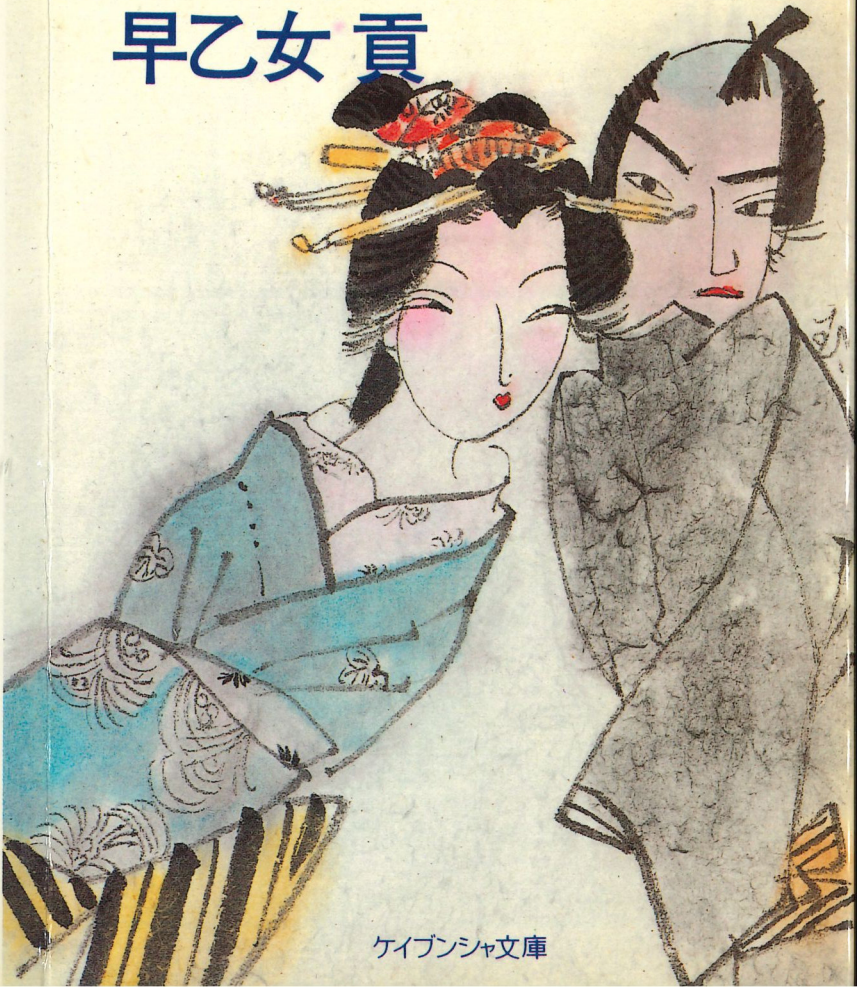
真説 遠山金四郎

早乙女貢



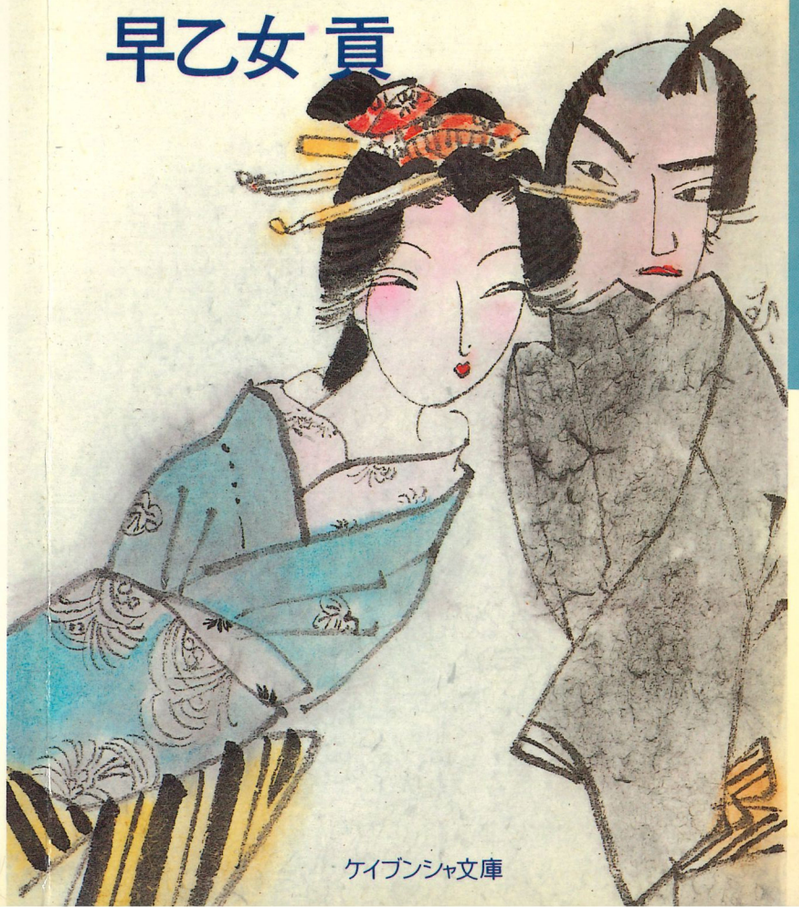
ケイブンシャ文庫

早乙女　貢（さおとめ　みつぐ）　一九二六年中国ハルビン生まれ。長篇歴史小説「僑人の檻」で第六十回直木賞受賞。以後、時代小説を中心に第一線で活躍中。著書に、娯楽作品〝忍法シリーズ〟の他、幕末歴史小説「会津士魂（全十三巻）」「おけい」などがある。現在日本ペンクラブ理事。

カバー・村上　豊

真説遠山金四郎

早乙女貢



ケイブンシャ文庫

真説遠山金四郎

早乙女貢

ケイブンシャ文庫
さ
03-01
540

勘定奉行の家に妾腹の子として生まれた遠山金四郎。武家暮しを嫌い、女の生首の刺青をして、放蕩無頼の〝金さん〟として長屋住いをしていたが、兄の出奔により家督を継ぐはめとなった。前代未聞の刺青町奉行の誕生である。と、それを待っていたかのように、彼のもとへ女の生首につけた連続殺人を予告する不逞な挑戦状が届く！　俗説を破り、遠山金四郎の実像に迫る傑作長篇時代小説。

勁文社

ISBN4-7669-0809-0 C0193 ¥540E　定価540円

ケイブンシャ文庫
好評発売中

生島治郎
もっとも安易なスパイ

田中光二
あのグリーンを撃て！

豊田　穣
旗艦三笠と東郷元帥(上)(下)

梶山季之
贋の季節

真説　遠山金四郎

早乙女　貢

勁文社

真説遠山金四郎

早乙女　貢

ケイブンシャ文庫

真説　遠山金四郎

早乙女　貢

ケイブンシャ文庫

勁文社

目次

金猫の女……六
深川芸者……六十
死化粧……九九
夜の緋牡丹……一三八
お仙という女……一六四
堀ノ小万……一九七
泣き千鳥……二三四
生首盗人……二七四
犯される……三〇六
憎しみの刃……三四三

真説遠山金四郎

金猫の女

掘り割りの水が血を流したように赤く染まっている。江戸の夕焼けは、深川が一番綺麗だといわれるのも、この掘り割りのおかげである。

この夕焼けを背に受けて、永代寺門前仲町の通りを、狂ったように走ってゆく男がいる。

若い男だ。

髷の刷毛先が、ぱっぱっとひるがえる。

黒江町の八幡橋を一気に渡ると、一ノ鳥居のほうへ走ってゆく。

尻からげしているが、草履を穿いている。走るのに邪魔になったのか鳥居の下で、男は草履を脱ぐと両手に持った。

たしかに、速力が増したようだ。

「なんでえ、あの野郎、まるで狂った馬のようだ」

「気狂い犬かもしれねえ」

往来の者が好奇の眼で見送っているのも知らぬ気に走ってゆく。

永代寺門前町は羽織芸者の出入りする料亭がずらりと並んでいる。

ここの仲居は軽子と呼ばれているが、転ぶのでも知られている。華やかな色街だ。

だが、男は見むきもしない。よほど先を急いでいるらしく、永代寺の門前も駆け抜けていく。

汐見橋のてまえ、東仲町からすぐが、深川三十三間堂の南門になる。

男は境内に駆け込んだが、そのまま、斜めに走って、裏の玉垣を越えて、植え込みに飛びこんだ。

そこは料亭にはさまれたしもた家の裏庭になっていた。

いきなり裏から飛びこんで来た男に驚いて、女の悲鳴が奔った。

「おっとっと、姐さん、わっちだ、半助だ」

「あら、半ちくの半助さんかえ、あたしゃ、三十三間堂の羅漢さまが飛び込んで来たのかと思ったよ」

玄人上(それしゃ)がりらしい女が、皮肉たっぷりに言う。

「こいつァ御挨拶だ。搦手(からめて)から参上したなァ、わけがあってのことでんね」

「そうだろうさ、わけなしに、始終、裏から舞いこまれちゃ、玄関もいらないからねえ」

「そんなこと言ってるヒマはねえんだ。姐さん、金さんが来ているだろう」

「ああ、さっきから、いい目が出てねえ、ツイているところさ」

「ところが、ツイちゃいねえんだ、早く知らせなきゃいけないことが」

と、言いながら、半助は、勝手知った家の中へ踏みこんだ。
裏の六畳では、数人の男たちが、鉄火博奕に熱中しているところだった。
花札である。
「――金さん、わっちだ」
と、半助が声をかけたのへ、
「うるせえな、せっかくツキがまわって来たところだぜ、それ、こいつが……ちぇっ、雨降り坊主か」
ぴしっと花札を叩きつけて、ふりかえったのは遠山金四郎である。
「やいやい、せっかく、ツキがまわって来たところに、妙な野郎が飛び込んで来たものだ。おかげで、金さん、からっけつだぜ」
言葉ほどには怒っていない。
さばさばした調子で、遠山金四郎は立ち上がった。
「何の用だ」
「へえ、その、わっちが来たのは余の儀ではねえ」
「ちッ、勿体つけるんじゃねえ。どうせ半ちく半助のお出ましだ、どっちに転んでも、半ちくな話だろうぜ」
「そんなことがあるもんか。わっちは、金さんのことが心配で、命がけで走って来たんだ。ああ、息が切れた。姐さん、水を一杯おくんねえ」

「お角、水をめぐんでやれ、ところで、何が起こったんだ」
「何がって、金さん、そうのんびりしちゃ居れねえんだ。御屋敷から、やかましい御用人がやって来たんですぜ」
「やかましい用人だって、吉川の爺か」
「へえ、吉川幸太夫さまで」
「融通のきかねえ頑固太夫だ」
「おっと、聞こえますぜ」
「何だって!?」
「追っつけ、ここへやって来まさァ。それでわっちが一足先に御注進に来たんじゃありませんか」
「どうして、おいらがここにいることがわかったんだ」
「へえ、なにね。丁度、都合の悪いことに、留の野郎がいましてね、金さんなら三十三間堂裏の浅蜊屋で花を引いていると……」
「ちぇっ、お饒舌り野郎め」
「全くで。わっちは、近道をして、一所懸命、走って来たんで」
「そうか、礼を言うぜ、半ちくの」
金四郎はたち上がると、尻っ端折りして裏へ出た。
「お角、頑固太夫がくる前に金さんは三十六計だ」

「あら、わかったよ。あとは任せておきなさいよ。うまく誤魔化してあげるよ」
「頼んだぜ」
金四郎は、裏庭伝いに、隣家へ入った。生垣を越えて、路地へ出ると、裾をおろした。
もう夕焼けは消え、宵闇があたりに湧いていた。
路地をぬけて通りへ出ると、掘り割りがあり、小さな橋が架かっている。
そこまでゆくと、河岸に人影が見えた。
女らしい。
ぼんやりと、佇んでいるのだ。
「おい、どうしなすった」
見たところ、夜鷹の類いでもない。いまにも、身投げしそうな姿だったのだ。
「……」
「おい、姐さん、いくら陽気がいいからって、堀の水ァ冷てえぜ、身投げなんぞは……」
と、言いさしたとたんに、まるで、その言葉に促されたように、女は、よろよろと河岸から身を乗り出そうとした。
「おっと、待ちねえ」
思わず、金四郎は、背後から抱き止めた。
「放して！」
女はもがいた。

「おっと、放さねえ、放したら、どぶんだ。ま、待ちねえったら」
「放して下さいまし、あたし、どうしても死なねばならない理由が……」
「馬鹿な、人間、一ぺん死んだら二度とは生まれねえ、止しなって」
「放して！」
「よし、放してやらあ」
ぱっと突き放すようにしたが、袖は握っている。女のからだがふらふらっとなったのを、くるっと、引き戻して、
「そら、死にな」
ぴしゃっと、平手打ちを喰わした。
「あっ！」
「もう一つ……」
「嫌っ！」
と、顔を背向けるのへ、
「ははは、ひっぱたかれたら痛かろう。痛いってェことは生きてることだ」
「ひどい……」
「ははは、ひどけりゃ、撲りかえしな」
「……」
金四郎は、顔を突きだしたが、さすがに、女は手を出せない。

「ははは、思いっきりやんなよ」
「――いいんです、もう」
「そうかえ、じゃァ借りにしとこう。だが、どうやら死神は飛んでいっちまったようだ。一体どうして……ま、聞かねえことにしよう、話したくもねえだろうし、聞いても仕方がねえ」
「――有難うございます」
星明かりに見ると、十六、七の町娘だ。身なりは粗末だが、汚れのない若さが、顔にもからだにも匂っている。
(こいつァ、おぼこだぜ……)
金四郎は、むらむらと、男の欲望が盛り上がってくるのを知った。
「だがよ、おいらがいなくなると、また死神がやってくるかもしれねえな。こんなところに、こんな時に間誤間誤していちゃいけねえな。家はどこだ、送っていくぜ」
「あ、あの、いいんです」
「よかァねえさ。せっかく、助けたのに明日あたり、そこらに水ぶくれで浮かんでいられちゃ、気色が悪いやな。送ってゆこう、どこだえ、家は」
娘はそれでも、迷っている風だったがやっと、こっくりと頷いた。
「あの、猿江町なんです……」
「それなら尚更だ。木場から小名木川から、どぼんするにゃ手頃なところがありすぎらァ。どうでも放せねえぜ」
金四郎はにこりとした。
「そのうち、月が出るだろう。今日は立ち待ち月だぜ」
その十七日の月が出たのは、大和町から亀久橋を渡って木場の間を通って小名木川の新高橋が見えて来たときだった。
娘は橋ぎわで、ここまでくれば、そこですからと固辞したのだが、金四郎は長屋まで送っていった。

深川猿江町といえば、江戸もはずれである。東南のはずれということになる。近ごろは死語になったが、場末というやつで、潮の香りが濃く、田圃の広がりが、すぐ裏に見える。火葬場も近かった。重願寺、妙寿寺などという寺がすぐ傍にあり、摩利支天もある。
長屋の奥がその摩利支天の境内に突き当たる。
投身自殺をはかった娘を助けて送っていった遠山金四郎は、長屋の表で足をとめた。
格子戸が開けっ放しになっていて、大勢の男たちが中にいたのだ。
「やあ、お姫さまのお帰りだ」
「どれどれ、なんだ、野郎がいるじゃねえか」
「どこの馬の骨だ」
「おい、お姫さまが、馬の骨を拾って来たようだぜ」
「どんな馬だ、肥え馬か。なんだサクラ肉もとれねえ、痩せ馬だ」

わいわいがやがやと、言いたい放題の言葉だけで、人品が知れるというものだが、人相の悪い連中である。

まさか、こんな連中に占領されていようなどとは思いがけなかったので、金四郎は唖然とした。

娘が、帰りたがらなかった理由の一端がわかるような気がした。

「ここか、お前の家は」

「はい……」

と、娘はおびえている。

中では男たちが酒を飲んで、花でも引いていたらしい。

「どうしたえ、お姫さま、てめえの家に何を遠慮しているんでェ。さあ、入った入った」

「わっちらがお邪魔しているからって、何も、そうおっかながることもあるめえ」

「どうしたんだえ、お姫さま」

こんな長屋でお姫さまもないものだがこの男たちの皮肉らしい。

「さあ、入んなって」

飛び出して来た男が、娘の手をつかんで、尻を抱えようとした。

「いやっ」

と、娘は身を揉んだ。

「おい、止せ」

金四郎は差し出がましいと思ったが、男の指をつかんだ。

柔術の心得があるから、ひょいと摑んでも逆手をとっている。

「あ、痛ッ、痛ッ……何をしやがる」

「お姫さまに手をつけるんじゃねえ」

うしろに一ひねりして、ぽんと突き放した。

男は、た、た、たっと、突んのめって井戸端に転びそうになった。

「この野郎、何をしやがる」

傍にあった手桶をつかむと、殴りかかってきた。

金四郎はひょいと外すと、とーんと弱腰を一蹴りした。

「わっ！」

と、男は泳いで、摩利支天の玉垣にぶつかった。

突んのめった男は、ドッと音を立ててそのまま、へなへなと崩れ折れた。よほど打ち所が悪かったのか、動けない。

「やァ、辰がやられたぞ」

「死んだか。くそ！　人殺しだ」

「なんだって？　辰がやられたって？　どいつだ、不逞野郎は」

ぞろぞろと男たちが出て来た。

気の早いやつは、すでに匕首を抜いている。

金四郎は、娘を庇うようにして、かれらを見まわした。
（五人……）
と、読んだ。
一目で無頼者とわかる連中だった。
月代のむさい浪人風もいるし、糸髪奴の頭もある。苔蒸したような月代もある。
いずれにも共通しているのは、むさ苦しさで、うす汚いことだった。
鉄無地の袷や、弁慶縞の単衣や、中には女物らしい赤っぽい長襦袢を下に着込んでいる変なのもいる。
「死んだか」
金四郎は、にやりとして、その〝辰〟と呼ばれた男を見た。
「ちょいと軽く触っただけだが」
「な、なんだって、軽くだって、触っただって！」
弁慶縞が顔をひん歪げて、素っ頓狂な声をあげた。
「ああそうだ。もろいやつだねえ、あれくらいで死ぬようだと、豆腐の角に頭をぶつけても死ねるぜ」
「この野郎、言わしておけば」
匕首を抜いたやつが、本気で、突っかけて来た。
金四郎は、半歩退って、胸を反らすと匕首は空に流れる。

「おとといこい！」
これも弱腰をぽんと蹴上げると、玉垣に頭を突っこんでしまった。
足だけばたばたやっている。
「お次は誰だ」
と、金四郎は浪人者を見た。
この連中の中では、一番骨のありそうな男だった。
「ことわっておくが」
と、金四郎は、微笑を絶やさぬまま、右手を懐中に突っこんで、
「おいらも素手じゃねえぜ」
「……」
「ただな。伝家の宝刀ってやつァ、軽々には抜かねえのさ」
「……」
「抜いたときァ、血の雨が降る。棺桶の手当ての出来ねえやつは、いまのうちに引っこんだほうが悧口だろうぜ」
言葉は静かだったが、ドスが利いている。
無頼者たちの間に、ひるむ色が見えた。
「血の雨か」
と、嘯いたのは、浪人者である。

「わしも血の雨は好きだ」
「……」
「このところ、お日照つづきだったからな。うぬの血の雨を降らせてやる」
言下に、さっと白刃が鞘走った。
さすがに、峻烈な刃風であった。さっと、白蛇が走り、金四郎は、面てを裂かれるような冷気を感じた。
こちらに心得がなかったら、頭から鼻柱にかけて、あざやかな真っ向額唐竹割りに斬り下げられていたに違いなかった。
金四郎は、僅かに上半身をひねっただけでこれを躱したのである。
その手に、九寸五分が握られていた。
だが、金四郎は、それ以上、動こうとしない。場馴れた様子なのが、浪人者を驚かせたようである。
浪人者は、さっと一歩退くや、無双に構えたが、それきり、金四郎が匕首を鞘に戻すのを見ると、呆れたようにかれも刀をおろした。
「この勝負、おあずけだ」
といい、拭いもせずに、ぱちりと鞘に落として歩きだした。
驚いたのは、なかまたちである。
「おっと、先生、どうしたんです」

「あの野郎を、一刀両断にしておくんなはい、よう、先生」
男たちは、思いがけないことになったので、残ろうかどうしようかと、迷いながら、浪人者のあとを追っていった。
そのときは、長屋の者も出て来て、遠巻きに見物していたのだが、狐につままれたように、
「ちぇっ、どうなってんでえ、せっかく面白え斬り合いが見られると思ったのに」
「全くだ、ふん、しっ腰ねえ野郎たちだァね」
と、金四郎のほうへ蔑むような眼を向けて、またそれぞれの家へ引っこんでしまった。
金四郎は苦笑して、娘を振り返った。
「お姫さま、やつらは出ていったようだぜ、さあ、入るがいい、お前の家だろう」
「あの、そんなふうに言わないで下さいまし」
「なんだ、あ、お姫さまか。そうかい、まま、話はあとだ」
とにかく、娘を家の内に入れないことには、金四郎は解放されない。
ここまで送って来たのだから、中途半端なことでは、突き放すわけにはいかなかったのだ。
中へ入って驚いた。
(病人か?)
と、思った。
誰か寝ている。が、よく見ると、枕元に線香が立っていて、顔には手拭いがかぶせてある。
(死人か……)

金四郎は、眉をひそめて、娘を見た。
娘は、その枕元に坐ると、疲れたように言った。
「お父っつぁんです」
「そうか……そいつァ、とんだことだったな」
「いいえ、もう長患いだったものですから」
「それにしても、だ。だが、このホトケの傍であいつらは何をしていたんだ」
あの男たちはお通夜に来たわけではなかったようだ。
長屋である。隣近所は一家のようなものだ。こういう長屋では厠も井戸も同じものを使う。
長屋人情という言葉もあるくらいなのに、この新ホトケのお通夜には、長屋の者は誰も来てはいない。
「呆れたねえ、とんだ情け無しの長屋だぜ、こんなお通夜は見たことがねえ」
「いいんです、あたし、誰も怨んではいません」
「しかし……」
「人さまは人さまの御都合がありますもの」
「ま、そりゃそうだがね。ところで、あっしもそろそろお暇しようか」
「待って下さい」
娘はすがるような眼を向けた。
「もう少し居て」

はじめて娘は、かれを必要としているようであった。
「ほう、こいつァ風向きが変わったぜ。さっきまでは、随分と邪魔だったようだが」
「いいえ、そうじゃありません。かんにんして下さい。あたし、気持ちが……」
河岸から飛びこもうとしていた娘だ。
この死んだばかりの父親といい、何か深い事情がありそうだった。
「あたし、なみ、と称います」
「おなみ、さんか」
「はい、あなたさまは、遠山金四郎さま……」
「ははは、よく憶えていてくれたな。おっと、こいつは皮肉じゃねえぜ。ところで、名前を聞いたら、次はあの連中のことだ」
「いいえ、あたしのことなんです。実はお父っつぁんには、借銀があったんです。それを返せないうちに、からだが悪くなって……お医者さまもお金がないと来てくれやしません。お父っつぁんが亡くなると、あいつらがやって来て、あたしに借銀を……」
「なるほど、そういうことだったのか。わかった。よくある手だ。つまり、借銀が返せないのなら、お前のからだで払えというのか」
「――はい」
「ふう、それで、お姫さまなんて言ってやがったのか」
「あたしが、そんなけがらわしいことは出来ないと言ったら、お姫さまじゃあるまいし、い

まどき、何をって……」
「なるほど、それでお姫さまか。それにしても、ひでえ奴らだな」
「あたし……死ぬつもりでした」
おなみは、虚ろな眼になっていた。宙に眼をやって、ぽつりぽつりと語った。
「もう生きていても、いいことはない。苦しいことばかりなら、いっそ死んだほうがいいんです。死んでお父っつぁんのところへ行こうと思って……」
おなみの頬を光るものが滴った。
金四郎はいつか彼女を抱いていた。
おなみのほうで、身を投げかけてきたのである。新ホトケの傍だということも、忘れたように、金四郎は、欲情をおぼえた。
貧しい長屋である。線香が一穂の香煙をたちのぼらせている。黄ばんだ明かりのもとに新仏が眠っている。
この冷たい部屋の中で、男と女が抱き合うということは、異常といえるかもしれなかった。おなみのほうでは、孤独の哀しみが、すがるものをもとめて、金四郎にすり寄っただけのことだったろう。
だが、若い女のからだと、熱い息吹きは、金四郎の健やかなからだには、あまりに刺戟が強すぎた。
「おなみさん、お前……」

ぐっと抱きしめて、金四郎はそれでも一たん、彼女のからだを放そうとしたが女は狂ったようにしがみついてくるのだ。
まるで、この手を放したら、地獄の奈落へ転がり落ちるのを怖れるかのように。
「おねがい！」
おなみは、わなわなしながら、叫んでいた。
「放さないで、おねがい、放さないで！」
「おなみ！」
金四郎は女の双眸に涙があふれているのを見た。
かれは、思わず、愛しさをおぼえて、頬ずりした。女の唇のわななきが、かれの頬に触れると、たまらずに、唇を吸っていた。
白粉気のない、少女のような清らかさが、かえって金四郎の男心をそそったのだ。
男に吸われたことのないような、女の唇であった。ふっくらとして、小さい。やや受け口なのも、男にとって、食欲をそそるものだった。
金四郎は、吸うように食べるように、その唇を蔽うと、いつか舌がからまり、甘酸っぱい唾液に全身がとろけるような感覚で、女のからだをそのまま、横へ倒していた。
おなみの気持ちは、どうなっていたのか。
死んだばかりの父親の傍で、男に抱かれることに罪悪感はなかったのか。いやそれを意識するよりも、ただ、男の強い胸に抱かれていることの安らかさ、解放感が欲しかったのかも

しれない。

だが、男の獣心は、それだけでは満たされないものだった。

熱くなった女のからだを片手抱きにして、片手は、腰にすべっていた。

臀の丸みを撫でおろした手が、ふとももから前へまわると、女の腰は、拒むように、反射的に縮こまったが、しかし、もう、手は動きをやめなかった。

前裾をかきたてて、両のふとももの間に指が入っていった。

(いけない……)

女の唇はそう言ったようであった。がそれも唾液の中でうねる舌が僅かに伝えた波動にすぎない。

金四郎は、女の肌が、絖に触れたように滑らかで、柔らかいのを知った。

指がふとももをなぞり上げるようにして秘所に及んだとき、さすがに、女のからだは一瞬、萎縮し、ひくっと息を呑むように動きを止めた。

(――こ、この娘ァ、おぼこだぜ)

金四郎は内心、驚いた。

いまどき、十五、六の娘で処女などいるはずがないと思っていたが、このおなみは、男を知らないらしい。

金四郎の指が秘所に及んだときの衝撃が、それを物語っているようだった。

たいてい、娘は処女を装うから、うっかりすると瞞されるが、女遊びでは、誰にもひけをとらない金四郎だ。

女の小細工など、すぐに見抜ける。

どんなに処女を装っても、かれの眼は誤魔化せない。

金四郎の指が女の秘所のふくらみに触れただけで、おなみは身をちぢめた。

陰阜には、ほんのわずかだけ、生えているようであった。それも春草の柔毛である。

金四郎は暫く、その柔毛の感触を味わった。

それはいかにも、その部分に生えていることが羞ずかしいような、柔らかさと、少なさで、丘の溝に沿っていた。

男の指はそこまでゆくと、さらに大胆になる。

静かに入口をなするだけで、これだけの動揺があるのだ。

指は扉を開けねば気が済まなくなる。

傍に死体があることも、線香の匂いがこもっていることも、すべて忘れさせるだけの処女の肉体であった。

金四郎の指は、溝をゆっくりと上下した。

その動きに合わせて、女のからだは動き、金四郎が、黄ばんだ破れ行燈の灯りのもとに女の顔を見ようとすると、

「いや!」

と、いいながら、顔を金四郎の胸におしつけるのだった。

そのくせ、かれにしがみついている腕は、ますます強くなる。
腕に力をこめながら、しかし、腰は段々と遠くなるのだ。
男の指の動きへの好奇心と、怖れが、その腰にあらわれていた。
指が、溝のうちに入ってゆくと、
「ああ……」
女はかすかに声を洩らした。
男の指は、まるでそれが、許可の声だったように、さらに図々しく入っていった。
「あ……痛っ」
と、女の顔がのけぞった。
眉根に皺を寄せた女の面てが、異様なほど美しく見えた。
「おなみ……」
と、呼んで、金四郎は、唇に唇をかさねた。
火のように熱くなっている。唇も頬も熱い。
上気した頬の血のいろが美しい。
金四郎は、勃起するのをおぼえた。かれは、膝をゆっくりと割りこませていった。
女の膝は固く閉じられ、かれを容れないように拒むように見えながら、しかし、かれがさらに力をこめると、いやいや開いていった。びっしりと汗が感じられた。
生処女（きむすめ）の膝小僧は四人力、という。男を容れたことのない秘所が、必死に蓋を閉じようと

するからであろう。
だが、それは、力ずくで股を開かせようとする場合のことである。
いま、金四郎が膝を割り込ませたのは娘の方から泣いてすがりついて来たからだ。
はじめ、かれを拒むようにしたのは、羞恥がさせたものにすぎない。
金四郎の膝が入ってゆくと、観念したように女は股を開いた。
すでに指は春草の丘をなずりながらわれめから滑り込んでいたのだ。
金四郎は充分心得た優しさで、指をもぐらせていった。
どんなに生処女が拒んでも、本来、女のからだは、男を受け入れるように出来ている。
況や、その尖兵としての指の動きは、快楽への使者であった。
たとえ、無骨な指であっても、それが無理であっても、女の蜜がそれに応えてくれる。女自身が嫌悪し拒否しても肉体は自然に動物としての働きをするように出来ている。
況や、金四郎の女に狎れた指は、鉄扉でも溶かさずにはいないのだ。
いかに緊張していたかを、女の膝の裡の汗が物語っていた。そこに処女のいのちの叫びがあった。
金四郎の、遊び心は、処女を歓迎はしない。
（面倒だからな）
と、日ごろ言い言いしていた。
処女のからだの清新さを味わうのは楽しいが、しかし、面倒なのが玉の瑕である。

女にとって、いのちであるだけに、ことが済んだあと、生きるの死ぬのと騒ぐのがいる。初めての経験は確かに衝撃的なものであろうが、それが馴れてくると、自分のほうから男にしがみついてくる。せがむようになる。

そこまでいかないと、女自身、その口が、如何に開き易いものか、（一銭も損するわけじゃなし）という気持ちにはならないものらしい。

どうせ、年齢を経れば、そうなるのだとわかっているから、男は女ほどことを重大に考えないのだが、こういうことは、説明しても、初めての女にはわからない。そのために面倒になるのだ。

いま——

この女が、処女の身にも関らず、自分のほうから金四郎にしがみついたのは、女の欲望があったからとは思えない。

哀しみの深さ、絶望感が救いをもとめて、頼れる男に吸い寄せられた、というのが正しい。ただ、処女ではあっても、男の生理や機能は知っていよう。下町育ちの女は耳年増になっている。

金四郎がどういう振る舞いに出るか、当然知っているはずだった。

娘との訣別よりも、男という大きな力への期待が、おなみをもの狂おしいまでに、赤裸々にしていたようである。

金四郎は女のからだを開くときが好きだった。内腿を下からゆっくりと手を滑らせてゆく間、股間に伝わる処女の戦ぎは言いようもなく男の快感をそそるのである。

片手で撫でながら、片手は女のくびにまわしてうしろから耳たぶをいじっている。

それだけで、女はもう夢中になって全身を火照らせていた。

かたく眼を閉じて、身を反らせ、がたがた顫えているのだった。

金四郎が、唇を吸っても、それに応じる術を知らないようだった。

男の唇の感触を味わうようには若すぎるのだろうか。かれの手が陰阜に辿りついたとき、はっと熱い息を奔らせるのが、はっきりとわかった。

指は遠慮なかった。春草が生え初めたその小さな丘の中央のわれめをなすりながら、ゆっくりと、その秘奥に入りこんでゆくのである。

まことに、早春の萌え出ずる柔らかい草の感触である。

男の指は暫く、そのあたりを彷徨した。

それは男にとっても愉しみであったがこういう処女の花を開くには、それだけの時間をかけることで、無理が生じないのである。

破瓜に伴なう激痛を、少しでも柔らげることで、女の情感は、いのちの泉となって溢れてくるのである。

現代の女性は、運動をする。股を開くこと、跳んだりはねたりが普通だが、江戸時代の女は、走る、ということすらしなかった。

女には、走る行為がなかったといっていい。着物の前裾がめくれるだけでも、醜態とされたのだから、走るなどというのは、許されなかった。

その生活が、股を開くことすらないままに成長する。

したがって、男の手が股をさぐるというだけでも、その衝撃と感触は激情を呼ぶのだ。

陰部という、秘所という——その文字通りの部分であった。

秘めたる花の趣きは、スポーツしなれた女の股間にはない。

内股で歩くことで、自然と膣の柔肉は締まり、それは男を迎えるまで、蕾のように閉じている。

そこを開くのが、男の快感であることは言をまたない。

金四郎の指が、柔らかい襞に触れただけで、女の唇から呻きとも、哀しみともつかぬ声が洩れた。

「——痛くはせぬ」

と、金四郎は囁いた。

囁きながら、なおも、指は進んでいった。

「そなたは、女になる」

さらに金四郎は囁き、つと、放して、顔を見た。

女は、顔をまともに見られたことで、一層、羞恥にからだを顫わせ、

「いや！」

と、かれの胸に面てを伏せた。

処女の花を開くのは、手間がかかるがその手間もまた楽しみの一つであった。

待つ間の楽しみ——というのは、女郎屋で〝廻し〟をとる女郎が来るのを待っている客の感懐であるが、処女の情感が盛り上がるのを待つ気持ちは、もっと贅沢で、豊かなものだ。

廻しをとる女郎は、他の客とどんなことをしているのかわからない。想像を逞しくすると、焦りが出るが、処女の秘めどころは、すでに掌中にある。

蕾をじっくりと手間をかけながら、花びらが毀れないように開いてゆく楽しみである。

金四郎は、彼女を怖れさせないようにはじめ、指一本を用いている。

かれの手は、女のように細長く、綺麗だった。

いつか芸者とねんごろになったとき、その指をしゃぶられた。女は、かれのような綺麗な指は見たことがない、といった。

男にとって、指を褒められても、そう嬉しいものではない。

むしろ、竹刀ダコのある手や肘を褒められるほうが、武士としても嬉しいわけだが、金四郎は、思うところあって、武士は捨てたつもり。

町人になって、長屋暮らしを楽しんでいる身だ。

殊にこの深川界隈は、馬鹿囃子などが盛んで、男で芸能にうつつを抜かす者が多い。

武士でもいる。旗本——といっても御家人だが、馬鹿囃子を習っている〝連中〟までいる。

かれらは、武士の身分ではあっても、むしろ、町人の道楽に没頭することで、生き甲斐を

見い出そうとしているらしかった。

金四郎は何にでも好奇心を持つ方だから、笛や締太鼓などもちょいとやったことがある。むろん、幼少のころから、四書五経の学問のほか、剣術・槍術、柔術・馬術・弓術……すべて武士一通りのことはやっている。

したがって、手や腕なども、節が固く女に綺麗といわれるほどのことはないと思うのだが、生まれつき、すんなりと出来ているのか、からだつきなども、着流しが似合って、粋だった。

お国侍というのは一様に無骨で、江戸の女に嫌われるのだが、金四郎は町人ぶり、江戸っ子の粋さ、というものが身についている。

身ごなしから、目つき、笑い顔まで粋で男らしいと、芸者や尻軽な女たちに騒がれるのだが、金四郎は、どちらかというと、もう女には食傷している。あまりモテすぎると、女の匂いまで、うとましくなる。

このごろは、博奕に明け暮れていたのである。

そんなかれだけに、この娘との出会いは、運命的な昂奮さえ感じさせたのだった。

金四郎の指は、女の秘奥にゆるやかに入っていった。

女のからだには二通りある。

未通女がおんなになるとき、速やかに花を開くのと、いやいや開花するのとだ。これは生まれつきの個人差、生理機能にもよるが多くは、情緒の違いであろう。下町の女は、一体に早熟だといわれる。

下町の生活は、表から裏まで筒抜けだから、近所の男女の噂がすぐ耳に入る。目にも見える。下町の女は、たいてい赤裸々な男女の生態を目撃して育つものだ。

隠そうとしても、長屋は開放的だし、隣家が壁一つ——それもうすいやつだし穴があいている場合がある。

貧しい長屋などは、壁が崩れて、穴があき、そこを鼠が通用口にして出入りする。

渋紙などを貼って塞いでも、鼠はすぐ食い破るし、話し声は洩れてくる。したがって、いやでも幼女のうちから性教育を受けることになる。

そうした女たちは、おんなの秘所に早くから興味を持って、まず、弄ぶことをおぼえる。小用を足したあと、指でいじることからはじめて、独り弄んで楽しむのだ。

それから親の不在のときに鏡でうつし、おのれのを観る。男の子との違いすぎる構造が、好奇心をそそりたてて、ひとりで甘美な行為に耽けるようになる。

それだけ早く情緒的になるのだから、男に使われれば、抵抗が少ない。

祭りの晩や、祝い言などの夜が、破瓜の時だった。

したがって、処女をもとめるのは難しくなる。たいてい十三、四、で、おんなになってしまう。

こうした早熟なのと対照的に、山ノ手といわれる屋敷町では、乳母日傘の育ちが多い。

母親も女大学の教養があるから、まず貞淑であること、夫につくし、姑につくし、子につくす。

その生活では、男女の行為など、滅多に目撃することはない。

嫁にゆくとき、長持の中に母親が春画をしのばせるというのも、娘に女のなすべきことの知識がないと心配してのことである。案外、娘の方でとっくに知っていて、というのは現代のことで、昔の屋敷町、山ノ手育ちというのは、実際、色恋の情緒を煽るものがない。

固いことが金科玉条とされていて、娘に虫がつくことを、極度に恐れていたのである。一度でも娘が男に瞞されたら、傷モノになって、嫁の口がなくなる。家門に傷がつく。名誉が逆に足を引っ張って、身動き出来なくするのだ。

そういう躾を受けていれば、いくら肉体が成長しても、蕾は固いままで、春を知らない。春風も冬風と同じに感じるその固さが、娘を情無しの干からびたものにしてゆくのだ。

この娘は、そのどちらでもなかった。

はじめてなのは、女の秘奥に突きこんだ指が、生ぬるく、とろりとしたもので濡れたことでもわかった。

（血だ）

と感じた。

「あ……」

眉根を寄せて、一瞬、苦痛を洩らしたのである。

それは芸者などが演じる種類のものではなかった。

快感のまじった苦痛が、一瞬全身を顫わしたのだ。破瓜の瞬間であった。

金四郎は指を抜いて、見た。

黄ばんだ行燈の明かりが、はっきりと鮮血を見せた。

金四郎の食指は根もとまで血にまみれていた。

初夜にあっては、殊に男性の方が経験が少ないと、それ以上のことをしないまま、翌夜を待つ者がいる。

女の不感症の一つの原因にもなるという。女の破瓜に出血がともなうのは、生理的必然で、それは交媾への赤信号ではない。

むしろ、そのことで女の受け入れ態勢が整ったことを意味するのだ。

金四郎は知っていた。かれは食指にさらに高指を添えた。

二本の指を入れながら、血の湖の中をゆっくりと進ませたのである。

そうしながら、かれは花の唇を吸った。

未通だったことが判然とすると、急に愛しさを感じた。

いたわりたいような気持ちであった。

処女の味とか何とかではない。この女体が、まだ一人の男にも抱かれたことがない——それを自分が、いま抱くのだという感激であった。

数えきれぬくらい、女を知っている金四郎であったが、やはり、この気持ちばかりは理屈ではない。

感動というのは理屈ではないのだ。言い知れぬものがある。殊に男女の仲はそうである。

女の唇が、何やらの馥郁たる香を放つ花びらにさえ見えてきたのもそれであった。

唇を吸いながら

「愛しや……」

と金四郎は呟いている。

ふっと、しかし我にかえって、

「可愛いーぜ、おなみ」

と、女の名を呼んだ。

「あ……き、金四郎さま」

はじめて、女の唇が応えた。

かれの名を呼んだのだ。同時に、しがみついた手に力がこもった。腰がうねった。

それは、

(早く、入れて……)

と、せがんでいるようだった。

金四郎も勃起をおぼえている。ふっとそのとき心配になったのは、かれのものが、入るだろうか、ということだった。

馴染みの芸者に言わせると、巨きすぎて……という。金四郎はさらに、もう一本、指を添えようとした。

三本の指を入れるのは、破瓜の女の膣には無理である。さすがに、女の口から呻きが洩れた。

金四郎は、その三本目の指——薬指をうしろの方へ伸ばした。

二本を秘奥に入れてゆくと、必然的に三本目はうしろへゆく。

肛門に触れた。

女のからだは、またびくっと動いた。

陰部——他人に知られたくないもっとも秘めた肉体の部分は、またもっとも、敏感な部分でもある。

金四郎は遠慮なく薬指を動かした。

肛門の周辺を指頭が這いまわるだけで、女の戦慄がたかまり、それは明らかに、二本の膣内の指を締めつけるように、動いている。

(鈍いほうじゃねえな)

と、感じた。二本の指は、さらに奥へ入ってゆく。

処女の出血でとろりとしている。異臭も懐かしいものだった。

金四郎は何度か、処女を破瓜しているのだ。

(面倒で手間がかかるが、悪いものじゃねえ……)

男を百人も知っているような女につきものの、〝垢〟がない。

その清新さは、やはり男の征服欲、開拓欲を充分、満足させるものだったのである。

柔襞の動きは、そこに充分、刺戟への反応があることを示している。感覚というものは、

磨きをかけることで、鋭敏になる。それはしかし、あまりに刺戟すぎても鈍麻するものだが。

二本の指は、ころよく締めつけたり放たれたりした。それは女自身が、情感のたかまりに陶酔してゆくことを如実に見せると同時に、男にも、その本質的な結合を促しているかのようであった。

「おなみ、いい仲になるぜ」

金四郎は囁いた。

これまでの行為は、いわば前戯。

かれの勃起した固いものは、熱棒のようになっている。

金四郎は腰を少し浮かせると、指をひきぬいたあとへ、そっとあてがった。

そして亀頭でゆっくりと、そのあたりを打診した。

それは、女に覚悟させるとともに、肉の交わりを馴れさせるものでもあったのだ。

「ああ……き、金四郎さま！」

「おなみ、いつか、おんなになるんだ、おんなにな……」

どっと、女の裡から、何やら芳香を放って、潤沢な愛液が噴きだすのが感じられた。それは男の硬直したものを導き入れるための自然の摂理であった。

金四郎の熱いものは、静かに入っていった。柔襞はこれを喜びと不安で迎えてうち顫えるのが、はっきりとわかった。

ひきぬいた指で、金四郎は、その秘所の入口を静かにまさぐっている。柔毛の生えた丘のわれめに、かれのものを咥えんとて大きく裂けている。その入口の上部に、女の宝珠があった。

女の宝珠……

もっとも敏感なところである。

おなみは、せつない声をあげて、金四郎にしがみついて来た。

手淫に馴れた女か、そうでないかは、そこに触れただけで、わかる。

若い娘の中にも、手淫しすぎて、その部分が、黒ずんでいる者がある。

（見たい……）

と、金四郎は思った。

だが、生憎と破れ行燈は、燈芯も細く、灯も小さい。

淡い明かりが、僅かに夜の闇を払っているだけで、たとえ、女の下肢を大きくひろげ、行燈に近づけても、秘所のそのあたりの色合いを確かめることは難しい。

よほど、年経りて変色していなければ、はっきりしない。

まして、小さな突起の？　〝珊瑚玉〟と呼ばれるそれは、明るい陽の下で見ると美しいが、黄ばんだ行燈ではまず無理だった。

だが、金四郎は指が触れたか触れないくらいで、女の衝撃は大きく、しがみつくと同時に、裾を蹴立てるようにして女の肢は、金四郎にからまって来た。

金四郎はゆっくりと迪送をくりかえしながら、女の唇から唇を離して、頬ずりした。

女の甘い唾液が長く尾を曳き、はしたないほど、それは唇の端からもこぼれて、わなわなと顫える唇の熱さで、白く乾いてくるのだった。

耳たぶを舐めてやると、さらに女は声をあげた。

軽く咬み、さらに舌を耳の裡に遊ばせる。

耳のそこの部分は、女の陰部のかたちに似て、官能の源とする説もある。

金四郎の舌は、さながら、かれ自身の陽物のように——陽物が女の秘奥に入っていったのと同じように、細くすぼめられて、先端が耳の穴に入ろうとする。

むろん、耳と下とは違う。下は男のものを入れるように出来ているが、耳は耳かきしか入らない。

それだけに舌が、意志と途惑いで、動きまわるほど、くすぐったさと、快感が金四郎を慄わすのだった。

女は、男にこんなかたちで接触したのは、生まれてはじめてだったらしい。

この金四郎の技巧は、年増女にでも充分、効果がある。

それを生処女にほどこしたのだから、おなみは、もう、息も絶えだえなほどに昂奮していた。

金四郎の陽物は、ねっとりとした女の生温い愛液のあふれるのを感じた。

女の昂まりが醸し出す、それは、熱い上潮だった。

金四郎はそれを感じると、さらに女の耳のうしろから、おくれ毛のあたりに舌を延ばして、

這わせた。

女は何やら、言葉を洩らした。

それは、情感の極致が叫ばせたものだった。

「お乳を、お乳を……」

自ら、襟をひき剝ぐようにして、胸もとを開いている。

おなみの叫びは、女の情感が極致に達したことを物語っていた。

下町育ちにも関らず、おなみは男の手を知らなかったのだ。

それだけに、金四郎の手で快楽の扉を開けられると、もう、うつろになって、自分の感情を抑える術を知らないようだった。

おなみは自ら襟をかきひろげて、呻くように言った。

「お乳を吸って！」

仄白い胸乳があらわになった。

まだ硬みを残したうず高い乳房であった。

思わず金四郎はそこへ口をつけた。

乳首は、固くとがって天を向いていた。

舌の先で転がすようにすると、女は身を反らして、歓喜の声をふり絞った。

「おなみ！」

金四郎の手は乳房をやわやわと揉み上げながら、口は乳首を含んで、転がしている。

すでに男女のからだは交わっていた。
おなみは、頭をはげしく左右に振り、声にならぬ声を洩らしてあえいでいる。
その狂おしいばかりの悦楽の表情が金四郎を一気に爆発させた。
その一瞬に、金四郎はおなみの唇を強く嚙んでいる。
顔を放してから、彼女の唇にうすく血がにじんでいるのを見た。
おちてのち、金四郎は、この場所といい、時といい、処女とのまぐわいにはふさわしくないことに、あらためて気がついた。
また新仏の枕元で線香が薄い煙をくゆらしていた。
おなみは羞ずかしそうに面てを背向けていた。
金四郎は何か言わなければ、と思った。
そのとき、表の格子戸が音を立てたのである。
金四郎が身を起こすと、
「済んだか」
と、声がした。
破れ障子が開いて、ぬっと、顔を出したのは、あの浪人者だった。
まるで、さっきから、二人の交媾を見ていたかのような、口調だった。
「きさま！」
「おっと、ていさいぶるこたァねえ。冥途への土産に、おぼこ娘と楽しんだのだから、本望

だろう」
「なんだと！」
「いいってことよ。おれも、野暮は言わねえさ、死ぬ前の湯灌だと思ってやるぜ」
どうやら年齢分だけ、相手が一枚上のようである。
「さあ、行こうぜ」
「……」
「おや、どうした？」
と、浪人者は、懐手のままだったのが襟から手を出して、無精髭の生えた顎のあたりを撫でまわしながら、
「おぼこ娘のお初を頂戴したら、腰が抜けたか、え、色男」
先刻、この浪人者は、あっさりと刀を鞘に納めて引き上げている。
その引き上げっぷりが、ばかにいさぎよいと思ったら、こうやって舞い戻ってくるつもりだったのか。
そして、戻って来たとき、金四郎とおなみは新仏の傍で、夢中になって交わっていたことになる。
浪人者はのぞいて見たのか？　それを知るや、ことの終わるのを待っていたとすれば、無頼者とはいえ、なかなかの男だ。
世間の裏街道をゆくような輩は、たいてい卑劣だから、ほかのやつだったら、飛び込んで

来て、兇刃をふるったろう。

「そうか」

金四郎は、眼が醒めたように、漸く、浪人者の真意がわかった。

「そうなのか、さっきの勝負をつけに来たのか」

「おれは生得、けじめというやつをはっきりさせたいのでね」

「おれだってそうだ」

「あのままじゃァ、木暮弥平次、奥歯にものがはさまったようで、気色が悪いのさ」

「出よう」

金四郎は、おなみに心配をかけたくなかった。

おなみは起きあがったが、背を向けたまま、凝っとしていた。

金四郎が立って帯を締め直すのを、不安そうに見上げた。

「金四郎さま……」

「大丈夫だ、任せておきな」

どうせ決着はつけねばならない。

この浪人者とそのなかまの無頼者たちが、おなみに身投げの決心をさせたのだ。

およその事情は呑みこめたが、それにしても、無頼者たちの数が多すぎたのである。

ただの借銀とりにしては、仰々しい。大の男が一人で充分だ。二人でも多すぎるくらいなのに、なぜあんなに大勢で来たのか。この木暮弥平次と名乗る浪人者を痛めつけて、

（吐かせればわかる）

と、金四郎は思った。

「寝ていろよ」

と、一声言い捨てて、金四郎は戸外へ出た。弥平次は先に立って歩いてゆく。

「何処へ行くんだ」

「邪魔の入らぬところさ」

振り返りもせずに、かれは言った。

「だから、どこだ」

「どこにするね」

「なに!?」

「どこでもいいのさ、邪魔さえ入らなきゃな。それに、十万億土に近いところがいい」

「十万坪か」

「お前のためを思っていっているのさ。どうだえ」

歩いてゆくうちに、木場が見えて来た。

夜の木場はひっそりとして人影もなくただ材木を揺らめかせて、たぶたぶと石垣を波が打っているだけだ。

深川といえば木場。

それに富岡八幡宮である。

木場は一カ所ではない。縦横に掘り割りがめぐらされ、猿江町に近いほうにまで、木場があった。

昼間は威勢のいい中乗りなど若い衆の陽気な声が飛び交い、半裸やかんばん姿が見られるが、夜ともなると、しんとしている。

たぶたぶと、重い水音が岸の石垣に戯れ、筏になった材木をゆっくりと揺すっているだけである。

木暮弥平次は、その木場までくると、足を止めて振り返った。

「ここらでよかろう」

「ああ、おいらはどこでもいいぜ」

と、金四郎は懐中に手を突っ込んで、にやりとした。

「どうせ、死ぬのはそっちだ」

「なに！　こやつ」

「三途の川の渡舟銭は持っているのかえ」

「うぬ、言わせておけば」

「ああ、減らず口は生まれつきだ。おかげで勘当さ」

「その減らず口も、今夜が納め時だ」

「どうだかね」

先刻の長屋での斬り合いで、手並みはわかっているつもりだった。

だが、木暮のほうでは、自信があるのだろう。

「ここなら、誰にも気兼ねなくやれる」

と、木暮は言った。

「長屋などでは、邪魔が入る。殊にあの穀つぶし共がいてはな」

なかまのことを、平気で侮蔑するところを見ると、自分では、かれらより数段上等の人種のつもりらしい。もっとも、あの連中の中で、かりにも武士らしいのは、この男だけだった。

奇妙なことだが――

この男となぜ斬り合いをしなければならないのか、それが、ふっと疑問に感じられたのである。

「おい、木暮さんとやら」

「なんだ」

「妙なことになったが、一寸、訊きたいな」

「やい、臆病風か」

「そうじゃねえ、納得ずくでなくちゃ、お前を地獄へ送りこめねえからさ。いうならば首斬り役人だ。坊主でもいい、印導の渡しようがない」

「なんだと、こやつ」

「そうだろう、一体なんのために、斬り合いをするのだ」

「それは……お前の胸に聞け、邪魔をしたのは、そっちだ」

「なんの邪魔だ」
「呆れた野郎だ。いいか、あの女は借銀の質だ。親父の借銀の代わりに、あの女のからだがある。そういう約束だったのだ。そいつを、うぬが出て来て反古にしようとする。だから、消えて貰いたいというのさ。気の利いた幽霊ならとっくに引っ込んでいるところだ。引っ込まねえから、引っ込ませるのさ」
木暮はこれだけ言うと、ぎらりと抜き放った。
気の利いた幽霊か。
金四郎は、匕首の柄に手をかけた。
抜こうとして一歩、退った。
そのとき、感じたのである。
幽霊という言葉が、木場の闇に、何気なく視線を走らせた。
そこに、ふっと動いたものがある。
夜になると、人通りがなくなる木場である。闇に動く影は、夜漁りの猫か犬しかいまい。
「おい」
と、金四郎は、かまをかけてみた。
「木暮さんとやら」
「なんだ、命乞いか」
「笑わせちゃいけねえ。命乞いをするくらいなら、腹をかっさばいて、臓腑をうぬの口の中へ捻じこんでやらぁな」
そう言いながら、眼は油断なく、四囲を見ている。
「おめえ、一人か」
「……」
「なんだか、面妖だ」
「何が面妖だ。つべこべ吐かさずと……抜け」
「抜いたらおしまいさ。そのときは、うぬが地獄へ落ちるときだ。おい、木暮、一対一の勝負と言ったが……」
「そうだ、抜け」
「どうもおかしい、そこらの闇に、なんだかウジ虫が潜んでいるようだ」
「……」
「三人、いや、四人か、ひょっとすると五人てェところか。やい、木暮、きたねえ真似はするな」
木暮弥平次は、見つかったのならしかたはない、というふうに、苦笑いに唇を歪めた。
「あいつらは、見張りだ、邪魔が入らぬようにな。手出しはさせぬ」
その言葉を待っていたように、材木の蔭、軒の蔭から、人影が出て来た。
やはり待ち伏せしていたのだ。
「ふむ、やっぱりな。四人……」

四つの黒い影だった。

「きたねえやつらだ。長屋では人目に立つ。ここなら、五人で包み討ちにしても、人に知れねえという寸法か」

「どうとでも考えろ、所詮は、曳かれ者の小唄だ。線香の一本くらいは立ててやるぜ、観念するんだな」

相手は三尺近い大刀である。金四郎は、九寸五分。

いくら自信があるといっても明らかに損だった。だが、金四郎は、

(こやつ一人なら)

匕首でも渡り合えると思った。

「ゆくぞ」

凄まじい刃風だった。金四郎は反射的に躱した。一撃はもとより虚である。二撃が落ちた。一瞬、かん高く金属が哭いた。火花が散っている。喚きは木暮の口から噴いて出たものであろう。

三度目の刃が、胴薙ぎに横に流れた。金四郎は宙に飛んでいる。草履がその足から抜けた。ふたたび地上に降り立ったときがくっとなって、膝を着く。拝み討ちの一刀が真っ向から落ちてきた。

がっくり膝を着いたところに、

「死ね!」

と、真っ向から、拝み討ちの刃だった。

金四郎は反射的に、さっと匕首で受けた。

が、凄まじい勢いだったし、力がある。

刀が滑った。文字通り、間一髪で、木暮の刀は土をはねていた。

金四郎は地上で一転して、はね起きるや、身を翻して、原木を積み上げた陰へ跳び込んでいる。

これは逃げるというより、態勢を立て直すためだった。

木暮が、さらに追って来た。踏みこんで一打ち——

その眼に向かって、金四郎は匕首を投げた。

木暮は瞬間的に、顔をそむけた。匕首は、耳のあたりを掠めた。

「あっ」

と、ひるんだのは、微かではあるが、傷つけたらしい。

その一弾指の間が、救いになった。

突然——

全く、天の配剤としか言いようがないのだが、金四郎の眼の前に、ふいに刀が躍り出たのである。

躍り出た、というしかない。

鞘に入ったままの一振りの刀が、ひょいと出た。

現実にはあり得ないような、救いの神の仕わざか。

「有難てえ」

金四郎には、刀しか見えなかった。

なぜ、刀がそこにあったか、誰の好意か、そんなことは考えるひまはなかった。

溺れる者が藁をも摑む心理にも似ている。

かれは、夢中で、刀を摑むや、

「ゆくぜ」

と、叫んで、木暮の前面に躍り出ている。

刀さえあれば、鬼に金棒、の自信がある。

手練(てだ)れの浪人者であろうと、喧嘩馴れた無頼者たちであろうと、恐いものはない。

五人や六人、ものとしないだけの腕がある。

匕首を投げた金四郎が、素手のはずが、刃渡り二尺四、五寸の刀を振りかぶって飛び出したのだから、木暮は狼狽した。

最初から、刀と刀なら、それだけの気構えが出来ているが、素手になったはずという認識が覆えされた動揺が、かれの太刀を揺らめかした。

「念仏を唱えろ」

金四郎は、小野派一刀流である。斬り込んでくるのを峰ではね上げるや、一閃に斬り下げている。

木暮の刀を握ったままの右腕が、あざやかに、宙に飛んだ。

肩のつけ根のすぐ下から、すぱっと切り放したのだ。

木暮と名乗った浪人者は、一瞬、かっと瞠目した。

その面てに、ざッと夥しい血が降り注いだ。

金四郎が斬り下げた一刀が、右腕のつけ根近くから、すぱっと切断したのだ。刀を握ったままの右腕が、宙に飛んでいる。

木暮はくるくるっと、独楽のように廻って、河岸から掘り割りの中へ、まっ逆さまに転落した。

はげしい水音とともに、木暮の姿が消えたのを、なかまたちは見た。

待ち伏せの連中である。

この金四郎の手練は、かれらを驚愕させるのに十分であったが、しかし、喧嘩馴れた連中だけに、かえって闘志を燃やして来たのである。

「やあ、先生をやりやがった」

「くそ！　こうなったら、手加減は出来ねえ」

「叩っ斬れ」

「八つ裂きにするんだ」

四人は口々におめき叫んで、斬りかかって来た。

やはり金四郎の手並みを見ると、そういう喚きで、ひるみかける心を鼓舞したのかもしれ

なかった。

金四郎がいつの間に刀を、どこから手に入れたのか、そんな疑問を感じるだけの余裕がなかったようだ。

金四郎は、木暮弥平次を斬ったことで自信を得ている。

ぴゅっと刀を一振りして、

「来い！　蛆虫ども」

と、叫んだ。

が、やはり、刀を与えてくれた〝影〟に対しても、礼の言葉を忘れなかった。

「どこのどなたか知らねえが、いまのうちに礼を言いますぜ。死んでからじゃ、礼のしようがないからな……」

しまいまで言わせず、右側から、ぱっと、一人が飛びかかって来た。

かなり烈しい太刀先だった。

金四郎はこれを空に流して、一間、左へ飛んでいる。相手が大勢の場合、一人と鍔ぜり合いになることは避けねばならなかった。

こういう手合いに、武士道などあろうはずはないから、どんな卑劣な手段をとられるかわからない。

背中を向けることは出来ないのだ。

飛びのくと同時に、近くにいた男へ、たっと片手斬りに斬りつけたが、これはむろん、場所を得るための威しの一刀である。

その男が声にならぬ声をあげて、たたっと、退ったあとへ金四郎はすっくと立って、呼吸をととのえた。背後に原木の山を背負ったのは、敵を三方にするためだ。

「来い！　どいつから冥途の一番乗りをする気だ。頼まれりゃ金四郎、お望み通りに送りこんでやるぜ」

「ほざくな」

と、長脇差が、ぶるーんと、横殴りに斬りこんでくる。

むろん、金四郎は、この四人の敵を斬り殺すことなど考えてはいない。

殺すだけの理由もない。

いうなれば、恩も恨みもない。ただ、売られた喧嘩というにひとしい。

相手が刀を引いてくれさえしたら、金四郎はそれ以上の行動に出るつもりはない。

もともと、この喧嘩も、木暮のほうで仕掛けて来たものだし、その木暮を掘り割りに斬り込んでしまったのだから、他の者は、無関係なはずであった。

普通の無頼者なら、いい加減に退散してしまうはずなのだ。

それが、

「先生のかたき」

などとほざいて斬りかかって来たのだからしかたがない。

「こうなったら、みな殺しだ」

と、金四郎は、威勢よく、ぱっと、片肌脱いだ。
生まれつき色白である。
極道して気儘に遊んでいるから、肉もぽちゃっとしていて、女のような綺麗な肌である。
「なんだ」
と、かえって、相手に侮蔑されることになった。
「まるで女のようだぜ」
「彫り物もねえのか」
無頼者たちだ。からだのどこかに彫り物の一つや二つはある。
それが無頼者の通行手形のようなものだった。
彫り物一つない、すべすべと綺麗なからだでは、なかま扱いも出来ないし、敵としても、拍子抜けしてしまう感じだった。
「こんな野郎、斬ってもしようがねえが」
と、一人が言った。
「先生を斬りゃァがった」
「そうだ、生かしちゃおけねえ」
「さっさと片付けようぜ」
四人は三方から一度に斬りこんでこようとした。
こういう男たちの恐ろしいところは、命知らずということである。

それは、四人が一度にかかれば、下手をすると、お互いの刃で、お互いが傷つくことになる。
同士討ちになる、ということすら、気にかけない無鉄砲さということだった。
そのかわり確実に、誰かの刀が、金四郎を仆すに違いないのだ。
「それっ」
相手の出鼻を挫いて、金四郎は一瞬攻勢に出た。
その勢いに驚いて、ぱっと、四人は飛び退いた。
正面の敵に斬りかけたのだが、その刀が、相手に届くと同時に、脇から斬りこんで来たやつがいる。
身を開いて、金四郎は、片手振りに包から脱出した。
その刹那、背中にすっと冷たいものが走った。
痛い、という感じではなかった。
氷のような冷たいものが、しゅッと走った——
背中である。
(やられた!?)
金四郎は突んのめった。
あやうく、石垣から掘り割りに転落しそうになった。
眼の前に暗い水面がある。

その水面を波立てて、すーっと小舟が近づいて来たのである。
「あっ……」
舟は波に押されて、ひとりでに動いて来たかのように見えたのである。
が、艫に船頭がいた。
手拭いですっとこ被りをしている。無腰である。袖無し布子の姿で、竿を操っている。
「お乗りなせえ」
金四郎が何も言わないうちに声をかけた。
そのときは偶然に漕ぎ寄って来たものだと思われた。
数人を相手の死闘と見て、親切から声をかけてくれたものと思った。
「有難てえ」
渡りに舟、とはこのことか。
金四郎は、身を起こした。
そこへ拝み討ちの一刀が背後から落ちて来た。
「くそっ」
下から掬い上げるような一刀で、ちゃりんと、はね上げた。
相手の刀が宙へ飛んだ。
金四郎が、そのまま身を転じて、舟へ飛び込んだのは、敢て相手を傷つける気がなかったからである。

試合なり怨恨なりの闘いだったら、もう一歩踏みこめば、充分、斬ることはできたのだ。
かれには、その気がなかった。いまはこの場を逃れるだけだ。
背中に一太刀浴びている。
こうした場合は、僅かの傷でも戦力にひびいてくるのである。
金四郎がどさっと、舟の中に飛びこむと、
「やあー逃げるぞ」
「逃がすな」
男たちはどっと殺到した。
その騒ぎを無視して、船頭は、とんと竿で石垣を突いた。さっと舟が離れる。
「やい、舟を戻せ」
「うぬ！　逃げやがるか、やい、待ちゃァがれ」
「ぶった斬るぞう」
刀を振り廻して叫んだが、船頭はまるきり耳を藉さない。
あざやかな竿つかいで、舟は掘り割りを遠去かってゆく。
「畜生、追っかけろ」
「待てえ」
岸辺を走っていったが、舟はわざと方向を変えて、どんどん遠去かり闇の中に消えてしまった。

「ちぇっ、しかたがねえ、おい、先生を捜せ、土左衛門にはなっちゃいめえ」

深川芸者

夜と闇は、時にとって幸いである。

木場の濃い闇が、遠山金四郎を危機から救ったといっていい。

「有難てえ」

と、金四郎は遠去かる岸辺を見やりながら、心から礼を言った。

「時の氏神、いやさ、地獄からの救いの仏だ。御礼を言います」

「ははは、その礼には及びやせん」

と、船頭は言った。

手拭いのスットコ被りをとろうともしないが、声の調子や、機敏な身ごなしからいっても、三十前後というところであろう。

「だが、この刀がなかったら、いまごろは、ズタズタにされて、冥途の川を彷徨っているところさ」

金四郎は、刀を置いていった。

鞘を捨ててしまったので、むきだしにしておくしかない。

「へえ、お役に立って、そいつも喜んでいまさあ」

船頭は、そういってから、

「傷の工合はどうなんで？」

「傷？　ああそうだ」

生命が助かったので、忘れていた。

やっと、痛みが甦ってきた。あいにくと、背中だから、傷が深いのか浅いのか見当のつけようがない。

「どれ、こっちへお見せなせえ」

まだ竿を動かしながら、船頭は言った。

「深いようだと、早く血止めをしなきゃあ、生命に関りまさ」

「なあに、大した痛みじゃねえ、この分なら、生命には」

「そうともいえませんぜ、小さな傷でも生命とりになることもございます」

金四郎は背を向けた。

血が流れ出ているので、傷口の大きさ長さはよくわからない。

「とにかく、手当てを早くしなきゃなりませんぜ、近くに妹がいますから、そこへ一まず、舟をつけましょう」

……このあたり、木場の水路は、迷路のようだ。

船頭は馴れた竿使いで、右に左に操ってゆく。
その間も、金四郎には一抹の不安が残っている。
この男、ただの船頭とも思えない。第一、あんなところで、何をしていたのか。
それに刀をくれたのでも、船頭のすることではない。
（何者だろう？）
助けてくれたのだから、あの無頼者のなかまでないことだけは確かだった。
定かではなかったが、舟が着けられたのは、佐賀町のあたりだ。
河岸から、家がずっとせり出していてこれでよく保っているものだと思われる。びっしりと壁が接して、出窓が水のすぐ上にある。
船頭はその石垣のところで、
「おりき、いるか」
と呼んだ。
返事がして、障子に女の影がくっきりとうつった。
障子が開いた。
女がのぞいた。浴衣に黒繻子の襟のついた半纏を羽織っている。
「あら、兄さん、どうしたのさ、いまごろ」
「けが人だ。蒲団を敷きねえ」
「まあ、そのひと？」

こんなところに、妹がいたとは、幸いだった。
「さあ、あがっておくんなせえ。ここなら大丈夫だ。玄徳一家も知りやしません」
「玄徳？」
「へ？　なんだ、あいつらのことを知らなかったんですかい」
「ああ、はじめて聞くのさ、そうかい玄徳一家というのか」
急に痛みが増して来た。
部屋に通ると、もう蒲団が敷いてあり、おりきは枕に手拭いをかぶせていた。
「そこに横になっておくんなせえ、すぐに医者を呼んで来まさあ」
「大したことはねえのだ、そう大けが扱いしねえでくれ」
金四郎は出来るだけ平静を装っていたが、痛みはひどくなっている。思わずよろよろとなった。
「あぶない」
と、おりきが抱きとめた。
「やあ、こいつァ済まねえ」
「そっと、横に……」
甲斐甲斐しく、おりきは世話をしてくれる。
「おれは藪先生を呼んでくるからな、焼酎をかけるくらいのことはしておいた方がいいぜ」
男は出ていった。

おりきは台所から焼酎を持って来て、
「少し、しみるかもしれませんよ」
「やってくれ」
「いい？」
「ああ、いいとも、あっ、痛う……」
金四郎は悲鳴をあげた。
「ほほほほ、ほほほほ、いいっていうから、ごめんなさい」
「な、なァに、ちっと滲みただけだ、もっとやってくんな」
「いやよ、なんだか、あたし、いじめているみたいじゃありませんか」
「いいさ、おりきさんのような美しい女なら、何をされたって……」
「お口の上手な人には用心しろって」
「誰が」
「兄さんさ」
「おっと名乗りが遅れたが、あっしは遠山金四郎、素寒貧の遊び人だ。おっと、おめえは、おりき……いい名だ」
「兄さんとは、どこで知り合ったんですか」
「知りあうも何も、木場で殺されそうになったところを助けられたのさ。まだ名前も聞いちゃいねえ」

「そう、じゃ。あたしの口からは言えません」
おかしな兄妹だな、と金四郎は苦笑した。
どうやら、ここはおりきの一人住まいらしく、部屋の中は女らしく小綺麗になっている。壁ぎわに三味線が見えた。
（芸者か？）
ほどなく医者が来た。
「藪坂先生ですぜ」
「藪？……」
どうやら本名らしい。医者の名前だから、あまり得ではないだろうが、この医者は、そんな名前などにこだわらない。
「どれどれ、なんだ、大した傷ではないの」
といって、てきぱき治療に当たった。
「三日もすれば、傷口はふさがるじゃろ。だが、それは動かないでいればの話じゃ、動きまわったら十日の余もかかるかもしれぬ」
「おどかしっこなしですぜ」
「何をいう、天下の名医は、おどかしなどせぬ」
「そうですかい、そいつァ有難てえ、これで、治療代が安かったら、助かるんだが」
「高くはないぞ、いのちが助かったと思えば安いものだ」

おりきの兄は、伝蔵と名乗った。

「あらためて礼を言うぜ、伝蔵さんか、あそこで、刀を渡されなかったら、こうやっていまごろ笑っちゃいられなかった」

「刀ですって？　兄さんが」

おりきは妙な顔をした。

「何が幸いになるかわからねえ、実ァ博奕で質にとったやつさ。酔っぱらったんで、材木の間で寝こんでいたら斬り合いがはじまったってェわけだ。それも、おめえ、一人に五人だ。こいつァ、ほっちゃおけねえ、黙っていちゃァ江戸っ子の名が廃らァな」

「おいらァ、天から授かったと思ったぜ」

「なに、金さんが運がよかったというだけさ。こう考えてみると、おいらが博奕で勝ったのも、その運につながっていたわけだ」

「ついているぜ、こうやって、斬られたからこそ、おりきさんに介抱して貰えるのだから」

金四郎が、こういうと、おりきは、頬を染めて、

「あら、介抱なんて。焼酎をかけただけだから……でも、今夜は、なんだか、虫が知らせたというのかしら、お座敷には出たくなかったんですよ」

「そいつもついていたなあ、何だか、つきすぎて気味が悪いくらいだぜ」

伝蔵もおりきも、今夜の斬り合いの原因などを聞こうとしないのが、気持ちがよかった。なんだかんだと詮索好きの相手だと、小うるさくなってしまうのだ。

「おりき、酒はねえか」

「あら、焼酎は、みんなかけてしまったじゃないか」

「べら棒め、こんな夜だから、一ぺえやりてえのだ。金さんとのお近づきだ。極上の酒でなきゃァ話にならねえ」

「ああ、わかったよ、ちょいと買ってくるから」

おりきは気軽に腰をあげた。すらりとして立ち姿が絵になる女だった。

背中の傷は五日も経つと、包帯がとれた。若い金四郎の体力は回復も早かった。

十日目には、もう風呂にも入れるようになっている。

おりきは、その間、甲斐甲斐しく世話をした。熱い湯を金盥に注いで、からだを拭いてくれる。

金四郎は、若いおりきから、そんなふうにして貰うのは嬉しいのだが、いささか迷惑でもあった。

「有難いがねえ、おりきさん」

と、何度か、断わった。

「毎日、拭いて貰っちゃ、悪いからな。一日おきでいいやな」

「あら、それじゃ、垢がとれませんよ」

「なあに、何もしねえんだ。垢のつきようがねえさ」

「あら、何を言っているんですか、人間の垢なんて、何もしなくたって、出てきますよ」

「そんなこともあるめえ」
「いいえ、垢がつかなくなったら、人間は死ぬばかりですって」
「へえ、そうかね」
「年齢をとると、垢があんまり出ないんですって」
「そうかね、おいらなんぞ、垢が出ねえさ、だから、二、三日で死ぬかもしれねえ」
「あら、そんなことありませんよ。金さんなんか、垢だらけじゃありませんか。毎日、こうやって、こすっているからいいようなものの、一日でもやめたら大変ですよ」
「へえ、だから、十日もこのままでいようぜ、そうしたら、カンナで削りゃいいやな」
「あらいやだ。そんな垢づきの男なんかここには置いておけませんよ。出ていって貰います」
「そう、冷てえこと言いなさんな」
「だって臭いの、いや」
そういえば、おりきは、綺麗好きだ。
芸者といっても、お座敷では、ちゃんとしているが、裏へ廻れば、だらしのない女が多い。ろくに着物のたたみ方も知らない者がいるというくらいだが、この深川の芸者は、柳橋に対抗して、意地と張りとで、同じ町芸者でも、気位が高い。
深川芸者は羽織芸者といわれて、羽織を着る。他の芸者にはそんなことがない。もともと、深川の木場は若い衆がいなせで、気っ腑のいい町である。

木場の材木商は投機性が強い。
したがって、山を買い占めて巨利を博することがあるが、また見込み違いで、大損をすることもある。
そんな木場の男が主な客だけに、芸者たちも意地っ張りなのだ。
このおりきも例外ではなかった。
「病人はちゃんと寝ていて、あたしの言う通りに綺麗にしなきゃ、追い出してしまいますよ」
ぽんぽん言うのが、かえって耳にこころよいのだ。
芸者というものには、もともと、男女の別がなかった。
芸人である。男芸者と女芸者がいる。芸をする人、芸をする者、つまり芸達者を〝芸者〟という語は表現している。
新吉原などに芸者がいたといえば、現代からは一寸、想像し難いが、それだけ新吉原遊廓などが、単なるセックスの吐け口ではなく、男性社会の社交場だったことを物語っている。
したがって、こういう遊廓の芸者と、いわゆる町芸者とは区別されていた。
町芸者とは、料理屋で、芸を見せるわけで、今日のそれと大差ない。
料理屋といっても、柳橋とか、今戸界隈とか、芝神明とか、そういう盛り場の料理屋街に、芸者置屋が出来て供給するシステムが出来たのは、江戸中期からである。柳橋や今戸などの原型は船宿であったことはよく知られている。

釣りのための船を貸す、その船宿が弁当の支度をしたり、休息をするための部屋を貸していたのが、仕出しでなく、独自の料理を作るようになったりしたのが、このあたりの料理屋のはじまりである。

休息や食事が、社交場をかたちづくってゆくのも成り行きで、その座興に芸達者を招くようになり、芸者という存在が出来上がった。

幇間というのも、男芸者の同義語で、因みに、たいこ持ち、という別称は、太鼓を持っているからではない。

客を威張らせるために、合の手を入れたり、驚いてみせたり、拍手したり、いわゆる、お太鼓を叩く——そこから来た名称だ。

これには多分に侮蔑が含まれている。深川の芸者が羽織を着るようになったのには、色々説がある。

それを一々書いていては、話が外れる。ともあれ、プライドの象徴であること。客の席に、羽織を着て出る芸者は、この深川門前仲町だけの習慣だということだ。

羽織芸者と異名がある。羽織衆とも称う。

天保の黄表紙『春色梅ごよみ』には、

——風も浮世の流行を思ひ、辰巳の伊達衣裳、模様の好染色も、実婦多川が魁にて、端折(羽織)芸者の多き中、別て当時の名題には……

うんぬんと記されているが、深川芸者が羽織を誇りとしたのは、

「腰から下は使わない」

という含みがある。

つまり、みず転の枕芸者ではない、と言いたいわけだ。おりきは、毎晩、羽織を着て出てゆく。

お座敷がかかるのだが、たいてい宵の口だけで戻ってくる。

腰から下は使わないといっても、簡単には転ばないというだけで、好きな客に呼ばれたら話は別だ。

孔雀でもコブ巻でも、簡単に楽しむことはできる。だが、遊び馴れた金四郎の眼にも、そんな気配は感じられなかった。

(——おりきは勝気だといっても女だ、もう抱いてもいいだろう)

と、金四郎は考えた。

傷が治ったら、いつまでも、この家に居候している理由はなくなる。

そうでなくても、体力が充実してくると、一つ家におりきのような美い女と同居していることが怏えきれなくなっている。

(十日も女を抱かなかったことは臍の緒切ってはじめてだぜ)

と、金四郎は苦笑する。

襖を開けると、そこにおりきが寝ている。

閾をまたげば、それきりだと知りながら、金四郎に遠慮があったのは、やはり危ないとこ

ろを助けられたという弱みがあるからだろう。
こんなに女に手を出すことを遠慮したのははじめてだった。
（――金さんらしくねえなあ）
自嘲した気持ちだった。
背中の傷を治して貰ったという弱みがあるのだ。一ぺん、外へ出なければ、いつもの金さんに戻れない。
相手は芸者にすぎないが、恩人になれば、ただの女という見方が出来ない。
あれ以来、兄の伝蔵は姿をあらわさない。
酸いも甘いも心得た男だ。金四郎の背中の傷も軽いものだったから、心配することはない。
おりきも素人女ではない。伝蔵が心配することはなかった。
一つ家に若い男と女が起き伏しすればどういうことになるか、充分知り尽くした男の粋な計いだった。
その好意に応えるには、やはり金四郎は武士の血が邪魔したようである。
（明朝は出てゆこう）
長屋でも心配しているかもしれないと金四郎は思った。

その夜、おりきが呼ばれたのは、門前仲町の「田ごと屋」だった。
木場の旦那衆の座敷で、半刻ほどで降りてくると、

「あら、おりきさん、『新花菱』から貰いがかかっていますよ」
と、女将が言った。「新花菱」は三軒向こうで、一ノ鳥居ぎわの料亭だ。
「あら、どうして、こちらにいるのがわかったのかしら」
「おりきさんは姿がいいからね、どこからでもわかりますよ」
「誰かしら、呼んでくれたのは」
「さあねえ、大勢さんですってさ」
おりきは自前で出ているから、料理屋の女将の顔は立てなければならない。
「新花菱」に行くと、軽子頭のお勘が目ざとく見つけて、
「桐ノ間ですよ」
と、言った。
この深川では、仲居のことを軽子と呼ぶ。
「こんばんは」
三つ指を突いて顔をあげたおりきは、ちらりと客を見た。
客は五人だった。
正面に坐っていたのは、でっぷりと肥った五十がらみの男で、結城の対をぞろりと着て、旦那顔をしているが、目つきが悪い。濃い眉の下の奥眼がぎょろりとして、冷たい光を放っている。
左右に坐った子分たちは四人。もうみんな酔いの廻った顔だった。

（こんな客だったら、くるんじゃなかった……）

と、おりきは、嫌な気持ちになった。

「おりき、といったな」

正面の肥った男が、にやりとした。

「よく来た。さ、一つ、ゆこう」

「はい、頂きます」

裾を曳いておりきはその客の前へ進みよって、お銚子をとりあげた。

「まず、お酌させて下さいな」

「そうかい、貰おうか」

この親分といわれる男の顔は何度か見たことがある。だが、これまで、席に呼ばれたことはなかったのだ。

「おい、女」

と、わきの男が、無粋な声をかけた。

「おりきでございます」

やんわりとおりきは躱した。

「おりきでもおめこでもいいさ」

「……」

「おめえ、こちらの親分は存じ上げているだろうな」

「ええ、あの、お顔は」

「お名前さ。木場で玄徳親分といえば知らねえ者はねえ。知らねえやつは、モグリだ」

「ああ、そうでございますか」

「なんだと」

「いえね、玄徳親分なら、お名前は、そりゃ伺っていましたよ」

「そうだろう、だから、失礼のないようにしな」

「ほほほほ、深川の羽織は、お客さまに御無礼など、しやァしませぬわえ」

わざと芝居がかった調子で、すいとそらした。こういう下司な連中の席で、まともな応対をしていたら、あとがよくないことは、経験でわかっていた。

文人墨客や、ほんとうに大分限で鷹揚な客だと、しゃれや冗談がわかって座が楽しくなるが、こんな手合いは、ほどほどにはぐらして、席を立たなければならない。

「なんだと、この女」

と、そいつは、かっとなって膝を起こそうとしたが、さすがに玄徳は親分らしい貫禄を見せて、

「止さねえか、六」

と、叱りつけた。

「料理屋に来て、野暮な声を出すんじゃねえ」

「へえ、済んません」

「面でも洗って来い」
六はすごすごと立っていった。
玄徳がおりきの方へ向きなおったとき、また笑顔になっていた。鬼瓦が笑った感じである。
「済まねえな、こういうところに馴れねえのでね。ところで、おりきとやら」
笑顔が消えていた。
玄徳の顔は、笑顔が消えると、冷たく鋭いものになる。もともと造作は悪い。鬼瓦そのものだが、これを笑いで誤魔化して来たらしく笑顔のほうが作りもので、その冷酷で残忍な表情が生地だった。
「おりき、わしは男を小莫迦にする女は好かねえ、腕の一本脛の一本へし折って泣きを見せたくなる」
「……」
「どうせ、そんな女ァ、男にフラれ通しの醜女と相場は決まっている」
「そうですか」
「お前は違うぜ、おりき」
と言って、また鬼瓦がにたりとした。
「この門前仲町でも、五本の指に入るだろうぜ」
この泣く子も黙る地廻りの親分が、そんな甘口を言うとは思いがけなかった。男と女の掛け引きは心得ているのが水商売の女だ。

打てば響くように、当意即妙に応酬するのも粋な女の条件である。
「あら」
と、すかさずおりきは言い返した。
「あたしゃ、羽織衆の中でも一番幟と思っていましたけどねえ」
「ほう、そいつは……」
「うぬぼれ鏡。ほほほ、それが羽織衆の意地でござんしょ。ねえ、旦那、少しもお飲みになりませんねえ」
と、銚子をとりあげた。この話はこれでおしまい、という意志表示で、同じ話をこのあとも続けるのは野暮天として嫌われる。
鬼瓦の玄徳は、そんなことは、まるきり意に介さないようだった。
「ははは、そうともよ。おりきは一番だぜ、ほかの女を連れてきても月にすっぽんだ」
「あらあら、どうしましょう、これじゃ、大勢さんのお座敷に出たら、羽織を台無しにされてしまいますよ」
「おりき、そのうぬぼれ顔が割れねえうちに聞くがね。おめえの情夫のことだ」
「おとこ？」
「ああ、おめえといい仲のつまり情夫さ」
「あら、何をお間違いか知らないけれどあたしにゃ、情夫なんていませんよ」
「ふうん、おとぼけも大したものだ」

玄徳は子分たちを見た。子分たちは、待っていたように、一せいに笑い声をあげた。
「おい、おりき、情夫というのが勘にさわったのなら、ヒモと言い直してもいいがね」
「あらあら、どこまで嘘っ八が拡がるかしれやしない」
「なんだと！」
「いえ、こっちのことですよ。そうじゃありませんか、あたしにゃ、ヒモも情夫も居りゃしません」
「この女、親分の眼を節穴だといいやがるのか」
子分の一人が、腕をまくった。
「そんなことはありますまい。親分はお見違えなすったんでしょうよ。あたしにゃ、兄がいますから、その兄と見間違ったんじゃありませんか」
おりきは、胸を張って言い返した。
「――見間違えだと！」
玄徳は急に威たけ高になった。
「馬鹿野郎、わしの眼に狂いはねいわい。おめえにろくでなしの兄がいるくらいは知っている。そいつのために、ひでえ目にあった。わしが言っているのは、おめえの家にいる男のことさ」
しまった、知られたのか、とおりきは胸が早鐘を打つように鳴りはじめた。
「どうだ、図星だろう、やい、あいつに用があるのさ。おりき、あの金四郎とか金五郎とか

いうやつを、ここへ呼んで貰おうか」
「金さんを……」
「なァに、どうしようってんじゃねえ、ちょいと用があるだけさ」
「……」
「まさか、いやとは言わねえだろうな」
「……」
おりきは、狼狽していた。何といって断わったらいいか、口実を探した。
あのときの金四郎の刀傷は、この男たちがやったのだと知って、むしろ怒りがこみあげていたのだ。
「あの……」
「なんだ」
「あたし……」
「なんだというのだ。え、おい、色男を呼びなって」
子分たちがへらへらと笑った。
「おめえが呼びゃ、すぐにやってくるだろうさ。おい、てめえの巣で、もそもそと、乳くりあうよりも、門前仲町の料理屋でヤルほうが粋だからなァ、ははは、その手助けをしてやろうといっているんだ」
「あたし……違うんです」

色男といわれたことで、かえってはっきりと言えた。
「違います。あたしたち、そんな仲じゃありません」
「何が違うって」
「そんな、いい仲じゃないんですよ」
「とぼけるなって！　これだから芸者の口と財布の紐はままならねえってんだ。え、おい、一つ家に若けえ女と男がいて、それが十日も一緒だ。それで何もなかったなんて、えっへへへ、そんな嘘ァお釈迦さまの前でも通用しめえぜ」
「だって……ほんとなんです」
おりきは、どう言ったらいいか、言葉が浮かんでこないのに焦った。
「だって、背中に刀傷でしょう、そんな大けがをしていて、そんなことが出来るわけがないじゃありませんか」
「大けがだって？　もう治ったらしいじゃねえか。ちゃんと、こっちじゃ、お調べ済みなんだぜ」
「そりゃァ、傷口はふさがったようだけど、ほんとに、そんな仲では」
「わかったわかった。傷口はふさがったさ、だから、今夜あたり、そろそろ、いい仲になろうってんだろう。それなら、かえって、好都合ってなもんだ。ここでやるがいい、見ていてやるぜ。おらァチンチンカモカモを覗き見するのが大好きだ」
玄徳は卑猥な笑いで、おりきの胸に手を突っこんだ。

それまではゆったりと構えて見せていたのが、やはり仮面だったのだ。
「あれっ、御冗談を」
おりきは、避けようとして、身をひねった。
酔いどれ客の無粋な手をあしらうのには馴れている。
だが、するりと手を外されると、玄徳は、さらに、もう一方の手を延ばした。
「逃げるな」
その膝で、猫脚膳がひっくりかえり、お銚子や肴の皿小鉢が、けたたましい音を立てた。
「何をするんです」
さすがに、おりきも笑顔を作っていられない。
ぴしっと手を払いのけて、立ち上がろうとした。
「この女！」
と、玄徳は抱きすがってきた。
おりきの手から三味線が落ちた。
そのとき、逃げようと思えば、逃げることは出来た。
が、三味線は芸者のいのちだ。
おりきは、あわてて、三味線を拾おうとした。その時間だけ、かれらに稼がせたことになる。
「おっと、挨拶もしねえで、座敷を出るなァ、御法度だぜ」

と、子分の一人が、大手をひろげて、立ちふさがった。
「そうとも、おりき、親分になんてェことをしやがる」
別の子分も立ち上がった。
その間に、玄徳は倒れた膳部を押しのけて身を起こしていた。
「おりき、よくも恥をかかしてくれたな」
「――変な真似をなさるからですよ。あたしゃ帰らして貰います」
三味線を抱えるようにして、おりきはじりじりと廊下の方へ出ようとしたが、子分たちは、にやにやしながら、手をひろげている。
「親分、おりき姐さんは帰りてェそうですがねえ、どうします」
「帰りてェか、それなら、帰りな」
玄徳のその言葉に、
「えっ！　帰してくれるんですか」
「ああ、いいとも、その前に挨拶してからだ。客に恥をかかした無礼を詫びてからだ」
「ええ、そりゃ、済みません、ふつつかなものですから」
「おい、それが詫びか？　詫びってェのはな、裸になって、両手をつくんだ」
「えっ、何をいうんですよ。冗談じゃない、辰巳芸者が、そんな真似は」
「出来ねえってのか、出来るようにしてやらあ」
子分の一人が、わきから、さっと三味線を奪いとると、足をあげて、ばりっと猫の皮を踏

み破った。
「あれ、なんてェことを」
「次はその肌だ」
さすがに綺麗ごとでお座敷をつとめようとしたおりきも、かっとなった。芸者のいのちの三味線を踏み破られたのだ。
「何をしやがるんだい」
おりきの口から、威勢のいい啖呵が飛びだした。
「三味線は女のいのちだ。操と同じだ。こんな真似をされちゃァ、この門前仲町で羽織を着ちゃいられないよ」
「じゃァ脱ぎな」
玄徳が言うと、子分たちが一せいにげらげら笑いだした。
「そうだ、脱ぎな」
「羽織を脱ぎな」
「全部、脱ぎねえ」
「裸になりねえ」
「手伝ってやろうか」
あっと思ったときは、羽織が宙に舞い帯に手がかかっていた。
粋に結んだ帯の端が畳を掃いた。

「畜生、何をしやがる」
口だけは威勢がいいが、女だから、力ずくでやられては、どうにもならない。
大の男たちが寄ってたかってのことだ。
とうとう帯を摑まれて、ぐいと引かれると、おりきは反射的に抵抗しようとしたからだが、くるくるっと独楽のように廻って、悲鳴をあげた。
帯を奪いとられて、よろよろとなったときは、眼が廻っている。
天井や襖がぐらぐらと、まるで大地震のように揺れて、おりきは、ばったり倒れた。
「まだ、裸じゃねえぜ」
「さあ、一枚一枚、脱がしてゆこう」
「凝っとしていなよ。てめえでするこたァねえ」
「わっちらが手伝ってやるわな」
子分たちは、紐をほどき、腕をとらえ着物を脱がし、着せかえ人形を裸にしてゆくようにして、楽しみながら玄徳の意に応えているのだった。
おりきは、悲鳴をあげるだけだった。
さすがに、この落花狼藉には、料亭の方でも驚いて、どかどかと数人がやって来て、中をのぞいたようだ。
だが一人や二人ではない。
それも名うての悪辣な一家が、五、六人がかりでやっているのだから、制止するどころで

はない。
あわてて唐紙を閉めてしまった。
「お役人に御注進しなきゃ」
「待ちなよ。うっかりすると、あとが恐いよ」
「御礼廻りだなんてことになると」
「そうさ、火でもつけられた日にゃたまらない」
「でも、見て見ぬふりも出来ないし」
どたんばたんと、大変な騒ぎだ。店の者は女将をとり囲んで、二階を見上げ、どうしたらいいかと、相談しているうちに、静かになった。
「あら……どうしたのかしら」
「こ、殺されたんじゃないかえ」
「お由、ちょっと見ておいで」
女将はおびえた顔をふり仰いで言った。
傍若無人な連中である。
いくら色街といっても、他の客への慮りもありそうなものだが、こういう手合いには、遠慮というものがない。
地廻りというやつは、その土地では役人よりも睨みが利く。
理屈が通る相手ではなかった。日々顔を見ているのだから、意地の悪い仕打ちをしようと

思えばどんなことでも出来る。

早い話が、店の前でなかま喧嘩をされるだけで、客が寄りつかなくなる。料亭のような弱い立場では、たとえば吸物椀の中に、蠅が一匹浮いていたというだけでも、悪い評判になる。

「お役人に知らせちゃ駄目だ、火をつけられるよ」

と、女将は、走り出そうとする軽子(かるこ)―仲居を、あわてて制した。

「だって、それじゃァおりき姐さんが」

日ごろおりきに心づけを貰っているから軽子は気が気でない。

その間に、おりきは、男たちに手籠めにされかけていた。

着ているものを次々と剝ぎとられていく。

抵抗したが無駄だった。

何しろ、荒くれ男が五人もである。

日ごろ三味線しか持ったことのない芸者の細腕では、抗いようがない。

両腕を圧えられ、足をつかまれ、襦袢まで剝ぎとられては、もう観念するしかなかった。

「畜生！　みておいで、あたしゃきっと、しかえししてやるからね。〝菊むら〟のおりきは、昨日今日の芸者じゃないんだから」

「へえ、吠えるだけ吠えな。そうやって吠えている牝犬をやるのが楽しみさね」

と、玄徳は羽織を脱ぎ捨てると、

「おい、一枚くらいは残しておきな」

と、顎をしゃくった。

腰のものまで剝いでしまっては、味気ない。

最後のものを一枚、身にまとっているというだけで、女の羞恥が色気になるのだ。

おりきは必死になって、最後の一枚を守ろうとして、脚を圧えた者を蹴飛ばして、

「ちくしょう、負けやしないよ」

「ははは、いいぜ、姐さん」

玄徳はゆっくりと帯をほどきながら、そんなおりきを眺めおろしている。

女が抗えば抗うほど、玄徳の楽しみは増えるのだ。

こういう男は、普通の状態では気が動かない。

異常なほうが昂奮するのだ。

かれはおりきの腰のあたりにうずくまると、手を伸ばした。

暴れるので、前が割れている。玄徳は手を差しこむと、内腿のあたりを撫でた。

「ひひっ、なんと滑らかな肌だ」

「さわらないで！」

「こんないい肌をさわらねえでおくなんて勿体ねえ。たっぷりと可愛がってやるぜ。どれ、観音様の御開帳だ……」

おりきが腰のもの一枚にさせられて、五人の男たちに凌辱されようとしていたころ、金四郎は飛ぶように門前仲町を走っていた。

軽子のお由というのが、知らせにきたのだ。

「女将さんは、しかえしが恐いから、お役人へ知らせちゃいけないって。そんなあんまりじゃありませんか、おりきさんがそれじゃ、可哀想ですよ、だって、あんなうす汚い悪党に、手籠めにされてしまうなんて」

お由は、女将の目をぬすんで走って来たという。

「有難てえ、礼を言うぜ」

金四郎はお由を置いたまま、走り出たのだった。

「おれのせいに違いねえ、やつらは、おりきを囮りにして、おれをおびき出そうというのだろう」

走りながら、金四郎は、そう考えた。

「おれが行きゃ、おりきは放すだろう。やつらの狙いはおれだけのはずだ」

金四郎がそう感じたのは、かれの武士の血である。

武士には、玄徳たちのような、下司な考えの男たちは理解できない。

はじめは金四郎をおびきだすためだったにしろ、おりきの抵抗にあって、裸に剝いてゆくうちに、欲情してくるのだ。

男なら誰でも欲情はする。そのとき、それをいまわしく感じて制馭するかどうかである。

金四郎は刀をつかんでいた。

あの、鞘のない刀だ。

さすがに抜刀では町中を走れないので、白刃には、目についたおりきの長襦袢を巻きつけてきた。

急いだので裸足だ。

そんな格好で、一ノ鳥居をくぐり、門前仲町の「田ごと屋」に飛びこんで来たのだから、女将たちが驚いた。

「あれ、何ですよう」

「おりきはどこだ」

「どこって、一体、お前さんは」

「うるせえ、おりきを救けに来たんだ」

「こ、この上ですよ」

女将がこわごわ、上を指さした。

金四郎は返事もせず、階段を駆け上がっている。

「おりき、どこだ」

と、叫んだ。

「おりき！」

それに返事させまいとして、子分の一人が、あわてて口を抑えようとしたが、それより早

く、おりきは金切り声をあげていた。
「金さん、助けて、金さん」
「おう！」
金四郎は、その声のした襖を蹴破って、転がりこんだ。
「あ、野郎だ」
あっと、子分たちが総立ちになる。
「おりき、迎えに来たぜ」
(間にあった……)
おりきの姿を見て、金四郎はほっとした。
腰のもの一枚——落花狼藉という風情だが、どうやら、まだ犯されていない様子だ。
刀を巻いて来た緋色の長襦袢が、ぱっと宙に舞った。
「野郎、飛んで火に入る夏の虫ってェのを知らねえな」
吠えた男がいる。
金四郎はにやりとした。
「生まれが悪りいわりには、聞いたふうなことを吐くじゃねえか。せっかくだからお返しをしてやろう、虎穴に入らずんば虎児を得ずってな」
「なんでェ、それは」
「わからなかったら地獄の閻魔に聞いて来な」

語尾は宙に飛んでいる。
金四郎は一跳するや、おりきの傍にいた若い男を斬った——
と、見えた。
その男は、絶叫を噴きあげてへなへなと崩れたのだ。
「や、やった！」
と、誰かが叫んだ。
「ああ、ぶった斬ってやったぜ。よく見な、血が出ねえ、この野郎は、魚じゃねえか、だぼはぜかもしれねえ」
こんなときでも、金四郎は余裕がある。峰打ちにしたのは、こういう場所で人を斬ったら、自分の損になるからだ。
「さあ、次はどやつだ」
その声に促されたように、わきから、
「くたばれ」
と、匕首が突っかけて来た。
金四郎は、ひらりと身を躱すや、たっと、蹴った。
弱腰を蹴られた男は、よろよろと、よろめいて、匕首を持ったまま、ばたっと倒れた。
その刃の下から、わっと声がした。
なんと玄徳のどこやらに刺さったらしい。

「や、いけねえ」
「親分がやられた」
「鉄の野郎が、へんなことを……」
子分たちは呆然となった。
目のあたりに見たのだから、どうしようもない。
玄徳は子分に刺されて、
「こ、この馬鹿野郎」
と、呻いている。
匕首は、玄徳の腹のあたりに刺さったらしい。
「間抜けめ、くそったれ、こいつ」
「お、親分、勘弁してくんねえ、つい手もとが狂って……」
金四郎は、この間に、おりきを助け起こしていた。
「さあ、衣裳をとりな。おっと大事な羽織もだ」
「有難うよ、金さん」
「行こうぜ、こうな馬鹿どもとはつきあいきれねえや」
金四郎がおりきを抱くようにして出てゆくのを、もう玄徳以下、子分たちも止める気もなくなっていた。
階下でおりきは着物を着た。それを手伝ったのは軽子のお由である。

「ほんとうにひどい人ですよ。でも、金四郎さんが来て、よかったですわ。もしも間に合わなかったら」
と言いさして、あわてて口を噤んだ。
悪いことを言ってしまったと思ったらしいが、おりきのほうは、玄徳たちへの憤りで、まだ熱くなっている。
「ほんとうさ、あんなやつらに手籠めにされちまったら、深川を歩けやしないよ」
「悪い人たちですねえ。あたしのともだちも酷い目にあった子がいるんです。お父っつぁんが、借銀をしましてね、それの金主が玄徳親分だというので、そりゃァ大変なことになっちまって」
「やっぱり、手を出して来たのかえ」
「ええ、悪いことに、お父っつぁんが死んだものだから、借銀は子供が払えって。だって、息子なら、どうにかなるけれど、娘でしょう、どうにもなりゃしません……」
そのときは、金四郎は、隣の部屋にいた。情婦というわけでもないおりきが着衣しているところにくっついているわけにはいかない。
玄徳たちがまだ未練を持って、悪戯をしてきたら困るので、いわば隣室での見張りをしていたのだ。妙な役割だが、乗りかかった舟だからしかたがない。
（似たような話もあるものだ）
と思った。

断片的にしか聞こえなかったせいもある。が、お由の話は、おなみの境遇によく似ている。

（おなみのことだろうか？）

あとから聞いてみよう、とそのときは何気ない気持ちだった。ふとした機縁でおなみを助けることになったが、父親の通夜の席で、肌を合わせるという、不道徳なことをしてしまっている。

おなみの方で拒まなかったとはいえ、そして金四郎も、おなみの初穂への魅力を断ちきれなかったのだが、あとから考えると、やはり、仏サマに済まない気持ちだった。

おなみが燃えて、思いがけない愉悦の時が持てた。あんな女の燃え方には、めったに出食わさないだけに、金四郎は、おなみのことを毎夜のように思い出したものだ。

おりきと一つ家に起居しながら、夜這いしようとしなかったのは、そのせいもある。

そのおなみは、その後どうなったか、傷が治ってみると、あらためて気にかかってきたのだ。

どかどかと玄徳たちが、階段を踏み鳴らしておりてきた。

「女将、邪魔したな」

と、誰かが、怒鳴るように言うのが聞こえた。

（来るか？）

と、金四郎は刀を握りしめたが、かれらは諦めたように、捨てせりふを口にして出ていった。

（――お由のやつ、ト一ハ一じゃねえかな）

金四郎はなんとなく、そういう感じがした。ト一ハ一は、上下の分解したもので、レズのことだ。

レズとは女同士の性行為乃至は度を越した仲の良さを称するものだが、何と現代の産物ではない。

江戸時代、文化が爛熟してくると、下々でも盛んになってくるが、大奥三千人の女御が島での淫欲図絵を蔽うばかりのものがあったらしい。

お由は日ごろおりきから、祝儀を貰っているばかりでなく、その美しさに参っているらしい。

だが、こんな場合は役に立つ。

金四郎はおりきの帰宅にお由を供につけた。一安心である。

裸足で走ったので汚れていたし、汗をかいたのだ。

金四郎は櫓下の横丁に銭湯を見て入っていった。「やぐら湯」である。

十日も傷の治療をしていて、銭湯には入っていない。

いつもおりきが肌を拭いてくれたのだが、やはり金だらいで手拭いを絞って拭くだけでは、さっぱりしない。

金四郎は銭湯が好きだから、一日に二度でも三度でも入りたいほうである。

銭湯は思ったより空いていた。
金四郎が裸になっておりてゆくと、
「おや、金さん」
と、洗い場にいた男が声をかけた。
「さっきは血相変えて走っていなすったねえ、何が起こったかと驚いたぜ」
「ああ、変なところを見られちまったな」
「女に逃げられたわけでもあるめえに、何だか、まるで」
「まるで、なんだえ」
「へっへっ、金さんは、女に逃げられるような間抜けじゃねえやな」
「あたりきよ。おっとごめんよ」
小桶でかけ湯をしてから、湯槽に飛びこんだ。
「ああいい湯だ」
湯槽の中で手を伸ばして、金四郎はざぶざぶと顔を洗った。
「なあ、金さん、いつかゆっくり、教えて貰おうと思っていたんだが、おめえさんは博奕で負けたことがねえんだって？」
「なあに、そんなことがあるものか。負けるも勝つも、賽ノ目しだいよ」
「だって、そういう評判ですぜ。金さん背中を流してやらあ」
「有難てえ、かゆくてたまらねえ、ここんとこずっと病気をしていてよ」

「そうかえ、ひえっ、この傷ァ……こいつァ刀傷じゃねえかえ」
まだ治癒したばかりで、生々しい傷痕だった。顔馴染みの町人は、金四郎の背中が男にしては珍しい色白の肌だけに、そこにくっきりとついた刀傷の生々しさに吃驚したようだった。
「ああ、刀傷だ。男の向こう傷は名誉だが背中だから、こいつァ小ッ羞ずかしいやな」
男の向こう傷は名誉だが、背中や尻の刀傷は、〝逃げ傷〟〝うしろ傷〟といわれて不名誉なことになっている。
むかし戦場で、恐怖のあまり敵にうしろを見せて、追撃され、背後から斬られたり突かれたり、矢を受けたりした傷あとは、卑怯を物語ることになったのだ。
泰平の世がつづいても、武士の世界の常識は変わらないから、こういう傷はやはり見っともないのだ。
金四郎の場合、五人もの男たちに囲まれての傷だから、卑怯も何もないが、しかし、事情を知らない者には、やはり、うしろ傷に違いないのだ。
金四郎はざぶっと湯をかけて、
「ま、そのうちに傷痕も消えるだろうさ」
「いんや」
と、その男は首を振って、
「金さん、この傷ァ消えねえよ。少なくとも三十年は消えめえ」
「おい、驚かすじゃねえか。三十年も背負ってなきゃならねえのか」

「悪いところだねえ、これじゃ片肌脱ぎも出来めえ」
その男は同情したように言った。
河童の久助というのが、この男の名前だった。
渾名の由来は、背中の刺青だった。河童が泳いでいる図で、波紋がボカシでなかなか味な図柄になっている。
この男は町火消だ。
町火消はたいてい文身をしているが、面白いのは、火防せのために、秋葉大明神を背負っていたりするが、この久助のように、水に因んだ刺青が多い。
火防せには水に縁のあるものを刺青していれば、災難が降りかからないと信じられている。どうせ迷信だが、火の中に飛びこまねばならない職業だから、せめて、そういうことで自信を持とうというのだろう。
「なあ、金さん、いい考えがあるぜ」
背中を流してやりながら、久助は言った。
「おめえもホリモノをしなさるがいい」
「え!?」
「このあたりにさあ、つまり、その」
「傷隠しか」
「ああ、うめえ刺青師を知ってますぜ、彫宇之、といってね、当世、イの一番だね」

「彫宇之、聞いたことがあるぜ」
「腕も一番だが、仕事も早い、よそでは、ひと月かかるところなら、まず、十日だね、ミノ一で済まあ」
「そいつは早いな」
「ちッと痛てェがね。金さんは、痛てェからといって、途中で逃げ出しやしねえだろう」
「当たりきよ」
刺青の途中で逃げだしたりすれば、それこそ、男がすたる。
「その彫宇之はどこに住んでいるんだえ」
そう聞きかえしたとき、久助は口を噤んだ。どかどかと入ってきた男たちがいたのである。

死化粧

荒々しい男たちである。酒臭い息を洗い場に吐き出しながら、男たちは裸になると、洗い場へおりて来た。
「番台の野郎、もう火を落とすなんて言いやがって」
「頓馬な野郎だあ、山甚の旦那の顔を見て、木戸を突くなんて、あの野郎、ろくな死に方は、

しねえぜ」

「そうとも、木場の山甚親分が湯へ入りなさろうってんだ、有難く恩に着ろいって」

男たちは、がやがやと勝手なことを喚きながら入って来た。

六人か七人だが、荒くれ者の一団なので、他の客たちは竦みあがった。

山甚と呼ばれた男は、六十近い感じだが、前身は草角力の大関ででもあったかでっぷりと肥って、便々たる腹を揺すっている。

かれらは、集団で調子づいているから傍若無人だ。

ろくにかけ湯もせずに、ざわざわと湯槽に入ってきた。

「ひでえな」

飛沫がかかったので、久助が呟いて顔をぺろりと拭った。

低い声だったが、男の一人が聞き咎めた。

「なんだと！　やい、何と言った」

「へ、へえ」

「やい、何とか吐かしやがったな」

なかまが多いので、恐いものなしの気持ちなのだろう。カサにかかって、久助を威しにきた。

「こいつ、表へ出ろ」

さすがに見かねた。

「おい、兄さん、どこの兄さんか知らねえが、一寸、図に乗りすぎゃしねえか」

金四郎は久助を押しのけるようにして湯槽の中で、前へ出た。

「なんだと、この野郎。おれたちに喧嘩を売る気か。え、おい、この生ッ白いのがよ、山甚の身内と喧嘩したいとよ」

「へへえ、こいつァ面白え、買おうじゃねえか、なあ、みんな」

「そうとも、買ってやるぜ、山甚の身内に喧嘩を売るたァいい度胸だ」

こんな子分たちを止めもしないで、そのでっぷり肥った男は、面白そうに成り行きを見ているのだ。

金四郎は、その男を見た。

「お前さんかい、山甚てえのは」

男は、はじめて険しい表情になった。金四郎のそんな態度を不快に思ったようである。

「わしだが……」

「そうかい、山甚かい。山甚てえのは、この土地じゃ、大した親分だと聞いていたが、見ると聞くとは大違いだねえ」

「なんだと！」

ざぶっと湯をはねて、立ち上がった。

「親分てえものは、子分が世間さまに迷惑をかけるときは、叱りつけて抑えるものだ」

「……」

「そいつが出来ねえでは、親分といえねえ。第一、親分面をするには、睾丸が小せえようじゃ話にならねえな」

と、金四郎は下腹を見た。

山甚の腹は、便々たる太鼓腹である。六十近い様子だが、こういう腹はしぼまないものか、その腹のかげにかくれて、男の一物はよく見えない。

金四郎は、平気で山甚に近よると、

「親分の貫禄ってェやつは、睾丸にあるもんだ」

こう言うや、いきなり、両手でざぶりと、湯の中から、山甚の睾丸を掬い上げた。

「あっ……」

山甚も吃驚したが、まわりの子分たちも啞然となった。まさか、そんなことをされるなどと、本人はもとより、子分たちも思いがけなかったのだ。

金四郎は、両手で掬いあげた山甚の一物を、珍しいものでも見るようにじろりと見て、

「ほう、結構、御立派だぜ」

「お、おい……」

山甚が何か言おうとする前に、金四郎は、にやりとして、

「久助、見ねえ、立派だぜ」

「あ、ああ、り、立派でござんすねえ」

あわてて久助も答えた。

「わっちのより、チット大きいようだ」

「どうして、どうして大したもんさ。やっぱり山甚の親分だ」

ぱっと放すと、金四郎は、その手を湯の中でざぶざぶっと洗った。

「久助、出ようぜ、御立派なものを拝見したからねえ、もう用はねえや」

こう言い捨てると、金四郎はさっさとあがるとろくにからだを拭きもせずに、あとも見ずに脱衣場へ出ていった。

久助もあわてて、そのあとへついていった。あとに残された山甚と子分たちは啞然としたままだった。

あまりにあざやかな金四郎の意表をついた行為で、度胆を抜かれたというか、急には、どうしてよいかわからなかったのだ。子分たちが、われにかえって騒ぎだしたのは、金四郎が、帯を締めて草履を手にして振りかえったときである。

「あ、あの野郎！」

「逃がすな！」

「ふてェ野郎だ」

「ぶった斬れ」

わっと、一せいに追いかけようとしたが、みんな全裸になっているのだ。

「やいやい、あわてるんじゃねえ」

と、山甚も、漸く、してやられたことに気がついて、これは苦笑していった。

「いまから騒いでもしかたがねえ。あの野郎は、どこのどいつだえ」
「へ、へえ、金四郎とか、金五郎とか……」
「土地の者か」
「先ごろから鉄火場では見かけますがねえ、どこの馬の骨か、よくは知らねえので」
「今度見かけたら、さぐって来な」
「へえ」
「だが、いい度胸だぜ、そうか、金の字か」
山甚はむしろ、してやられたことに感心したように首をふりながら、ざぶりと巨体を湯に沈めた。

おなみが首を吊って死んだのは、それから三日目のことだった。
金四郎とふとしたことから、交わりを持ったおなみは、あの夜から、死んだ気になっていた。
(どうせ死ぬつもりだったのだから……)
と、あきらめている。
あのときも、掘り割りに身投げしようとするところを金四郎に助けられたのである。
金四郎との一夜の交情は、思いがけないものではあったが、
(死土産……)

と、淋しく微笑むのだった。
人間、誰しも生きる道があれば生きていたい。
まして、若い娘である。
だが、薄幸な運命は、彼女を生かしてはおかなかった。
父親の残した借金が、彼女を身動き出来なくしていた。
金四郎が玄徳の子分たちと、闘ってはくれたが、それは、おなみの境遇を変えるものではなかった。
一夜明けると、玄徳の子分たちがやって来た。
「さあ、今日からはじめて貰おうか」
借金を払うための稼ぎをしろ、というのである。
こういう無頼者の貸し金は、烏金(からすがね)よりもっとひどい。
高利貸しから借りる金のことを烏金というのは、烏がカアと啼けば、利息がついている、という、甚しさなのだが、無頼者の高利貸しと来ては、烏も啼かないうちから利子がついている。最初から二割の天引きで、したがって、見る見る雪だるま式にふくれあがってくる。
早い話が、二両三両という金でも、おなみには工面の方法がなかった。
「吉原へいってもらうか、金猫・銀猫の稼ぎをやるしかあるめえ」
と、子分たちは威した。
新吉原の遊廓へ身を沈めれば、数十両にはなる。

だが、それで父親が助かるなら、それでもよかった。無垢の身の娘が、それだけ決心するのも大変なことだったが、おなみは、決心はしたのである。

父親が頓死したことで気持ちが変わった。

もう生きていてもしかたがない。身投げしようとしたのは、そのためだ。

「さあ、お目見えだ」

深川の金猫・銀猫は、娼婦の俗称である。

〝金猫〟は値段が高い。若くて、綺麗な方で〝銀猫〟はこの道十年以上の、それこそ、五十過ぎたのまでいる。

そうした、女たちの一人になるのは、おなみは耐えられない。

(死んだ方がいい)

と、思った。

三日間、その娼婦になるための仕込みをさせられた。

仕込みとは、この場合、訓練である。

娼婦の訓練といえば聞こえはいいが、玄徳をはじめ子分たちが、三日間、慰みものにするのだ。

同じ死ぬなら、金四郎の思い出を抱いたまま、美しく死にたい、と、おなみは思った。

はじめての男を、女は忘れない。

たとえ強姦されても忘れないものだという。

その是非は別にしても、おなみは、金四郎との熱い思い出は、冥途への土産にしたかった。

(金四郎さまに愛されたからだを)

このまま持って、死んでゆきたい。

それでこそ、死ぬという思いきった行動も、美しく彩られるのだと思った。

だが、玄徳の子分たちは、彼女に自由を与えなかった。

「来な、こんなところにいちゃ、せっかくの花嫁御寮が、鼠に引かれてしまわあ」

と、三人でやって来て、どこかへ連れてゆこうとする。

「いやです。あたし、お約束通り、明後日(あさって)いいえ、その次の日から、お金を稼ぎますから」

と、一時逃れに、拒んだが、そんな甘い手に乗るほど、かれらは、お人善しではなかった。

いずれも、札つきの悪党連中である。

「そうとも、今夜から稼げというんじゃねえのさ」

と、猫なで声で、

「まあ、なんというか、その花嫁修業だわさ」

「……」

「稼ぎに出る前に、とっくりと心得を教えてやろうというんだ」

「でも……」

「さ、来な。新吉原へ叩き売られることを考えてみねえ、そんな贅沢は言っていられねえんだぜ。うちの親分は、あの通り御親切だ、思いやりもあら。おめえのために、金の字から、

ひどい傷を負いなすったが」
「……」
「そのことで、おめえを咎めようというんじゃねえ。あれは金の字にしかえしをすりゃ済む」
「済みません、あたし、そんなつもりで金さんに……」
「いいってことさ。ただな、おめえが、その、にっこりと笑ってさ、親分を見舞ってくれりゃいいのさ」
「それくらいでしたら」
おなみには、こういう連中の腹の黒さ口のうまさはわからない。
つい、うかうかと乗せられてしまって玄徳のところへ連れてゆかれてしまった。
そこは、一ツ目の検校屋敷の裏手だった。
「さあ、入んな」
押しこまれるように入ったおなみは、玄徳の部屋に連れてゆかれるかと思っていると、廊下を何度か曲がって、突き当たったところが、湯殿への渡り廊下だった。
「さあ、丁度、湯も沸いている、入りねえ」
「え!?」
おなみの顔はみるみる蒼ざめた。

一ツ目の検校屋敷といえば、深川や本所界隈はもとより、両国橋を越して日本橋で下谷辺でも知らぬ者はない。
検校というのは周知のように、盲人社会の最高位である。
この検校屋敷は、のちには総録屋敷という。
元禄六年のことというが、杉山検校という者がこのあたり一帯を拝領した。
いつだったか、父親が笑い話のようだが、といって話してくれたことがある。
この杉山検校というのは、五代将軍綱吉の針医になったほどの名医で、将軍の目を治して信頼を得るや、関東の盲人を支配し日本全国の総検校となった。
「何かほしいものがあるか、申せ、かなえてとらす」
と、将軍にいわれて、
「一つ、目がほしゅうございます」
と、答えたので、
「一つ目をやろう」
ということで本所一つ目河岸に屋敷を賜わったというのだが、語呂合わせで、後人の作り話であろう。
一つ目とは、橋の一つめ、二つめの順番でつけられたにすぎない。
ともかく弁天町一円の地所も拝領したので、検校屋敷といえば、大名にも匹敵する力があった。

盲人保護という政策もあり、俗に座頭金という高利貸しが、かれらにのみゆるされていたからである。

現代の福祉政策を先取りしたようなものだが、盲人にだけ適用されたのはなぜだかわからない。

検校以下、別当、勾当、座頭の四官を十六階に分けて、さらにこれを七十三刻とこまかく身分を分けてある。

杉山和一はただの検校ではなく総検校であったので、後年、その地位を継称する者を総録検校と称するようになった。

したがって、寺社のほうの僧録とは制度や身分とまるきり別のものである。

因みに、京都に御織検校というのがいて、関西三十三カ国の盲人を支配していたが、これがのちに総検校となったので、江戸の総検校が総録検校に昇格したのである。

はじめは技能によって得られた検校の地位が、のちには旗本の株の売買と同じように金銭で購えるようになった。早い話が勝海舟の祖父は、叩き上げで、この検校の株を千両で買って身分を得た。

つまり一夜検校で、それくらい盲人による高利貸しと、そのピンハネの利益は大きかったのである。

さて、この一ツ目の総録屋敷の裏の町屋から入ったのだが、なんと、中は通じていて、湯殿まで出来ている。

当時、町家では湯殿の設置が許されていない。火事の心配だからだが、湯殿を作ることが出来るのは屋敷だけだ。

「さあ、裸になんな」

といわれておなみは不安におびえた。

「さあ、湯へ入んな」

男たちは、退路をふさぐようにして言った。

「――なぜ、どうしてお湯へ」

「どうしてって、それが、つまり、しきたりってやつさ」

「しきたり？」

「そういうことだ。それとも、親分の見舞いにくるか」

「いいえ、あの……」

玄徳の顔など見たくはなかった。少しでも引き延ばしたかった。

「そうかい、入るかい、入んな。湯は丁度、沸いているそうだ」

湯殿は広かった。脱衣の部屋もちゃんとしたもので、簀ノ子が敷いてあり、濡れた足であがってもいいようになっている。

おなみは、着物を脱いで、湯殿へおりていった。

檜の香が漂っている。湯槽も、壁も天井も新しい檜だった。

おなみが、湯槽をまたいで入るのを、壁の隙間から見ている眼があった。

壁は無双になっていて、細く隙間が開いている。向こう側は暗くて何も見えないが、そこに人の気配があった。

はじめ、おなみは気がつかなかった。

かけ湯をしたりしていて、その音でまぎれていたのである。

おなみは、自分の肌を愛おしむように、そっと、両手で抱えるようにしている。

着痩せするたちなのか、裸になると若い弾力のある乳房が豊かだった。桃色の乳首も小さく、つんと上を向いている。

おなみは自分でも、この生き生きとした若い肌を死なせてしまうのが悲しいのであった。

誰も見ている者のない湯殿だという安心からか、おなみは、前を隠したりしない。

覗き見している方は、その明らさまな姿態の動きが、たまらなく新鮮なものに見えた。

暗い中で、玄徳は蒲団に寄りかかって眺めている。

「田ごと屋」で傷ついた腹に包帯をして、寝ていたのだが、おなみを連れて来たと聞いて身を起こしたのである。

女の一人湯を覗き見する機会は少ない。

町家には湯殿がないし、塀のうちで夏場は行水をつかう者も尠なくないが、どこから覗かれるかもしれないという懸念がある。

こうして湯殿に入ってしまえば、女は安心するのだ。その安心感が、大胆な姿態を見せるのである。

（――どうせ死ぬのだから……）

おなみは、死化粧を思った。

人生の垢を綺麗に拭って、美しく死んでゆこうと思った。

人前では恥ずかしい陰部の浄めなども、この湯殿なら出来ると思われた。

大きく股をひらいて、おなみは自分の秘所を覗きこんだ。

広い湯殿だった。ここは総録部屋の一部になるのだろうか。

とすると、盲人のために考慮されているのだろうか。広々とした湯殿は、湯槽の檜材も贅沢に作ってあり、角も丸みがつけてあり、転んだり、ぶつかったりしないような配慮がしてあるのかもしれない。

連れこまれたおなみには、屋敷の湯殿というのははじめてであった。銭湯しか知らないのだ。

こういうところで、からだを洗うというのもはじめてのことだった。

洗い粉らしいものが小桶の中にあるし、糠袋がいくつもある。紐がついていて下げてある。

着物を脱ぐところには、乾いた手拭いがたくさん置いてあった。軽石もあった。

洗い髪は、たいてい髪を洗うのに用いる椿油を湯で溶かして、そのあとすすぐのである。

そうすると洗い髪がしっとりする。

洗い粉をゆるく溶かして、少量ずつ、用いると、垢が落ちやすい。そのあとを糠袋でこすると、肌の荒れが少ない。

女のもっともよく洗わなければならないのは股間であった。下肢のつけ根のところなど、日ごろ風通しも悪いから、黒ずんでいる者が多い。

水商売の女などは、銭湯でも、人目があろうが、かまわず、大股ひらきでごしごしと洗っている。

娘などは、見られると恥ずかしいから、背中を丸めて、こそこそと手早く洗う。

そのため、水商売の女たちは、

「素人さんより、あたしたちのほうが、アソコは綺麗だからね」

と、揚言して憚らない。

これは、そういう理由からである。

また、水商売の女たちにとっては、アソコが、金のなる木だから、殊更に大事にする。

「オ××コが臭せえ」

といわれるのをもっとも恥とする。

いや、商売モノだから、臭気があっては、客がよりつかない。つまり、裏もかえさないし、馴染みにもならない。

したがって、そこを清潔に保つためには、素人以上に、気をつかうのだ。

巨人の王が現役時代に、左肩を冷やさないように気をつけていたとか、日劇ミュージックの松永てるほが、脚に保険をかけていたとかいう話も、商売モノを大事にするところから来ている。

そういう意味では、素人の女性やウーマンリヴの女は、何も売りモノは、アソコばかりじゃないわと、強気に仰有る。

そういう女性たちは、多分、アソコをよく洗わないのだろう。したがって、臭いと思って間違いない。

商品を大事にする気持ちが、客をひきつけるのはいうまでもない。

おなみは素人だったが、すぐに死ぬのだという気持ちが、洗わせた。

すると、金四郎との行為が思いだされて、いつか、指が、そこを弄んでいた。

玄徳というのは通称である。玄海屋徳兵衛というのが、かれの名前だった。深川の木場で材木問屋を開いていて、まだ二十年にならないが、高利貸しも兼ねてすでに深川一帯で大変な顔役になっていた。暗やみの中から、おなみの裸を見ているうちに、むらむらと欲情がこみあげて来た。

（あの女、金猫に出すのは惜しい）

と、思った。

その手は、いつか勃起しはじめたおのれのものを、しっかりと摑んでいた。

湯殿では、おなみが、しきりにからだを洗っている。

広々とした湯殿である。湯気がこもっているが、広いから気持ちはいい。

檜の香りの中で、おなみは、誰も見ている者はないと思って、股を広げて、垢をこそいで

いた。

そんな女の姿態が、玄徳の眼には、新鮮なものに見えたようである。

玄人女の媚態に狎れた男にとって、素人の娘の無心な姿は、かえって魅力的で玄徳の欲情をそそりたてた。

「あ、あの女、連れてこい」

眼を光らして、かれは言った。

「へえ、ここへ、ですかい」

「そうだ、早くしろ」

匕首で刺された腹に包帯を巻いたままであった。そんな恰好で、下手に動けば、傷口がまた開くはずだった。

いくらしっかり縛っていても、傷口は縫っているわけではないから、凝っと安静にしているしかない。

だが、親分の命令だ。

子分は、二人して湯殿へ入って来た。

「おい、おなみ。肌を磨くのは、それくらいでいい、来な」

「え!?」

突然、男たちに踏みこまれて、おなみは、あわてて、前を押さえてかがみこんだ。

「来るんだ」

腕をつかまれた。

「あ、待って」

おなみは抗った。

どこへ連れてゆかれるにせよ、着物を着なければ。

「着物を……」

「いらねえよ」

「そ、そんな！」

「来な」

大の男に、両腕をつかまれては、かよわい娘の身では、諦めるしかなかった。隣室の仄暗い部屋の中に突き飛ばされたおなみは、一糸まとわぬ裸身で、よろよろと崩れた。そのとき、彼女には、すべてが判然としたのである。

明るすぎる湯殿の中が、暗い部屋からはっきり見えたからだ。

「まあ、こんなことを……」

玄徳は蒲団を積み上げて、寄りかかっていたが、大胡坐をかき、すでに前をはだけ、そこに屹立した肉塊を手でしごき立てながら、言った。

「おい、金猫の見習いに、しゃぶってみな……」

おなみは顔を背向けた。

仄暗いなかではあったが、玄徳の大胡坐をかいた中心の、その生き物は、はっきりと見え

た。

それは、かれがいままで、おなみの湯浴みを覗き見しながら、しごいていたので、赧らんで、天に冲するように屹立していたが、かれの指が漸く、まわるほどの巨きさだった。

女にとって、男の性器は、愛と憎しみの肉塊である。

愛する男のそれは、舐めたり、食べたいほど、いとしい。

が、嫌いな男のそれは、醜悪で、臭気ふんぷんで、見るに耐えない。

触るのも、嗅ぐのも、嫌で、おぞましい。

玄徳のそれは、正しく、おなみの気持ちを悪くする類いのものだった。

玄徳は、にやりとした。

その手は、まだ、根元をしっかり握っているのである。

「それ、見な」

「……」

「これが、男のものだ」

「……」

「やい、見ねえか。これが、男の中の男だ」

玄徳はよほど巨大さが自慢らしく、自分の手で、ゆっくりとしごいてみせた。

「そこらのヘナのように、一握り茶つまみ、なんてェものじゃねえ、二タ握り半……どうだ凄いだろう」

「……」

「世間にゃ、まず、これほどの持ち物のやつはいねえ。な、そこで、だ。お前も、これから男を喜ばせて、稼がなくちゃならねえ。そのためには、早く狎れることだ」

「……」

「聞いているのか！」

あまり黙って、顔を背向けているので業を煮やしたように、玄徳は怒鳴った。

「この女(あま)!!」

と、子分の一人が、おなみの髪をつかんで、玄徳の方をむかせた。

ひいィ、とおなみは悲鳴をあげた。

「見な、見るんだ、親分のものを」

「は、はい……」

「拝みな、拝んでな、有難うございますといえ」

言えない。おなみは歯を食いしばった。

「情強(じょうつよ)な女だ」

あっと思ったとき、尻に男の手が当たった。ぐいと持ち上げられた。男の指は、秘所にずぶりと入っていた。

おなみはまた悲鳴をあげた。

「おい、手荒にしねえことだ」

と、玄徳は、鷹揚らしく言った。

「さあ、教えてやるぜ、おれほどのものを知ったら、あとは楽になる。たいていおれより小せえからさ」

「さあ、しゃぶるんだ。金精様を拝んだことぐらいあるだろう。有難く拝んでから、しゃぶらせて頂くんだ。お願いしますと言いな」

また男の指がうしろから女の裡に入った。

「おい、親分が、恐れ多くも、しゃぶらせてやろうと仰有るんだ。有難くしゃぶらせて貰いねえ」

子分たちは、どこまで本心か、真顔でこう言いながら、裸のおなみの臀を持ちあげて、顔を玄徳の股間に近づけようとする。

目の前に巨大な陽根が近づいて、おなみは悲鳴をあげた。

「それ、お礼を言わねえか」

「いやっ、放して」

顔を振って逃れようとしたが、ぐいと髪を摑まれているので、逃れようはない。

「さあ、よく拝め、こんなに立派な金精様には、そんじょそこらじゃお目にかかれねえのだ」

「おねがい……」

顔を振ったが、容赦ない力で押しつけられて、鼻が触れた。

強力な臭いがした。

巨大なだけ、その発散する臭いもすさまじいのである。

腹を匕首で刺されて、包帯に血がにじんでいるから、膏薬や血の臭いが混じって、臭気が激しいのかもしれない。

「親分、この女、尺八は嫌だとさ、こうなりゃ、観音様から入れてやるしかありませんぜ」

背後の男の指は、すでに一指入っていたのだ。

そう言ったとき、もう一本指が入って来た、おなみは、顔を歪めて、泣き声をあげた。

「まだ狎れていねえようですがね、へえ、親分に観音様をほじくられたら、破れて当分、使いものにならねえかもしれねえ、いっそ、わっちが試しに……」

「馬鹿野郎、うぬらはそこらの鼻欠けでもやって来い、この女は」

と、玄徳は手をのばして、おなみの乳房を弄んだ。

まだ硬い蕾を思わせる鉄砲乳だった。

弾力があって、掌にこころよい。

「おなみ、ひとが親切に言っているのがわからねえのか。おれを怒らせる気か、ううむ、こいつ」

腹の傷が病んで来たらしい。

玄徳は、弄んでいた乳房を、ぎゅっと握った。

「あれっ」

「こいつを削いでやろうか。いうことを聞かねえ女がいたがね、ヤットコでこの乳首を挟み切られてな、そりゃ痛そうだったぜ、どっと血が吹いてよ……翌日、隠亡堀に浮いていたぜ」

「ああ、もう言わないで」

恐怖でおなみは泣き声をあげながら、顔を振った。

「わからねえ女には、百万遍言わなきゃならねえのさ」

「やめて、やめて」

叫ぶ女の口が、とうとう玄徳の巨根を咥えさせられてしまった。

それは、おなみの小さな唇いっぱいになって、呼吸が出来ないほどだった。

「いいぞ、舌をつかえ、うむうむ」

おなみは頭を上下しながら、涙をぽろぽろこぼした。

女の柔らかい唇と舌で、怒張した肉塊を愛撫されると、玄徳は腰をあげて、それに応えようとした。

快感とともに、匕首の傷がぎりぎりと痛んだ。

「うっう……たまらねえ」

玄徳は、たちまち、達しそうになったが、射精してしまうと、同時に傷口から凄まじく出血しそうな不安に駆られた。

「もういい、もういい」

と、手を振った。

が、その声は、おなみには聞こえないようだった。

こういう男たちに抗うことの無謀さを知って、おなみは、もう人形のように無心になっていた。

怒張した男のものを咥えて頭を上下しながら、おのれを虚しくしようとつとめていた。

屈辱や羞恥や——そういう人間的な感情を失くすことで、この試練に耐えようとした。

「おい、もういいってよ」

子分は、髪をつかんで、ぐいと引き離した。

すぽっと、音がした。唾液が糸を引いた。

(惜しい……)

と、子分たちは思った。

(親分が出来ねえのなら、おれっちに分けておくんねえ)

と、口まで出かかったのを、怺えた。

「痛てえ、痛てえ」

玄徳は包帯の上から圧えた。

「その女、おめえたちで楽しみな」

その声を子分たちは待っていたのである。

「有難てえ」

「やっぱり親分だ」
「話せるぜえ」
「こんな親分は二人といねえ」
「おい、クジ引きだ」
「クジだ、クジだ、早く作らねえか」
子分たちは、はしゃいで、一人が紙縒をひねりはじめた。
「そんなものを作っていちゃァ日が暮れらあ。それより年の順だ」
「そうだ、金時の兄貴が先だ」
兄貴分の金時と呼ばれている男が、にたりとして、おなみの腕をつかんだ。
「親分のお許しが出たんだ。可愛がってやるぜ」
全裸の身では抵抗するだけの気力もなかった。
おなみは、その夜、何人の男に抱かれたろう。
金時が散々、弄んだあとは、多吉という男が代わった。
その次には藤七という男だった。それから銀次——
みんな、うす汚い鼠か病犬のような連中だった。
おなみは、男が代わるたびに、からだがぼろぼろになってゆくように感じた。
(あっ、もう駄目……あたしは、金四郎さまには、二度と会えないからだになってしまった……)

おなみは翌日、辻に立った。
いや、立たされたと言ってよい。
玄徳の子分二人がついて、客をとる方法などを、細かく指示されたのである。
「いいかえ、下手に声をかけちゃいけねえぜ。男というものは、妙に袖を引かれると、かえって嫌になるものだ」
「……」
「な、流し目だってそうだ。色っぽく見ればいいってものじゃねえ、見るような見ねえような、気のあるような、ないような……」
そんなふうに言われても、おなみには難しい。
だが、彼女は、
(あたしには出来ません)
と、咽喉まで出かかった言葉を呑みこんだ。
どうせ、こんな商売をやる気はなかった。
(——死ぬのだから……)
子分たちが何を言おうとも聞いていなかった。
「え、おい、聞いているのかえ、しっかり聞かねえか、教えてやっているんだぜ、客の引き方をさあ、やい、おなみ！」

「はい……」

「ちぇっ、はっきりしねえなあ、おめえはこれから金猫になるんだ。な、上手に客を引くんだ。下手に安っぽくやったら銀猫になっちまう。安っぽい女には小銭しか入らねえ。どうせ、男と女のすることだ。同じことをして、お宝が多く入るほうがいいだろう」

どっちだって死ぬ身には同じなのだった。

が、殴られるだけ損だから、はい、と、返事をした。

「な、はじめは、羞ずかしそうにするんだぜ、男の袖を引くといっても、袖をつかんじゃ駄目だ。初心っこそうに、もじもじしながらよ、ちらりと見る、やってみな」

おなみはその真似をした。

ともかく、一人になることだった。

子分が看視しているから、首をくくるのは、難しい。

客をとれば、いくら子分でも、まさか抱かれるところまでは見てはいない。

その客が帰ったあとで、紐をかけて、首を吊る。

そのためにも、一人は客をつかまえなければならなかった。

「わかりました、出来ますわ」

おなみは言った。

「おい、ほんとうに、出来るだろうな。うんと銭を稼いで、借銀を返すんだ。おめえのような器量なら、二年もやりゃァ、ちゃんと返せらあな」

その男は、こういう役目ばかりやっているのか、猫なで声がうまい。

おなみは、淋しく微笑した。

「わかりましたから、あっちへ行って下さい。お前がいるから客が来ません」

「へえ、はっきりいうじゃねえか。いいとも、向こうで見ているからな、ちゃんとやるんだ」

どこまでも見張るつもりらしい。

人間、死ぬ気になれば、やれないことは何もない。おなみは、辻に立って男の袖を引くなどということは死んでもやれないと思っていた。

(――でも、そうしないと……)

看視の眼から逃れられない。

ダニのようにしつこい玄徳の子分たちの網からは逃れられない以上、僅かの時間を利用するしかない。

死ぬことも許されないのだ。

父親の借銀が子供にまで負いかぶさってくるのは、理に合わないように思ったが、世の中がそうなっている以上、どうしようもなかった。

(――死んで……迷って出てやる)

幽霊になって、玄徳とその子分たちの枕元に毎晩出てやる、と思った。そのためにも死ななければならない。路地に身を隠して、凝っと見張っている子分の視線を意識しながら、お

なみは、客を待った。

手拭いをふわりと髪にかけて、一方の端を唇でちょっと噛むのは風に飛ばされないためだ。莫蓙を丸めて持つのは、いかにも乞食同然で、みじめったらしくて嫌だと思った。

「金猫は、そんなものを持たねえのだ」

と、玄徳の子分が教えてくれた。

「莫蓙を抱えてうろうろするのは、最低の女さ。女郎にもいろいろあるんだ。お前のような若くて綺麗な女は、金猫といって、チョンノ間でも高くなる。莫蓙を抱かえたら、銀猫になっちまう。そんな安売りするのは、お前なら、そうよな、二十年先だァね」

二十年どころか、二日と生きているつもりはないおなみだった。しかし、同じことなら、感じのよい男がよかった。

おなみは辻をいったり来たりした。小名木川の橋の上に立ったり、河岸をゆっくりと歩きながら、男が声をかけるのを待った。

「おい、姐さん」

数人の酔いどれが近寄って来た。

「どうだ、え、おや、美い女だ」

「幾らだえ」

「安けりゃ抱いてやるぜ」

「べら棒め、こんな美い女が安いはずはねえだろう」

がやがや騒いで取り囲む。

おなみは顔をそむけて歩きだした。

そのとき濠割りから吹き上げた風で、手拭いがまくれあがった。あっと思って手を延ばしたが、手拭いは空へ舞い上がってしまった。おなみは狼狽した。

手拭いで顔を隠していれば恥ずかしさも少なくなる。手拭いなしでは男に声をかけることなど思いもよらないのだ。

（どうしよう……）

迷っていると中年の男が近よって来た。町人だが、浮わついたところのない律義な感じがおなみを安心させた。

おなみは微笑して男を見た。

「遊ばない？」

はじめてその言葉が出た。教わった通りの言いかただった。

その男は、一見したところ素姓はわからなかった。

縞の着物を着て、博多の献上帯を締めている姿からは、職業を当てることは出来ない。武士ではない。

が、そこらのお店者（たなもの）でもない。

かなり目つきは鋭いのだが、物腰は穏やかだった。

年のころは三十歳前後だろうか。

おなみのほうから声をかけられたことで、かれはまじまじと、女を見た。
「遊ぶって……」
「あの」
「ああそうか、わかった。だが、お前さんは……」
と、何か言いかけたが、男は、ひとつ頷いて、
「行こう」
と、言ったのは、一応は遊び馴れているのだろう。
茣蓙を敷いて、チョンノ間に客をとる夜鷹の行為では、稼ぐ金も知れている。
〝金猫〟
といわれる方の、女郎稼ぎは、あいまい宿に客を咥えこんでのお楽しみであった。
そうした家がそこら中にある。
岡場所といえば、切見世が多いが、あいまい宿のほうが、まだ気持ちを誤魔化せるのだ。
おなみが連れこんだのは、河岸のしもた家で、船頭の亭主が波にさらわれてしまったので、寡婦ぐらしに、部屋を貸して、生計の足しにしているという家だった。
部屋に入ると、客は、
「わしは、宇之吉という者だ」
と、名を明かした。
これも意外だった。

チョンノ間の金猫夜鷹を買うのに、本名を名乗る客などいない。
だが、おなみにしてみれば、嬉しかった。
彼女を、ただの夜鷹と見なかったからだと思った。
「宇之吉さん、ですね。あたし、おなみ……今夜が、あの、はじめてなんです」
と、消え入るようにいった。
「あっ、そうだろう、はじめて見る顔だ。あっしもそう思ったよ。だから、いや、お前を見たとき、こいつァ見逃せねえ、そんな気がしたんだ」
「……」
「おなみ、いい名前だ」
「……」
「どうだろう、お前の言い値の倍を出すから、肌を見せてはくれまいか」
「え!?」
「美しい肌が見てえ。お前の顔を見たとき、なんてえ美しい肌だと思ったんだ。それで、のったのさ。肌を見せておくんねえ」
宇之吉の言い方も目つきも真剣だったので、おなみはその気になった。
どうせ、夜が明けないうちに死ぬのだ。拒むことはない。
おなみは着物を脱いだ——
おなみの綺麗な肌に、宇之吉は、感歎の声をあげた。

「こいつァ、すげえや」
淡い行燈の明かりではあったが、着物を脱いだおなみの肌は、抜けるような色の白さに、若い張りと艶があって、ぬめっとしていた。
「ちょっと、さわっていいかえ」
宇之吉は、にじり寄った。
「あの……」
おなみは口ごもった。
遊びの金は、先に貰え、と何度も繰り返しいわれている。
夜鷹を買うような客は、どうせ、ケチな野郎だから、ことが終わっちまうと、一文でも吝しくなる。
タダ遊びで逃げてしまうのが多いから金を貰うまでは肌に触らせるな、と言い含められていたのである。
どうせ、玄徳の子分が表を見張っているに違いなかった。もしも不馴れなおなみをいいことに、金を払わずに逃げるような男がいたら、外で捕まえる。おなみが悲鳴をあげたら、飛び込んでゆくといっていた。
「あの……」
「いやかえ」
律義に宇之吉は手をひっこめた。

「いいえ、あの、そうじゃないんです」
おなみの口からは、どうしても金のことが切り出せない。そのもじもじしている様子で、やっと宇之吉にも、のみこめたようだ。
「ああ、そうだったな、済まねえ、済まねえ、揚げ代だろう、いくらだえ」
「――七匁五分……済みません」
「いいとも、そら、こいつァ、おいらの気持ちだ」
宇之吉は八匁の銀粒を懐紙にひねって渡した。
「有難うございます」
おなみは頂いた。
「いいかえ、な、なあに、嫌だったら、そう言っておくんねえ」
宇之吉は手を延ばして、おなみの腕から背中に触れた。
肩から背中を、ゆっくりと撫でている。
「いいねえ、つるりとして、そして、しっとりして……汚点一つねえ、こんなのを玉の肌ってんだ」
「……」
「おいらァ、ツイてるねえ、前からこういう肌にお目にかかりたかったんだ。全く、美しいねえ、絖肌ってんだろうな」
「……」

「おなみ、そう称ったっけな」
「はい……」
変な客だと、おなみは、どうしていいかわからなかった。背中に触ったのに、その手が前の方にやってこない。男からすれば、胸乳のほうに手を延ばしたいのが普通のはずだった。そうしてもいいのに、そうしないというのも、女の気持ちを焦々させて来たのである。
「あの、……」
思いきって、おなみは言った。
「抱いて！」

夜鷹のチョンノ間として銀七匁五分というのは、相場といえば相場だが、宇之吉は、おなみの肌に感激したように、抱かない前から、ぽんと、八匁くれた。
金さえ先にとってしまえば、あとはお茶を濁して客を追っ払えばいい。酔っぱらいなら、どうにでもなる、と、玄徳の子分たちは、夜鷹の心得を教えてくれたのだが、おなみには、とてもそんなことは出来なかった。
七匁でも八匁でも、その金は男が欲情を露らす代償に支払ったものだ。
男がどんなに玩具にしようと、しかたがない。男のおもちゃになるための値段なのだ。
「抱いて下さいまし」
おなみは、消え入るような声で言った。

「おめえ……」
宇之吉は、驚いたように手を放した。
その顔へすがるように、おなみはにじり寄って、
「お願いです、抱いて下さい。あたし、そうでないと……」
「わかった、わかった。だがよ、おなみさん、わたしは、お前を抱くつもりで、いやさ、夜鷹を買うつもりで、来たんじゃねえのさ」
「え！　それじゃァ」
「まあ、驚かんで聞いてくれ、お前の肌があんまり綺麗に見えたので、頼みてえことがあってな」
「……」
「実は、わしは、彫物師だ」
宇之吉は、はじめて、職業を明かした。
「ホリモノ……」
「そうだ、刺青だ」
「……」
「彫宇之といえば、臥烟や、中乗りの間ではちっとは知られている」
道理で、並の町人とは違ったところがあったのだと、おなみは、宇之吉を見た。
「お前の肌を見て、手がこうムズムズして来たのさ。これまで、男の肌に仁王だとか鍾馗だ

とか、昇り竜下り竜と、そんなものばかりが多かった」

宇之吉の眼は、だんだん粘っこい光を放って、おなみの肌を舐めまわすようであった。

「そこで、一つ、女の美しい肌に、美しいものを彫りたいと、常に、思っていたのさ」

「え！　そうすると、あたしに……」

「そうだ、図星だ。お前のこの肌に、牡丹でも水蓮でも、美しい花を彫らしちゃくれめえか」

思いがけないことだった。

はじめて夜鷹に出た夜に、こんな客にぶつかるとは。

「あの、あたし……」

どう返事していいかわからなかった。

「お前もこういう商売をしているからには事情があるのだろう。どうやら、やくざなやつに見張られていたようだが、およそのことはわかっている。金で縛られているのなら、その金を払ってもいい、どうだえ、うんといっちゃくれめえか」

この綺麗な肌に、美しい花を咲かせたい、と彫宇之は言った。

おなみの途惑いは大きかった。

死ぬ気でいたおなみである。見張りの目の届かないところで死のう、と思っていた。苛酷な運命に引き廻されて、娼婦の境遇に落とされたおなみにとって、もうこの世は生きるに価しないところだった。

玄徳の子分に見張られて、死ぬことさえ出来なかったのである。

「なあ、前から美しい花を彫ってみたかった。緋牡丹か何か、ぱっと、目に鮮やかな花を咲かせてえ」

それには、おなみのような、白く滑らかな絖肌でなくては意味がない。職人気質といおうか、彫宇之の熱心な口説きに負けて、おなみは頷いてしまった。

（どうせ、死ぬんだから……）

冥途にいって、お父っつぁんやおっ母さんに見せてあげよう、それがあたしの悲しいこの世の土産になる、そんなことを思うと、おなみの面てに自嘲の笑いが浮かんだ。そのとき、この家の老婆の声がした。玄徳の子分が痺れをきらしてやって来たのだ。呼び出されたおなみを、子分は目を三角にして怒鳴りつけた。

「おい、あれほど言ったのに、まだわからねえのか、チョンノ間ってェのは、ちょいと乗っかって、チョンチョンのチョンと、一発やらせりゃ、それでお終いだ。いつまで、ぐだぐだと、しんねこで楽しましちゃァ、おあとが閊える。さっさと追い出すのが、この商売のコツだ。野郎が愚図ついているようなら、お前の方で外へ出ちまえばいーんだ」

「済みません、あの、それが……」

おなみはどう話したらいいか苦慮した。

「なんでェ、うるせえことを言ってやがるのか。おれがつまみ出してやらあ」

「あ、そんなのじゃないんです」

おなみがさえぎったが、子分は押しのけるようにして飛びこんだ。
「やい、うぬは、女郎遊びも知らねえ野暮天か、チョンノ間と一夜切りの違いもわからねえようなら……」
「一寸待ってくれ、そう頭から噛みつかれちゃァ話も出来ねえ」
彫宇之はむろん、こういう見張りがついていることを知っていた。
「チョンノ間のつもりだったがね、聞けば初夜とのことだ、それなら祝儀買いをしなきゃなるめえ、そこで哥兄に相談だ。二両でどうだえ」
「に、二両……」
「あっ、祝儀だからな」
彫宇之はさっさと財布から小判を一枚と、二分銀を二枚出した。
目の前にこれだけ揃えられては、文句のつけようはない。
「へへへっ、こうつァどうも。話のわかった兄さんで」
「じゃァ、連れてゆくぜ。信用ならねえようなら、跟いてきな、家はすぐそこだ」

夜の緋牡丹

彫宇之の家は、冬木町の俗に寺裏と呼ばれるところにあった。
隣町が蛤町で、漁師が多い。深川も小名木川から南側は一帯に潮の香が濃いが仙台堀より南となると、一層、甚しく江戸湾の中に突き出した埋め立て地という感が強い。
冬木町のこのあたり、寺裏という俗称は、掘り割りをはさんで、ずうっと寺が並んでいるからだ。
寺の裏通りは海辺橋（正覚寺橋）から富岡橋までの道すじで、向かい側が万年町二丁目だ。つまり片側町になっていて、橋袂の正覚寺から南へと寺が八軒居流れている。
寺の門が八つも並んでいることになるが、北から、正覚寺、恵然寺、増林寺、浄福寺、心行寺、玄信寺、法乗院、陽岳寺となっている。
これらの寺の裏側に濠を挟んで蛤町、冬木町とあるので、寺裏と呼ばれているのだ。
この寺裏の一帯は、いわゆる細民街になっていて、濠が挟むかたちで、三角形のデルタ地帯を作っている。
つまり、行き止まりである。
こういうところには、人はあまり住みたがらない。火事になると、海へ飛びこむしかない。もっとも漁師などにしてみれば、船を舫っていて、波浪が起こっても洪水になっても流される心配が少ないから、悪い場所ではない。
「これ以上、汚ねえところはねえ家だ、我慢して上がってくんな」
彫宇之はおなみを招じた。

それから、うしろを振り返って、
「おい、そこの哥兄さん、尾けて来たのはわかっているんだ。ここから逃げやしねえから、明け方まで、石切り歯の鼻っ欠けとでも遊んできたらどうだえ」
「ちぇっ、馬鹿にするねえ」
尾行して来た玄徳の子分は、
「いいか、ちゃんと見張っているからな」
「ああ、勝手にするがいい」
「この洲崎の長助はダニの長助とも呼ばれているんだ。目をくらまそうたってそうはいかねえぜ」
「ダニ長か、おぼえておかあ」
彫宇之はぴしゃりと格子戸を閉めた。
おなみは肌に刺青をすることに、特別の感慨も抱かなかった。
どうせ、すぐに死ぬ身である。肌に墨を入れて汚すことにも何の抵抗もなかった。
それに彫宇之は、
(美しい花を咲かしたい)
と言っているのだ。
(美しい花なら……暗い冥途への土産になる……)
そうも思った。

彫宇之は期待に胸をふくらませて、刺青の絵型などを見せてくれた。墨を磨ったり針を揃えたりしている間におなみは、帯を解いて、一糸まとわぬ姿になった。
おなみは一糸まとわぬ裸身を破れ畳の上に横たえた。
(美しい!)
思わず、感歎の声が洩れかけた。
彫宇之は仄暗い部屋の中で、鈍く沈んだ輝きを秘めた白い肌に魅せられたように見入っていたが、はっと我にかえって、あわてて、燈芯を増やした。
行燈がぽっと、明るさを増した。
目に眩しいほどの絖の肌であった。
彫宇之の手は、思わず、背中に触れた。
「素晴らしい肌だ……まるで天女だ」
背中から、腰のくびれ、尻のほうにまで掌が滑るように動いてゆくのを、おなみは、むしろ、うっとりするような気持ちで味わっていた。
抱き枕、と呼ばれるものを抱えて、うつ伏せになっているのだ。
普通の枕ではない。痛みに耐えてしがみつけるように、箱枕に座蒲団を被せて、下締めのようなもので括ってある。
男の手が、臀部の丸みを撫でている。
「いいなあ、ここまで、総彫りにしてえが……」

ゆっくりと撫でている掌には、好色な思いはなく、職人の純粋な感動があるのだろうが、女の感覚のほうには、異性の情感が伝わってくるのはしかたがない。

ゆっくりと筆先を墨に浸して構図を考えていたが、彫宇之の手から、筆がぽろりと落ちた。

おなみの丸い臀のかたちが、あまりにも、魅惑的で、彫宇之の胸に情念がこみあげたのだ。

「いけねえ！」

と、口走った。

「え？」

何か言われたのかと、おなみは、首をねじまげるようにして、かれを見上げた。

「いやなんでもねえ……」

「……」

「お前があんまり綺麗なんで、抱きたくなったんだ」

「……」

「かんにんしてくんねえ、お羞ずかしいかぎりだ」

彫宇之は刺青師として、好色な思いを抱いたことを恥じたのだが、おなみにはそうした男の忸怩たる気持ちは、理解の外であった。

「そうだ、緋牡丹を入れさせて貰うぜ」

気をとりなおして、彫宇之は、紅筆をとりあげた。

墨を用いずに、紅筆で輪郭を描こうというらしい。葉や茎の部分は墨で入れるわけだ。

小皿に溶いた紅をたっぷりと筆に含ませると、かれは一気に緋牡丹を描きはじめた。

どうせ一夜で仕上げなければならないのだから、多くは描けない。

背中の少し上部に、紅筆を走らせる。その冷たい筆先の感触が、おなみにはひどく官能的であった。

職人肌、という言葉がある。

それぞれの手職に熱をこめて、自分の仕事をなおざりにしない。むしろ熱を入れすぎるくらいに、その仕事に打ち込む者をいうのだが、職人気質というのも同じである。偏屈な者が多いのは、それくらい実直で、一すじに打ち込まないと、仕事として完璧が期せられないことを物語っている。彫宇之は自分でそうだと思っている。

仕事には、自信があるし、江戸では一といわれないまでも、この深川では、誰にもおくれをとらない。

その自信が、おなみの美しい肌を見すごしにさせなかったのだ。

それは、自分が彫れば、本人も喜ばないはずはないという思いこみからであった。

いま——

おなみの背中に緋牡丹を彫ってゆく彫宇之の額には冷たい膏汗が噴き出していた。

その両眼は、爛々と輝き、一刺し一刺しに精根を傾けている。

刺青に用いる針は木綿針を十本あるいは二十本、固く縛って使うのである。

人によっては、絹針を用いることがあるが絹針を束ねた場合はよほど細心な注意をしない

と、皮膚を破って肌の滑らかさを損なうことになる。
荒っぽい男の鮫肌の場合はまだいいがこういう絖肌のときは、勿体ないことになる。
彫宇之の極意は、絵柄によって、針の束を変えることにあった。
ボカシなどのときは、木綿針と絹針を段違いに束ねたものを用いる。
これは、かれ独自の効果を生んで、未だ、誰にも真似の出来ないことであった。
そのぼかしの幽艶さ、妖しさが、花のいのちになる。
一夜で彫り上げる緋牡丹だから、背中一面に咲かせるわけにはいかない。
僅か二、三輪である。
が、かえって、それが効果的な感じだった。
彫宇之には、すでにイメージがある。
かれはそのイメージに向かって、仕上げてゆくのであった。
チクチクと背中を刺される痛みに、おなみは歯を食いしばっていた。
かれが咥えさせてくれた手拭いが破れるほど、ぎゅっと噛みしめて、しがみ枕を抱きしめていたが、
「動いちゃいけねえ」
といわれながらも、痛みに耐えかねてつい、びびっと、からだが顫える。
乳房がそのたびに揺れる。腋の下の毛がこまかくふるえていておくれ毛とともに、なまめかしい。

うっすらと肌が汗ばんでくると、その甘酸っぱいような体臭が発散して、彫宇之の理性を狂わせる。かれは、途中で眼が眩むような欲情をおぼえた。
思わず、針の束を捨て、女の乳房を背後からつかんだ。
こんなことははじめてであった。
彫宇之は、自分でもそのときの昂奮は思いがけなかったであろう。
刺青の最中に欲情したのだ。
背後から抱きすくめられるようにして、乳房をつかまれたおなみも驚いた。
だが、背中の痛みと、むしろ、その痛みからくる異様に甘美な陶酔の中にあったおなみは、僅かに、
「あっ」
と、驚きとともに、噛みしめた手拭いを放していた。
「お、おなみさん！」
彫宇之は、声をうわずらせて、両手を動かせた。
掌の中にあるのは、まだ固さを残した乳房だった。
全身がうっすらと汗ばみ、若い女の甘酸っぱい体臭がかれの鼻腔をくすぐった。目の前には、血を吹いた牡丹の花。
文字通り鮮彩な緋牡丹が咲きかけている。血は拭いても拭いても、ぷつぷつと噴き出してくるのであった。

見方によっては、凄惨な感じだが、その血の異臭も、二人を異常な昂奮に巻きこんだのだ。こりこりした乳房の感触といい、美しい肌の未完成の緋牡丹といい、彫宇之から自制のタガを外させてしまった。

刺青師のもっとも自戒すべきことを、あまりの凄惨美のために、踏みはずしてしまったのである。

彫宇之は下帯を突き破るばかりに勃起したおのれを、容赦なく、おなみの秘所にあてがった。

意外だったのは、その先端は、ぬらっと生温かいぬめりを知ったことである。

おなみもすでに濡れていたのだ。

それは、かれを受け入れる気持ちに——尠なくとも、からだはその態勢にあるということの証明であった。

かれはさらに片手を女のそこにあてて、ぐっと腰を持ち上げると、おなみの悲鳴にもかまわず、捻じこんでいた。

「……」

おなみの悲鳴は、きれぎれに奔り、彼女は、しがみ枕を放して、両手を突くと、腰をあげて、男の行為を助けるような姿勢になった。

女の肉体はそのように作られているものか。

おなみはかれの熱したものを受け入れると、間歇的なあえぎに変わって、律動に応えるのだった。

「いく、いくぜ、おなみさん……」

もはや、彫宇之は、名人刺青師ではなく、ただの男になっていた。

一匹の牡といったほうがいいかもしれない。かれは、むろん、こうした事態になることなど、まるきり予想外のことだったのだ。

これまで、何人も、女の背中に墨を入れている。

花も咲かせている。

だが、一度もこんなことはなかったのである。

「た、たまらねえ……」

と、叫びながら、かれは牡丹から噴き出た血を、ぺろぺろ舐めた。刹那、絶頂が来た。

刺青師が、針を入れている最中に欲情するとは、よほどのことである。

これは、一種の禁忌であった。

刺青師に要求される道義であろう。

すべてを投げだして、無防備の女性を犯すというのは、強姦より悪いといえる。

名人芸と自他ともに認める彫宇之が、そのことを戒心しないはずはない。

だが、そうした自戒の、すべてを投げ棄てて、欲情に狂わせるだけの美しい肢体だったのだ。

全裸になって、凝っとうつ伏せている姿は、ただ美しい。

だが、朱が入れられ、針に刺されて、痛みと快感でうごめいていくにしたがい妖しい雰囲気になってきたのだ。

妖艶なまでの若い女のうごめき悶えが、彫宇之の自制心を震わせたのである。

「す、済まねえ！」

と、叫びながら、彫宇之は、おなみを犯した。

おなみのほうも、半ばおのれを失っている。

腰を持ち上げられ、そのままの姿勢でうしろから、犯されて、おなみは喜悦の声をあげた。

痛みと甘美な陶酔で、夢うつつになっている。

そのまま、地獄でも、陥ちてゆくのなら、陥ちていけ、というような快美感であった。

彫宇之は、ひとたびの快楽のあとも、尚、そのまま、うしろから女性を抱きしめたままであった。

（離れたくない……放したくない）

という思いだった。

おなみの針のあとから、血がぷつぷつ吹きだした。朱に混じってゆく。

何やら、異様なほど美しい緋牡丹の開花であった。

おのれの彫った緋牡丹に、かれは、うつろな眼をむけて酔ったようになっていた。

この美しいからだが、夜の河岸で、男の袖を引いてたなどと、嘘のようだ。

それはしかし、事実なのだ。

ただ、運がよかった。好運に感謝しなければならない。

彫宇之は、ひとたび放ちながら、萎えかけたものが、ふたたび、充足するのをおぼえていた。

それは、このような美しい肌には、二度とお目にかかれないのではないかという一種の予感のようなものを感じたからかもしれない。

かれは、ふたたび、いのちの充実と欲情をおぼえた。

「おなみさん、もう一度……」

と、言いながら、またその姿勢で、動きはじめていた。

おなみの方は、一度でも二度でも同じだった。

半ば放心したようになって、かれの動きに応えていた。二度目も早かった。彫宇之が咽喉から絞りだすような叫びをあげた。おなみの中から温い潮があふれている——

それから半刻ほどのち——

彫宇之は、ごろりと横になったまま、眠りに落ちていた。

精も根も尽き果てたという姿だった。

刺青というのは、細かい神経を駆使するので、疲労がはげしい。張り詰めた時間は、急激な疲労をかもすのである。

その上、おなみの美肌に惹かれて刺青師の禁を犯して、交わってしまった。

背後から抱きしめての、交媾であった。
それも、短時間に二度も行なったのだ。
彫宇之は、ぶっ倒れるようにして眠りこんでしまったのである。
おなみも、眠っているかのように、凝っと動かなかった。背中に火がついたように痛い。熱っぽい。その熱でものを考えるのも億劫だった。
おなみが身を起こしたのは、小半刻ほど経ってからであった。
彫宇之の愛撫で、からだがとろけるような思いを味わって、何も考えたくなかった。
このまま、死んでいきたい、と思った。
（――静かに死なせて）
誰にともなく祈りを捧げるような気持ちで、彼女は、立ち上がった。
僅かに腰のものを一枚、巻いただけである。
緋のしごきを手にしている。
上を見上げた。
部屋の中では、しごきをかけるようなところはなかった。しごきを引きずりながら、彼女は外へ出た。
外には、柳の木が一本、淋しく立っている。
彼女は、頭上の太い枝を見上げて、しごきの一方を丸めると、投げかけた。
部屋の中にあった踏み台を抱えてくると、枝の下に置いた。

しごきを結んで、結び目を上に廻した。
（――死んだら、お父っつぁんのところに行ける……お父っつぁん、待ってて頂戴、おなみは、間もなく冥途へまいりますから）
この苦しい世の中から、死ぬことで解放される。それだけが、借金から逃れる道であった。
娼婦として、稼いで借金を少しずつ返してゆくといっても、どれくらい経てば、完済できるか見当もつかない。
そんな長い歳月の間、男に奉仕するのは耐えられなかったのだ。
おなみは、しごきの輪に手をかけた。
まだからだに、彫宇之のいのちの証しが残っているようだった。
金四郎に最初のものをあげただけで、この世に生まれてきた役目が終わったようなあきらめがついている。
（彫宇之さん、緋牡丹が出来上がらなくて済まない、かんにんして頂戴）
おなみは、しごきに首を入れた。そして、踏み台から足を踏みはずした。体重が一瞬、ずしりとかかって、それから、両足が宙に浮いた。
おなみの死体を発見したのは、数人の漁師である。
漁師は朝が早い。
暗いうちに舟を出す。漁場の良いところを誰よりも早く確保して水揚げを増やしたいのと、魚をとるには暗い方が水面に近いところに多いのだ。

「大変だあ、女がぶら下がってらあ」
「若けえ女だ」
「彫宇之んところだ」
「お役人に知らせろやい」
漁師たちは大騒ぎして、彫宇之の家へ駆けこんで来た。
「まだ、からだは温かいぞ」
「助かるかもしれねえ」
柳の下枝から抱きおろしたおなみを横たえて、胸をさすったり、医者を呼んだりしてみたが、もうおなみは、息を吹きかえさなかった。
「こんな美い女がよう……」
「死ぬこたァねえのにな」
「それも彫モノはまだ出来上がっちゃいねえ」
「こいつァ、針を入れたばかりだぜ」
「馴れねえことをするからだ」
「あんまり針が痛かったんじゃねえか」
「彫モノを途中でやめるのはいても、死ぬやつはいめえぜ」
この騒ぎに一番驚いたのは、見張りをしていた長助だ。
かれは待ちくたびれて、表でしゃがみこんで居眠りしていたのだ。

漁師が騒ぎだして、おなみが吊り下がっているのを知った。
「ふえーっ、なんてことだ」
おなみは、金の成る木だ。
借金の肩代わり、死んだ親父の代わりに、借金を払わせるため、売春を強要していたのだ。
これから稼がせようと思ったやさきに、死なれてしまったのだ。
(親分に何といおう……)
玄徳の怒気が、唾とともにかかってくるようだった。
(馬鹿野郎、どうしてくれる。女の借金は、うぬが返せ!)
そう怒鳴られるのは目に見えていた。
(どうしよう……)
眼がさめてしまった。
長助はうろうろしていたが、医者が漸くやって来て、おなみが絶望であることを確認すると、
(親分に知らせなきゃあ)
と、思う一方で、
(親分の前に出ると危ねえ……)
と、竦みあがった。
そして、結論は、

（尻に帆かけて……）

逃げ出したのである。

深川の外へ出てしまえばいい。本所は近すぎるが、両国橋か永代橋を渡ってしまえば、何とかなる、と思った。

長助は姿を晦ましてしまえばそれまでだが、迷惑なのは彫宇之だった。

彫宇之は酒浸りになった。

（何で死にやがったんだ。あんな美い肌は、二人とお目にぶら下がれねえのによう……）

どんな事情があるにせよ、死ぬなんて……とはつまらない。

生きていてこそこの世だ。人生だと彫宇之は思っている。

せっかく三年も四年もかかって彫りあげた総身彫りの傑作が、その男が死んでしまうと、ただの皮になってしまう。

死人の彫モノを哀惜して、ナメシて保存している者を知っているが、刺青師に言わせれば、所詮、それは、抜けがらにすぎない。

ただの皮であった。

（人間サマの刺青は、生きていてこそだ。本人が生きていりゃこそ、背中の仁王サマだって、乙姫サマだって、生き生きしてくるんだ。天の羽衣だって、死に皮じゃ、ヒラヒラと領巾を振って天を泳ぐ天女も、本人が生きていなきゃァ天を泳いでいるようには見えねえ）

彫宇之は口惜しくてならなかった。

緋牡丹が生き生きと咲きほこる。あの美しい肌があってこそだ。

ひとむらの牡丹の花を彫っただけで、心残りだった。

あとから、次々と、牡丹を増やしてゆきたかったのだ。

（何も死ななくったって……）

口惜しい。

かれは居酒屋で酒を浴びるように飲んだ。

いくら飲んでも、こういう口惜しさは消えない。

後悔とも違う。女が死んだことは、かれの彫った牡丹が枯死したことにひとしい。

遠山金四郎と出会ったのも、居酒屋だった。

おなみの背中に緋牡丹を彫った男——

と聞いて、金四郎は興味をおぼえた。

「そうか、おなみは死んだのか」

自分の力で助けられなかったことの悔いが金四郎の胸をゆすぶった。

「哀れな女だ」

「金四郎さん、と言いなすったねえ、お前さんも、おなみを可哀想だと思いなさるかえ」

「ああ、何とかしてやりたかった」

「可哀想なのは、あっしもそうだ」

「……」
「せっかく、いい肌だったのにょう、彫宇之の腕が泣いていらあ」
金四郎はそのとき、決心している。
「おなみのことは、おれにも忘れられねえ」
「そうですかい、一杯、飲んでおくんねえ」
「飲むぜ。だがよ、おめえが、おなみの顔をちゃんとおぼえているのなら、頼みがある」
「え？　頼みといいなさると」
「おなみの顔を、おいらの背中に彫ってもらいてえ」
おなみの顔――
そう言われて、彫宇之は表情を変えた。
「おぼえているかって？　冗談じゃねえや。親父の顔は忘れても、あの女のことは忘れねえ、死ぬまで忘れねえ、死んでも忘れねえ」
「おいらもそうだ」
「え？　金さんも……」
「そうだ、おめえとは、よくいうじゃねえか、兄弟みてェなものだって、あれさ」
苦い笑いが口辺に浮かぶ。
彫宇之は、目を瞠るようにして、金四郎を凝っと見た。
「――そうかえ、そうだったのか」

「お初はおれが頂戴した。おめえが、その仕上げをしてくれたわけだ」
「……」
「おなみはいい子だ。喜んで逝っただろうぜ」
「へえ、そうとでも思わなきゃァ、こっちがやりきれねえ」
「そこでさ、相談ということさ」
こういうと、金四郎は立ち上がって、ぱっと、片肌脱いだ。
男にしては、白い綺麗な肌である。生まれの良さ、育ちの良さが、そのまま、綺麗な肌になってあらわれている。
「こいつァ……」
といったきり、彫宇之は呆れた。
「なんてえ、美しい肌だ。こういっちゃなんだが、男で、こんなに綺麗な肌は見たことがござんせん」
「なあに、ひとさまと変わらねえよ。よく言われるんだがね、おれは、疳性でね、湯へ入っただけじゃおさまらねえ、タワシで、こするんだ。ひとっ皮剝けるくらいにな。そうでないと、気持ちが悪いのさ」
「へえ、そうすると、タワシでこんなに」
「そういうことさ。そうだ、ここに女の顔を彫ってくんな。おなみの顔を」
金四郎は背中を指さした。

「おなみの……」
「一生、背負っていてえのさ、あの女の……」
おなみの真心を、と言おうとしてさすがに、照れくさくなって、やめた。
顔を背負っていることが、彼女へのせめての供養だ、と思った。
「ふふん……」
彫宇之は考えた。
「顔をねえ……」
「その他の図柄は、おめえにまかせるぜ、いいようにやってくんねえ」
「――そこまで言われちゃ、引き受けるしかありませんや。よござんす、やらせて貰います」
彫宇之は元気づいて、
「じゃァ、明日といわず、今夜から、はじめましょう」
「いいとも、やってくんな」
連れ立って、あの寺裏の家へやって来た。
おなみがしがみついていた枕だと聞いて、金四郎もしがみついているうちに、おなみの肌の香が感じられてきた。
金四郎の背中に、その夜のうちに、彫宇之は、おなみの顔を筋彫りしている。
おなみの顔の筋彫りが出来たところで金四郎は、合わせ鏡でこれを見た。

「どうでござんす、まるで……」
「まるで、なんだ」
「てめえで彫っていて、てめえで言うのはおかしいが、生き写しだ」
彫宇之は、自分の腕に惚れ惚れとしたように見入っている。
「うむ、さすがに彫宇之だ」
金四郎は鏡の中のおなみに見入った。
死んだはずのおなみが生き還って、そこにいるようだった。
金四郎の肌は白くて綺麗だから、おなみの白さを再現するのにふさわしい。
「だが……この傷が邪魔だな」
と、金四郎は背中の、まだ生々しい刀傷を示して、
「こいつがぶち毀しだ」
「へえ、ですが、十年も経ちゃ、刀傷でもうすくなりますぜ」
「おい、冗談じゃねえ、こいつが向こう傷ならいいがね、うしろ傷だ」
「へえ、そうですね、うしろだ」
「まるで、卑怯な、逃げ傷だ」
「おっと、そいつァ考え過ぎだ。おめえさんほどの男が、卑怯をするはずがねえ。それに戦さ場じゃねえんだ、うしろ傷がどうのと言ったのは、三百年も前の話じゃねえですかい」
「そりゃそうだが、それにしても、こいつは自慢にならねえのさ。誰も刀傷を見て、一々、

由来を聞いてくれやしめえ」

金四郎は苦笑した。

「彫宇之、何か考えてくんな。この刀傷を消す図柄がいいな」

「消すって……」

「おなみの顔と……うまく図柄が合わなきゃいけねえ、金太郎とマサカリと熊ってェやつさ」

「そうでござんすねえ、おなみと……」

彫宇之は首をひねった。

「金さん、難しい注文だ。こいつァ一晩考えさしておくんなはい」

彫宇之にしても、おなみの顔を彫っただけに、いい加減な図柄にはしたくないのであろう。

それは金四郎にしても同じだった。

長屋に戻ってくると、隣家の鳶の伝七が顔を出した。

「金さん、金さん、どこへ行ってたんだねえ、留守にお客さんがありやしたぜ」

「留守に来たやつは、運がなかったのさ、気にしねえでくれ」

「それがねえ、実ァお屋敷から、おっかねえ爺さまが来たんで」

「またか」

金四郎は用人の吉川幸太夫を思いだした。

「うるせえ爺さまさ」

「あの爺さまだけじゃねえ、女も来ましたぜ」

と、伝七は小指を立てた。

「女が？」

「へえ、美い女だったねえ、アダッぽくてよ」

「知らねえな、そんな女」

「へへっ、知らねえのなら、こっちに譲っておくんねえ」

鳶の伝七は、にたりとして顎をなでた。

「美い女でさあ、ぞくっとしたね、ふるいつきたい女だ。ありゃァ、どこかの水茶屋女にちがいねえ」

「水茶屋？」

「へえ、どこかで見たような美い女でさ、すらりとして、粋で、美い女でさ。美い女ってェのは、どこか冷てェもんだがあの女は違ったね。愛想がよくてよ、こぼれるような笑顔だ、ねえ伝七さん」

「やい、変な声を出しやがるな。伝七サンに惚れているのか、その女」

「そ、そうじゃねえ、わっちのほうで名乗ったんだ。金さんは何処にいっているのだって聞くからよ。あの風来坊……おっとっと、へへっ、そう言っちまったんだ」

「口を圧えたって間に合わねえぜ」

と、金四郎は苦笑して言った。

「たしかに、金さんは風来坊だ、かまわねえよ」
「へえ、そう言って貰やァ……そこでな、金さんは何処へいったのかわからねえんだから、この伝七なら、いつでも相手をするぜと」
「それで、その女は、どこの馬の骨だ」
「へえ……お仙、とか言ってましたぜ」
「お仙？　どこのお仙だ」
「だから、そいつがわからねえ、それがわかるくらいなら、もうわっちが行ってらあ」
「だが、水茶屋といったろう」
「じゃァねえか、と思っただけでさあ」
伝七は、うしろに隠していた徳利を前に出した。
「その女は、こいつをくれたんでね。お口よごしに、てんだ、えっへへ」
金四郎はちらりと徳利を見た。
徳利には酒屋の名が大きく書いてある。入山形に久の字である。
わきに小さく馬道三河屋、とある。
「馬道の三河屋だ。浅草じゃねえか」
「そうのようですね」
「だとすると、水茶屋女というのが正しけりゃ、奥山だ」
「なぁーるへそ、浅草寺の奥山の水茶屋女にちげえねえ」

「お仙、といったな」
「御存知で？」
「知らねえ」
「なんでえ」
「知らねえ女だ。伝七、お前にくれてやるぜ」
「へ、お有難うさんで」
「その代わり、お仙とやらが、なんでおれを訪ねて来たのか、さぐってくんな」
金四郎は嘘を言っていない。
ほんとうに、お仙という女を知らないのだ。
そんな女がなぜ訪ねて来たのかも、わからない。
ところが、その女は、また翌日も訪ねて来たのである。
「金さん？」
と格子戸を開けて、のぞきこんだ。
伝七の話の通りの女だった。にこりとした顔が、何とも色っぽい。
「お出でかえ、金さん、今日は」

お仙という女

「お仙か」
金四郎はのっそり起き上がった。
「あら、名前を御存知？」
「地獄耳だ」
「あら、嬉しいねえ。ねえ金さん、あら馴れ馴れしすぎるかしら、でもいいですよね、固苦しい挨拶は抜きでいきましょうよ」
お仙はぺらぺら饒舌りながら入って来た。口のうすい女だ。受け口でもある。こういう女は、軽薄な上に、尻軽である。
ちょっと見には、上玉だが、よく見れば底がない。心がない女だ。
薄っぺらな感じで、金四郎はこういう女には関心がない。
「何か用かえ」
ちょっと、眉をしかめて、
「おいらは、知らねえ女とは、口をきかねえことにしているのだがね」

「あら、冷たい。もう口をきいたじゃありませんか、つまり、知らない仲じゃなくなったわけだね」
「勝手なことを言っているぜ」
「ごめんなさい、だって、金さんにそっぽを向かれちゃァ、あたし、困っちまうのさ」
「ほう、そうかね。困るのはそっち、おいらは困らねえ。それより、昼寝の邪魔をされるほうが、大迷惑だ」
「そんな冷たくしないで下さいな」
お仙は、がらにもなく、項垂れて、肩を波打たせていたと思うと、袖を顔にあてた。
「おいおい、こんなところで泣かれちゃ困る。泣くんなら、外へ出てくんな。長屋の外じゃねえ、木戸の外だ」
「お願いです、金さん……」
「馴れ馴れしくされるのも、おいらァ嫌えな口でね。帰ってくれないか」
「では、金四郎さま。遠山金四郎さま、お願いがあるんです」
どこまでも、お仙は食い下がってくる。とうとう金四郎も折れてしまった。
「一体、なんだってんだ」
「実は、金さんとどうしても、死ぬ前に一目逢いたいと……頼まれて来たんですよ」
「死ぬ前に？　誰だ、その男は」
「男じゃありません、女のひと。いいえお婆ァさんですよ。ねえ、金四郎さま、おきぬ、と

いう人を御存知でしょう、もう五十すぎかしら……」
「五十すぎで、おきぬ？　ああ、それなら知っているとも、おいらの乳母だった……」
「ええ、そうなんですよ。そのおきぬさんがねえ、もう老齢で、その、昨日倒れたんです……」
乳母のことは忘れない。
金四郎の母は、生まれるとすぐに死んだと聞いている。ずっと乳母の乳で育った。乳離れするようになってから、以来、一度も逢っていない。屋敷から出されたであろう。金四郎は嬉しさで、胸がいっぱいになった。
「そうか、おきぬが……」
「向島なんですよ。直ぐに来て下さいな」
向島に金四郎の乳母がいて死にかけているという。
（逢いたい！）
と、思ったし、臨終とすれば、顔を見せる義理もある。
乳母は、母に代わって乳を含ませ、育ててくれた。恩人ともいえる。
金四郎の家は複雑だった。
父親の遠山左衛門尉景晋（かげくに）はこのころ、勘定奉行の要職にあった。
数年前まで作事奉行であり、その前は長崎奉行である。
幕閣の要職を歩いている。その伜が放蕩無頼で、下町の長屋で暮らしているというのは、

呆れた話だが、実は、金四郎は、妾腹なのだ。
かれには兄がいる。
兄は景善（かげよし）といい、実は父の子ではない。父の兄の子だ。
旗本の子弟は、長男と次男では人生に大きな違いがある。
長兄は長幼の序で、家督をするから家禄をそっくり受け継げるが、弟の方は一生、冷や飯食いだ。
才能が認められて、お役に抜擢されることでもなければ、兄の世話になって、部屋住みで生涯をおくるしかない。
その他の道は、養子になって他家を継ぐ。
そうでなければ、兄の自然死を待つしかない。
それも、甥っ子が生まれないうちだ。兄に子が生まれ、嫡出子としての届け出があれば、家督はそっちに決まってしまう。
家というものの仕組みがそうなっている以上、二男以下は、まず日蔭を歩むしかないのである。
それが徳川幕府の旗本組織の秩序であった。
これは、大名でも、その家臣でも、大要に於ては同じである。
したがって、武士の宿命といっていいかもしれない。
金四郎が生まれたのは、寛政五年八月二十三日。

金四郎は長じての名で、それまでは通之進と称った。
父はそのころ御小姓組で五百石。
そこから段々と出世したのだ。
兄の景善は、父の兄たる景好の次男でそれを貰って、長子として届けが出されている以上、金四郎の立場からはどうしようもない。
よく、貰いっ子をすると、子が生まれるという、譬え通りだ。もっとも妾の腹に生まれた。人生は皮肉なものである。
こういう複雑な家庭から、今日でいう非行少年が出るのはしかたがない。
金四郎なぞは、さしずめ、非行少年だ。若いときから、女と博奕と喧嘩で、家を飛び出しているのだ。
父は怒って、腹を切らせる、とまでいったことがある。
幸太夫が探しにくるのも、そのためだった。
「急ぎだから、猪牙でいきましょうよ」
と、お仙が言った。
猪牙は、舟のへさきが尖って、猪の牙のように見えるので、そういう名称がついたらしい。昔のいわゆる小早で、軽舟だ。二、三人乗りである。
五、六人乗れるのもあるが、やはり舟足は小人数のほうが速い。
この猪牙が出来たのは、明暦の大火後、吉原の遊廓が、日本橋人形町のところから、浅草

も北の端の今戸に近いところに移転させられた。
旧地から歩いてゆけば、半日かかってしまう距離だから、馬や駕籠でゆく者が増えたが、それよりは、大川の流れに逆らっても、猪牙の方が早い。
そうした遊所通いの客のために猪牙が発達したということになっている。
「吉原通いか」
と、金四郎は苦笑した。
「お仙泣かすな、馬肥やせ、じゃねえ、お仙を連れて吉原通い、こいつァ唄にもならねえぜ」
潮風に髪の毛をくしけずらせて、金四郎は目を細めた。
「あれ、いやですよう、そのお千とあたしのお仙は違いますよう」
「なあに、目に文字のねえやつには同じさ」
「憎らしい」
と、お仙は、肩をぶっつけてきた。
狭い小舟の中だから、
「おいおい、あんまり動くなって、ひっくり返るぜ」
「あら、どうせなら、そのほうがよござんしょ」
「冗談じゃねえ、まだ魚屑にゃなりたかねえ」
「あたしゃ、金さんと一緒なら、本望ですよ」

「こっちがご免蒙る」
「あら、御挨拶だこと」
お仙はつんとなって、
「そんなときゃ、女を嬉しがらせることくらい言うもんですよ」
「そうはいかねえ、嬉しがらせると女はつけ上がるからな」
「それが可愛いんじゃありませんか」
「真っ平だ。外面女菩薩、内面如夜叉、といってな」
「また、憎いひと！」
と、こんどは、腿のあたりをつねった。
「痛てえ」
金四郎が腰を浮かしたのへ、お仙がしがみついてきたから、ななめに大川を遡っていた猪牙が、ぐらりとして、
「危ねえや、お客さん、イチャつくのは、着いてからにしておくんなはい」
と、船頭が、渋紙色の顔を笑わせて、
「なあに、どんなにイチャつきなすっても、舟はひっくり返らねえがね、お二人さんが、どんぶりこで土左衛門になっちまっては、銭が貰えねえ」
「冷てェことを言いなさんな」
両国橋の下にさしかかってきた。船頭はへさきを向島へ向けた。

両国橋をくぐると、左手にお米蔵がずらりと並んでいる。その先が、駒形の渡し。駒形堂があって、その前から、渡し舟が本所へ往復する。
右手は向両国で、お竹蔵の広い囲いと竹が数百本頭をのぞかせている。
大名屋敷のお蔵の壁が並んでいる。
本所もこのころは、すっかり小屋敷が建てこんで、深川と変わらない。
源兵衛堀から先が向島である。
三囲り稲荷の森が見えて来た。長命寺があり、牛御前があり、向島へくるとやはり郊外の感じが強い。
向島の土手が近づいた。
柳、桜、桃の三樹がしっかり根を張っている向島の土手は、花のころには、遠近の行楽客で、大層な賑わいを見せる。
「あの土手の樹は、東照神君（家康）がお鷹野に来て御覧になって、植えるようにと仰せられたのが、はじまりだそうだ」
と、金四郎は土手を見て言った。
もう桜は花が散って、葉桜になっている。柳の糸が爽やかな翠緑を水にうつしていた。
「金さんは、何でも御存知ねえ」
「そうでもねえさ、お仙の内腿にホクロのあることなんか、知らねえぜ」
「まあ、誰に聞いたんですかえ、ほんとに、ここのところに」

と、お仙は、秘所の近くを着物の上から指さして、
「大きな黒子があるんですよ。金さんたら、油断も隙もありゃしない。何でもお見通しなんだから」
「図星だったかえ、なァに、まぐれさ」
「こわいひと」
そう言いながら、肩を寄せてくる。掬い上げるような流し目が、ぞっとするほど色っぽい。
（剣呑剣呑、こういう女狐にひっかかっちゃ、化かされちまわあ）
金四郎は自戒した。女遊びは人後におちないから、余裕があるし、女の嘘を見抜く眼もある。三囲り前の竹屋ノ渡しの舟着きに着くと、
「御苦労だったな」
金四郎は、約束の舟賃のほかに百文、
「酒代だ」
と、船頭の厚い掌に乗せてやった。
「こいつァどうも。帰りもお待ちしますぜ」
「そうだな。じゃ一刻ばかし待っていてくんな」
「へえ、そこらで一杯やっていまさ」
のんびりした時代だ。半刻や一刻、待つのは、誰も苦にしない。
時計というものは、大名屋敷くらいにしかないのだから、時間の観念も大まかなものだった。時の鐘が聞こえてくるのを待って不自由はなかったのである。
「お仙、乳母の家はどこだ」
「はい、新梅屋敷の裏のほうですけれど、あ、いけない、手ぶらで来ちまった。長命寺の桜餅でも買ってゆきましょうよ」
久しぶりの訪問に手ぶらというわけにはいかない。
牛の御前と称われる牛宝山明王院最勝寺のあたりは、洲崎村。
このあたり葛飾郡である。洲崎といえば、深川の洲崎は江戸湾に面していて埋め立て地になっているが、こんな向島で洲崎という地名になっているのは、古いころ、このあたりは海浜だったからだ。
向島も島だし、寺島村も島だ。つまり向島、本所、深川などは、隅田川の河口にあって、ずっと入江だったのが、数百年の間に、流されて来た土砂の堆積で、島が出来、埋め立てられたことを物語っている。
江戸の前期は、深川や本所（庄）は湿田地帯で、江戸の外だったのだ。文政年間も、まだ郊外の感じで、広々とした寺社の森が田圃の中にあり、農家が点在し、料理屋もある。
市中の雑沓を嫌った金持ちの陰宅（別荘）などもある。金四郎とお仙は、長命寺の門前の桜餅を買った。
元禄時代にはじまったというから百三十年も前になるが、いまでは向島の名物になっていて、客が門前にむらがっている。小旗がひらひらしていて、さくら餅、と書いてある。この

あたり、桜樹が多くその葉っぱが、餅の包み皮になる。塩漬けにしたやつで、ほんのりと香りが餅にうつって、甘味をそそるのだ。

一つ四文。

お仙は十箇買った。

「あたしゃ甘いものとなると目がないんだから。でも、こんなに売れて、よく桜の葉っぱがありますねえ」

「へえ、集めるのが大変ですがね、一年で、ざっと三十樽ばかり漬けますんで」

四代目という亭主の新六というのが、自慢そうに言った。

「へえ、三十樽も。一樽に葉っぱが何枚になるのかしら」

「お仙、よさねえか、そんなことどうでもいいじゃねえか」

金四郎が止めたが、新六のほうが饒舌りたいらしい。

「よくお客さんに聞かれますのでね。数えましたよ。一樽に、およそ二万五千枚」

「おい、本当かい」

「へえ、砂糖代が五十両、しん粉が……」

そんな数字を聞いているひまはない。物見遊山に来たのではないのだ。金四郎は、お仙を促して歩き出した。

「おめえももの好きだな、あんな桜の葉っぱを数えたからって」

「ほらっ、金さん、気がつかなかったかえ、あんなに聞いてやると、いい調子でさ、一つ余計にくれるのさ」

お仙は包みから一つとりだして、歩きながら食べはじめた。

「呆れた女だな、みっともねえ」

「あら、ここは御朱引内じゃない、何をしたって、咎める人はいませんよ」

「そりゃそうだが」

ますますもって、このお仙という女がわからない。

新梅屋敷は、諏訪明神に沿って、東へ入るのである。

「――だが、乳母のおきぬは、老齢でからだが弱っているのだろう、餅なんか食べたら、咽喉へひっかかりゃしねえか」

金四郎は歩きながら、ふと疑問を口にした。

「あら、餅は、あたしたちが食べるんですよ」

けろりとしてお仙はいう。

「おい、手土産といったじゃねえか」

「そりゃ、手土産ですけどさ、かたちだけ。おきぬ婆さんは、餅より酒が好きなんです」

「なんでえ、だったら、酒を買ってくればよかった」

見まわしたが、寺島新田の真ん中で、あたりに酒屋はおろか、農家もない。

「大丈夫ですよ、昨日あたしが持っていった一升があるから」

そんな言葉の端々に、お仙がおきぬの世話をしているように見えて、金四郎はお仙への警

戒を解いていったのだ。

新梅屋敷のわきを通って彼方に若宮八幡の森が見えるあたりに来て、漸く、

「あの家ですよ」

と、お仙は指さした。

一むらの竹藪があって、半ば隠れるようにして一軒の農家が見える。土蔵もあるようだった。

「そうか、あそこか」

かなり大きいが、すっかり老朽化して萱葺きの屋根にはペンペン草が生えているし、土蔵も白い漆喰塗りが剝落しているし、屋根瓦もずれていたり、まるで無人の家のようだった。生活が苦しいのであろう。

「おきぬさんは、土蔵の二階に寝ていますよ」

と、お仙は言い、勝手知ったように戸を開けた。

土蔵の二階とは、一寸、おかしいと思ったが、ないことではない。

殊に若い夫婦に遠慮したりして、老人は土蔵の中で寝起きすることがある。

土蔵というのは、壁が厚いから、冬は温かいし、夏は意外に涼しいのだ。

「おきぬさん、珍しい人をお連れしましたよ」

と、中に向かって、明るく声をかけるとお仙は、金四郎を振りかえって、

「さ……早く」

と、微笑した。

その態度には、些かのためらいや、怪しいふしはなかったから、それまで、一抹の疑惑は残していた金四郎も、うっかり乗ってしまった。

何気なく、土蔵の中に一歩踏みこんだ。

吹き抜けの二階へ上がる梯子段がある。

その上かと、見上げたときだった。

突然、音を立てて、戸が閉まったのだ。

はっとなって、振りかえった。その愕きの前で、またもう一つの戸が閉まった。はげしい音だった。二重戸が閉められてしまったのである。

「どうした、おい、お仙！」

その声に答えるような、女の笑い声がかん高く聞こえた。

けらけらと女のかん高い笑い声は勝ち誇ったそれだった。

「おい、どうしたんだ、お仙」

金四郎は、戸を叩いて怒鳴った。

そのときまでは、まだお仙の悪企みとは思わなかったのである。

間違って戸が閉まったのだと思ったのは、お仙を信じていたからであろう。

また、そんな目にあわされるような憶えはないのだ。

「お仙、お仙、ここを開けろ」

その声に答えたのは、笑い声だけだった。
漸く、戯れではないと気がついたが、そのときはもう遅かった。
「おい、やったか」
「うまくかかったな」
「お仙、でかしたぞ」
なんと、男の声がしたのである。
それも、三、四人はいるらしい。
(嵌められた!)
罠だったのか。
(なぜだ?)
最初に浮かんだ疑問がそれだった。
お仙とは初対面である。何の因縁もない。
恩讐のない女から、こんな目にあわされるのは不本意だった。
「開けろ、お仙、なぜ、こんなことをする」
戸を内から叩きながら、金四郎は怒鳴った。
「お仙! お仙!!」
もう女の声は聞こえなかった。代わって男たちの濁み声が、
「馬鹿野郎、お仙もお三もあるものか」

「そこで泣いていろ」
「遠山金四郎か、いい名前だが、それも今日かぎり」
「あとは塵骨灰だあ」
「天気がつづいていたから、よく燃えるぜ」
はっとなった。
燃える?
(焼き殺すつもりか)
なぜだ?
しかし、もはや、その理由を考えている閑はなかった。
外の声は一層、騒がしくなり、ばさっばさっと、音がした。
薪や萱など、燃え易いものを積み上げているらしい。
火を点じられたら、おしまいだ。
「くそ! あいつら」
土蔵の戸は厚い。それも、二重になっている。
いくら叩いても、こじあけようとしても、無駄だ。
金四郎は、血走った眼で、内部を見まわした。空家になってどれくらい経つのか。中には、がらくたが埃をかぶっている。
かれは、梯子段を駆けのぼった。

むろん、そこには、おきぬ婆さんなどいるはずもない。
土蔵の二階である。
明かりとりの窓には、鉄格子が嵌まっている。
分厚い窓の戸は、泥で目塗りすればどんな猛火にも耐えられるが、中の人間は蒸焼きにされてしまう。
泥棒の侵入を阻むために、鉄格子が嵌めこんである。鼠に荒されるのを慮って、金網を貼っているところもあるが、この土蔵には、それがないのがせめてもであった。
金四郎は、鉄格子をつかんで揺すった。
「畜生！　こいつは、はずれねえか」
懐中の匕首を抜いて、格子の根元をこじった。
漆喰で固められている。匕首の尖先は、掘り起こさないうちに折れてしまったが、根元はぐらついてきた。
（何かないか）
血走った眼で金四郎は見廻した。
石臼が目についた。手廻しで、豆などを挽くやつである。
かなり重い。金四郎はそれを担ぎあげると、鉄格子に叩きつけた。
凄い音がした。石臼ははね返されて転がったが、格子は一層、ゆるくなった。
重い物を吹き抜けの二階にあげるための滑車がついている。鉄鎖が下がっていた。

金四郎は、その鉄鎖をはずした。
そうこうしている間に、土蔵の周囲には、薪や粗朶が積み上げられ、火がつけられたようだ。
ぱちぱちと、弾る音と煙がたちのぼって来た。
もう寸時の猶予も出来ない。
金四郎は取りはずした鎖を鉄格子にからめると、力いっぱい引き寄せた。
漸くばさっとはずれた。
「しめた！」
鉄鎖を柱に結びつけて窓から下をのぞく。
濛々と煙があがってくる。このまま下へおりるのは、火中へ入ってゆくことになるが、逡巡してはいられない。
二階には、綿のはみ出した蒲団が埃をかぶっていた。
あるいは病人などがいて、ここで亡くなったあと、そのままにされていたのかもしれない。
なんであろうと、いまの金四郎にとっては、いのちの綱である。
かれは、窓から、その破れ蒲団を押し出した。
蒲団がどさっと落ちて、ぱっと、煙が騒いだ。
その上に鎖で伝わっておりようというのだ。
火勢が強ければ、むろん蒲団も燃え出すが、その前におりるのだ。

金四郎は、鎖をつかんで、外へ身を乗りだした。
「あっ、野郎、出て来やがった」
と、下で声がした。
金四郎にとって幸いだったのは、火と煙が見えたのだろうか、どこかで半鐘が鳴りはじめたことだった。
この若宮村のだろうか、それとも寺島村のか。
どっちにしろ、けたたましい半鐘の音は、のんびりした村人たちの耳目をそばたたせる。
昼火事は発見し難いという。よく見つけてくれたものだ。
鎖を伝わって土蔵から脱出する金四郎目がけて、何か飛んできた。
お仙のなかまの男たちが、せっかく、焼き殺そうとしたのに逃げられてたまるかと、投げつけて来たのだ。
だが、それも、姿を晦ます前の、最後っ屁のようなものだった。
ぶすぶす燻りだした蒲団の上へ降りた金四郎が、煙の外へ逃げ出たときは、もうそのあたりには、一人もいなかった。
たしか、男たちは、四、五人はいたはずだったのである。
お仙は、いち早く、姿を消していた。
男たちの顔は見ていないから、見当はつかない。
上からのぞきおろしたとき、数人の影は見えたが、人相は煙にさえぎられてよくわからなかった。

「くそ！　よくも、おれを蒸焼きにしようとしたな、あのお仙のやつめ」
お仙という名も、本名かどうかわからないのだ。
半鐘は鳴りつづけている。
村人たちが八方から飛んでくるのが見えた。
林に囲まれた一軒家だから、どっちにしても類焼の危険はないが、無人の廃屋だったから、村人たちも驚いたに違いない。
お仙とそのなかまは、金四郎を焼殺するために、この廃屋を利用したのだ。
「――どうしなすった」
「あの窓から逃げ出すのを見ましたよ。一体、どうしたんだね」
駆けつけた村人たちが心配してのぞきこんだ。
「有難う、どうやら、殺され損なったぜ」
はじめて、金四郎は微笑した。
「悪いやつらだ。一体、あそこには誰が住んでいたのだえ」
「へえ、むかし、甚兵衛という者がいましたがね、一家が死に絶えて、もう三年もあのままでさ」
「ふうん、おきぬという婆さんを知っているか」
「おきぬさん？　へえ、聞いたことがねえなあ」

と、村人たちは顔を見合わして、首をひねった。
やはり、お仙の出鱈目だったらしい。
「有難う、すっかり瞞されていたようだ」
「大丈夫かね、おらがのところで休んでゆかねえか」
「大丈夫だ。ゆっくりもしていられねえのさ」
川の水で顔を洗っただけである。お仙と名乗った女をまず探さねばならない。

水茶屋の女——
お仙と名乗った女は、水茶屋の女だと思われた。
階級制度のはっきりした江戸時代にあっては、生活がそのまま姿かたちにあらわれている。特に女の職業の少ない時代だから、色分けがはっきりしている。
色里、色街のつとめの女は、誰の目にもわかった。芸者と女郎では違うし、同じ売春を職業としていても、新吉原の女郎と、岡場所の女では大きな違いがある。また、宿場女郎も違う。江戸で宿場といえば、それぞれの街道の一つ目の、千住、新宿、品川、板橋の四宿である。これはもともと飯盛り女郎なのだ。
飯盛り女中、が、旅人の一夜の慰めにからだをひらく。宿場の繁栄のために必要とされたものだ。
また遊山旅や伊勢詣りなどで女も旅をするようになったのは江戸の後期のことで、以前は旅をするのは、男が大半だったのだ。交通の不便な時代だし、生活が忙しいから遊山旅ということは少なかったのだ。武家娘と町娘は一見してわかったし、同じ武家娘でも、父親の身分の違いがあらわれる。
髪のかたち、衣装、着付けまでが違っていたのだ。したがって、簪や笄などでもわかる。金四郎が、お仙を水茶屋女、と見たのは、それしか考えられない風俗だったことである。
水茶屋女、というのも、新しい職業であった。
もともと水茶屋は文字通り、休み茶屋である。腰かけ茶屋で、店先にへっついがあって湯をわかしている。
客は腰かけで一休みして、咽喉をうるおす。
それだけのことだから、古いころは、一ぷく一銭。一文あきないだった。
こういう値段では、大した収入にならないから、爺さん婆さんがのんびりとやっているのに、丁度よかった。
寺社の門前や境内で、お詣りのあとで一ぷくする。そのための掛け茶屋だったが、しだいに泰平の世になって、寺社詣りが遊山を意味するようになってくると、若者もゆくし、男にとって、若い女は、花と同じだから目の保養になる。
老人が寝こんだりして、代わりに娘や孫娘が出たり、手伝いしているうちに、そっちのほうが客が多いとなると、水茶屋商売も、資本投下のうまみが出て来て、若いきれいな娘を雇って、赤い前垂れをかけさせたりする。

娘だから、特別に愛嬌をふりまかなくても、花を慕う虫がいやでも寄ってくるし、段々と、水茶屋の女、という一つの風俗が出来てくる。

色街でもない、色里でもない。

一ぷく十文二十文で、若い女に公然と話しかけることも出来るとあれば、男たちが浮気の虫をおこして、出かけてゆくようになるのは当然の成り行きだった。

水茶屋に若い女が出るようになると、その女目あてに、客が集まるようになる。

そうなると茶代も十文二十文では済まなくなる。

五十文百文が当たり前になってくる。

蕎麦が十二文でアンマ上下が十六文だとすると、この茶一杯の値段が、如何に高いかがわかる。

茶屋女のほうでも、過分にぽんと出してくれる客には、愛嬌をふりまくから、その微笑ほしさに、鼻の下の長い客が値を吊り上げてゆくことになる。

この得体の知れない茶代が、習慣的に常識値段になってしまう。

こういう値段には、男の誘いと、女の媚が加味されているわけだから、一種の色商売で、女郎と芸者に水茶屋女が加わることになる。

水茶屋女が雇われ、その美貌が評判になって、錦絵になったりするようになった。

当時、錦絵になるということは大変なことだ。

今日のブロマイドの比ではない。

錦絵も三人女五人女として描かれる場合と、いわゆる〝一枚絵〟にとりあげられるのは、大きな違いがある。

それだけ価値があるというわけで、したがって、新吉原の花魁に匹敵する値がつく。

花魁に処女はいないが、水茶屋女は、もともと、おぼこ娘が出ていることが多かったので、男にとっては関心の度合いが大きい。

商家の若旦那が評判の美女を女房にしたいといい、大旦那や隠居などは、妾にして囲いたい、ということになる。

そこで値が上がるのだ。

水茶屋に出ているというのは、まず金持ちの娘はいないということもある。

たとえば、支度金を十両、月のきめが一両か二両で、手活けの花にすることが出来る。となると、小金のある連中の申し込みが多くなる。

水茶屋女は、妾候補のようなものだった。

一口に水茶屋女といっても、寺社の境内と町中のそれと、別である。

寺社の境内は、寺社の持ち物だから坊主がうまい商売をするわけで、町中で水茶屋を開くには町名主や五人組などにわたりをつけて、町奉行所へお届けしなければならない。

寺社の境内のほうは掛け茶屋で、どこからでも見通しだが、町中のほうは、はじめ掛け茶屋でも、段々、家らしくなって二階を作り、ちょいと二階へ上がろうよ、ということになる。

客がつかなければ、男女のあいびきに時間貸しをするというふうで、風紀が乱れて、岡場

所的になって来た。そうなると、時々、手入れがある。
したがって、評判の美女の茶屋女といえば、寺社の境内にかぎったものになる。
いつの時代でも簡単に寝る女は、値段が安いのだ。
「お仙のやつは、町茶屋のほうだな」
と、金四郎は見当をつけた。
駒形堂の傍で舟をおりると、金四郎はいつか、足が浅草寺のほうへ向いていた。
いつもなら駒形のどじょう汁で腹ごしらえをするところだが、その気にもならない。
(お仙のやつをとっ捕まえて、しめあげてやる)
その思いで一杯だった。
女の悪知恵というのは、どこかに可愛いところがある。
男と違って、女が一人で生きてゆくのは難しいから、男をたぶらかして、少々の金をマキ上げるなどというのは、まだ可愛げがあるし、許せる感じなのだが、あの土蔵に放火して、金四郎を殺そうとはかったのは、四、五人の男たち。
お仙とどういうつながりがあるか知れないが、少なくとも、女だけの考えでも行為でもない。
かなりに大がかりなものだ。
お仙という女とは初対面なのだから、金四郎を殺したいと考えた元凶は別にいる。
その元凶をさぐり出すにも、お仙しか手がかりはないのである。

(水茶屋女……)
というのも、その衣裳や髪かたち、容子から察しただけのことで実際はどうかわからない。
が、それしか、手がかりはないのだ。
(町茶屋だろうが……)
浅草界隈と狙いをつけているうちに、金四郎は浅草寺の前へ出ていた。
金竜山浅草寺の境内の奥山の水茶屋は有名だ。
ここは、当時の盛り場の一つでもある。
大道芸人たちなどが、それぞれ声を涸らして、客を呼んでいる。
この奥山の賑わいが、のちの浅草六区興行街、つまり、映画館や木馬館から、ストリップ、軽演劇のメッカとして、今日につながっているのは、よく知られている。
雷門をくぐって、仲見世を通ってゆくと、金四郎は、
(やっぱり、ここかもしれねえ)
と、思うようになった。
町茶屋の女は、いつでも岡場所の女になるが、寺社の水茶屋には、華やかさがある。少なくとも、掛け茶屋で男に抱かれるなどということはないから、その分だけ、値が張るのである。
顔やすがたに自信のある女だったら、町なかよりも、こちらのほうが分がいい。
お仙の蓮ッ葉な感じが、町茶屋ではないかと一たん思ったが、歩いてくるうちに、

（あの女なら、率のいいほうをとるだろう）

と、気がついたのだ。

水茶屋といっても、この奥山だけで、二十軒や三十軒はある。一軒一軒、のぞいて見るつもりの金四郎である。

（どんなことをしても見つけだしてやる。あの顔を忘れてたまるか）

掛け茶屋というのは、腰掛け茶屋というのと、水屋掛けという両方の意味がある。簡単な葭簀張りの小屋だから、雨になると、仕舞って帰る。

軒ぎわに短い暖簾が下がっていて、そこに屋号や紋どころが染めてあるのが普通だった。

「おや、若様じゃございませんか」

突然、声をかけて来た女がいる。

はっとするくらいの美い女だったので金四郎は眼を瞠った。

「はァて、どなたでしったっけ」

「いやですよう、若様、そんな他人行儀な」

「――他人行儀って……」

こんな美い女を抱いたことがあったか、と、金四郎は、首をひねった。

一見、芸者風である。

水茶屋を探しに来て、芸者に会うとは意外だった。

「あたしですよ、堀ノ小万ですよ」

「堀、というと山谷堀か」

「あら、ごめんなさい、小万じゃ御存知ないかしら、お馬ですよ」

「えっ、お馬か、そうだ、お馬だ、こいつァ一別以来だ」

お馬とは妙な名前だが、近所の医者の娘だった。

金四郎よりは、五つ六つ年齢下だったから、丁度いい遊び相手だったが、医者が死んでから、母子がどこかへ移転して、それきりになっていた。

「ほんとうに、若様、あたしゃ、夢かと思いましたよ。これも観音様の御利益かしら。毎日お詣りしているのがよかったんですねえ」

大仰な思い入れは、こうした商売の女の身についた所作かもしれないが、いまの金四郎には、いささか強すぎる。

お仙という女にひどい目に合わされたばかりだから、こういう出合いに警戒が働くのもしかたがない。

「そうか、山谷堀にいるのか」

「はい、去年から一本になりました。自分の口からいうのもおかしいけれど、堀ノ小万といえば、知らない人はいません」

「売れっ妓か。そのうち、会いに行くぜ」

「あら、ほんと、嬉しいわ、若様に呼んで頂けるなんて」

袖を胸で合わせて本気で喜んで見せる仕草に、昔の少女時代が思いだされたが、眩しいよ

うな美い女だけに、金四郎には、まだ途惑いがある。
「おいらは観音様に来たのは久しぶりだ。半年ぶりかもしれねえ。それがこうやって、ばったり会うなんて」
「ええ、やっぱり、お引き合わせですわ」
「そうかねえ。実はおいらは、人探しで来たんだ。それも、女だ」
「あら……お安くないこと」
「そうじゃねえのさ。一口じゃ説明できねえが……そうだ、お前さんなら、ひょっとして、知っているかもしれない。お仙という女だ。知らねえか？」
お仙、と聞いて、小万は首をかしげた。
「聞いたような名前だ……と」
「珍しい名前じゃねえさ。この奥山にいねえか」
「そうねえ、聞いたことがあるようだよ。ごふく茶屋のお仙がどうしたとか」
ごふく茶屋というのは、この奥山の水茶屋のことである。
〝御福の茶屋〟とか〝呉服の茶屋〟とか書いてあるが、別に衣類と関係があるのではない。これは御仏供と書くのが本当だ。本来の意味は、観音様へあげる御茶という意なのだ。昔はこの浅草寺のごふく茶屋は、三十六軒あった。そこで歌仙茶屋とも称った。
ところが、段々、茶屋が減って、二十軒になってしまったのが享保ごろで、以来、二十軒茶屋と称うようになっている。

「――見たところ、二十軒もねえなあ」
と、金四郎は目ノ子勘定で言った。
「ここにお仙という名の女がいるかえ」
「ええ、いたようだけど」
「こころもと無えな、お仙といっても、あの笠森お仙じゃねえぜ」
「知ってますよ、あれは三十年も前の評判でしょう。奥山のお仙さん、ねえ」
「しかたがねえ、一軒一軒、雁首を調べてまわるか」
「一体、どうしたんですよ、若様がそんなことまでして」
「理由があるのさ」
「そゃァそうでしょう。若様はおモテになるのでしょうねえ」
「冗談じゃねえ、女にモテてりゃ、こっちから探すものか」
「でも、惚れた女を……」
「憎い女さ」
「可愛さあまって……の口ですかえ」
金四郎は、呆れたように、小万を見た。
「お前さん、いつの間に一人前の女になったんだえ、お馬は、そんなに達者じゃなかったぜ」
「ほほっ、お馬は、もう昔の話ですよ、堀ノ小万姐さんは、水商売で揉まれて、口先だけは

達者になりました」

突っ張った調子でそう言ったとき、ふっと横顔に寂しい翳が浮かんだ。

華やかな芸者稼業の裏をふっとのぞいたような気がした。

山谷堀の色街が繁栄しはじめたのは、吉原にゆく客を、猪牙で運んだ舟着場のいわゆる船宿からだが、柳橋や深川に飽いた客が、山谷堀の風情を楽しむようになって来たことによる。ひとつには、郊外という気やすさが女たちを大胆にしたり、面白い遊びが出来るという評判を呼んだらしい。

金四郎も色街の遊びは好きだが、いまは〝お仙〟の行方を突き止めなければならなかった。

「こうなったらしかたがねえ、お馬は、じゃァねえ小万、首あらためにつきあってくれ」

「なんだか、割に合わないようだけど、あたしも、そのお仙が気になりますよ」

笠森お仙というのは、感応寺の笠森稲荷の前の水茶屋の女だった。

屋号は鍵屋で、あまりにも美人だったので評判になった。

お仙がこの水茶屋に出たのは、親の手伝いで、十三、四のころから出ていたというから、かなり早い。

労働基準法などない時代だから、十三、四でも、もう色気がある。色気を売り物に出来る器量だったわけだ。

明和のはじめである。したがって、水茶屋女で鳴らしたのは六、七年の間だ。明和七年に

ちゃんとしたところに嫁に行っている。

一枚絵にもなった美人だから、そんな玉の輿に乗ることが出来た。

もっとも、玉の輿といっても、相手は御家人だ。江戸城の御庭番。出世といってもその程度にすぎない。面白いのは、お仙が嫁に行ってしまったあと、父親がまた茶店に出ることにした。

「とんだ茶釜が薬鑵に化けた」

と、人々は、はやしたてた。

とんだ茶釜というのはお仙のことで薬鑵は薬鑵頭だ。お仙のいなくなった茶店を見て、失望のあまり口にしたのだろう。

「さあ、ごふく茶屋のお仙を捜そうぜ」

水茶屋には、それぞれ屋号がある。

〝湊屋〟だの〝蔦屋〟だの〝堺屋〟など、それぞれ何かの理由があるのだろうが、屋号が軒暖簾に染め抜いてある。

金四郎と小万が歩いてゆくと、水茶屋女が、

「いらっしゃいませ、お休み下さいな」

と、声をかけてくる。

なるほど、一軒一軒、見てゆくと、どの女も十人並みの顔が揃っている。

「なるほど、いい女がいるぜ」

「あら、若様、まるで、お上りさんのようですよ」
「浅草寺は、久しぶりだからな、お上りさんのようなものさ」
「ねえ若様、そんな……」
「おい、その若様はよしてくれ、金四郎だ」
「あら、そうですねえ、若様」
「また。金さんと呼んでくれ、金ノ字でもいいぜ」
「金さん、ほうら、このほうがぴったりしているようだねえ」
「おっと、そうじゃれつくな、人探しが出来ねえぜ」
水茶屋に芸者を連れてくる男は、まずいない。
女同士の火花が散るのは目に見えている。
女連れのときは、爺さん婆さんが細々とやっているところへ行くのが普通である。
だが、金四郎は、〝お仙〟を探さねばならないのだ。
「おう、ちょっと聞きてえがね」
〝蔦屋〟と染め抜かれた暖簾の茶屋女に声をかけた。
「この奥山にお仙という女はいないかね」
「お百ならいるけど、あたしさ」
にっと、女は笑った。

堀ノ小万

色気が売り物の水茶屋女にしてみれば芸者連れの客など嬉しくはない。
ババァ芸者ならまだしも、一本になって一年足らずという売り出しの小万のような美い女と並べられては、どうしても見劣りする。
いわゆる、割を食うというやつだ。
「お仙なんて知りませんよ」
どの女も、木で鼻をくくるような返事だ。
あるいは、
「お仙さん？　谷中へ行ったらいるかもしれないよ」
などというやつもいる。
笠森お仙のことを言っているのだ。
中には小万を知っているらしく、
「お千だなんて、お万さんに悪いじゃないかえ」
と、気の利いたつもりの皮肉を言う女もいた。

金四郎は、諦めるしかなかった。

こうやって何人もの茶屋女の顔を見てくると、なんだか、お仙の顔がまぎらわしくなってしまいそうだった。

「しかたがねえな」

と、途中で考えこんでしまった。

「しかたがないねえ」

と、小万も同情したが、

「ねえ、若様、差し出口のようだけど、どうして、お仙という人を探しているのか、教えて下さい」

「うむ……」

「あたしだってお役に立つかもしれませんよ」

「いいんだ、久しぶりにあったお馬に、そこまで心配して貰わなくても」

「あら、久しぶりだから、かえって、そうでしょ。あたしゃ、若様を見たとたんに思いだしたんだから、ねえ、筒井筒ふりわけ髪の、っていうじゃありませんか」

「そうだなあ、幼馴染みのおめえの……」

と、言って、金四郎は何を思い出したのか、にやりとした。

とたんに、小万も、はっとしたようだった。

「いやだ」

と、いい、はっと、袖で、顔を蔽うしぐさをした。

「いやよ、思い出しちゃァ」

「いやだといったって、おめえ……思い出させたのは、おめえじゃねえか」

通りすがった職人らしい三人連れが、

「ようよう、お安くねえぜ」

「真っ昼間から、妬けるよう」

と、声をかけた。

それくらい、二人の様子は、奥山であいびきでもしているように見えたらしい。

何しろ、小万が派手なので、人目をひくのだ。

「だって、あたしのあそこを触ったのは金さんがはじめてでしょ」

「おい、よしなって。小せえときのことだ」

「お医者さまごっこだなんて……あたし死ぬほど羞ずかしかった」

お馬のわれめのうす桃色を見たのは、金四郎が十歳くらいのときだ。

お馬は医者の娘だった。だからお医者さまごっこをしようといわれたときに、素直に帯を解いた。

「若様がお医者になるの」

「そうだよ。お馬が病人だ」

「あたし病気じゃないよ」

「だけど、病人だ」
子供のうちは他愛ない。
「じゃァ、寝ているのね」
まだ胸のふくらみもない幼いからだである。
男と違うところは、下半身だけだ。
若様は、ほかのところは診ようとせずすぐに、股に手を延ばした。
「くすぐったい、若様……」
「病人は我慢するんだ」
両手で下肢をひろげて、金四郎は女の秘所をのぞきこんだ。
春草も芽生えず、つるりとした丘の中央を割るみぞの奥に、桃色の綺麗な柔襞が見え、少年は胸がふるえた。
その部分に指をさし入れると、少女は、いやがって、下肢をつぼめようとする。
「凝っとしていろよ」
叱りつけて、柔らかい肉をいじりまわした。
(これが女なんだ)
少年ながら、そのときの感慨は強烈なものがあった。
「若様、もうやめてえ」
「もっと……」

「いやよ、もう」
「凝っとしていないと、病気になるぞ」
それで、静かになったが、本当なら、病気が治らないというべきだったろう。
俄か医者だから、少年は昂奮のあまり、何を言っているのか自覚していない。
もっとよく見ようと思って、行燈を引き寄せた。
「若様、いやよ、もう」
お馬は泣き出しそうになっていた。
こまかく顫えているのが、なんともいじらしく、可愛いのだ。
少年は下腹部に異常な衝動を受けていた。
金四郎はそのときどうしたかおぼえていない。その勃起したやつを、少女の前でつかみだすような真似はしなかったのはたしかだ。
旗本の子供という自尊心は、少年のうちから養われるのである。
そのお医者さまごっこは、女中に見つかってしまった。
何かの道具をとりに入って来た女中がこの情景を見て棒立ちになった。
「まあ、若様が……」
仰天した女中が身を翻そうとしたのを、少年は、一喝してとどまらせた。
「父上に告げ口したら、斬ってやる」
そう叫んでいた。

「は、はい……」
「父上だけじゃない、誰にも言うな。ほんとうに斬る」
そのとき、少年は、その気になっていた。お馬の肌をいじったのは、あとにも先にも、そのとき一回きりだ。
「――ねえ、若様とあたしだけの秘密」
と、小万は、紅の口を耳もとに近づけて囁く。
「あのことを考えると、いまでも、ゾクゾクッとするんですよ」
「あのこととは何だえ」
「あら、おトボケ。ホラ、土蔵の中で、若様があたしを裸にしてあそこを指で」
言いながら、小万は赧くなった。
「止さねえか。真っ昼間から」
さすがに金四郎も、目のやり場に困る。
「あら、誰も聞いてはいませんよ」
「それにしたって、何も」
「おいや？　若様。あたしは、あのときのことを思いだすと、いつも肌がかっと火照って、じわっと……濡れてくるの」
「小万、その話は、夜になってしようぜ」
金四郎はへきえきして言った。

「それより、いまはお仙のやつを探さなきゃならねえんだ」
「まあ、お仙お仙って、何さ、そんな女誰も知りゃしませんよ。笠森お仙なら、とっくに」
「そんな仲じゃねえんだ。わからねえやつだ」
「わかるように話しておくれな」
小万はもう女房きどりだ。
お仙さがしの協力を頼んだのだから、面倒でも一部始終を話すしかない。
金四郎は、お仙が突然あらわれたことから、乳母が臨終だからといって、向島に案内され、土蔵へ閉じこめられて焼き殺されそうになったことなどを話した。
「まあ、なんてェやつなんだろう。そんな女は、女の風上にもおけないよ、ねえ、若様」
「風上も風下もねえ、見つけ出して」
「水茶屋に出ているかどうか、はっきりしないのでしょう」
「おいらの勘さ」
「それじゃア八百八町歩いたって、見つかるかどうかわかりませんよ」
「ほかに手段がねえ」
「ねえ、若様、あたしの知っている親分がいますよ。このあたりの女のことなら知らないことはないという女衒の親分なんですよ」
「女衒か、なるほど、それならわかるかもしれねえ」
女の売り買いが商売の者だ。

水茶屋に連れて来たり、あるいは、囲いたいという者から手数料をとって女に納得させたりしているのであろう。

小万の案内で、その男のところにいった。

雷の与兵衛というのが、その女衒の親分の名前だった。

「カミナリだって」

「えっ、雷門の傍に捨てられていたんですって」

「捨子だったのか」

「自分が捨子だったから、困っている女の世話をするそうですよ」

「ふうん、何とか言いやがって、どうせ口利き料で、いい儲けをしてやがるんだろう」

雷の与兵衛の家は田原町にあった。

路地の奥で板塀がめぐらされている。

表が閉まっていて返事がないので、裏へまわった。

「こっちだと思うけど」

「よく知っているな」

「一度来たことがあるんですよ」

裏の木戸のところで、中へ声をかけたが返事がない。

「いないのかしら」

と、手をかけてみると、するりと開いた。

「あれ、いるらしいよ」

小万は中へ入って、

「ごめんなさいな、親方、お出でかえ」

と声をかけた。

裏といっても、猫の額ほどの庭とはいえない、空地があるだけで、万年青の鉢などが置いてある。猫があくびをして、まだ、眠そうに眼をとじた。

「あら、おかみさんでもいるのかしら」

「おい、他人の家だ、断わりなしに入らねえほうがいいぜ」

金四郎は注意したが、

「あら、声をかけたじゃないか」

と、小万は平気だ。

「声をかけたって返事がなきゃ、断わったことにならねえ」

「若様は、やっぱりお旗本だねえ、考えることが難しいよ」

たしかに下町の生活の常識は、それほど面倒ではないのかもしれない。長屋暮らしなど、いつでも奥まで見通しだから、のぞいたとかのぞかないなどは問題にならない。

ところが、やっぱり、この家の中に入ったのは間違いだったようだ。

小万に次いで中へ入った金四郎は、ひょいと覗いて、

「いけねえ」
と、小万の袖を引いた。
なんと、中では、真っ昼間から、男女のからだが絡みあっていたのだ。
半裸の男女だ。
いや、女のほうは、殆ど、全裸にひとしかった。
長襦袢をまとってはいたが、肩から胸まで、剝きだしになっているし、下半身もあらわな肌で、狂ったように、男をもとめて呻いている。
三十近いと思われる年齢だ、一目で、この親方の女房らしいとわかった。
だが、相手の男は若い。
二十歳になったかどうかという感じの若者で、痩せている。
白昼からこうした交媾は、あまりにもどぎつく、金四郎もかなりのことには驚かないほうだが、これには呆れた。
「いけねえ、出ようぜ」
「あら……でも」
「何が、でも、だ。人の乳繰りあっているところを覗いちゃいけねえよ」
「待ってよ。若様、あたしゃ、人のするところを見るのも、好きよ。面白いじゃないか」
小万は、眼を輝かせて、八ツ手の蔭からのぞいた。あれだけ声をかけたのに聞こえなかったのか、男女は激しい声を洩らして、うごめいている。

白昼から、男女がからみあっているのは、しかし、そう珍しいことではない。
二人が驚いたのは、女の方は年増なのに男の方が若すぎるからだった。
(あいつが……)
まさか、雷の与兵衛じゃあるまい、と金四郎は瞥見して思った。
小万も、かぶりを振った。
「おかみさんだよ」
という。
すると、若い男は、
(情夫か?)
(そうらしいねえ?)
声に出さずに、二人は頷きあった。
悪いところをのぞいてしまったものだ。
もっとも、わざとしたことではないしこのまま、出てゆけばいい、と思った。
そのとき、
「あら、小万さんかえ」
女の方が声をかけたのだ。
これには、二人とも、ぎょっとなった。
髪ふりみだして、若い男と絡まりあっているのである。

呻き声まで出していたのに、まさか、小万の姿に気がついていようとは。
さっき、あれだけ、声をかけたのだから、当然、聞こえているはずだった。
だが、二人がのぞいたときは、眼を閉じ、歯を軋らせて、快楽にのたうっていたのである。
そのくせ、ちゃんと、小万が来ていることを知っていたのだ。
出ようとしたまま、二人は立ち止まった。
不動金縛りのように、釘付けになった思いだった。
「小万さん、親分に用かえ」
と、かみさんは言う。
「え、ええ……でも」
小万のほうがあわてている。
「また、あらためて……」
「用があるんだろ、だったら、こっちへ来ても駄目だと……あ、いい、いい……」
こちらに話しながら、まだ男にまたがっているのだ。
殆ど上半身は全裸になったまま、悶えるように身をくねらしている。
小万の額や小鼻のわきに、汗が浮かんでいる。
「あの人ったら、女の品定めなんていってさあ」
「……」
「勝手なことばかりやっているから、こっちでもやってやるんだ、どうだえ、この子、ちょ

っと、いい男だろ」
「え、ええ……あの、また来ます」
「親方なら、あっちだよ」
「――あっち？」
「蛇骨長屋にゆきな、菊のところだ。あそこにいるよ」
「はい、有難うさん」
礼もそこそこに、二人は、裏口から出た。
路地に出てから、ふーっと、息をついた。
「大変なところを見ちまったねえ」
小万の眼は潤んでいる。
真っ昼間から、男女の赤裸々な交情を見てしまったのだ。
いくら色に狎れた芸者でも、小万にはやはり刺激が強すぎたようである。
「悪いところに行きあたってしまったようだねえ」
路地へ出てからも、小万の動悸はおさまらない。
「ああ、おどろいた」
「あんなところを見たのは、はじめてかえ」
「はじめてじゃありません、でも、まさか、あのおかみさんが」
何しろ、雷の与兵衛の女房が、若い男を引き込んでの情事だから、意外性だけでも、驚か

されるのに充分だった。
その上、
「おかみさん、見られても平気なんだねえ。あたしゃ、とっても……」
「平気どころじゃねえぜ。あのおかみ、見られたいくちじゃねえのか」
「そうかしら」
「見られると、かえって昂奮するのさ。あんな女は、見てやると嬉しがるものさ」
「へえ、そうかしら、呆れた」
小万の若さからは、一寸、想像出来ないようだ。
「へへっ、そんなことを言っているがね、堀ノ小万姐さんも、四、五年うちにはそのくちになるかもしれねえぜ」
「いやです。そんな」
と、また赧くなって、
「あたしゃ、好きな人と、誰の目もないところで、しっぽりと」
「そいつも悪かァねえがね」
と、金四郎は、小万を見た。
往来へ出てくると、小万の姿は眩しいほど、美しく見えた。
肌の色が透き通るほど滑らかな上に、上気した頬が、ぽっと、桜色になって、眼には、まだ潤みを残している。金四郎は、まるで、あいびき宿で楽しんで出て来たような、そんな気

持ちになった。
「なんですよう、ひとの顔をじろじろみてにやにやするなんて」
「ははは、あんまり、小万姐さんが綺麗なのでね」
「いやな金さん」
「まるで、いいことをしたあとみたいだぜ」
「それがほんとならいいけど」
「おい、本気にするぜ」
金四郎は、小万を抱きたくなった。
だが、いまはそんなことをいっている場合ではない。
お仙を探さなければならないのだ。
蛇骨長屋は、すぐそこだった。浅草寺の境内の外側で、そのあたり、一帯が貧しい者たちの長屋がごちゃごちゃに建っていて、昼間から、路地は陽がささずいつもぬかるんでいて、溝の饐えたような臭気に満ちていた。この一角は、司直の手も入らない。路地から路地で真っ昼間から博奕をしたり、男女がからみあったり、かと思うと路で寝ている男もいる。よく見ると死んでいる、などということも日常だった。
路地を通りながらでも、半裸の男女が抱きあっているのが見えるのである。
人の好みはいろいろだ。性行為を見られても平気な者もいる。見られたほうが一層、昂奮するという者もいるが、見られると、立つものも立たない、というのが一般的だろう。

もっとも、この凄まじいスラム街では世間の常識は通らない。一般的でないのが、ここの通り相場なのだ。

まず、世間の常識からいえば、ここは犯罪者の巣だった。

犯罪といっても、小さなかっぱらい、置き引きから、スリ、窃盗、恐喝、強盗、あらゆる犯罪者が巣喰っている。

蛇骨長屋というのは、どういう意味なのか、蛇の骨とは言い得て妙である。俗称だが、ちゃんと江戸絵地図にも記されているのだから、知られていたのであろう。二人が歩いてゆくと、好奇の眼がむけられた。

「なんでえ、あの野郎は」

「野郎も女郎も、見なれねえやつだ」

「見なれなくても、女はいいやな、芸者だろう」

「芸者かあ、たまらねえな、こんなところに来るなんて、滅多にあるもんじゃねえ」

「ゴミ溜めに天女が舞い降りたようなものだ」

「ああ、いい匂いだ」

「うふッ、たまらねえ」

傍へ寄って、くんくん犬のように匂いを嗅ぐ。どこまでもついてくる。金四郎は、小万を庇うようにして歩いていたが、

「うるせえな」

と、ときどき睨みをきかした。

この辺の輩の扱いは難しい。あまり喧嘩腰になってもいけないし、恐れてもつけ上がらせる。

喧嘩となれば、何十人という連中に取り囲まれてしまう。

何しろ、かれらのシマだった。現代的にいうなら、一種の治外法権的なものがあるのだ。まともでない連中の巣に入って来たのだから、その辺を巧みにやらないと、

(生きて出られなくなるかもしれねえ)

と、緊張した。

金四郎一人なら、どうにかなるが、小万という足手まといを連れている。

いや、ただの足手まといではない。この巣窟の男という男が、涎を垂らし、舌舐めずりしているのだ。

もしも、何かあったら、小万の肌は、数十人の男たちに輪姦されてしまうだろう。

小万はさすがに蒼ざめている。後悔していることは明らかだった。

ぽんぽんと、向こうッ気の強い、お俠(きゃん)な気性だが、いざとなると、やはり弱い女なのだ。

「菊ってのは、誰だ」

「知りませんよ」

小万は顫えている。

しかたがなかった。金四郎が一軒の家で聞くと、

「あたしのことかえ」
と、奥から、中年の女の声がした。
運がよかった。まさか、こんなに数多い家の中で、その家に声をかけようとは。
偶然ということもあるものだ。
「お菊はあたしだよ、なにか用かえ」
と、中年の女が顔をだした。
奈良半晒の襦袢だけきて、下は腰巻きという、浅ましい格好だが、こんな姿も、このスラム街では、珍しくない。
襦袢の衿がはだけて双の乳房が丸見えになっているのを、隠そうともしない。
「おや、いい男だねえ。こんないい男に訪ねて来られるなんて、あたしゃ果報者さね、お前さんは？」
「おれか、そうよな、金の字だ」
「金の字」
お菊は妙な顔をした。
こんなところで、ちゃんと姓名を名乗ることはないから、金四郎は突っ撥ねた。
「金さんと呼んでくれ」
「ああそうかえ、じゃァ金さん、あたしに惚れて訪ねて来たんじゃないだろうが……」
「ああ、惚れた女はここにいる」

ついでに金四郎は小万を振り返った。
こういう仲だと知らせていた方が、小万に対して悪心を起こさないだろうと咄嗟に考えたのだ。
「へえ、芸者衆かえ」
お菊は一瞥した。
「お菊さんに聞きてえな、雷の与兵衛を探しているんだが」
その声が聞こえたらしい。
「おれのことか」
声のした方を金四郎がのぞくと、ひんまがった簾（すだれ）のかげから、五十がらみのいかつい顔をした男がのぞいた。
片肌脱ぎになって、何やら白いものをいじっている。
どうやら、それは人間の肌——女らしい。それも若い感じだ。
「あら、雷の親方」
と、小万が金四郎のうしろから顔を出して、
「あたしですよ、堀ノ小万ですよ」
「小万か、何しに来た」
「あら、お取り込み中かしら」
「そうだ、品物を見ているところだ。そこで酒でも飲んでいきねえ」

と言ったきり、また、女の上にかがみこんでいる。
女といっても、少女だった。
十二、三というところだろう。
素っ裸にして、その肌を撫でまわし、下肢を押しひろげ、蕾をひらいて中をのぞきこんでいるだ。
少女は羞ずかしげに、身をくねらしている。
泣き叫んだりしないのは、納得済みなのだろう。
「ねえ、親方、一寸、聞きたいんだけど……」
「忙しいんだ」
「そりゃわかっているけど、人を探しているんです、お仙てひと知らないかえ」
「お仙だって、お仙なら五人くらい知っているぜ、どんな女だ」
雷の与兵衛が、顔をあげてこう言ったのは、少女のからだを隅々まで調べあげたあとだった。
たがめつ、すがめつ少女のからだを調べたのだ。
「売り物だからな、傷があっちゃいけねえ」
傷とは、腫れ物とか、欠陥のことをいうらしい。
うつ伏せにして、尻を持ちあげ肛門まで調べている。
「菊座のしまりはいいな、お菊の菊とは大違いだ」

などと呟いたり、また仰向けにして今度は、恥毛のまだ生えていない、つるりとした丘を、掌ですっぽりおさめるようにして、それから、その部分を、ゆっくりと舐めまわした。
「この分じゃ、まだ生えねえな」
という。
「毛が生えたら、値は安くなる。この年ごろじゃ、いつ生え出すかわからねえのだ。こうやって舐めてみるとな、二、三日で生えるやつは、もう、下で、芽が息をしてやがる」
「……」
「むかしな、えらいしくじりをしたことがあったんだ。生えてない娘なら十両出すという隠居がいてな、そこで、ちゃんと、よく見た上で、一日経って連れていった。そうするとおめえ……」
夜になって、隠居が少女を裸にしていじりまわしたが、なんと、恥毛が少しだが生えていた、という。
「十両は返さなきゃならねえし、その上瞞した罰だと、二両ふんだくられた」
「へえ、親方がそんな金を出したんですかえ」
お菊が呆れたように見た。
雷の与兵衛といえば浅草では知られた女衒だ。
これほどの男が、素直に違約金など出すはずがない、と思ったのか。
「ああ、いまのおれなら出しゃしねえさ。だが、あのころはな。何しろ、商売だ。話に嘘が

あっちゃ、あとの商売がやり辛くなる。この世界は信用だけだからな」

なるほど、聞けば一理ある。

「金さんといったねえ、どうだえ、おめえも、舐めてみねえか」

と、与兵衛は少女のまるい白い丘をまだ撫でながら言った。

「いや、おいらは……」

「やったことねえのだろう、小万のように生えているのをいくら舐めても、女の方でヨガルだけさ」

「いやな親方」

小万はぽっと赧くなった。

「金さんには、まだ一度も、舐めて貰っちゃいませんよ」

「そうかね。やってみな、金さん。ただ舐めるだけでも、明日生えるのはわかるがね、こう歯をつかわずにな、上下の唇だけでぱくりぱくりと柔らかく、つまむようにしてみるんだ、そうすると、三日先に生えるやつまで、わかるぜ」

「ひょっとすると、金さんの捜しているお仙てェ女は、猿若町の芝居茶屋にいるやつじゃねえか」

と、雷の与兵衛は言った。

いまは、その言葉を信じるより、ほかにあてはない。

徒労だったとしても、芝居町を捜すしかない。

二人は礼を言って、猿若町に行くことにした。

明暦の大火で、日本橋界隈もすっかり焼けたあと、吉原遊廓は、この浅草田圃に土地を拝領して移転して来た。

新吉原というのは、そこから来た名称だ。北里とか、北廓とか、いずれも、江戸の北郊という意味でつけられたのだ。

遊廓と同じく芝居も、長い間、下町で繁昌して来たが、これも浅草へ移されて来た。

それだけ江戸の町が発展したせいもある。

たとえば江戸草創期に、浅草田圃に遊廓や芝居があっても、これだけの繁昌はのぞめなかったであろう。

二人が猿若町へきたときは、しかし、すでに日が暮れていた。

「しかたがねえな、出直しか」

と、金四郎はやれやれ、という口調になっている。

考えてみれば、一日中大変だった。

「ねえ、若様、堀へお出でな」

と、小万が誘った。

「うちなら、ゆっくり出来るじゃないか。いまから深川へ帰って出直すなんて大変だよ」

「そりゃそうだ、じゃァ厄介になるか」

「まあ、嬉しい！」
小万は飛び上がらんばかりだ。
「だが、うるせえ女将か何かいるんじゃねえのか」
「バカね、これでも、小万は自前で出ていますのさ」
「そうかい、そいつァ助かった」
今戸の山谷堀にやってくると、待乳山下の聖天町、今戸町と、船宿が並んでいて、芸者の置家や、しもた家が山際にあって、船宿のさんざめきが、大した賑わいを見せている。
船宿といっても、釣りのための船宿は、もう少なくて、大半が芸者の入る料亭であった。吉原遊廓で揚屋だ何だと、面倒くさい格式のある花魁を有難がるよりは、よっぽど安く遊べて面白い、というので、この山谷堀の色街がどんどん大きくなっていったのだ。
町芸者でも、柳橋はもっとも早く料亭化したので、威張っているし、深川はれいの羽織芸者。
そこへゆくと堀の芸者は気どりがなくて、羽目をはずして遊ぶという評判だった。柳橋や深川から、猪牙や屋形船を仕立てて、この堀へくりこんでくるというくらいだから随分、盛んだった。
「うちは小さいけれど、誰の気がねもしないで済むんですよ」
小万は金四郎を招じると、
「若様！」

といって、抱きついてきた。
金四郎は、狼狽したが、しかし、ここで据え膳を拒むような男ではない。
「何年ぶりだえ」
と言いながら口を吸った。その右手は前裾をかきわけて、股間に入っている。
もうじっとりと濡れていた。
一刻も前から、あちこち、男女の赤裸々な姿を見たのだから、しかたはない。
金四郎はゆっくりと指を入れながら、
「帯は解かないのかえ」
「ええ、このまま、お願い！」
小万はあえいでいる。火のような熱い息で、眼はもう虚ろになっている。
金四郎も勃起するのを感じた。
かれは小万のからだをうつ伏せにすると、裾をまくりあげた。
その間も待てないように、小万は下半身をうごめかせているのだ。
ぱっと、裾をまくりあげると、真っ白な尻が目の前にあらわれた。
肌の美しさが若さを誇っているような、思わず、頬ずりしたくなるほどだった。
（まだ、思ったほど、弄ばれちゃいねえようだ）
汚点一つない白い肌は、まるで白磁のような素晴らしさだった。
美しいといっても、よくみれば、大抵一つや二つは、蚤の食い痕や、汚点があったり、黒

子があったりするものだが、小万の尻は、ほんとうに難癖のつけようのないものだった。
金四郎は、わざと、ゆっくりとその丸みの肌を掌で撫でた。
それが一層、小万の欲情を煽ったようである。
前ではなく、後背位というかたには不安がある。
犯される不安は、受動的に出来ている女体には、たまらない刺戟なのだ。
その撫でた掌を、谷間のわれ目にすべりこませると、生温かい泉のあふれるのがはっきりとわかる。
「ああ、若様……」
もう、それだけで、いったようにへなへなと、小万は崩れそうだった。
金四郎はその尻を抱えるようにして、
「筒井筒の、か……あの土蔵の中を思いだすぜ」
と、挿入していった。
「あ……」
小万のからだが大きく悶えて、ずるっと、膝がすべった。
両手でしっかり抱えながら、金四郎はさらに奥深く、納めた。
中からあふれるものが、かなりせばめの柔襞の中で、潤いとなって、二人の結合を助けている。
「——いいぜ、小万」

金四郎は、背中にかぶさるようにして囁いた。
「こ、小万」
「若様……あ、もっと！」
たぎるような叫びが、小万の唇から奔った。

お色気という日本語は、欧米語に訳すのは非常に難しい。難しいというより不可能といっていい。もっとも日本的な情緒である。
ハダカになりさえすりゃいい、という欧米人には、この情緒を理解する基礎的な生活がない。
白い脛、まつわりつく赤い蹴出しのちらちらが、男心を刺戟するといっても、わからないし、したがって、コブ巻きや孔雀という陰語の持つ妖美の感覚に至っては、解せよというほうが無理であろう。
そこには、日本的着物の美と、白い肌とタタミという条件がなければならないからだ。
日焼けした黒い肌では、食欲が起こらない。鮫肌ではげんなりする。
白い、なめらかで、そしてふくよかな肉づき、その柔らかさが、男をふるい立たせるのである。
「あたしの家にお出でなさいましな、若様」
と、小万に誘われたときから、金四郎は今夜のことは、察していた。

そこは憎からぬ思いの男と女だ。自ら意は通じている。
だが、こうしたかたちになろうとは、金四郎は思いがけなかった。
散々、生々しい情交場面を見せつけられていたから女の方は濡れているだろうとは思っていたが、家へ入るなりの、小万の発情だったのだ。
うつ伏せにして、芸者の裾をぱーっとめくるなどという行為には、合意の上でも、なお、男の征服欲を満足させるものがある。
女が尻を剝きだしにして、顔を横にむけて、目を閉じて、犯される喜びと不安に戦(おのの)いているくらい、男の性的満足に媚びるものはない。
したがって、珍しく金四郎は果てるのが早かった。
小万の秘所も、芸者という職業からにしては、それほど荒れてはいなかった。まだ若いせいもある。一本になって間もなくだったからか。
二度、放ったあとで、金四郎は、ゆっくりと、そこを行燈の明かりで見た。
「あらいやだ」
と、小菊紙で丹念に拭きとったあと、小万は、浄めの水をつかってから、
「こんなこと、ほかには、誰にもさせたことがないのよ」
と、言った。
「おいらだけかえ。喜ばせるねえ」
と、金四郎は、指でゆっくりとひらきながら、行燈を引きよせる。

それは、幼いときの、あの土蔵の中と同じだった。
うす桃色の柔襞は、金四郎の指がふれただけで、またじっとりと潤んでくるのだ。
「こうやっているところに、邪魔が入ったんだな、あのときは……」
と、言ったのに応えるように、
「こんばんは、姐さんいるかえ」
と、男の声がした。
金四郎と小万は、思わず顔を見合わした。
(来やがった)
(何かしら、いまごろ)
(とんだ恋路の邪魔よ)
(お座敷じゃないかしら……)
しかたなく、裾をあわせて小万は障子際までいって、顔を出した。
やはりお座敷がかかったのだ。「松葉屋」からだという。
「病気だといっておくんなさいよ」
小万は素早く、おひねりを手渡した。
「へえ、どこが悪いので」
「気の利かない人だねえ、頭が痛くってお腹が痛いのさ」
「それだけで？」

「馬鹿！　手が痛くって撥も持てないのさ、それから足が痛くて、踊れやしない」
「へえ、そう言っときますぜ」
おひねりを、袂に入れて、男衆は、一たん外へ出たが、また格子戸をがらっと開けて、
「たんとお楽しみを」
「馬鹿」
小万はそれでも嬉しそうに、金四郎のところに戻って来た。
「帰ったか」
「帰しましたよ」
「腹が痛いのか」
「聞いていたのかえ」
「聞くも聞かねえもねえさ、筒抜けじゃねえか」
「そうだったえ。若様、抱いておくんなさい」
「またかえ、もう二度も……」
「あら、三度だっていいじゃないのさ。とんだ邪魔が入ったのだもの」
今度は小万のほうから、金四郎の股間に手を差し入れて来た。
大胆につかんでいる。
「驚かすなよ」
「あら、もう大きくなっている」

「お前の手だからさ」
「ほんとうかえ」
「ああ、ほかの女の手じゃ、こうはならねえさ」
「にくいわ、若様。そのお口で、どれだけ、女を泣かせたか」
「止しねえ、憚りながら女を泣かせたことはねえよ」
「じゃァ、泣かされた？」
「そうとも、惚れちゃ振られ、惚れちゃ振られで、いまは、深川の金さんになっちまったじゃねえか」
「そういえば、聞きたいと思っていたのさ、若様が、どうして」
「どうしてかねえ」
そんなことはどうでもいいじゃねえかと、金四郎は、女の腰を引き寄せた。

翌日、二人は、猿若町へ出かけている。
「急ぎましょうよ、松葉屋さんに見つかると……」
「昨夜の仮病がばれちまうか」
山谷堀から猿若町は、すぐである。待乳山をめぐって聖天町。その向こうが猿若町の芝居町になる。
お仙は芝居茶屋で働いているという。

芝居茶屋のお仙、と聞くとすぐにわかった。
「お仙さんなら、小菊茶屋だぜ」
その茶屋には、しかし、お仙はいなかった。
「どちらさんだえ」
と、女将が顔を出した。
「お仙に会いたいのだがね、遠山といってくれりゃわかるが」
「遠山さま。あっ、お屋敷からですか。さっきも馬道の親分が来ましたよ」
「馬道の？　誰だえ」
金四郎は眉をひそめた。
「おや、知らないんですか、権蔵親分ですよ」
「馬道の権蔵？」
金四郎は事実知らないのだ。
なおも聞きかえそうとすると、小万が目くばせしているのに気がついた。
「あっ、知っているとも」
「そうでしょ、遠山さまからの何か仕事だとか言ってましたから」
金四郎は礼を言って、歩きだした。
暫くいってから、
「馬道の権蔵とかいったな」

「知ってますよ、嫌なやつでねえ、堀じゃァ鼻っつまみですよ」
「――そいつは、子分を持っているのか」
金四郎は首をひねりながら、何か考えている。
「ええ、いつでも五、六人は、お供にしていますよ。それに、ちょっと声をかければ、十人、二十人は集まるのではないかしら」
「読めた、そいつらだ」
金四郎は大きな声を出した。
土蔵でかれを焼き殺そうとした男たちは馬道の権蔵の身内に違いなかった。
お仙との関りからいっても、間違いない。
〝遠山〟と名乗ったら、小菊の女将は、お屋敷から、といった。
町人の格好をしている金四郎が、遠山家の次男だと気がつくはずはない。
これは、お仙と馬道の権蔵が、遠山家と関りがあることを物語ってはいないだろうか。
「うむ、どうやら、根は深いぜ」
と、金四郎は立ち止まった。
「どういうことなんですか、若様」
小万が心配そうにのぞきこんだ。
家のこととなると、金四郎の口から、明らかには話せない。相手は芸者なのだ。
「いや、おいらの生命を狙ったやつがわかって来たということだ」

「どういうことなんです、聞かせて下さいな」
「いや、お前は、知らない方がいいだろう」
「あら、水くさい。若様とはもう他人じゃないんだから」
そういわれれば、ただの芸者扱いは出来ない。客と芸者の間ではない。筒井筒の幼馴染みの上に、肌を交わした仲だ。
大体、武士というものは、家庭内のことをペラペラ饒舌らない。
そういう者は軽薄な性質として、侮蔑されるし、信頼されないのだ。
遠山金四郎も、屋敷を飛び出して市井の陋巷に住み、無頼な生活をしていると、段々武士の性根が失われてゆくような気がしていた。
（これでいいのだ）
という気がある。
（おいらァ武士を捨てたんだ）
そのため、敢て無頼のなかまに入って飲み打つ買うの、放蕩に身を持ち崩している。
自ら、この陋巷の生活に甘んじている金四郎にしてみれば、いま、兇刃に襲われるおぼえはない。
「――どうやら、おいらは、邪魔者らしいな。生かしちゃおけねえらしい」
「……」
「お前だから話すのだが、おいらに兄者がいることは知っているだろう」

「ええ、聞いてます」
「変なものさ、兄貴は養子だ。親父は、いつまでも子が生まれねえので、養子を貰った。家督のことが心配だったのだな。兄貴にしてみりゃ、遠山の家を嗣ぐために養子に来た。家督は約束済みだ」
「……」
「そこへ、変な野郎が生まれた。こっちが実の子だから、兄貴にしてみりゃ、居心地が悪くならあ。だから、おいらァ飛び出したんだ」
「まあ……若様、思いやりがあるんですねえ」
「なあに、旗本家の鹿爪らしい暮らしがいやになったというほうが本当だ」
そんな金四郎の気持ちを、義兄のほうでは理解しようとしないのか。
「馬道の親方とか、お仙とか、みんな知らない連中だ。こいつらが、おいらを殺そうとしたのは、誰かにそそのかされたというわけだ」
「誰かって……」
それは遠山家にほかならない。
金四郎は黙りこんだ。
誰が企んだことか。まさか、父の景晋ではあるまい。
（兄だ！）
義兄の景善が派遣して来たのか。

（なぜだ？）

すでに金四郎は、町人になっている。

いまさら、兄の家督の邪魔をする気はない。

遠山家では、金四郎の立場は、廃嫡されたにひとしいものだ。

兄に憎まれたり、怨まれたりすることはないはずであった。

「やっぱりお仙のやつを捕らえて、吐かせなければな」

「あの小菊茶屋に戻ってくるかしら」

「さあ、どうかな。おいらが乗りこんだと聞いたら、二度と姿を見せねえかもしれねえ」

金四郎は考えこんだ。

茶屋おんなのお仙は身軽だから、姿を隠すのは容易だろう。

だが、仮にも親分といわれて身内を抱えている馬道の権蔵は、そういうわけにはいかない。

「小万、お前に頼みがある」

金四郎は考えたすえに言った。

「はい、若様のことなら、何でもいたしますよ」

「言い難いことだ。せっかく、堀で一本になったお前を、こんなことに引き込みたくはないが……」

「いいんですよ、若様のためなら、どんなことだって……いのちを賭けてもよござんす。堀ノ小万がはじめて惚れた男だから」

「照れくさいぜ、そこまで言われちゃァどんな面をしていていいかわからなくならァ」

「いいんですよ。若様はそのままで、惚れたのはこっちの勝手。堀の芸者の心意気を受けておくんなさいましな」

「そこまで言うのなら、頼むぜ。実ァ、権蔵をおびき出して貰いてェのだ」

「あら、そんなことだったら、お安い御用ですよ。あの馬蔵は、あたしに気があるのだから」

「権蔵だ」

「ええ、馬道なんで、馬蔵とかけて呼んでいいんです、顔が長いせいかしら、あの馬鹿、いい気になって、おれのモノは馬並みだなんていって、いやらしいったらありゃしない」

「そうかい、おいらのは並みだから」

「あれ、そんな意味じゃありませんよ。あたしにゃ、若様のは大きすぎるくらい……」

思いだしたのか小万は赧くなって、

「自分で馬並みなんて言っているやつは、大きいのはいないんじゃないかしら。あんなやつ、馬だって牛だって、関りありませんのさ。死んだって、あんなやつとは」

「――おびき出すとすれば、どこがいいかだ」

様子を聞いてみると、権蔵は何んの用があるのか毎日のように、隅田川を渡って、本所のほうへゆくという。

「きっと、妾でも囲っているんじゃないかね」

と、教えてくれた料亭「弥五七」の板前がにたりと反ッ歯を剝きだして、
「うちには、えらい気の強い山の神がいるからね。あれで女房には、頭が上がらないのさ」
その時刻はたいてい昼刻だという。
金四郎は小万の口利きで、屋形船を借りると、今戸橋の下で待つことにした。金四郎は船頭に化けて、頬かむりをし腰きりの法被で、匕首だけを呑んだ。
もう一人の船頭は玄人だが、金四郎の頼みを面白がって、あっしもあの馬蔵は大嫌いだ。大川へほうりこんでやりてえくらいで、と言った。以前、権蔵の賭場でイカサマにかかり、六両ばかり儲けたのが、スッテンテンにされたという。
かれらが待っているとも知らず、権蔵は子分を三人連れてやってきた。屋形の障子が開け放されて、タバコを喫っている小万の姿が見えた。

泣き千鳥

「小万、待たせたな」
と、子分の一人が声をかけた。
「あら……」

小万ははじめて気がついたように振りかえって、
「馬道の親分さんは」
「来なすったぜ、おいらと、三助と由公がお供だ」
「冗談じゃありませんよ。あたしゃ、親分だけに……」
ぐらりと、屋形船が揺れた。
「嬉しいことを言うじゃねえか、小万。おいらァ、この年齢になるまで、芸者衆に誘われたことァねえ。天気もよし、今日は、なんと嬉しい恋の道行きだ」
「お供は要りませんのさ」
と、小万は眉をしかめた。
馬道の権蔵一人なら、金四郎が斬り合いになっても大丈夫とは思うが、子分が三人もついていては、一人で四人を相手にすることになる。
「ねえ、親分、こいつらを帰しておくんなさいよ」
と、小万は、肩をすり寄せるようにして、
「邪魔者は消えて貰いたいよう」
「ははは、おい、野郎ども。邪魔だとよ消えな」
権蔵はほたほたした顔で、顎をしゃくった。
「消えろって、親分……わっちらは、姐さんの言いつけで、離れるわけにゃいかねえので」
「そうなんでさ。堀ノ小万さんから、大事な人がある、会わせたい人があるなんてェ使いが

来ちゃ、姐さんとしても、平気じゃいられませんからね」
「ちぇっ、この野郎、ともかく、屋形からおりな」
三人の子分たちは顔を見合わせ、何やらこそこそ相談していたが、
「よござんす。ここからおりりゃいいんですね。仰せの通りにしまさ」
子分がおりるのを待っていたように小万は、
「船頭さん、やっておくれな」
と、声をかけた。
「へえ」
ぼそっと答えて、身を起こしたのは、船頭に化けた金四郎である。
もやい綱を解いて、竿で、とんと岸を突く。屋形船はゆらりと揺れて、たぶたぶと、水音を立てながら、雁木から離れてゆく。
「やれやれ、これで二人きりだな」
権蔵は、もうすっかり色男気取りになっている。
屋形船の中には、台の物が用意してあり徳利や盃が目についた。
「姐さん、一つ酌をして貰おうかい、照れくさくていけねえな」
「あら、何も照れくさいことはありませんよ」
「だって、おめえ、こんな屋形で、男と女が、それも、きれいな芸者衆と二人きりとなりゃ、ひっひっひ」

「二人きりじゃありません、船頭さんがいるじゃないか」
「船頭なんか、案山子と同じだ」
案山子といわれ、金四郎は、ふっと振り向こうとした。
小万があわてて、
「あら、そりゃァ酷いじゃありませんか、船に乗ったら、船頭まかせ、竿の使い方一つで、ひっくり返すことだって」
「なァに、やい船頭、静かに漕ぎな。ここに乗っているのは、浅草一の渡世人だ。いいな、馬道の権蔵さまと、堀ノ小万姐さんだ。有難く思って、ゆっくり漕ぐんだ」
「へえ、静かにねえ」
船頭は向こうをむいたまま、答えた。
揶揄するような調子である。
「ああ、下手に揺らしやがると、重石をつけて、大川へ叩きこむぞ」
権蔵は、威してから、小万に手を伸ばした。
「お前から誘ってくれるとは、今日はツイてらあ、なんてえ、佳い日なんだろう」
「そうかしら」
と、小万はちらちら、船頭の方をむいている。
「おい、障子を閉めなよ」
「でも」

小万は、早く金四郎が正体をあらわして、やっつけてくれないかと、はらはらしている。ところが、金四郎の方は、邪魔な子分たちが、別の小舟で、あとを跟けてくるので、どうしようかと思案しているのだ。

竿から櫓に代えてから、ゆっくりと謡いだした。

〽人買船は
　沖々漕ぐ
　都から漕げや
　船頭どの……

哀愁をおびたいい唄である。いい声であった。小万はうっとりとなった。

ちぇっと、権蔵は聞こえよがしに舌打ちして、

「何が、人買船だ。せっかく、いい思いをしようというのに、陰気な唄を唄いやがって。やい、船頭、いまどき、そんな古臭い唄は流行らねえぞ」

「そうですかね」

「あっ、チョボクレでもやりやァがれ」

「かっぽれにするかね」

「なんだと！」

「いっそ、お前さんが、この舟ン中でかっぽれを踊ったらどうだ。そうすりゃ大川の魚が喜ぶぜ」

「な、なんだと、この野郎、船頭のくせに大口たたきやがって」

「悪いか」

「う！　こいつ、おれさまを誰だと」

「馬道の馬蔵だろう」

「野郎！」

権蔵は、ぱっと、長脇差をつかんだ。

が、さすがに屋形船の中では抜刀できない。

「ぶ、ぶっ斬ってやる」

と、喚いた。

そのとき、船頭は、はじめて顔を見せた。

「権蔵、地獄から帰って来たぜ。たっぷり礼をさせて貰おう」

馬道の権蔵はぎょっとして、眼を見張った。

「あっ、うぬは……」

「遠山の金四郎でござんす」

はらりと豆絞りの手拭いをとった金四郎である。

屋形の内へ、ぬっと顔を突きこんで、にやりと笑った。

「土蔵の中で、すんでのことに蒸し焼きになるところだったがね、どうやら悪運が強いらしい」

「う、うぬ、どうして、ここへ……」
「どうしてだかね。そいつァ、大川のうろ屑になってから、とっくりと考えることだ」
「くそ！　この野郎」
権蔵は、あわてて、障子の外へ——身を乗り出そうとしたのは、十数間おくれて小舟で跟けてくる子分たちを呼ぼうとしたのだろう。
「うるせえ」
ぱっと、金四郎の手から、匕首が飛んだ。
ぶっすりと、権蔵の右手を舷側に釘付けにしている。
「痛う！」
「喚くんじゃねえ、魚に悪いぜ、せっかく魚は昼寝しているところだ。人間さまは人間さま同士、話をつけようじゃねえか」
「こ、この……」
長脇差に手を伸ばそうとしたが、素早く、小万がとって、金四郎の方へ。
「有難うさん、姐さん、気が利くなあ」
金四郎は、長脇差を受けとると、すらりと抜いた。
「ふうん、備前モノ、大したものじゃねえが、二、三度、鋸引きにすりゃ、首くらい斬れるだろう」
「助けてくれ」

権蔵は押し潰されたような声をあげた。
「ひとを殺そうとしたくせに、助けてくれもないものだ。どうやって殺そうかと考えているところだ。やい、馬蔵、どっちがいい」
「どっちだって？」
「刀で押し切りに生首にするか、それとも、ぶっ喰わして、大川へ叩き込むか、だ。水雑炊も悪かァあるめえ」
「御免だ、どっちも御免だ」
「この野郎、それじゃ、あの土蔵にゆくか。おれの代わりに、あそこで、蒸し焼きになってはどうだ。なんなら、おいらが火をつけてやるぜ」
「勘弁してくんねえ、おれがやったんじゃねえのだ」
「わかっている、うぬの子分だ」
「……」
「おれを殺すように、指図したのだな。やい」
「あ、ああ……」
「よかろう。正直者だ。な、馬蔵の。ついでに、全部、吐きな。誰に頼まれたのだ」
「……」
「はっきりいいな、いわなきゃ、水雑炊だ。ぼらや白魚がさぞ驚くだろうぜ」
その間に、うしろの小舟では、漸く異変を感じたらしい。

「おい、おかしいぜ」
「どうした」
「屋形船が動かねえ、いやさ、流されているじゃねえか」
「そうだ、あれっ、船頭がいねえ」
「中へ入ったんだ」
「船頭が屋形の中へ入ってどうする」
「どうするといっても、入ったんだ、親分が危ねえ、早くあいつへ寄せろ」
小舟だけに足は早い。川中で揺れている屋形船に近づいた。
船頭の櫓さばきが下手なのか、子分たちが騒ぎ過ぎたのか船先がどーんとぶつかった。
屋形船がぐらりと揺れた。
「親分！」
「親分!!」
呼びかけに応じたように、がらっと、障子が開いた。
「あっ!?」
子分たちは瞠目した。金四郎の顔がそこにあった。
「地獄から還ってきたぜ」
金四郎はにやりとした。
「おれを焼き殺そうとしたのは、うぬらだな」

と、子分たちを見まわした。
その手には、長脇差がある。
「あのときの礼をしてやるぜ」
「畜生！　野郎め」
「親分……」
その親分権蔵は、首ねっこを圧えられて、呻いているだけだ。
「さあ、どっちから料理するか、まず、馬蔵からにするか」
と、白刃を権蔵の襟くびに当てて、
「ナマクラでも、百回も挽きゃ切れるだろう、さあ、どうする」
「助けてくれ、一生、恩に被る……」
「ほう、味なことをいうぜ、じゃ子分どもをこっちの船へ呼びな」
「へえ、へえ、やい、牛六、三助、由公、こっちへ、移るんだ」
子分たちは、顔を見合わした。
金四郎の言いなりになっている親分の言いつけだから、拒むわけにもいかない。愚図愚図していると、金四郎が、
「聞こえねえようだぜ、もっと大きな声を出しな。おっと、手が滑った」
と、刀を、一寸動かした。
白刃が襟くびをしゅっと切った。ひえッと殺されるような悲鳴をあげて、

「や、野郎ども、早くしねえか、首が、首が……」
「そうだ、遅れると、段々、切れてゆくぜ、やれやれ、血だらけだ」
金四郎は笑いながら、
「大川の水がこいつの汚ねえ血でよごれて白魚が迷惑だとよ。蔵前のアサリも食えなくなら
ア」
子分たちは、渋々、こちらの屋形船へ乗り移って来た。
牛六と呼ばれたのが哥兄分らしく獰猛な面がまえだったが、さっと脇差を抜くや、金四郎に斬りつけた。
チャリン！　と冴えた音がした。
瞬時に金四郎が、小手返しに、刀を撥ね上げたのだ。
白刃は牛六の手を離れて、屋形船の上に高々と舞い上がっている。
が、申し合わせたように、三助が、匕首を抜いて突っこんで来た。これは殆ど同時といってよかった。
金四郎は身を外らすや、夢中で、横に振っている。
ざくっと、胸を薙ぎ払っていた。
しゃーっと、鮮血が飛沫だ。咄嗟に顔をそむけたが、金四郎の横顔から左肩に、返り血が飛び散った。
絶叫を噴いて、三助は大川の中に転落した。

残りの由公という男は、あわてて、背を見せた。
その背に血刀が走った。
「斬られた！」
激痛とともに、由公は悲鳴をあげた。
「安心しろい、峰打ちだ。深川の金さんはうしろから斬るような真似はしねえ」
と金四郎は哄笑した。
牛六は蒼くなって動けない。
三助は水面をばしゃばしゃやっていたが、力尽きたように、ずるずると溺れていった。
夥しい血が水面に浮き上がってきた。
「おい、おめえらも、土左衛門になりてえのか」
金四郎が一喝すると、牛六も由公も蛙にうずくまってしまい、権蔵のほうへ、ちらちら視線を投げながら、
「親分、こ、ここは、謝ったほうがよさそうだ」
「そういうことだぜ、馬蔵親分」
と、金四郎は刀の血のりを権蔵の袖できゅっきゅっと拭いながら、
「大川の上でよかったな。馬道でこんなところを見られたら、明日っから浅草じゃ住めなくなるだろうからな」
「もう勘弁しておくんねえ」

権蔵は精も根も尽きたように、
「お前さんが、こんなに強いとは知らなかった。二度と変なことはしねえから」
「ことわっておくぜ、こっちの姐さんにもだ」
「こ、小万にか」
「小万姐さんだ。堀で一番の売れっ妓だそうじゃねえか、子分どもにもちゃんと言っておけ。指一本触れやがったら、うぬの首がねえ」
「わかった」
「わかったじゃ駄目だ。証拠がいるなあ」
と、言ったかと思うと、権蔵の髷をつかんでざくっと切った。
「わっ、何を……」
元結が切れて、ザンバラ髪になった権蔵、
「助けてくれえ、これじゃ、表を歩けねえ」
「なあに、髪なら一年も経ちゃ元通りになる。二度と出来ねえ証拠というと、こいつか」
あっと思ったときは、長脇差が、ぱっと音を立て、権蔵の右手の小指が、飛び魚のようにはね飛んだ。
金四郎の目的は、芝居茶屋のお仙と権蔵に頼んで、かれを葛飾の空家に連れこみ、焼き殺そうと企んだ者の名前を判然とさせるにあった。断片的な証言から、およその想像はついているが、はっきりと、権蔵の口から言わせたかった。

子分たちは知っているだろうが、殺しを請負ったのは権蔵なのだ。髷と小指を切られて、権蔵は泣き声をあげている。
「ひでえ、ひでえ」
「何がひでえ、人を罠にかけて焼き殺すのと、どっちがひどい」
「そ、それは……」
「吐きやがれ、誰に頼まれた」
「……」
「吐かねえか」
「痛てえ、痛てえ」
「もう一本、指を貰おうか」
「堪忍してくれェ、おれは、お仙に頼まれたんだ、お仙が知っている」
「ああ、お仙から聞くさ。お前の口からも聞きてえ」
「知らねえ、痛てえ」
同じことの繰り返しだ。さすがに、馬道の権蔵である。この期に及んでも、まだ抵抗しているのだ。
「よかろう。こうなりゃ土左衛門になってしまうだけだ」
「え!?」
「どうせ饒舌らねえのなら、魚と同じだ。うろ屑になってもかまうめえ」

「な、なんだって」
「土左衛門と名を変えるか。うぬのことだ。これまでも何人、簀巻きにしてこの大川へ叩きこんだか、知れやしねえ、今日はいよいよ年貢の納め時だ。うぬの番だぜ」
というなり、金四郎は権蔵のえりがみをつかんで、
「やい、野郎ども、こいつに水雑炊をくらわせてやれ」
と、長脇差で、牛六と由公の尻を突いた。
「痛てッ、お、親分をそんな……」
「助けてくれ、おれは泳げねえのだ」
「魚に教えて貰うんだな。さあ、やれ」
また、尖先が、牛六の尻を刺した。
「うへっ、親分、許してくれろ」
牛六は由公に目くばせして、権蔵のからだを舷側から、外へ——
「うわッ、やめろ、やめろ」
髪を切られてザンバラ髪の上に、右手の小指からは血が噴きだしている。
権蔵はもう生きた心地はなかった。
二人の子分は、泣き喚く親分のからだを、どーんと、突き落としてしまった。
ばしゃっと、水飛沫が悲鳴を呑みこんだ。
「助けてくれえ、泳げねえんだ、殺生だ、殺生だ、助けてくれえ」

ばたばたと水を叩きながら泣き喚くのを見おろした金四郎。
「さあ、言いな、おれを消したいやつの名を言えば、命は助かるんだ」
「全部、話をするから助けてくれェ」
馬道の権蔵は漸く、すべてを話す気持ちになったようだ。
大川で土左衛門になるよりはマシだと気がついたのだろう。
「よかろう、おい、引き上げてやれ」
金四郎は、牛六の尻を白刃でひたひたと叩いた。
「へ、へえ。親分、つかまんなせえ」
牛六も由公もほっとして、竿を権蔵の方へ突きだした。
小指を失った手で、権蔵は竿にしがみついた。
ずぶ濡れて重くなった権蔵を引き上げてやると、もう息も絶え絶えになっている。
「さあ、吐いて貰おうか、おっと水を吐けってんじゃねえ、おれを殺せと命じたやつだ」
「……」
「野郎、舐めやがるな」
金四郎の我慢ももう限度だった。
かれは長脇差をふりあげた。
「うわっ、斬るな！　言う、言えばいいのだろう、お前さんを殺せって話を持って来たのは、遠山さまの、吉川幸太夫……」

「吉川が……」

金四郎は、用人の顔を思いだした。

権蔵が嘘を言っているのでないことは、芝居茶屋の女将の話と符節が合うことでもわかった。

「そうか、よく言った。約束通り、生命だけは助けてやる」

「あ、有難てェ」

「幾らで請負った？　おれを殺したら、幾らになる」

「へえ……面目ねえ」

「幾らだ」

「へえ、ご、五十両で」

「五十両だって、呆れたぜ、おいらの生命はそんなに安いのか」

「悪うござんしたねえ、この次から、百両にせり上げまさ」

「馬鹿野郎、この次だって、そう度々狙われてたまるものか」

金四郎は、がっかりしたように、腰をおろした。

「――若様……」

と、小万が声をかけたが、聞こえないもののように、待乳山のほうを眺めていた。

ややあって、権蔵、と視線を戻した。

「お前に五十両儲けさせてやる」

「え!?」

「おれを殺ったことにするがいい」

「へぇ……ですが、そいつは、すぐばれっちまいまさァ」

「なあに、おいらがそう言うんだ。案じるこたァねえ。吉川に、殺ったと言って五十両受けとるがいい」

「ようござんすかねえ、へへっ、お有難うさんで、なんなら、半分、割り戻しをいたしやす」

「そんな目腐れ金ァいらねえ。いいな、かまわねえから、屋敷に知らせろ、金四郎は間違いなく、向島で殺りましたと」

何を考えているのか、金四郎はこう言ってにやりとした。

翌朝のことである。

遠山屋敷の吉川幸太夫のもとに若い男がやってきた。

「馬道から参りました」

と、男は言った。

「馬道？」

「へえ、そうお告げ下さりゃ、吉川さまには、おわかりで」

「ふうん、そこで待ってろ」

中間は、うさんくさそうに男に顎をしゃくって入っていった。
やがて吉川幸太夫が出てきた。
「お前か、馬道からの使いは」
「へい、親分から、これをお届けしろと……」
と、袱紗包みを手渡した。
吉川は、頷いて、自分の部屋に戻ると周囲に人がいないのを見て、そっと開いた。
中に書状がある。糊づけしてある。剝がしてみると、簡単な文面だった。
——約束を果たしたから、品物を見に来てほしい、という意味のことがしたためられていた。
馬道の権蔵にしては達筆である。誰かに頼んだのであろう。
こういう文面だから、頼まれた方でも別段の不審もなく、筆を執ったのだろう。
(やったか)
吉川の面てに、ほっと、安堵の色が広がった。
かれは遠山家の〝三太夫〟である。
〝三太夫〟というのは、風呂屋の三助、というのと同じで、屋敷の用人などのことを言う俗称だ。
遠山家では、この老人が、すべて取りしきっている。
旗本屋敷には、こういう生き字引きのような老人が必要だった。故実典礼に詳しい。現代的にいうなら、冠婚葬祭や、日常の旗本生活のノウハウを知っていて、ソツなく、殿様の行動半径を間違いのないものにする。

旗本でも、お目見得以下の身分の低い者の場合は、大したことはないが、数千石ともなると、難しいことが多い。
階級社会で、一つ間違うと切腹ものだから、こういう生き字引きが必要で、殿様のほうが、引き廻されるということもある。
遠山家にとっては重宝な存在だった。
吉川幸太夫は、その小半刻ほど後に、屋敷を出て向島へ向かっていた。
かれが急いでゆく一丁ほどうしろから一人の男が尾行していたが、気がつかない。
ひどく急いでいる。
やってきたのは、向島の寺島村である。
ここは、れいの金四郎が焼き殺されそうになった空家の土蔵と、さして遠くはない。
近くに料理屋などが、ぽつんぽつんとある。
このあたりの料理屋は、美味をもとめる風流人と、女とあいびきに利用する者とのために繁昌しているのだ。
向島の料亭で有名なのは、竹屋ノ渡しの上がったところにある「平石」、寺島は秋葉山のてまえの「大七」、隣接の「武蔵屋」それに小梅の「小倉庵」などだ。
吉川幸太夫がいったのは、飛切稲荷のうしろの松林の中にある寮だった。

金持ちの隠居所かと見える瀟洒な造作である。水鶏の啼き声が聞こえる。
「吉川どのか」
若い男が顔を出した。
「三村、若様の案配はどうだ」
「はあ、それが……」
と、若侍は口ごもった。
吉川幸太夫は、眉根を曇らせて、上へあがった。
庭に面した座敷に一人の男が臥せていた。
枕元には、薬湯の入っているらしい瓶などが置いてあり、黄表紙なども数冊あるのは、病床の気ばらしであろう。
顔色も悪く、病床に就いてかなり長いようだ。年のころは三十前後に見えるが、病気のせいもあるだろう。
「――殺ったか」
吉川の顔を見るなり、かれは言った。
「は……如何でございますか、お具合は」
「ええい、おれのことより、あいつだ、斬ったか」
「はい」
と、幸太夫が頷くと、

「殺ったか、そうか、そうか、ほんとうに殺ったのだな」
昂奮して身を起こそうとし、がっくりとまた倒れた。
「若様！」
と、幸太夫が手を出した。
病人はこれを払いのけた。
「見たい、やつの生首を見たい」
「しかし、それは」
「持って来い、殺ったのであれば、まだ腐ってはおるまい」
「はァ、それは」
「持って来い、金四郎めの首を見ないうちは安心ならぬ」
「はい……」
この男が言いだしたら、言を飜さないことを幸太夫は知っている。
（やれやれと、執こいお方だ。そんなにまでせねばならないことか）
遠山金四郎の義兄の景善である。
（兄が弟を殺すなど、それだけでも尋常ではないのに）
と思うと、幸太夫は、うんざりしたような顔になる。
景善はもともと蒲柳の質であったが、今年になってから、急にからだが弱った。
病床に就くと、家督のことが心配になったのか、金四郎の暗殺を策して、馬道の権蔵に頼

んだらしい。

「あいつの生首を見ないうちは、死んでも死にきれぬ……」

「はい、かしこまりました。必ず、持参いたしまする」

やむなく幸太夫はそう答えて、退出するしかなかった。

(金四郎若君の首か……)

なぜ兄が弟を殺そうとするのか。

遠山景善は、伯父景好の次男で、金四郎の父景晋の養子嗣となっていたのである。

家督相続は景善と決まっている。

いまさら、弟を邪魔にする必要もないはずであった。

だが、景善にしてみれば、何か理由があるのかもしれない。

吉川幸太夫は、

「金四郎の首を見せろ」

と、病床の景善に要求されて、困った顔をした。

馬道の権蔵から、

(金四郎殺害)

は成功したと報告を受けている。

が、それだけで、死体は見ていないのだ。

生首の持って来ようはない。

が、病気になってから、ますます短気になっている景善は、すぐに怒鳴ったり刀をふりまわしたりする。

「かしこまりました……」

と、請け合うしかなかった。

幸太夫は馬道の権蔵の言葉を信じている。

人の生き死にのことだから、嘘を言うなどとは考えない。大金も動いていることだ。

かれは竹屋ノ渡しから渡し舟で浅草へ渡ると、浅草寺の奥山の茶屋に権蔵を呼びだした。

「首がいる」

と、切りだした。

「まだ腐ってはいまい。ある人に見せなければならんのだ」

「そうですかい、何とかいたしやしょう」

「首はどこにある」

「へえ、御安心なすって。実ァ、深川に置いてあるんで」

「深川？」

「へえ、寺裏でね。へえ、子分に案内させまさあ」

権蔵は、頬かむりで、髷のない頭を隠している。右手の小指も失って包帯していたし、ひどい格好だった。

その姿はどうしたのだと聞かれて、

「てこずりやしてね。あん畜生、首にするのはえらい骨折りましたぜ」
「五十両の約束だ。それ以上ビタ一文出せぬ」
「へえ、結構で。ともかく深川へいっておくんなせえ」
寺裏、というのが、一寸、おかしかったが、墓地の裏にでも埋めてあるのか、と思った。子分の牛六が案内して、大川を下った。
深川は冬木町。海福寺裏の堀にはさまれたデルタ地帯で、寺裏とも呼ばれている。正覚寺橋の袂で舟からおりて、河岸を蛤町へやって来て、路地へ入った。
「塩漬けにしてあるのだろうな」
と、心配そうに、幸太夫は聞く。
「へ？　塩漬けですって」
「うむ、生首とあればすぐに腐る」
「いえね、それが腐らねえので」
生首が腐らない、という牛六の言葉が不審だったが、それが判明したのは、一軒の家へ入ってからだった。
軒の傾いたひどい家だった。
「ここに？」
「へえ、ここなんで」
中に入ると、ごちゃごちゃしたところに一人の男が裸で寝そべっていた。

その背中にかがみこむようにしていた男が顔をあげた。
むろん幸太夫の知らない男である。
「彫宇之でさあ」
牛六が紹介した。
が、彫宇之は、会釈するでもなく、無言で、束ね針を動かしていた。
行燈の乏しい明かりのもとに、その針と血泡の中に浮き上がった絵を見て、あっと、幸太夫はのけぞらんばかりに驚いた。それは、女の生首だった。
「……」
呆然となった幸太夫に、
「見たかえ」
と、寝たままの男が言った。
「生首をほしくて来たのかえ」
「……」
「あいにくだったな。おいらの生首はまだ胴体にくっついたままさ」
と、首をねじまげて、にやりと笑ったのは金四郎だった。
「若……」
「せっかく遠いところをやって来たのに生首の土産がなくて悪かったな」
「あ、あの……」

幸太夫は狼狽した。

ふりかえると牛六はもう家の外へ出てしまっている。ここまで連れてくれば牛六の役目は終わったのだ。

「若様、これは、あの、手違いで……」

「何が手違いだ。すっかりお見通しなんだぜ、この期に及んでじたばたしなさんな、吉川らしくもねえ」

「お許し下され」

べたっと坐って、幸太夫は平伏した。

「御兄君の申し条を拒めずに、幸太夫はやむなく、不埒な……」

「そうだろう、おいらを殺そうなんて、悪いことだぜ、お前は、いくら兄者にそそのかされたといってもこいつァ、了見ならねえな」

「……」

「生首がほしけりゃ、背中からひっ剝がしてゆくかね」

女の生首ではどうしようもない、スジ彫りだけだった背中の女の生首を昨夜からずっと、不眠不休で、彫宇之が精根かたむけて彫って来たので、凄まじい絵になっていた。肩のところに桜の枝が出ていて、そこに、女の髪の毛が縛ってあり、生首がぶら下がっている。桜の花が、ぱらぱらっと咲いている。

「吉川、帰って親父と兄貴に伝えるがいい。金四郎は、女の生首を背負った男でございます、とな」

「若、若、御許しを、幸太夫、かくの通りでござる！」

ぱっと襟をくつろげると、脇差を抜いて、おのれの腹へ——

「止せっ」

大喝するや、金四郎は枕をぱっと、投げつけた。

抱き枕といって、背中に墨を入れる痛さに耐えるためにしがみつくものだ。普通の箱枕を座蒲団でくるんで縛ってある。

これが、いま、将に切腹しようとした幸太夫の顔に当たった。

あっと、脇差をとりおとして、ひっくりかえってしまった。

「吉川、つまらねえことをするんじゃねえ」

「わ、若……」

「お前さんに、ここへ来て貰ったのは、何も怨みばらしをしようってんじゃねえのだ。おいらは怨みには思ってやしねえぜ」

「御許し下され……」

「殺されていたら、怨んで化けて出たかもしれねえ。だが、どうやら、五体満足だ。怨むことはねえ、執っこく探したのは、事情を知りたかっただけだ。何もお前さんが、腹を切ることはねえのだ」

「若、これには、いろいろ深いわけが」

「そうだろう、お前さんが、おいらを憎む理由はねえからな」
「はい、かくなった上は、すべて申し上げまする。御兄君が重い病いで臥せられていますが、御家督のことで……」
病気が進むと、誰でも焦りから妄想がふくらむ。兄の景善は、放蕩者の金四郎に家督が渡るのではないかと、それを恐れて、
（金四郎を殺せ）
と、幸太夫に命じたというのだ。
むろん暗殺であった。幸太夫はことが成就したあかつきには、切腹して、景善を諫死するつもりであったという。
遠山家に二代にわたって仕えて用人をつとめている吉川幸太夫は、主命と罪悪感の板挟みになって苦慮したのである。
聞いても、しかし金四郎は顔色を変えなかった。
「そうかい、どうせ、そんなことだろうと思ったぜ」
これは負け惜しみではなかった。
「だから、お前さんに、こいつを見て貰いたかったのだ」
「え!?」
「この背中の生首をよっく見な」
「……」

「そして、帰って、兄貴に伝えてくんねえ、金四郎は背中に女の生首を背負っている。放蕩無頼のやくざ者になりきっているってな。そうすりゃ、兄貴も安心して、病気も治らあ」
「若！」
感きわまって、幸太夫は、はらはらと落涙した。
「なんでえ、なんでえ、泣くやつがあるか。さあ、お代は見てのお帰り、じゃねえ、見終わったら、さっと帰んな。ここはお前さんのような勘定奉行の御用人さまがいるところじゃねえ」
金四郎は、からからと笑って、
「いいか、間違っても、腹を切るなよ。そんな皺腹切ったって、誰も喜びゃしねえやな」
人の運命も計り難いが、大体、世の中は皮肉に出来ている。
思った通りに、ことが進むことは、まず少ない。遠山金四郎の場合、特に、波瀾に富んでいる。
兄の景善が、金四郎を殺してまで家督にしがみつきたがったので、金四郎は女の生首の刺青を見せて、はっきりと、兄の立場を奪う意思のないところを示した。
切腹して罪を詫びようとした用人の吉川幸太夫は、金四郎の思いやりに、落涙して謝したのである。
ところが、その三日後——

兄の景善が失踪してしまったのだ。
あの重病の身で、どこへ去ったのか、遠山家では、大騒ぎになった。
（ともかく探し出せ）
父の景晋は勘定奉行である。その要職からいっても、大変なことだ。
これが世間に洩れては、身分にも差し障る。
心当たりを家臣や一族の者たちが探してまわったが、とうとう行方はつかめなかった。
失踪ということははっきりしている。父と吉川へあての手紙が届けられたのだ。
病気の景善の世話をしていた夫婦が、手紙を渡された。前後の様子を見ても、失踪であることに間違いなかった。
金四郎暗殺に失敗したことから、やはり、貶罪のつもりであったのだろうか。
こうした場合、武士なら、腹を切る。
だが、自ら切腹を金四郎に止められた幸太夫が、やはり景善の切腹を諫めたというのだ。
おのれの手にかけようとした金四郎に逆に命を助けられる——これは、景善には耐えられない屈辱であったろう。
（死にもならず生きもならず……）
そして、失踪したかれの心情は、あまりにも哀れだった。
十日ほども探したが、とうとう行方はつかめなかった。
駕籠に乗った病人が成田街道を行くのを見たという者があったが、その先はわからなかった。

た。これを聞いた金四郎は、驚くやら呆れるやらだった。
「馬鹿だなあ、何も、姿を消すことはねえのによう。おいらの刺青を聞いたら、喜びゃいいのにな。一体、遠山家はどうなるんだ」
急に父親の心痛が思いだされた。
だが、背中一面に女の生首と桜を彫ったからだで、武士に戻ることは考えられなかった。
（早まったぜ、兄上！）
固いばかりが武士じゃない。固すぎるから、つまらねえことを考える。と、金四郎は呆れた。
遠山家にしてみれば、しかし、後嗣がいなくなっては、どうにもならない。
時間が経っては、事実が露見する。
とりあえず、景善の病気お届けをした。
その上で親類一同が鳩首相談になった。
金四郎の方では、屋敷の動きがだいたい察しがついた。
「こいつァ面倒なことになるな」
背中に女の生首を背負った男——これは現代でも、まともな社会では受け入れられない。況や勘定奉行の伜としては大変なことになる。
吉川幸太夫に刺青を見られた以上、これは勘当される、と信じていた。
勘当処分になりさえすれば、どんなに墨を入れても、かまわない。

旗本という身分は、それも高級官僚の倅ということは、世襲制度からしても、将来を約束されている。したがって、刺青をした高級官僚というのは、許されないのだ。

刺青は、文身とも、入れ墨とも書くが要するに彫り物である。

ところが、彫り物という概念の中でも、入れ墨というと犯罪人を連想する。

というのは、軽犯罪には入れ墨追放という処分がある。

袖から出る腕に、一本筋を入れる。これが二度目になると、二本。ふつうに着物を着ていれば、見えないがちょっと袖をまくれば、人目に触れる。

犯罪者、前科者を見分け易いために考えだされたことだ。

いなせを売り物の彫り物と、この犯罪者の入れ墨とは違う。

が、同じ立場にある者が多いために、この入れ墨を消す目的で、他の文様を全身に彫って、手くびまでに及ぼす。

町人でも、町名主や肝煎りなどにはなれないのだ。

(ざまァ見やがれ、もう兄貴が遠山家を継がなきゃならねえのだ。おいらは気随気儘に、女と博奕で面白おかしく一生おくるぜ、やくざほど気楽なものはねえからな)

そのつもりだったが、兄貴が行方知れずとなると、いやでも、遠山家を家督しなければならなくなるかもしれない。

「若様、あのお爺さんがまた来たよ」

と、堀ノ小万がやって来た。

「あたし、泣きつかれて困っちまった。若様を翻心させてくれってさあ。ホンシンなんて、本心は、若様はあたしを好きだと言ってやったんだよ、よかったかしら」

「ああ、よかったとも。せっかく来てくれたんだ、帯を解きねえ」

「あら、何を言うのさ、あたしゃ、知らせに来ただけで」

「とか何とか仰有いますが、それ、おいらに抱かれたいと、顔が言っているぜ」

「馬鹿！」

「馬鹿はお互いさまだ」

と、素早く、金四郎は、小万の裾から手を差し入れた。女の秘所はすっかり濡れていた。

「あらいやだ、あたしゃ……」

帯が弛んでいたのは、意識的なのか。

小万は自ら、着物を脱いで、金四郎に抱かれると、白昼から声をあげた。そこへ、いかめしい武士たちが訪れたのである。

正式の訪問だった。

といっても、こちらは九尺二間の長屋だから、表から裏まで筒抜けである。

「頼もう、遠山どのは御在宅か」

と、のぞいた武士は驚いた。

玄関などというものはない長屋だ。すぐ目の前に、当の金四郎が、若い芸者と派手に楽しんでいるのだから、あわてて、視線をそらした。

「これは、むさいところへようこそ御入来」
と、金四郎は、着物をひっかけて、一同を迎えた。
武士たちは、狭いところに膝を揃えて坐った。
「こういうところだ、ざっくばらんにいこうぜ。お揃いで見えるとは仰々しいが、あらためて聞こう、何の用だ」
「若、御父上の言葉じゃ。ただちに帰宅いたされい」
親類の中で長老の武士が、白髪をふるわして、詰め寄った。
「父上が……」
金四郎は、意外な面持ちになった。
これといった仲違いをしたわけではなかったが、金四郎が家を飛びだしたのは、父とは、争いをしたくなかったからなのだ。
「われら親類一同も、若の帰宅を願うている。かようなところで、多弁は弄せぬが、およそのことは、そちにもわかっているはずだ。のう、聞き分けてくれい」
「若、もうよいではないか」
と、苦労人らしく、微笑を浮かべながら言う者もあった。
「のう、これまでのことは、若気のあやまちで、すべて丸くおさまる。おぬしだけが、帰ればいいのだ」
「散々、遊び尽くして、もう遊び疲れたころあいではないかの」

そんな、いかにも、聞いた風な言葉が金四郎には、不愉快だった。
「多弁を弄せぬか、その方が、こっちも大助かりだ。まあいい、何とでも仰有るが、よござんすがね。何よりも、こっちが変わった」
「変わった？」
「ああ、どうにもならねえのさ。左様しからばと、全うな楽しみは出来ねえ。まあ、論より証拠だ。こいつを見て、ものを言ってくんな」
金四郎はひっかけた着物をぱっと脱ぐと、くるりと背を向けた。
背中一面にぱっと、展開した桜の花びらと、大きく女の生首が——。
これにはさすがに、武士たちは、ぎょっとなった。
唖然と口をあけて、身をのけぞらした者もいる。
「とっくりと御覧じろ、女の生首を背負って、遠山金四郎景元、いまさら、御屋敷に帰れまい」
「……」
「諦めるんだなあ、その方が、そっちも楽、こっちも楽」
かれらは声もなかった。ただまじまじと、女の生首を見つめている。
「お帰りはそっちだぜ。もういいだろう、こっちが風邪をひく」
たとえ小さく一字二字の彫り物があっても、武士としての資格に欠ける。
女の生首を背中に背負っている官僚などは現代でもいまい。まして身分階級のやかましか

った時代である。

「ああ、これで、せいせいしたぜ。あいつら、二度と来ねえだろう」

と、金四郎は、親類たちが帰ったあとほんとうに晴々とした顔で、小万を引き寄せた。

「あの堅物どもは、博奕も知らねえ、女の味も知らねえ、左様しからばで固苦しく生きているのさ、可哀想なやつらだぜ」

「女も知らないで？……でも、奥方さまはおありでしょう」

「女房しか知らねえのさ。哀れなものさ。屋敷育ちの女と寝たって面白いことはねえ、丸太を抱いた方がマシってなもんさ」

堀ノ小万のような芸者には、嬉しい思いやりに聞こえる。

「じゃァ、あたしは」

「面白ェ、一日に三べんもしたくなる女だ」

「あら、たった三べん？」

「おい、冗談じゃねえ、四、五回やらなきゃ気が済まねえのかい、そいつァ、小万、淫乱ってものだぜ」

「あらいやだ、あたしゃ、若様だから何べんだって抱かれたいだけですよォ」

「どうだか。そいつァいいが、もう、その若様は止してくんな。金四郎でいい、深川の金さんだ」

「いやァ、金さん……あああ、なんだか夫婦みたい」

小万は肩を竦めて嬉しそうに笑った。

これで綺麗さっぱり、武士の世界からおさらば出来たと思ったのは、しかし、金四郎の早合点だった。

翌日、武士たちは、またやってきたのである。

これは意外だった。

すっかり諦めたと思った心の隙を突かれた感じだった。

「是が非でも、御帰宅をとの、殿の仰せでござる」

「おい、帰ってどうするんだえ、おいらァ、この通りだ。身体髪膚これ父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始めなりって、なんだっけ、論語だったかなあ、この刺青は、毀傷もいいとこだあ、親父に顔が合わされめえ」

「そのことでござる。悉皆、お伝えいたしました」

「ほんとうかい、女の生首って言ったか」

「はい。絵まで画いてお見せいたしました」

「親父は呆れただろうなァ」

「暫くお考え遊していましたが、ややあって、やむを得ぬ、と仰せられました」

「……」

「彫物のことは、知らなかったことにする。口外いたすなとのことで、ともあれ、是が非で

も、連れ戻せと」

外には、駕籠まで用意されていたのである。金四郎も、そこまで事が運ばれてはしかたがない。父景晋を説得するつもりで、一たん帰邸することにした。

説得するどころではなかった。

「其の方しかいないではないか」

と、親類別座の面前で父の景晋に叱りつけられた。

「其の方が家督せねば、遠山家は絶えるのじゃ。左様なことでは御先祖に相済まぬ。これまでの放埒はすべて、目をつぶるゆえに、心を改めよ」

「こりゃ金四郎、聞いたか、家督をお受け致せ」

「遠山一族のことを考えよ、のう金四郎」

みんな口を酢っぱくして説き伏せようとする。

そうした一族の者たちの必死の形相が金四郎をしだいに諦めさせていった。

(しかたがねえなあ)

彫物をしていても、かまわないというのだ。そうなると、金四郎としては、抵抗する口実がなくなってしまう。

金四郎はとうとう家督を承知してしまった。

放蕩無頼の生活に、ピリオドを打ったのである。

遠山の本家のルーツを辿れば、利仁流藤原氏の出である。武士の家柄というものは、江戸

時代の後期になっても、重く見られるから、ニセ系図などが出回ったりしているが、遠山家の場合ははっきりしている。

遠祖左近のときに、美濃苗木城にいて信長に与力した。これが幸運のつきはじめで、信長の出世とともに、身上も大きくなったが、信長が本能寺で横死するや、家康に乗り代えた。

このあたり、なかなか機を見るに敏である。

さらに、関ヶ原の戦いには、家康の褒賞を受ける武功をたて、苗木領を安堵されて、加増を受け一万五百石の身代となった。景晋はその遠山家の末流であるが、官僚としては、才がぬきんでて、出頭している。はじめは御小姓組で五百石どりだった。それが、次々と出世していった。

長崎奉行——作事奉行——そして勘定奉行になったのだ。

こうした景晋とその親類たちが、あとを絶やしたくないと思ったのも当然であろう。

金四郎が家督相続人を承ったのは文政六年で、年齢は三十。

若気のあやまちの放蕩や彫物はすべて不問に附す、ということになって、失踪の兄に代わり家督を認められたのだ。

もともと、好きで無頼の生活に墜ちたわけではないから、金四郎はきちんと、旗本の世子としての生活をおくるようになった。

旗本というのは他人目には、まるで遊んでいるように見えるが、それぞれ支配筋への挨拶や、式日がやたらとあって、虚礼だろうと何だろうと、勤めねばならぬことが多いのである。

それらのことをきちんとやっていないと、出世の邪魔をされる。
文政八年十二月、金四郎はお役に就いた。西丸御小納戸。かれが家督したのはその四年後である。

生首盗人

金四郎の父左衛門尉景晋が勘定奉行をつとめたのは、文政二年からの十年間である。
金四郎自身が、親子二代の勘定奉行を拝命したのは天保九年。
西丸小納戸役から、作事奉行となり、それから勘定奉行になった。
その当初から、金四郎は、〝公事〟（訴訟）を扱うように命じられているから、後年の町奉行の才は認められていたわけだ。
勘定奉行は二年で町奉行に転じた。
すなわち遠山左衛門尉景元は、女の生首の刺青を背負って、江戸市中の犯罪を裁く町奉行に就任したのである。
天保十一年三月二日であった。
配されたのは〝北〟である。

文化三年以来、北町奉行は呉服橋門内の堀際の屋敷だった。
町奉行所は町奉行の役宅である。
遠山左衛門尉景元こと金四郎が北町奉行役宅に落ち着いて三日目のことである。
呉服橋に近い西川岸町の自身番へ、大きな包みを投げこんだ者がいる。
包みは大きな西瓜のようなものだった。自身番にいた町役人はうたた寝をしているところだったので、仰天した。その包みを開いてみると、女の生首が転がり出た。
「わあっ」
と、町役人は、驚いて腰を抜かしてしまった。
町内は大騒ぎになって、町廻りの同心なども駆けつけて来た。
その生首には、書状が付されていた。
女の髪に結びつけられていたのである。
「北町奉行殿へ参る」
と、表書にあった。
同心は町役人たちに生首を持たせて、奉行所へ運んだ。
「何、生首を？」
金四郎は眉をひそめた。
女の生首だということが、かれには、きわめて個人的ないやがらせと受けとれたのである。
十六、七の、美しい女だった。

「ひどいことをする」

その書状をひもとくと、達者な筆使いで、はっきりと金四郎への挑戦がしたためられていた。

——御役就任、祝着に存じ、生首一箇

進呈仕り候

もし御所望ならば、十日に一箇宛、進呈候はば、御賞味これ有るべし……

鬼面党

と、あった。

「鬼面党とは、何者か」

金四郎は与力を呼んで、犯罪の記録を調べさせた。

ところが、鬼面党なるものは、ついぞ聞いたことがないというのである。

「ふむ、されば、いたずらであろうか、何者かの」

「左様、したが、いたずらにしては度がひどすぎるようで」

「私が恐れるのは、第二の犠牲が出ることだ」

と、金四郎は言った。

女の生首——

冗談にしては、きつすぎる。

金四郎が遠山左衛門尉景元として、北町奉行に就任したことへの、不逞な挑戦であった。

生首は、まだ血がしたたっていたのである。

油紙に包んで、その血が外へ洩れないようにしてあったので、顔も髪も血みどろになって凄惨そのものだった。

「こいつァ、小塚ッ原から盗んで来たものじゃねえ。女囚の獄門など、とんと聞かねえ……とすると」

金四郎は、眉をしかめて、深い息をついた。

金四郎が北町奉行になったために、この女は殺されたのか。

まるきり、憶えのない顔だった。

もっとも、兄の失踪で、家督してからは、女遊びはぷっつりと絶っているし、こんな若い女に知り合いはなかった。

「女の身元を洗え」

と、金四郎は、与力や同心に命じた。

北町奉行所出入りの絵師に、女の顔を描かせ、木版で二百枚ほど刷らせた。

絵師はお手配の人相書などの下絵を描く。巧妙な筆づかいで、出来上がった絵もよく似ている。

町名主たちを呼んで、これを配布した。自身番や木戸の番屋で、これを貼ったりして、探すのである。

「若い女だ。神隠しにあった者がいないかどうか、すぐにわかるはずだ」

無宿者などは、あっと居なくなっても、誰もさして気にとめないから、生首になってしま

えば身元を洗うのに骨を折るが、若い女だけに探しやすいと思われた。
重大犯罪の獄門首ではないから、生首を曝して、広告するわけにもいかないのである。
行き倒れなどの場合は、その場か番屋の横に寝かして、通行人に面体を改めさせる。
これが一番手っとり早いのだ。
「――美しい女だからねえ、すぐにわかるはずだ。惚れた男も、二人や三人いただろう」
髪のかたちも崩れて、髪型では判断できない。
金四郎は、女の顔の汚れを拭わせて、仔細に見た。
「この女の顔でわかることは、水商売じゃァねえってことだ」
「はァ、左様でございますか」
与力には、ぴんとこなかったらしい。
「見な、この肌は、白粉焼けがしていねえ、まだ、初心っこいぜ」
「はあ」
「ひょっとすると、未通女かもしれねえ。そうでなくても、大した男を知っちゃいねえだろう」
首の切り口は、あざやかだった。
刀ですっぱり切っている。
「下手人は、なかなかの手練れだ。脇差の押し切りじゃァこうはいかねえ」
この女の身元がわからないうちに、第二の殺人が起こっている。

金四郎は、袴を脱ぎ捨てた着流し姿でふらりと山谷堀へやって来た。
月が代わって、月番は南町奉行になって、ひまが出来たのだ。
ひまといっても、訴訟などを受け付けないというだけで、老中の屋敷に挨拶にいったりしなければならないから、ひと月まるまる休めるというわけではない。
だが、月番の忙しさに比べれば、ずっと楽だった。
(十日……十日経ってしまった)
生首の女の身元の確認がとれないうちに、鬼面党のいう〝十日〟が来たのだ。
金四郎は、役宅で情報の集まるのを待っていられなくなったのだ。
あれから小万は、芸者をやめ、料理屋を買いとって、女将になっている。
さすがに歳月は、小万から若さを奪いとってはいたが、色所の水は肌に磨きをかけるから、容色の衰えを感じさせない。
せいぜい十年くらいしか経っていないようだ。
「きれいだぜ」
と、金四郎はおだてた。
「あら、ほんとかしら、あたしゃ毎朝、鏡をのぞくのが恐いんですよ」
「女っぷりが一段とあがったぜ。いまの小万から見りゃ、あのころの小万は小便臭せえ子供だァな」
「あたし、喜んでいいのかしら」

「女の、味があるだろうぜ。そこがいいとこさ」
「嬉しいねえ、だから金さん、あら御免なさい。遠山左衛門尉さま」
「よしな、ここでは金さんでいい」
「それさ、金さんのせりふは、昔と変わらないねえ」
「なあ、小万、聞きてえことがあるのだ」
と言いかけたとき、襖があいて、こんばんは、と澄んだ声がした。
「遠山さま、これがあたしの姪なんですよ。小万と名乗らせています」
「じゃァ、お馬に還ったわけだ」
「それがねえ、お馬じゃ色気がなさすぎるから」
「そうでもねえよ、お馬でいい」
「あら、そういうわけにはいきませんよ。いまでは、お久ですよ」
「お久か、いいねえ、幾久しゅう頼むぜ」
「ねえ、金四郎さま、生首はどうしていますかえ」
「なかなか身元がわからねえのだ」
「あれ……背中に背負っているじゃありませんか」
「背中か、ははは、彫物と同じにはならぬ。ほんとの生首の身元を調べているのだが、わからぬ」
その女は、イナカからやって来たばかりの女ではないか、と聞いたのは、白粉気のない顔

を思いだしたからだ。
小万が、その日、つけてくれたのは、やはり小万という若い女だった。
「あたしゃもうお褥辞退だから」
と、お馬のお久は言った。
まだ色香はあるし、それほど遠慮することはないのだが、こうした水商売の女には、伝習的な仁義のようなものがある。
若い小万を金四郎に侍らして、お久は退りながら「口惜しいけど」と、微笑んだ。
そうされると、金四郎も、では御馳走になろう、とはいえない。
「可愛いな」
酒の相手をさせながら、小万の顔を見る。
「お羞ずかしゅうございます」
「なんの、昔のおれだったら、こんなのんびりしちゃいねえ、この場で孔雀あそびだ」
「あら……」
小万は、袖で顔を蔽った。
意外に初心な様子だった。
お久が気を利かしてくれたが、金四郎は、かえって、小万に手が出せなかった。
芸者遊びは、やはり、お膳立てされたのでは面白くない。
若いときから、金四郎は女にかけては自信のあるほうだったから、いまさらがつがつする

ことはない。
「小万、御用繁多で、今日は戻らなければならぬ」
「あら、つまらない」
と、小万は甘えた声でにじり寄ってきた。
「おっかさんが……」
「お久のことか」
「はい。お奉行さまは、床上手だから、可愛がって頂くようにって」
「おい、冗談じゃねえ、そんな……」
お馬のやつ、よけいなことを言いやがった。若い小万に身代わりさせて、妬心は起こらないのか。
もっともさばけた女だから、自分の好きな子には男を譲ってもよいという俠気のようなものもあるのだろう。
「おいらは、そっちは下手なほうだぜ、あんまり期待しねえでくんな」
「でも、あたし、上手下手じゃなくて、お奉行様のようなお方に抱かれたいんです」
小万は、そっと、かれの膝に手を置いた。
若いだけに、一途な感じだった。
芸者にしては初心すぎる。いまの金四郎はこういう女の一途さは、些か迷惑なのだ。
「ことわっておくが、ここへ来たのは、微行だ、お奉行さま、はやめてくんな」

「あら、ごめんなさい」
「今日は帰宅せねばならんが、近いうちに抱いてやるぜ」
「ほんとう!?　お奉行さま、あらいけない、金四郎さま」
「金さんでいいさ」
「約束げんまん、忘れないで。指切りよ」
小万は小指を出した。
しかたなく、金四郎も小指を出してからめたが、半日経たないうちに、この小万が、生首にされようとは。

小万は毎日、聖天様にお詣りする。
待乳山という、丘のようなものだが、その上に聖天様がある。
今戸橋に近く山谷堀を見下ろすところで、いうならば、山谷の色街の守り神のようなものだ。
したがって、芸者ばかりでなく、料亭の女将から、そこで働いている女たちまで、信心している。小万は、芸者になって、間もないだけに、まだ垢に染まっていない。
朝、まだ暗いうちに起きて、聖天様にお詣りするのが、習慣だった。
金四郎と会った翌朝も小万は、聖天様の石段を上がっていた。
社前にぬかずいて、かしわ手を打ったとき、ふらりと、人影が、お社のわきからあらわれ

た。
「早いね、姐さん」
と、男は言った。
「あ、お早ようございます」
あわててこたえたが、その男、見たこともない。
「あの……」
「小万、姐さんだろう」
「ええ、小万ですけど……」
「一寸、お前に話があってね。こっちへ来てくんな」
威かすというふうでもなかったので、小万は、何気なく、その男について、社殿の横手へ入った。
三十がらみの、いなせな感じの男だった。
あたりは木立が深い。
昼間でも神社の木立の蔭は仄暗いが、東の空がほんのり赤らんできたばかりで、木立の中には暁闇がまだ、未練気に残っている。
「あの、何でしょう、話って」
「まァ、金の字のことさ」
「金の字？……」

「金四郎さ、遠山金四郎」
「あ、お町奉行さま」
「へっ、よそゆきの声を出したね。昨夜はいい思いしたのだろうが」
「そんな、あの方は、そんな、ただ、お酒の……」
「相手をしただけだというのかえ」
「ええ、ほんとうです、そんな……」
「どっちだっていい、怨むのなら、金四郎を怨め」
「え!?」
「あいつのせいだぜ」
と、言いざまに、男の手が、小万の肩にかかった。
あっと思ったときは、強い力で引き倒されていた。突然だったし、抵抗するどころではなかった。
悲鳴をあげる口を、大きな掌がふさぎ裾をめくられている。
きちんと合わせた裾を、荒々しく、ひき開けられ、小万のすんなりした白い脚が宙に躍った。
「いやっ、助けて」
掌が弛んだとき叫んだが、男の荒々しく容赦ない手は、下半身をすっかり剝きだしにするや、膝を入れて割りこんできた。

男の生々しく硬いものが、下腹部に触れた。
小万の悲鳴は圧えられた掌の下で、呻きに変わった。
男の手は容赦なく、下半身を引き剝ぐようにして開き、すでに熱く硬くなったものを押しつけていた。
山谷堀では、いまや売れっこの若い芸者が、こんな惨めな格好で、名も知れぬ男に犯されるというようなことがあっていいものだろうか。
「放して、放して」
必死に逃れようとしたが、男の力は盤石だった。
その肉棒は、容赦なく、女の中心を貫ぬいた。
「ああ……」
小万の悲鳴が奔った。
男は、手拭いをその口に押しこんだ。
「喚くな、いい思いをするんだ」
そして、彼女の下肢を両手で持ち上げて、腰を動かした。
「ああ、いや！　いや！　放して……」
手拭いを吐きだして、小万は叫んだ。
その頬をしたたか撲られた。
「静かにしねえか、せっかく、いい気持ちにさせてやっているんだ」

そして、かれは、そのままのかたちで女のからだを裏返した。
「ああくくくるしい……」
草むらに顔を突っこまれて、小万は呻いたが、耳をかすような男ではない。
高々と女の尻を持ち上げ、ぐいぐい、おのれを突っこんで、うつつの声をあげている。
「いいぜ、いいぜ、ああたまらねえ」
もがいて、顔をあげようとする小万の頭をぐいと、押さえつけた。
口の中に草が入った。
（息が詰まる、苦しい！）
その叫びは、徒らに草を顫わせるだけだった。
男の手に容赦はなかった。眼も鼻も口も、草の中にあった。
呼吸の苦しさを、むろん理解しようとしない。
小万は、しだいに呼吸が苦しくなり、
（死ぬ……）
と、思った。
が、男の動きは、また激しくなっていた。
一度ならず、男は快楽を得ようとしているのだ。
そのとき、闇の中から、数人の影があらわれた。
「次郎作、まだか」

「こやつ、二度目ではないか」
「うむ、そのように見えたぞ」
「やい、今度はおれだ」
男たちは、浅ましく、奪い合いをはじめたが、
「もう少しだ、もう少し……」
と、次郎作は執拗に抱きしめた。
大勢の男に凌辱されて、若い小万は、抵抗したが、とうとうぐたりとなって、動かなくなってしまった。
「どうした？」
「死んだんじゃねえか」
「死んだようだ」
「いや、まだ心の臓は動いているぜ」
一人が、胸に耳をつけて聞きながら、乳房をつかんだ。
「へへ……勿体ねえな、まだ、死なせるには早すぎる」
「そうだ、おれにも楽しませろ」
「誰か来た」
はっとなって、一人が、社前の方を見た。
石段を上がってくる音がしている。

朝詣りの者だ。
（ここでは、やばい）
と、一人が目まぜして、他の者を促した。三、四人で、小万のからだを抱えて、裏の木立の中へ入った。
小さな丘である。
「よし、ここなら、人は来やしめえ」
「さあ、誰だ」
「今度はおれだ」
と、早くも、前をまくったやつが下帯から、逸物をつかみだした。
こういう手合いは、死姦をするのも平気なのであろう。失神した小万の下肢を押しひらくと、血で汚れているのもかまわずに、怒漲したものをあてがって、
「ひひひ、堀の芸者で、こんな美い女とやれるなんてたまらねえ、うひひ」
卑しい笑い声をあげた。
「叱ッ、声をあげるんじゃねえ、聞かれたらどうする」
「聞こえたって、へへ、男と女だ、どこでツルもうと、かまうことか」
「馬鹿野郎、ツルむ話じゃねえ、殺しの証拠を残しちゃならねえ、さァ、早くしろ、あとがつかえている」
「急かせるんじゃねえよ、うるさく言われちゃ野糞と同じで、やり難くて仕方がねえ、せっ

かくの上玉だ、楽しませておくんねえな」
「時間がねえのだ」
次の奴は、もう、自分のものを出して指でいじっていたが、犯されるうちに小万が、息を吹きかえすと、
「ええい、もう待っちゃいられねえ、おれはこっちで」
と、小万の口の中に、突っこんだ。
そうでなくても、苦しい喘ぎなのに、ふといやつを口中いっぱいに詰めこまれてはたまらない。
小万は、息苦しさと、恨みのあまりかがぶっと、噛んだ。
「ぎゃっ」
と、叫びをあげて、男はのけぞった。
「どうした、伍平」
「こ、この女……か、咬みやがった、あ、痛う」
噛み切るように、小万は首を振っている。
「この女、こいつ、痛て痛て」
伍平は、小万の髪をつかみ、それから咽喉を締めた。
伍平の逸物は格別巨根というほどではなかった。
が、堀の芸者で、いま売り出しの小万だけに、小さな可愛い口をしている。

その小さな花片のような口が、苦しげに喘いでいるのが、伍平の欲情を刺戟したのだ。
伍平の逸物を突っこまれて、小万は苦しまぎれに噛んだのが命とりになった。
首を締められて、そのまま、四肢をばたばたさせたのが最後で、彼女の息は絶えた。
「死んだ……」
と、伍平は手を離した。
「早すぎたぜ」
「全くだ」
「畜生、惜しいことを……」
惜しいというのは、自分が御馳走にあずからなかったことを悔やんでいるにすぎない。
「伍平、やれ」
「へえ」
殺すのが早すぎた。伍平のものは、まだ熱く硬直したままだった。
かれはすでに呼吸をしていない小万の口中でなおも逍送をつづけた。
死人の頬を両手で挟むようにして、腰を動かした。
小万の首を切り離したのは、まるで生きているものの如くに、放ち果ててからである。
半ば開いたままの上下の唇を手で押さえるようにして、絞り出して、へらへらと笑った。
「やい、いい思いをしたからにゃ、上手にやれ」
と、次郎作は促した。

「へえ、なんだか惜しいような気がするぜ」
「馬鹿野郎、女ァ腐るほどいるわい」
伍平は脇差を抜いて、小万の咽喉にあてがった。
刀の峰に手をあてるようにして、ぐいと力をこめた。
押し切りである。
ぱっと、血が噴いた。伍平は咄嗟に顔をそむけたが、頬からくびにかけてべっとりと、血汐が飛沫いている。
がりっと、刃が骨にかかった。
伍平は眉をしかめて、腕に力を入れた。ぼりっと音がして、首ががくんと垂れた。
草むらはぶくぶくと噴き出す血で染まり男たちの足元に流れてきた。
「そのまま血を抜きな」
次郎作は頬顎をしゃくった。
伍平が、髪を木の小枝にひっかけた。こうやって暫く血抜きをするのである。
聖天さまの朝詣りの客がくるたびに鈴を鳴らして、柏手を打つ。
そのたびに男たちは木立の中で、緊張した顔でふりむくのだ。
ひょっとして、裏へまわってくる者がいたら、人垣を作って、追い払おうというのである。
「金四郎の野郎、二人目の生首が、昨夜遊んだ女と知ったら驚くだろうぜ」
「顔が見てえな」

げらげらと皆、笑いだした。

北町奉行所に運びこまれた酒樽があった。
「山谷堀の小万姐さんからのお届け物でございます」
担いで来た二人の男は、ペコペコしながら、
「何卒、お納め下さいますよう」
「山谷堀から、なぜ、こんなものを」
「お奉行さまが御存知でございます」
「伺ってはいないぞ、なにも」
新しい奉行だから、門番も気を遣っている。
「では、お取り次ぎ願います。わたくし共もただこちらさまにお届けするようにと頼まれましたもので、詳しいことは何も存じません」
「左様か、そこへ待っておれ」
と、門番は役所へ入って行った。
町奉行所は、役所であるとともに、町奉行の自宅でもある。
家族も住んでいる。奥でつながっているのだ。
「おい、お奉行へ山谷堀からの届け物だそうだ」
「酒ではないか」

「ほう、こいつは豪勢だ。お奉行と山谷堀はどういう関りがあるのだ」
「小万……とか」
「堀ノ小万？　おう、そりゃ芸者だ」
「芸者か。芸者からの酒の贈り物とは、尋常ではないな」
「そねむな、そねむな、お奉行はあの通り、さばけた方だ。色街も色里も、よく御存知だ」
「ともかく、お取り次ぎしろ、われらがここでくすね酒したと思われても、困る」
金四郎は、まだ起きたばかりだったのである。
手水をつかって、庭を散策しているところだった。
「なに、山谷堀から酒が届いたと」
「はい……」
小万という名を言っていいものかどうか、用人は口ごもった。
家人に聞かれては、金四郎が困惑するのではないかと思ったのだ。
「ははは、堀といえば、小万か、いや、お久だな。どんな酒か」
「さて、開けてみますか」
くんくん匂いを嗅いで、首をかしげた。
「如何した？」
「はあ、何とも」
酒樽のかがみを割って、ぎょっとなった。

小袖にくるまれたものが入っていたのである。
「これは!?」
悪い予感がして、金四郎は、顔色を変えた。
十日目——
鬼面党と名乗る謎の連中から、女の生首を送ってきたのが十日前。金四郎への挑戦だった。
金四郎は、小袖の中からあらわれた女の生首が、若い小万であることを知って愕然となった。
「うぬ！　誰がこのような……」
金四郎は、女の生首を捧げ持って、はらはらと落涙した。
「許せ！　小万……」
小万の生首。
この一本になったばかりの若い芸者に誰が恨みを抱くことがあろう。金四郎の情婦と思われたばかりの奇禍であることは、考えるまでもなかった。
「彼奴らだ!!　鬼面党などと名乗って居るやつら」
その正体は、まるっきりわからない。
だが、金四郎の町奉行就任に挑戦して来た連中なのである。
小万のような弱い女を、金四郎への当てつけのために殺す——なんというむごいことであろう。

「許せ。この仇は、きっととってやる」
金四郎は、小万の首に向かって言った。
哀れというしかない。男には常に敵がいる。敵と闘うことが人生である。が、そのとばっちりを受けて生首にされてはかなわない。
堀で売り出しの若い芸者だ。こんなむごいことをする連中だけに、小万は死ぬ前に犯されたにちがいない。
あるいは、死後かもしれないが、ともかく、かようにその肉体を蹂躙されたであろうことは、想像に難くなかった。
（一人か？　いや党を名乗っているからには、一人や二人ではない。十人や二十人はいよう）
その連中が、何を口実にしての暴虐なのか。
昔から一匹狼の金四郎である。多人数を頼んでの行動には批判的だった。
徒党は幕府当初から御禁止である。したがって、鬼面党と名乗るだけで、すでに法度（法律）に触れる。
そのため、あくまで、地下に潜下しなければならないのだ。
「どこに潜っていようとも、必ず見つけ出してやる。そして、獄門にしてやる」
金四郎は、小万の首を塩漬けにして、葬るまで腐らないように指示した。
そして、同心に山谷堀へ使いを出した。

小万の失踪で大騒ぎしているに違いない。小万の死によって、何か手がかりがつかめれば、幸いなのだが、用意周到な鬼面党だ。容易に尻尾をつかませない。
同心は、まだ若い三沢信吾という者だった。
先ごろまで見習同心だった。亡父のあとを襲ったのである。因みに、町奉行所の与力や同心は世襲であり、他への転出も殆どなく、したがって、出世は望めない。
いわゆる不浄役人といわれる損な立場である。
「これは単純な殺しではない。そのつもりで、探って来い」
と、金四郎は、信吾に命じた。
信吾が山谷にゆくと、大騒ぎになっていた。
新任の北町奉行遠山左衛門尉景元こと金四郎の意を受けた若い同心三沢信吾は山谷堀へゆくと、お久から事情を聞いた。
聖天さまで首なし女の死体が発見されたとき、まだ、血は固まっていなかったのである。
それが若い芸者の小万だと知れると、堀の界隈は大騒ぎになったのだ。
お久に案内されて三沢信吾は現場へ上がってみた。
「ここか」
「ええ、可哀想に、あの子が……首がなくなったって、あたしにはすぐわかりましたよ。むごい……」
「ひでえ話だな。それで、下手人らしいやつらの顔は誰も見なかったのか」

「ええ、やっぱり芸者衆で小染というのが、お詣りに来て、やつらを見ているんですよ」
「やつらって……」
「七、八人いたそうですが。でも、暗かったし、まさか、そんなことだと思わないから、よく顔を見ようとはしなかったんですねえ。でも様子が変だから、裏へまわって見たんですって、そしたら……」
お久は、絶句して、嗚咽した。
信吾は役目を離れて、怒りをおぼえた。かれは、そのあたりを歩きながら、小万が犯されたであろう姿を想像した。
暗い中で、数人の男たちが、一人の女を輪姦するなどという浅ましい真似をしたのなら、(何か、落とし物でもしてはいないか)
と、思ったのだ。
木の間洩れの陽が、斑を描いている。
「――おや、こいつは何だ?」
信吾は叢の間から、何やらつまみあげた。
「ほう、面白いものを見つけたぜ」
「何かあったんですか」
「根付けだ」
それは精巧に彫られたひょっとこのお面だった。細い組み紐がついている。

「鬼の面なら、話はわかるが……」
ひょっとこを裏返してみると、なんとそこには男女が裸で抱きあっている。
実にこまかい細工であった。
銀細工である。こういうものは、物好きが注文して作らせたものに違いない。
「何かの手がかりになろう」
信吾は懐中にした。
「やつらのうちの誰かが、落としたものに違いない」
「財布か煙草入れについていたものでしょうね」
と、お久が言った。
「錺(かざり)の職人に聞いたら、わかるかもしれない。こういう仕事は、それぞれ特徴があるからな」
その前に小染にあって、何か憶えていることはないか、聞くつもりだった。
小染は、しかし、すっかり脅えていた。
昨日まで仲の良かったともだちが、首なしの胴体だけになっているなんて、異常すぎる。
「――あたし、あの中の人、知ってます……」
と、小染は遠くを見るような眼つきで言った。
「なに!? 小万を殺ったやつを知っているって?」
同心の三沢信吾は、小染をふりかえった。

「ええ……知っているとも、はっきりしないんですよ。どこかで、会ったような……」
「なんだ、それじゃァ雲をつかむような話だ」
「いいえ、それが、思い出しそうな……」
「客か、それとも……」
小染は頭をかしげた。急がされてもこんな場合は、なかなか思いださないものだ。
「旦那、この子は頭が悪いんだから、急がしても駄目ですよ。ゆっくり考えさせなきゃァ」
と、お久が救いの手を出した。
「それもそうだ。そういやァ、柳橋に面白い女がいたぜ。男に抱かれると、忘れ物を思いだすそうだ」
「あら、羞ずかしい」
「羞ずかしいこたァあるめえ、処女じゃあるめえし、小染といったな。なんなら抱いてやろうか」
役人といっても、二十三、四の三沢信吾は、若くて、きりっとしているから小染は、ぽっと頬を染めた。
「あらあら、嫉けますよ。旦那、あたしだってまだ」
「おっと、話ァ聞いているぜ、女将は、お奉行と昔馴染みだっていうじゃねえか」
「あら、誰が言ったのかしら、お饒舌りだねえ」
と、お久は満更でもなさそうだ。

「おいおい、冗談じゃねえ、殺しの捜査に来て、お前がたと、楽しんでいるところを見られたら、御役召し放しで、悪くすると甲府勤番だ。おい小染、そいつを思いだしといてくれ、おいらは銚屋をあたってみる」
「銚職なら聖天町にもいますよ。根吉といって、そりゃァ大したものです。毛彫りが得意でねえ、お米に観音様を彫るくらいだから」
「毛彫りの根吉か……」
三沢は、ひょっとこ面の根付けを見た。
お面らしく裏がえぐってあって、そこで男女が裸で抱きあっている。
ひょっとこ人形などの裏にある〝隠し絵〟又は〝ひとり笑い〟というやつだ。
翌日だった。
小染は朝風呂にいった。
昨日はあんなことがあったから、一日風呂に入らなかったから気持ちが悪い。
「たぬき湯」である。
こんなところにたぬきとは知らない者は異様に思うが、今戸焼きのたぬきから、名前を借りた銭湯だった。
「おや、姐さん、今日はこっちへ」
と、男湯のほうへ番台の佐七が顎をしゃくって、
「あいにくと、水洩れがしましてねえ、へえ済みません」

「あら、仕方がないわねえ」

と、小染は、男湯に入っていった。

混浴である。湯が洩るのなら仕方がない。役所でも大目に見る。銭湯の湯槽は使いが激しいせいかよく洩った。それも女湯が多い。

混浴は禁じられている。

地方にゆくと温泉などでは、混浴が当たり前だが、三都では風俗を乱すというので、御禁止だった。

だが、よほどの羞ずかしがり屋か、事情のある者以外は、男女とも混浴は嫌いではない。男にしてみれば、大勢の女の裸が眺められるのは悪い気持ちではないし、女の心もからだも、見られるように出来ている。

女は見られることが嬉しいのだ。

男の目つきを、

（いやらしい）

とか、

（すけべいな……）

と言いながら、熱い眼差しを乳房や腰のあたりに感じるのは嬉しいのだ。

女のからだとは、そういうふうに出来ている。

混浴が御禁止なのに混浴出来るというだけでも、ぞくぞくするのである。

男のほうはいうまでもない。せまい湯槽の中で、からだが触れるのはやむを得ないことだから、女のほうも文句はいえない。

たぬき湯が〝まじり合い〟だという評判がぱっと広がったらしく、仕事をほうりだした職人などが、押しかけてくる。

芋を洗うような混雑になって、番台では、ほくほくもので、

「もう着物籠がなくなっちまったよ。しかたがねえから、そこらに帯で縛っておいておくんなさい」

それでもいいから、入らせてくれ、という男が多い。

女にもいろいろいる。傍へ寄りたくないような醜いのから、小染のような若い芸者で職人たちには手の届かない女が、同じ湯槽で、裸をくっつけあうことが出来るとなると、目の色が変わるのも無理はない。

湯槽は、ざくろ口といって、湯気が逃げないように、壁でふさがれている。

下があいていて、くぐって入るのである。したがって、中は暗い。目が馴れてくると、おぼろに、お互いの顔かたちが見えるくらいだが、湯気はこもっているし、奥のほうは、殆ど、わからない。

小染が入ると、男たちの間にざわめきが起こった。

ざくろ口のあたりは外光があるから、小染の若いしなやかな姿態が見える。湯槽をまたいで入る腰つきに、男たちは、胸をときめかせた。

「混んでいて大変ですねえ」
などと言いながら、からだをこすりつけてくる。
「堀ノ小万か小染か、といわれるほどの姐さんと一緒に、裸で、うひひ、なんてェ運がいいんだろう」
幾つもの手が、小染の胸や腰にのびてきた。
「あれっ」
小染は避けようとした。が、避けられなかった。
狭い銭湯の湯槽である。十二、三人入れば、もう一杯だった。
そこに十四、五人は入っているようである。
小染は、男たちのいやらしい手を逃れた。
ざくろ口の入口近くにいるから、彼女の美貌や、若い肢体が目立つので、奥へゆけば、ゆくほど暗いから、若いか年寄りかはわからない。
小染は、そのつもりだったが、あるいは、これは、男たちが、そのように仕向けたのかもしれない。
「ごめんなさい、あの……」
と、小染は、逃れるように奥へ入ってゆく。
男も女も、こんな混浴は、なんとなく楽しい。女は一寸したことできゃあきゃあはしゃいでいる。

小染は奥にいって、ほっとした気持ちになった。
が、気がついてみると、まわりは男ばかりだった。
腕や背中や胸や腰に、男のからだが触れる。
小染は、不安になった。
男たちの顔が、真っ暗ななかだが、一尺と離れないところにある。
その顔、顔、顔……が、小染を見て、にやにや笑っているようだった。
気のせいだろうか。
(ひょっとして……)
小染が、はっとなったのは、誰かの手が、下肢のつけねに触れたのだ。
「あれっ」
あわてて、その手を払いのけた。
が、別の手が、胸乳に触れた。いや、これは図々しく、ぎゅっと鷲摑みにしたのだ。
「いやっ」
と、身を竦めて逃れようとしたが、背後の男が、抱き竦めるようにして、耳の傍で、
「逃げられねえぜ」
と囁いた。
ただの入浴客ではなかったのだ。
一人ではない。数人に囲まれていたのである。

「いやっ、何をするのさ」
その声も、笑い声と、素ッ頓狂な声などでかき消された。
小染は動けなかった。強い腕で摑えられていた。
胸乳をつかんだ男とは、別の男が、下腹をまさぐってきた。
「あ……」
「声を立てるんじゃねえ」
「……」
「銭湯で溺れ死になんて、見っともねえぜ」
「……」
「そうだ、脚を開きな」
小染は反射的に膝を合わせた。が左右から強い力でこじあけられた。股間に男の肉棒が触れた。正面の男が勃起させたものだった。

犯される

風呂の中で犯される！

小染は戦慄した。
数人の男たちがまわりを取り囲み、正面の男は、肉棒をそそり立てて、下半身を押しつけて来ている。
悲鳴をあげても、周囲の笑い声でかき消されてしまう。
「助けて、いやっ」
そんな声も、げらげら笑いで、
「ようよう、助けておくんねえ、借金で首がまわらねえよう」
「いやだといっても、借金取りはやってくるぜ」
「いやよ、いやよも好きのうち」
「べら棒め、借金を好きなやつは、いねえやな」
「助けて、助けて、借金で溺れそうだ」
「溺れるんなら、女の裸のうちがいいやな」
「おいらは、小判の海で溺れてえ」
「この野郎、勝手なことをほざきやがって、てめえなんぞは、肥え溜めで溺れるくちだ」
「狐に瞞されてかえ」
「狸に瞞されるよりは、なんぼか、狐のほうがよかんべ、美い女に化けるっていうぜ」
「いひひ、た、たまらねえ」
その声は、小染のなかに入った男の有頂天の声だった。

左右から脚を押さえてひき開けられ、真中の男が、屹立した固いやつをねじこんできたのだ。

湯の中でそんな行為に及ぼうとは、思いもしなかっただけに、小染は仰天すると同時に、悲鳴を奔らせた。

背後からは抱きかかえられているし、ぐいぐいと腰を動かして、男は、夢中になっている。湯の気だけでものぼせてしまうのだ。

この湯の中で犯されることは、恐怖ではあったが、男が夢中になるほどに、小染の女のからだは、拒みながら、反応を見せて来ていた。

「お願い、許して……」

「へへっ、いいだろ、いいだろ、そら、だんだんよくなってきたはずだぜ、そら、どうだ、そうれ、うう……」

男のやにっこい唇が、唇にかぶさって来た。

横合から、別の手が、乳房を揉んでいる。

それも両方から、別々の手なのである。

別々の男の手が、好きなように、乳房をなぶり、さらに、背後の男も、小染の豊かな尻にぴたりと前をくっつけているだけに、そのままでは済まなくなっていた。

その肉塊の勃起する様子が、はっきりとわかった。

前後からの、この男の攻撃は、女体にとって、あまりにも、強いものだった。

さすがに、うしろからは無理であったが、その部分に男のものが当たって、ごりごりと動いているというだけでも、もう小染は肉体がとろけそうになっていた。

前の男が放ち終わると別の男が代わった。

入れ代わり立ち替わり、男たちは、小染を犯した。

輪姦の話はないことではない。が、銭湯の中で犯された話など、聞いたことはなかった。

それも、他の客が大勢入っているところである。

混浴を幸い、好き合った男女が、おかしなことをすることはある。

が、それは合意の上だから、他の客に迷惑にならなければ、どうということはない。

が、堀の芸者が、男たちに取り囲まれて、いいように嬲られているのを、誰も気がつく者がいなかったのは、かれらが大勢だったからである。

湯槽の一番奥で、五、六人の男たちが囲んでいるのだ。

暗かったし、たとえ声を聞いた者も、ふざけているとしか思わない。

男たちは、最初のやつが犯している姿を見て——下半身は湯の中であったが——それぞれに昂奮して、怒張したものを持てあましていた。

「早くやらねえか、あとがつかえているんだ」

あとになった者は、待ちきれずに、急がしながら、小染の尻を撫でまわしたり、乳房を弄んだりした。

男たちは、六人だった。

その最後になった男は、小染が息も絶えだえになったのを容赦なく、咥えさせた。小染は髪をつかまれ、下腹に顔を押しつけられた。

湯は臍の上までである。

小染の顔は湯の中に浸けられた。ときどき、鼻で息をしなければ、息が詰まるのだ。が、男は快感が漸増すると、ぎゅうぎゅう頭を圧えつけた。

さらでだに五人もから犯された直後である。

小染は男を咥えたまま、ぱしゃぱしゃ水をはね飛ばした。

男が放ったとき、小染はそのまま、四肢の動きをとめた。

「おい、どうした」

「――どうやら、ホトケになっちまったようだ」

男たちは暗がりの湯気の中で顔を見合わした。

「――手間がかからなくて済んだぜ」

男たちは、そろそろと湯槽から出ていった。

からだを洗うどころではない。

死体が発見されないうちに、「たぬき湯」から出なければならなかった。

かれらがからだを拭くのも早々に、着物に手を延ばしたとき、ざくろ口の中で悲鳴が起こった。

悲鳴はたちまち、大騒ぎとなり、数人の男たちが、飛びだしてきた。

「大変だ、死んでいる」

「女だ、女が死んでいる」

「芸者だ、いい女だ」

「堀ノ小染だぜ」

「大変だ、町役人に知らせろやい」

かれらはその騒ぎを一瞥もせず出ていった。

堀ノ小染が、鬼面党と名乗る連中に殺されたことを、遠山金四郎が知ったのは町役人からの届け出がある一刻も前だった。

役宅のすぐわきの濠に、女の死体が浮いていると大騒ぎになったのだ。

派手な着物が騒ぎのもとだったが、それを着ていたのは死体ではなく等身大の藁人形だったのである。

「くそっ、人騒がせな」

「なんてェ真似をしやがるんでい」

「それも、お奉行所の傍で……」

藁人形は、髪(かつら)までかぶせてあった。

それと、騒ぎが大きくなるように、重石の仕掛けがしてあって、うつぶせになって水面に浮いていた。

引き上げた小者たちが白昼なのに驚きの声をあげたのは、なんと、般若の面をつけていたことだ。

そして、そのお面の裏側に、

〝ほりのこそめ〟

と、書かれていた。

藁人形にぴったりと付いていたせいか、濡れて滲んではいたが、はっきりと読みとれた。

この報告を受けた金四郎は、

（またか！）

と、憤りとともに、してやられ臍を咬んだ。

堀ノ小染――その女は知らない。

が、おそらく、小方と近しい仲だったのであろう。

（哀れな……）

これも金四郎への挑戦であることは明らかだった。

「堀からは届け出がないのか。ただちに小染という芸者のことを調べてみよ。失踪しているに違いない」

これが予告ではなく、すでに女の身に異変があったのであろうことは、如何にも若い芸者らしい着物が、物語っていたことだ。

金四郎の睨んだ通り、その着物は、銭湯「たぬき湯」で、小染が脱いだものだったのである。

下手人らは、湯槽の中で、小染が溺れ死んだあと、着物籠からそっくり持ち去ったのだ。

銭湯では大騒ぎのあと、町役人が届け出に出たのと、入れ違いに、同心が目明しとともに駈けつけたのである。

三沢信吾は、地団駄踏む思いだった。

「出し抜かれたか……小染に顔を見られたと思ったのだろうな、やつら」

小染も、もっと早く、思い出してくれたら、こんなことにならずに済んだのに。

しかし、悔やんでもはじまらない。

銭湯で聞き合わせても、男たちの人相など、番台ではおぼえていなかった。

第一、殺人だと聞かされるまで、溺れ死んだとばかり思っていたようだ。

「湯アタリして、そのまま、ずるずると湯槽に沈んじまったお老寄りもいましたのでねえ」

と、番台は蒼くなっていたが、責任の回避に必死だった。

「たぬき湯」の番台は、本当に知らないのか、知っていて知らぬふりをしているのか。

どちらにしても、関り合いになりたくないという様子だった。

こういう商売は、弱点を持っている。混浴という一事だけでも、お咎めを喰えば当分、商売が出来なくなるのだ。

町方役人風を吹かせれば、仕方なく協力することはわかっていても、そこまで問い詰める気はなかった。

る。

「しかたがねえ、何か気づいたことがあったら、届けるんだ」
と、言い置いて、三沢信吾は、銭湯から出た。下手人は手がかりを一つだけ残している。
ひょっとこ面の根付けだった。
落としたものらしいが、これは細工師の腕前が特殊だった。ざらにあるものではない。
花川戸の一六という細工師はもう老人で、眼が悪くなっていたが、三沢信吾の差し出した根付けを両手でもって陽にかざすようにして見た。
それから、指先で丹念に撫でまわしてから、
「これほどの仕事が出来る者は、十人と居ませんよ」
と、言った。
「十人？　そいつァ、少ねえとはいえねえな。みんな住所はわかっているのか」
「いいえ、十人といったのは、根付けが出来てから、こっち、だいたい百年ほどの間に、ということでございます」
「ふうん、じゃァ死んじまった者がいるわけだ」
「生き残っているのは一人きりですよ」
これは意外な言葉だった。
「根を詰める仕事ですからねえ、一所懸命に作る者は、みんな早死にしてしまいます。ろくな仕事が出来ないようなわしのような者が長生きするというわけで」
老人は歯のかけた口をあけて、自嘲の笑い声を立てた。

「その一人というのは、誰だ」
「鯉三郎でございます」
呆気ないほど、老人はずばりといった。
「鯉三郎？……まるで、役者の名前だな」
「そうでございますよ。女形で、ひと昔前には大変な人気だったんですがねえ。七、八年前に、すっぱり舞台から下りて錺職になったので、何しろ、女形だから、指が細くて、しなやかだ。若いから眼もいいし、こんな細工が出来るのは、鯉三郎しかいません」
「そうか、その鯉三郎の住居はわかるか」
「芝居町のすぐ裏にいますよ。もっとも、へんくつだからねえ、気が向かねえと、仕事をしねえで、化粧ばかりしてますぜ」
「化粧だって？」
「へえ、女形だからねえ、女姿でねえと落ち着かねえとか」
妙な話だ。何やら無気味だが、いってみるしかなかった。
三沢信吾は、錺職の鯉三郎を訪れる前に、お久をたずねた。
「どうなさったんでございます」
「お前のことが心配になって来た」
と、かれは言った。
「小万と小染が殺されたのだ。この次は昔小万のお前が危ない」

「ほほほほ、そんな。こんなお婆ァさんの首なんか狙いはしませんよ」
「いや、年齢ではあるまい。おい、知っているぞ、昔はお奉行と……」
「あらあら、そんな昔のことを。ともかくお茶でもあがっていらっしゃいまし」
舟宿の女将、といっても、大したことはないが、料亭である。使用人も男女七、八人はいるし、昔馴染みの客がついているので、内処は裕福らしかった。
「実はな、これから鯉三郎という錺職人を訊ねてみようと思っているのだ。たぬき湯のほうは埒があかねえ」
「そうでしょうねえ、混浴だということは、お咎めを受けて、暖簾をおろすなんてことになると……」
「そんな野暮はしねえさ、おれがそんな役人風を吹かすように見えるのか」
「見えませんよ。でも、銭湯では心配なんでしょ」
「らしいな。だから、打ち切った。鯉三郎というやつは、なんでも、もとは役者だったようだな」
「ええ、聞いていますよ。女形でひところ鳴らしたんですよ。あたしゃ荒事が好きだから、女形は好きになれません」
「ま、舞台で見る分にはいいがね、そんな家にいくのは、どうも、気が進まねえ」
「あら、そんなこと言ってちゃ、お役がつとまらないじゃありませんか」
「どうやら、一人前の町方同心にはなれそうもないな」

信吾は苦笑して、
「そういうわけでな、お前に一緒にいって貰いたいのさ」
「あら、そんなことだったんですか。道理で」
「なんだ」
「ほほほほ、いいんですよ。御一緒しましょう」
「なんでも、いまでも女の格好をしているようだな」
「ええ、聞いていますよ」
「気持ちが悪いだろうな」
「おかしいんですか。女形だから女の姿はやめられないらしいけれど、そのくせ女好きなんですよ。それに、またそんな女男を、好きになる女がいるんだから、わけがわかりません」
「ほう、そいつは面白いな。女形なんてのは、陰間だろう、男好きなのが普通じゃないのか」
「だから、おかしいんですよ。鯉三郎といえば、若い女には、まだ千両役者に見えるのかしら」
あとから考えれば、ここで、そんな話をしたことが、鯉三郎の口を封じることになったのかもしれない。
そのころ、魔手が鯉三郎に迫っていたのである。

女形の鯉三郎は、舞台を下りて錺職人になってからも、女姿でなければ落ち着かないというのである。米粒に観音様を彫るような、細かい仕事をするだけに、繊細な神経を持っているのだろう。歌舞伎芝居の女形はたいてい男の客をとるものだが、この鯉三郎は、その格好で、女の客の相手をする。

職人になっても、女装をやめないだけに、女遊びの方でも、役者のころと同じだった。

その日も、近所の娘を引きこんで、楽しんでいた。

女の姿をしているが、することは男なのだから、まともな女は嫌がるが、遊び飽きた女や、変わったことを好む女たちは、鯉三郎のそんな姿に、異常な興味を抱くらしかった。

「おきよさん、あたしゃ前から、お前を抱きたいと思っていたのさ」

「あたしも、鯉さん！」

「お前が、いつも家の前を通るとき、腰を振って歩く姿がたまらなかったよ。ほんとうに、格好のいいお臀だねえ」

「あっ、鯉さん……あたしゃ、もう気がへんになりそう」

「こうかえ、こうかえ」

鯉三郎は、熱く怒張したおのれを、すでにしとどなおきよの裡にねじこんで妖しく身をくねらせながら、両手で女の臀を抱えるようにし、はげしく躍動していた。

雨戸を閉めきって、行燈を点しての行為である。

昼間から雨戸を閉めているのは、尋常ではない。

だが、鯉三郎は、

「気が散って、いい仕事が出来ないから」

といって、日ごろから、暗い部屋で行燈を点して仕事をしているので、近所でも怪しまない。

あるいは、この男、このひそかな楽しみのために、日ごろから伏線を張っていたのかもしれない。

部屋が暗いと、女は大胆になる。はじめての娘でも、まず女装の鯉三郎に気を許し、暗いからと安心してからだを開くのだ。

その計算通りに、この若い娘もやって来たのか。

島田の髷を崩して、ハアハア息を洩らしながら、

「鯉さま、鯉さま……」

と、しがみついている。

初心らしいが、好き女らしく、股間にあふれさせて、かれを受け入れると、長屋中に聞こえるような声で、よがりはじめたのだ。

「いけないよ、声をあげちゃァ」

と、鯉三郎はさすがにたしなめて、

「ここは野中の一軒家じゃないんだからさ。鼠が出たり入ったりしているんだ」

女を抱いていると、鯉三郎は男の優越感を感じるのか。

しかし、もしも第三者の眼があれば、おかしな格好だった。女同士の快楽と見え、実は男のもので、女に満足を与えているのだ。

長屋で白昼から楽しまれては、近所迷惑だった。

だが、鯉三郎という男が、もともと女形で、その上、へんくつと来ているから近所では、特別扱いしている。

村八分というわけではないが、殆ど長屋づきあいということをしない。役者が舞台でどんな格好をしようとも、それは役の上だからいいが、日常の生活に女の格好をされては、何とも勝手がちがって、長屋のつきあいは出来なくなる。

それだけに、昼間から、女となにをしようと、誰にも何もいわせない変なかたちが出来ている。

因みにこの時代は、人権などないから日常を町名主や町の肝煎りなどに看視されるのは当然とされていた。

町役人は、町奉行所の下部組織のようになって、怪しいと見たら、お届けの義務を課せられている。

風紀が悪い、というのも、町役人の仕事である。したがって、品行が悪い青年子女は、いつの間にか町役人や町奉行のブラック・リストに載っている。

しかし、鯉三郎の場合、やはり女形の役者だったという前身が、許容させるものがあったようである。

それをいいことに、女を引きこんでは、こうやって、昼日中から羞ずかしい声をたてているのだった。

「ああ、鯉さま、もっとゆっくり……あ、痛い」

女は小さな声をあげた。

鯉三郎にひしとしがみついた。

こうなると、鯉三郎は、男に戻って、ぐいぐい責め立てるのだ。

しかし、姿かたちは女だから、異様なものだった。

誰が見ても、この図は、女同士のト一ハ一に違いなかった。

ところが、いつの間に、どこから忍びこんだのか、さっきから、一部始終を見守っている男がいた。

頭巾をかぶっている。二人の痴態を見ながら、傍へ寄っていったのも夢中の二人は気がつかない。

女は尻をなでられたときも、かれがやったことと思いもせずに、鼻声を立てていた。

件の男は、突然、狂い立ったように、屏風のかげから立ち上がるや、女をとらえ、固くなった肉塊をあらわにして、

「どいてろ」

といって、娘の上にかぶさった。娘は悲鳴をあげた。放ったばかりの鯉三郎のそれと違って逞しい男だった。娘はうしろから犯され、両手で、畳に爪を立てた。

「放して、放して、お願い……」
そんな声に耳を傾けない連中である。
男は、やがて、満足した。
「死ぬには早すぎるなあ」
これは娘のことを言ったのだ。
娘の乳房を弄びながら、
「いいだろう、いいだろう、もっと、いろんな手を教えてやるぜ」
娘のくびに両手をかけた。
娘が犯される間、鯉三郎はただ呆然となっていた。
もともと役者などというものは、こういう際に対処するには、愚かすぎた。
もっとも女形だから力はない。本来、逃げ出すところだが、あまりにも突然だったので、呆然となって、その激しい行為を見ているだけだった。
放ったあとで、気が抜けたときでもある。
漸く、我にかえったのは、覆面の男が娘のからだから身を起こしたときであった。
「ひ、人殺しィ……」
と叫んで逃げだそうとした。
が、ぐいとうしろから引き止められた。
裾を踏まれて——いたのではなかった。

脇差が、ぐさっと、裾を畳に釘付けにしていたのである。
「あっ」
仰天してふりかえったところに、男が見えた。
痩せた浪人者である。
いつの間に入って来ていたのか、鯉三郎はただ恐怖で、身が竦んだようになっていて、忍び寄った気配をすら、さとることが出来なかったのか。
「ああ！　助けてえ」
眼の前で、人が殺されたのだ。
それも、いままで鯉三郎と乳繰りあっていた女である。
白刃の鈍い光が、今度はかれの番であることを無言のうちに教えていた。
精一杯、叫んだつもりだったが、咽喉が塞がれたように、大きな声にはならなかった。
逃げようにも逃げようがない。
そのように覆面の男は、どうだ、というように腕組みをして、胡坐をかいているのである。
嘲笑っているのが、眼だけでもわかった。
その眼は、死神の眼だった。鯉三郎は、
「助けて、助けて、死にたくない……」
そのとき、はじめて、覆面のなかから、くぐもった声が聞こえた。
「人間、誰だって死にたかァねえ……」

ぞっとするくらい、無気味な声だった。
「……」
「だが、死ぬのさ」
「……」
「お前は、な」
「いやッ、いやよ、助けて！」
「お前は、死ぬことになっている。いま、ここで」
「そんな、誰が、そんなことを、勝手に人の死ぬことを、誰が決めたのさ」
「おれが決めた」
当然のことのような言い方であった。
「そんな……」
「お前は死なねばならぬ」
「ひ、人非人（ひとでなし）！」
「ああ、善人じゃねえさ」
ゆっくりと立ち上がった。脇差が抜かれた。鯉三郎は解き放たれた鳥のように走りだそうとした。刹那、その背に刀が落ちた。
鯉三郎は、自分の流した血のなかでのたうっていた。
夥しい血汐であった。人間のからだからこんなにも血が出るものかと思われた。

血は、畳の上を生き物のように流れ、鯉三郎が仕事場にしている板の間の方へ流れて来た。
「し、死にたくない……」
血の中でもがきながら、かれは、呪咀の声をあげていた。
「な、なぜ、あたしを殺すのかえ、何もしていないのに、何にも……」
全くかれにしてみれば、不可解だったのだ。
娘とは合意の上での、白昼からの秘そか事である。
誰にも文句をつけられる筋合いはなかった。
だから、突然、この男たちに襲われたのも、全く予期しないことだっただけに娘が犯され、殺されるのを、まるで悪夢でも見ているように、呆然と見まもっていたのだ。見ていたというより、ただ虚ろな眼を向けていたというほうが正しい。
そこへ突然、もう一人の男が襲って来たのだ。
背後からの一太刀で、もろくも鯉三郎は突んのめった。
一太刀は深く、致命傷だった。
かれが苦悶しているのを、斬った男は凝っと楽しむように見ていた。
「苦しいか」
と、くぐもった男がまた言った。
「怨むなら、あいつを怨め」
「あいつ？……」

「町奉行だ」
「え？」
「遠山金四郎だ。あいつを怨め、あいつのせいだ、お前が生首になるのは」
「な、生首？……あたしが、いやだ、いやだ」
「泣くな。どうせ女形の役者で、さんざんいい思いをしたのだろう。泣かせた女どもの怨みと思え」
「そんな、そんな……」
もがいているやつの首すじに、血刀を押しあてた。ぐいと、力をこめた。
が、刃は骨に当たったようだ。
「くそ」
かれは立ち上がり、血刀を一閃した。血が飛んで、なかまの顔にかかった。
「ひでえな」
と、娘を犯して殺した男はぺろり、拭った。
それから、生首の髷をつかんで持ち上げた。
「案外重いぜ」
「さあ、そこらの半纏にでも包むがいい」
包んだ生首は、そのまま、桶に入れて運ばれたが、なんと、元小万のお久の料亭にほうりこまれたのである。

鯉三郎の髷に結ばれた書状には、
「遠山金四郎どのへ進上」
と、あった。
お久は仰天した。生首はまだ血をしたたらせていたのである。

「なに！　生首がお久のところに!?」
金四郎は愕然となった。
「とうとう……」
お久のところにまで、魔手は伸びて来たか、という感じだった。かれはただちに、馬を曳かせた。一刻の猶予もならなかった。
斬りとられた首が、細工師の鯉三郎のものだという。〝鬼面党〟を名乗る無法者たちの行動が、尋常一様のものではないことを、その迅速さが物語っていた。
「私が、かの者の家を訪れたとき、すでに、二つの死体が転がって居りまして、肝腎の鯉三郎の首がなくなっていたのでございます」
と同心三沢信吾は説明した。
「お前が、鯉三郎の家を訪れることを、知っていたことになる」
と、金四郎は、判断した。
「はあ、でも偶然の一致だと思いますが」

「なぜだ。偶然ということは、滅多にあるものではないぞ」
「それでも……」
と、言いよどんで、
「私が行くことを知っていたのは、私だけで……いや、もう一人は。そんなことはない、そんなことはありませぬな、やはり偶然……」
「なんだ、もう一人というのは」
「はあ、他には洩らしておりません。話したのは、女将にだけで」
「なに、お久に話した？　お久が、そんなやつらのなかまであるはずがない。お久のところに生首が投げこまれていたのであろう」
「はい、ですから、これは全くの偶然でございます」
「――待てよ」
金四郎は、視線を聖天様に投げた。
乗って来た馬が、石段下の松につながれて、草を食んでいる。
「一体、その話は何処でしたのだ」
「はあ、女将の店で……あっ」
「お久一人ではあるまい。ああいう店で話したのなら、使用人なども小耳にはさんだであろう」
「そうでした、そのことに気づきませんでした。店の者だからと、安心していたところがあります」
「使用人を調べることだ、たとえ一味でなくとも、どういうつながりがあるかもしれぬ」
「はい、では女将を呼んで」
「いや、お久には、わしから話す」
金四郎は掘り割りに臨んだ部屋に通ると、念のために障子を開け放させた。
「お久、用心せねばならんぞ、生首を投げこんだのは、今度はお前だという予告だろう」
「そうかしら、ああ恐い。あたしゃ、もう……当分、眠れそうにありませんよ。夜はうなされそうで。ねえ、金四郎さま今夜は一緒に……泊まって下さるでしょう！」
「そうしてやりたいがな。泊まったら、焼け棒杭に火がつくぜ」
「あたしゃ構いませんよ。早くそうなりたかったんだから」
「そうなりゃ、いよいよ、お前が生首にされるかもしれぬ」
お久にしてみれば、金四郎さえ傍にいてくれたら心配することは何もない。
「ねえ、金四郎さま、下手人を捕らえにゆくよりも、あたしの傍にいて下さいな」
と、お久はにじりよって、
「ねえ、お願い、後生一生のお願いだから」
「馬鹿だなあ、下手人を捕らえさえすりゃお前は心配することは何もねえのさ」
「あら、金さんが、そっちにいっている間に、ここへやって来たら、あたし、どうにもなりゃしない」

「この家にいりゃ、安心だ」
「安心じゃありませんよ、みんな薄情なんだから、いくら、あたしが目をかけてやったって、不満ばっかしなんだから」
「使う方と、使われる側とじゃァ、そういったもんだ」
「ねえ、お願い！」
お久は、ぱっと、抱きついて来た。
「おい、あぶねえ」
幸い、ほかに人がいないからいいようなものの、女将が、こんな行為に出たら使用人の手前は困ってしまうのだ。
お久だって、よぽど切羽つまった心境なのだろう。
「ねえ、金さん、あたしを好きなんだろう、だったら、お願いよ、ね、ね……」
唇を寄せてくる。甘い感触が甦えった。
昔を思いださせる、お久の唇だった。こんな際でも、化粧を忘れないのは、水商売の馴れか。
お久の柔らかいからだが、しんなりとのしかかって来て、金四郎の欲情をかき立てる。
「おい、いい加減にしねえか」
「お願いよ、金さん、抱いて、ね、抱いて！」
使用人の中に、下手人一味がいるのではないかと思って来ただけに、この座敷から、かれ

らを遠ざけてある。
熱情が吹きこぼれるようなお久のからだにせがまれて、金四郎は、とうとう、お久を抱いてしまった。
行燈は点けっ放しである。明るい部屋の中で、お久のからだは、昔のように美しく見えた。色の白い女の得なところであろう。昔よりは、幾分、小肥りになっただけで、行燈の明かりのもとに見る、その部分も、みる貝は黒ずんでいなかった。
「いやよ、金さん、そんなところ見ちゃァ」
と、甘えた声を出すのも、昔の通りで、金四郎は、女を納得させるために、つづけて二度放ったことになった。
「——やっぱり、金さんねえ」
と、ほつれ髪をかきあげながら、彼女は言った。
「これで、お奉行でなかったら、ほんとにいいんだけど」
その奉行になったために、小万や小染が生首にされたことを考えるとたしかにそうなのだ。
お久を安心させたところで、金四郎は、鯉三郎の家へ出かけていった。現場を確かめる必要があったのである。
金四郎は、鯉三郎の家にゆく前に、お久に念を押した。
「いいか、なるべく、一人にならないことだ。必ず、誰か傍にいるようにしておけ。一人よりは二人三人、大勢のほうがいい、それだけ、悪心を持ったやつも近寄り難くなる」

「ええ、大丈夫ですよ」
「なんだ、急に、元気になったな」
「だって……もう何年ぶりかしら」
ほんとうなのか、何年も男なしでいたというのだ。
金四郎に惚れていた小万の昔を思い出すと、その言葉も、あながち、嬉しがらせではあるまい。
実際、お久の秘所は、荒れていなかったし、金四郎に抱かれたときの喜びようは、まるで、処女のような羞ずかしがりかただった。
その様子から見れば、彼女が、男から遠去かっていたというのは、嘘ではなさそうだった。
それだけに、金四郎に抱かれて、長い時間ではなかったが、激しく交わったことで、一種の安堵感が出たのであろう。
金四郎が鯉三郎の家にゆくと、町内の自身番で茶を飲んでいた三沢信吾があわてて飛びだして来た。
「これはお奉行、御直きじきのお出ましで」
「お前がだらしないからだ」
「面目次第もございません」
「芝の後、変わった様子はないか」
「はい」

「下手人らしい人影を誰も見た者がないというのも不思議だな。真っ昼間のことだぞ」
「はァ、それが、どうも」
と、信吾はまわりを見廻して、
「このあたりの連中は初めっから、上役人に協力するという気がないのですから」
浅草といえば繁華なのは両国の盛り場にも勝るが、もともと場末である。
浅草寺があっただけの土地だ。
そこへ吉原遊廓が引っ越して来て、猿若三座の芝居町も出来た。
ために、山谷堀の船宿が料亭としての発展をして、繁昌な土地になったのである。
だが、もともとは場末だし、人柄も悪い。
色里、色街の界隈は、無頼者が多いことは洋の東西を問わず、変わりがない。
そうした土地柄だけに、町民は、進んで町奉行所に協力しようという者は少ない。
協力の姿勢を見せただけで、裏切り者扱いをされるのだ。善良な者も、それが恐いから、役人を見ると、そっぽを向く。
「仕方がねえ、町奉行がこうやって、おみ足を運ばなきゃならねえ」
と、金四郎は苦笑した。
鯉三郎の家の前には、町内の者が数人でひそひそと話をしていた。これは見張りも兼ねていたのである。金四郎は中へ入ってから、狭い家の中を眺めた。血のあとなどはすっかり拭われていた。

部屋の中は、普通の家の中と違っていた。
壁という壁、屏風はもとより、錦絵が貼ってあるのだ。
いささか異常なほどである。
部屋に入るなり、金四郎は眼を瞠った。
「こいつは……まさか、女形のころの錦絵じゃあるまい」
近よって見ると、そうではないことがわかった。
いずれも春画なのだ。男と女の妖しくからみ合った図柄で、それも〝危な絵〟と呼ばれる、スレスレの絵から、直接、そのものずばりの春画ばかり。
春画の蒐集家というのは、よく耳にする。
町人の隠居などで、金とヒマにあかして、集めている者もいるが、意外にも、旗本の隠居や、坊主などにも多いのだ。
大身の旗本で、先祖伝来の家宝と称して、火事のときは、必ず持ち出すようにと、端々の者にまで厳命していた老人がいたが、その老人がぽっくり死んだあと、開けてみた家人たちが驚いた。すべて春画だったという。
そういう類いにしては、この鯉三郎の家は大っぴらすぎた。
細工師としても、女形あがりで、はじめから特異な存在として見られていたから、隠す必要もなかったのであろうが、これほどまでに、数が多いと、さすがに唸らざるを得ない。
「妙なやつだな。いずれ、変死する運命だったのだろうが」

と、金四郎は首をひねって、
「何かあったか」
と、三沢信吾を見た。
信吾は屏風に貼られた春画を、熱心にのぞきこんでいたのである。
「はあ、これが、そっくりだったものですから」
と、掌の根付けを見せた。
ひょっとこの根付けである。
裏に精巧な春画が浮き彫りにしてある。
これと同じ図柄の絵が貼ってあることは、細工師鯉三郎は、これを参考にして彫ったことを物語っていた。
「なるほど、同じ格好だ」
「はい」
「この根付けを鯉三郎が彫ったのは間違いねえ、問題は、これを誰に売ったか、だ。そいつがわからねえことには」
金四郎は、凝っと錦絵を見ていたが、
「こいつは何だ？」
何やら字が書いてある。
その字は、河八、と読めた。

「河八、何だ、こりゃァ……人の名前だろうが、妙な名だな」
「河八？　聞いたことがあります」
と、信吾は考えて、
「芸者と話をしているとき、そんな名前を、小耳に挟みましたが、あっ、そうでした。たしか幇間とかいう話でした、河八」
「幇間か……うむ、それで読めた」
金四郎はすっくと立ち上がった。
都鳥河八という幇間に関りがある、と、金四郎は睨んだ。
「河八の家はどこだ」
三沢信吾が表に出て、屯ろしている町役人に聞くと、すぐにわかった。
「町はずれの笑い地蔵の傍だそうです」
「笑い地蔵？　なんだそれは」
「お地蔵さまが笑っているので」
幇間は男芸者である。
宴席で滑稽を演じて客の御機嫌をとる。
むかしは、芸者といえば、文字通り芸をする者、芸能達者を称したものだ。
宴席もしたがって、男女の芸者が侍った。
遊廓にも芸者がいた。これは幕末までいたが、男と女ではやはり、女のほうが三味線や踊

りの色香にふさわしいので、男ははみ出してしまう。
そこで生き残ったのは、男でなければ出来ない滑稽を演じる者たちだった。
これが幇間と呼ばれた。
タイコモチ、と読む。太鼓持ち、である。
客が叩いて楽しむ小太鼓を捧げ持つ従者の意もあるが今日でいう、ヨイショの意味が強い。
タイコ、とも略称された。
野ダイコ、というのは、野卑なタイコモチ、の意で、つまり田舎の幇間という蔑称だ。
男はどんな身分の低い者でも、男らしく生きる事が要求されるから、客の御機嫌とりくらい、浅ましいことはない。
このタイコ持ちの都鳥河八は、山谷堀では、もっとも客がついているという。
それだけに、何でもする。
芸者の取り持ちから、あらゆることで少しでも祝儀にありつこうとする。
こういう連中を、金四郎は嫌いだった。
したがって、かれは女遊びをするのにも、幇間など呼ぶことをしなかった。
幇間に御機嫌をとり結んで貰うなどという、大尽遊びは、女遊びでは邪道だという気持ちがある。
（幇間なんぞに、タイコを叩いて貰わなくちゃ、女にモテねえなんてェのは下の下だ）
そう思っているのだ。

三沢とともに町役人の案内で、笑い地蔵のところの家にいってみると、不在だった。
独り住居だから、どこにいったかわからない。
「こうなりゃ、一軒一軒、アタってみるしかねえ、早く探せ」
金四郎は命じた。
町役人が、料亭に飛んでいった。
山谷堀の色街はあまり広くない。隆盛をきわめたときでも、せいぜい三十軒ほどだから、すぐにわかった。
「花の家でございますよ」
「どこだ」
「御案内いたします」
金四郎は、漸く、鬼面党の正体がつかめる、と思った。
その花の家では、河八が、尻からげに手拭いでスットコ被りをして、踊っていた。
山谷堀の花街は柳橋と同じく船宿が料亭になったものである。
この花街は北郊にあるために、取り締まりもゆるやかだから、通人粋人は、吉原遊廓にくるついでにちょっと立ち寄ったまま、腰を据えてしまうということが多かった。
(遊ぶのなら、堀がいい)
という評判が高くなって、客が増え、花街として繁昌したのだ。
「――花の家は裏口はどうだ」

と、金四郎は、道を急ぎながら、訊いた。
幇間の河八が、鯉三郎殺しに関っていれば、町方役人が来たと聞いて逃げ出すに違いなかった。
「裏口を固めてから、表から入ってゆくのだ」
と、金四郎は注意を与えた。
「へえ、裏口はありますがね。路地になっていますから、表の通りへ出てくるだけで」
路地の突き当たりは堀の石崖の上で、海へ飛びこむしかない。
「それなら、心配はねえ、取り逃がすことはあるまい」
むろん、幇間が下手人というわけではない。
小染を殺した連中と、何か関りがあると睨んだだけのことだ。
町役人が入っていって、女将を呼びだした。
「お奉行さまが、直々のお尋ねだ。幇間の河八を呼んでくれ」
「まあ、お奉行さまが」
信じられない、という顔で、女将は金四郎を見た。
金四郎をよく知らないところを見るとこの土地に来て、日が浅いのだろうか。
「蔵前のお客さま方なんですよ。河八はお気に入りで、よく呼んで下さるんで」
「それがどうした、殺しの捜査なんだぜ、え、小染や小万が殺されたってェのにそいつの邪魔をしようってェのか」

「そういうわけじゃござんせんが、でも、せめてお客さまがおひらきになってからだって……」

愚図愚図と、そんな言いわけをするのは、その間に仲居に気を利かさせる魂胆らしかった。お銚子を盆に乗せた仲居が二階にとんとんと駈け上がると、障子をあけて、河八の方を見た。

河八は尻を振りながら、さかんに愛嬌を振りまいていたが、仲居が目まぜをしたので、踊りながら、近寄って来た。

「町奉行所からお役人が……」

「なんだって!?」

河八は、踊りをやめた。

「おい、どうした」

蔵前の客というのは、米問屋である。景気がよくて、祝儀をいつも弾んでくれるのだ。

「旦那、気分が悪いんで、これで御免なすって」

ぺこぺこ頭を下げると、廊下へ出た。二階の欄干から屋根廂の上へ出ようとした。

階段を上がってくる足音が聞こえたのである。

幇間の河八は顔色を変えた。

町奉行所役人、と聞いただけで、かれが逃げ出そうとしたのは、何かうしろ暗いところがあるのに違いなかった。

先に階段をあがって来た三沢信吾が、目ざとく、見つけた。

「や、河八か」

むろん、これに返事をせず、河八は欄干から屋根廂へ出た。

窓は掘り割りへ臨んでいる。

下は舟入りである。

「待て！」

「ひやァ御勘弁」

河八は、屋根の上をいったり来たりしながら、

「わっちは何もしていねえ」

「やい、逃げるな、こっちへ来い」

「な、なんにもしていねえ、なんにも、助けておくんなさい」

「助けてやる。だから、こっちへ来い」

だが、河八は恐怖の色を浮かべて、戻ろうとはしない。

「なぜ逃げる、逃げるな」

「なんにもしねえのに、追われることはねえんだ、よしておくんなさい」

「だから、戻って来い、話を聞くだけだ」

「いやなこった、お白洲へ連れてゆかれたら、ろくなこたァねえ」

幇間という職業が、常に被害を受けているのか、町奉行所というだけで、恐怖と不安に駆

られるのか。

「河八、戻って来ぬか。ただ話を聞くだけというのにわからぬか」

「わからねえ、なんにもしちゃァいません」

「だから……」

若い信吾はいらいらして来た。

金四郎はゆっくりと階段を上がって来ると、この様子を眺めながら、

「信吾、追い詰めるな、気の小せえやつらしいぜ」

そんな言葉は、聞いていなかったようである。

屋根廂の端までいって、隣家の屋根へ飛び移ろうとした。

「危ねえ！」

と、三沢信吾が身を乗りだしたが、そのときは、河八のからだは、もんどり打って、堀に転落していた。悲鳴とともに、すさまじく水飛沫があがった。

「やあ、落ちやがった」

誰かが叫ぶのが聞こえた。

屋根廂の上をうろうろしている河八をあちこちの家からはらはらしながら見守っていたのであろう。

「た、助けてくれェ」

いったん沈んだ河八は、ぽかりと浮き上がって来て、助けをもとめた。

ぱしゃぱしゃ水面を叩きながら、

「おぼれるよう、助けてくれェ」

ほんとうに泳げないらしい。

「だらしのねえ野郎だ、信吾、助けてやれ」

金四郎は笑いながら言った。

信吾は下へおりてゆくと、近くにいた船頭に命じて、助け上げた。

憎しみの刃

幇間の河八は、堀から助け上げられても、ヒクヒクして、まるで死にかけているような塩梅だった。

酔って踊っているところに踏みこまれて仰天したのだ。

その上、堀に落ちた。泳げないだけに驚愕も大きく、動顚してしまっている。

「おい、せっかく助けてやったが、知っていることを隠していると、また叩きこんでやる」

と、三沢信吾は威した。

「へ、へえ、何でもお話ししますって」

「こいつだ」
と、信吾は、ひょっとこの根付けをとりだして見せた。
「知っているだろう」
「へ、へえ……」
「こいつを鯉三郎に注文したのは、きさまだな」
「へえ、そうですがねえ」
「それで、誰にやった？　やったのか売ったのか、まさか、落としただなどとはいうまいな」
信吾が訊問しているのを、金四郎は凝っと見ていた。
恐怖で引き吊った顔はしているが、河八は嘘をついている様子はない。
落としたといえば、小染殺しの下手人の一人と見ることもできる。
だが、落としたとはいわなかった。
「へえ、孝悦の旦那に頼まれましてねえ」
と、河八は言った。
「孝悦、何者だ、そいつは」
「へえ、なんてェのか、狂歌師ってんですかねえ、妙ちきりんな狂歌ばっかり作っている旦那で」
「その孝悦は、いくつくらいだ」

「そうでんね、七十過ぎかなあ、ヨボヨボですよ」
あの下手人の一人ではない。小染を犯したりするなかまにはいないだろう。
金四郎は、すぐに孝悦の家を訪ねた。
孝悦の家は橋向こうで、寺の傍にあった。金四郎たちが声をかけると、咳が聞こえて、病床から、首をもたげて、こちらを見た。
（なるほど、この老いぼれようじゃァ不埒なことは考えはしまいが……）
と、金四郎は納得がいった。
「おい、この根付けに見おぼえはねえか」
もう眼も悪いらしく、手にとって、不思議そうに眺めている。
「こいつを、幇間の河八に頼んだそうだな。お前の持ちものか」
「――へえ……あっ、これでございますか」
と、漸く、わかったらしく、
「いいえ、あたしも、さる御方から頼まれましてねえ。へえ、こういう注文品など、あたしどものような貧乏人は、とても……」
「そうだろう」
「そいつの名を聞きてェのだ」
そういったとき、裏の方でちらりと小袖が動いた。
その女の動きが、金四郎の眼を奪ったのである。

（あの女!?）

はっとなった。

狂歌師孝悦を訊問に来たかれらである。

その女は、孫か娘かわからない。かれらの様子を見て何故か、裏口から急いでどこかへ駆け出そうとしたのだ。

「待て！」

金四郎は声をかけた。

女はちらりと振りかえったようだった。が、すぐ聞こえないような顔で、路地を小走りに出てゆく様子だ。

「信吾、あいつを」

言下に信吾は走り出している。

「おい、待て！」

信吾は走りながら朱房の十手を抜き出した。

「待たぬか、お上の御用だぞ」

それでも逃げるようだったら、十手を投げるつもりだった。

が、女は、そのつもりはなかったらしく、

「あの、何か」

と、不審げな顔で立ち止まった。

「どこへ行くつもりだ」

「あの、ちょっと、用事が」

「何の用事だ。やい、お上を舐めるんじゃねえ、お前は孝悦のなんだ」

「孫です、お品と申します」

「お品か、どこへゆく気だ。用事は用事でも、お上には言えねえことだろう」

信吾の下手な訊問で、かえってお品は救われたようだった。

「あたし……好きな人に会いに行くんです」

そう言われてしまうと、信吾も、それ以上は追及出来ない。

金四郎は笑いながら、声をかけた。

「行かせてやれ、人の恋路の邪魔をするやつは、だ。犬に食われちまうぜ」

そして、お品が安心して歩き出したあと、目明しの七平に後をつけさせた。

七平は、見え隠れに、お品を尾行していった。

お品は今戸橋を渡って小走りにゆく。

下町の女らしく、裾を押さえながらであるが、川風が橋の上に吹き上げて、白くすんなりした脛がちらちらした。

小さくしまった臀部が、くりくり動いてゆく。

七平はごくり生唾をのんで、

（いい女だ）

と、思った。
お品は尾行されているとは知らず、猿若町にやってきた。
芝居町である。
猿若三座の町で、芝居茶屋が並んでいる。
お品は小菊茶屋に入っていった。
（へえ、あの娘が……）
役者買いでもやるのかと、七平は合点したが、そのことを戻って告げると、
「小菊茶屋だって……そうか、それでわかった」
と、金四郎は頷いた。
（小菊茶屋なら、あの馬道の権蔵に頼んで、おれを焼き殺そうとしたときの……）
金四郎は昔の事件を思い出した。もうとっくに権蔵は死んでいる。なんでも、やくざなかまの喧嘩で殺られたという話だった。今度のことに小菊茶屋が関っているとすれば、
（兄の……いや、まさか、そんなことはあるまい。あの茶屋も代が替わっているはずだし）
あのときの女将も、生きていたとしても、とうに老婆になっているはずだ。兄の密命を受けた吉川幸太夫もすでに他界している。だが、孝悦の娘が小菊茶屋に駆け込んだことは、小染や鯉三郎を殺害した下手人と関りがあることは否めない。
「ふん、こいつァ一筋縄ではゆくめえ、こっちも術を使わざァなるめえぜ」
金四郎はにやりと笑った。

半刻ほどして、素知らぬ顔でふらりと入っていった。
お品が帰っていったあとである。
「女将を呼んでくれ」
座敷へ通るなり、金四郎は言った。大身の旗本が、芝居見物にきたという格好である。芝居見物といっても、演しものがどうか、どの役者に執心とかいうものではない。遊びの感じが、その顔つきにも、からだつきにも出ている。遊冶郎を気取るのならお手のものだ。
「お出で下さいまして、有難うございます。わたくしが、この家の女将でございます。安と申します」
「わしは、番町の……深川、金作だ」
「はあ、深川金作さま？」
一寸、妙だと思ったらしい。が、そこは、ソツなく、信じこんだような顔で、
「お旗本でいらっしゃいます」
「ああ、よくわかったな」
「それにもう、お国の方とは、違いますもの」
お国侍の野暮なところがまるでない。粋を絵に描いたようだと言おうとして、女将のお安は、ほほほほ、と掌の甲を口にあてて、笑った。
若い。まだ二十代のはじめであろうか。
前の女将の娘かもしれない。そう思えば、面ざしが似ているようだ。

「うれしいことを言うぜ。客にはいつもそういうのかえ」
「あら、そんな。色街で育った女は、野暮が何より嫌いでございます」
「おいらもそうさ、この世は粋でなくちゃァな」
「ほんとうに、男女の間も、楽しく、さらりと遊んで」
どこまでお愛想か、ちら、ちらっと、流し目が、ゾッとするほど、色っぽい。
「こういう店は、女将のような綺麗すぎる女がいちゃァ、繁昌すまいぜ」
「あら……どういうことでございましょう」
「とぼけなさんな。女形にしたって、女の客にしたって、ワリを食うってことさ。女将の前に出たら、色褪せっちまって」
「おやおや、大変……」
「おいらも迷いそうだ」
と、金四郎は情のこもった眼で、お安を見た。

番町といえば、旗本屋敷ばかりだから、番町の、といえば、旗本ということがわかる。
だが、深川金作などと、口から出まかせにいった金四郎は、芝居茶屋〝小菊〟の女将に手を出している。
以前の女将は大年増だったが、代が替わったと見えて、このお安は若い。
若いだけでなく、美しい女だし、色っぽい。

(悪かァねえ……)
金四郎は、浮気の虫が動きだすのを知った。
もっとも、
(御用のためだ)
という弁解がある。
あの鬼面党の連中を突き止めなければならないのだ。
と、言いながら、凝っと眼を見て、手をつかんだ。
「あれ、何を……」
「嫌がるこたァねえ」
「……」
「おめえだって、まるきりの生処女だというわけじゃあるまい」
「放して！」
「放すさ」
ひょいと、放す。ほっとしたところを、ずいと膝をにじらせて、次の瞬間、抱いてしまった。
「あ……いけませぬ」
「嫌いじゃねえだろう」
「……」

「使用人のてまえ、困るってのだろう」
「人が、来ます」
「来やしねえよ、こういうときのために孔雀やコブ巻きがあるのさ」
金四郎は手馴れている。
さっさと、女を転がして、前裾をかき立て、手をさしこんでいた。
「あ、いけません、手を……」
「おっと、今度は、なかなか、放れねえ、もう入ってらァ」
文句をいうどころではない。
もう、じっとりと濡れて、指をするりと咥えこんでいる。
女の方からいわせれば、無理に差しこんだということになるだろうが、金四郎の指はもう、遠慮なく、指のつけねまで濡らしていた。
「ゆ、許して、お客さま」
「金さんと呼びな」
「……」
「金さんは本名だ」
「え!? それでは」
「本名だからいいだろう。金さんと呼ぶがいい」
「き、金さん……」

もう、女体は、痺れていた。
処女ではないまでも、男はそう知っているわけではあるまい。
女体は、もう逃げるどころか、かえって、しっかりしがみついてきている。
「いい気持ちにしてやる」
前裾を左右にひらいて、ぱっと、上へあげた。
女のすらりとした下半身が剝きだされた。眩しい眺めだ。
花柳界に於ける隠語で、〝孔雀〟というのは誰でも知っている。
が、隠語の通例で、表沙汰にならないから、いつの間にか、少しずつ、意味がくずれてくる場合が多い。
芸者が帯を締めたまま、裾を大きくひろげて、男を迎え入れるのが、孔雀の羽を広げたような華麗さで、その文字通りの美しさに眩惑されて、細かい点が忘れられているが本来、孔雀というのは、めくった裾を、ひろげるかたちで、つまり、後背位の場合をさすのである。
芸者が四つん這いになって、裾をまくられる。
芸者孔雀で、男は背後から、臀部の白さを愛でつつ、行為に移るのだ。
したがって、仰向けに寝て、裾を開いたからといって、孔雀にはならない。
座敷着の裾を曳いた姿が艶冶だから、その裾をめくって、背後から犯す場合の華麗さ、男の征服欲を充たすにはきわめて効果的だ。芸者のほうでも、男に、
〝犯される〟

被虐の喜びがある。

いま――

金四郎が犯そうとしているのは、芝居茶屋〝小菊〟の若い女将だ。

以前は芸者だったのかどうか。

色っぽい女だった。媚笑にも身ごなしにも、男を誘うものがある。

金四郎のように、女遊びを散々やった男は、滅多なことでは、女の誘惑にも乗らないし、浮気の虫が起こらない。

このお安には、そんな金四郎をも欲情させずにおかないものがあったのだ。

思った通り、お安の臀部は、ノミの食いあと一つない、美しいものだった。

金四郎の掌が豊かな丘の狭間をゆっくりと滑ってゆくと、

「あ……」

と、洩れかけた声を、咄嗟に袖を噛んで、女は怺えた。

金四郎の指は、ねっとりと生温い液体に濡れている。

(――好きだぜ、この女)

思わず、吸い込まれるように、金四郎の指は、泉に入っている。

袖を噛んだまま、女は呻いた。

ぬるりと、温かい泉が溢れてる。金四郎の下半身は熱くなっていた。

(久しぶりだ)

こんな美い女と、こうした場所で、あわただしい逢瀬の楽しみは、屋敷の奥で充分に時間をかけて楽しむのとは別な、あわただしいだけに、かえって、その危険が刺戟になって、愉悦も大きいのだった。

腰を高くあげ、袖を噛んで必死に耐えている女の横顔も、一層、情感を煽るのである。

若い女体は、何度も絶頂を迎えて、溢れるのが、はっきりとわかった。

「いいぜ」

と、金四郎は臀を抱いたまま耳もとに囁いた。

「おめえ、女同士のト一ハ一だと思ったら、男好きのからだじゃねえか」

女には意外だったようである。

金四郎の萎えることを知らないおとこに、たっぷりと、孔雀になった喜びを教えられて、暫くはものもいえないでいたが、漸く我にかえると、

「女同士って……わたし、そんなこと知りません」

と言った。

「知らない？　そうかねえ、おめえと、狂歌師の孝悦の娘との仲は、評判だぜ」

金四郎はサグリを入れた。

「孝悦さんの……ああ、お品ちゃんねえ、ほほほほ、そりゃ、間違いですよ」

女は面白そうに笑いだした。

その様子では、あながち誤魔化しではないらしい。

「間違いだって？　だが、お品がここに来ているのは」
「ええ、ときどき来ますよ。でも、あたしじゃァない」
「……」
「おっ母さんなんです」
お安は、髪のほつれをかき上げながらまだ笑いを口辺に残している。
「おっ母さんがねえ、孝悦さんとは古い馴染みなんですよ、それで……」
そうだったのか、それで納得がいくような気がした。
「ふうん、それで、いま、どこにいるのだ？」
「日暮里の寮にいったようですよ」
「日暮里の……」
「ええ、田圃の中の一軒家ですけどねえ、静かで気が安まるって」
そうか、日暮里の寮か。
（何かある！）
と、金四郎は気がついた。
鶯谷から日暮里へかけて、近ごろ別荘が増えている。
市中の喧騒を嫌った人たちの別荘である。
病人などの養生にも用いられるが、俗塵をさけたい隠居なども、多い。
大名や旗本や、商人のものもある。

そういう家は、たいてい金がある連中だ。
したがって、別荘などというのは、ただ、のんびり出来るだけでなく、見栄で造作することもあるし、密談にはもってこいだ。
それにしても、蛙の声が聞こえ、田圃のかなたに大きな月がのぼるところなど、錦絵になったりして、発句を作る人や、文人墨客に好まれていた。
芝居茶屋の女将が、そんな別荘なぞ贅沢のきわみだが、あるいは、別の何かに使っているのかもしれない。
まして、あの孝悦の娘が、あわてて、この家に来たところを考えると、いよいよ怪しくなる。
（ひょっとこ面の根付けと関りがあるはずだ）
ここを突き止めさえすれば、謎の糸はほぐれそうであった。
金四郎は、三沢信吾を連れて、日暮里にいった。

日暮里――にっぽり、と呼び習わしているが、もともとは、ひぐらしのさと、である。こう読んだほうが、情緒がある。
上野の山（忍ヶ岡）の北口が鶯谷、と称するのも風流めかしてつけたような感じだが、夏の朝顔市で有名な入谷と鶯谷、それから谷中、というふうに、山の向こうの谷、だったわけだ。

江戸時代を通じてもこのあたりは、郊外であった。

上野の山と不忍池（しのばずのいけ）そして、現在の東大の広い敷地が、加賀侯、前田百万石の上屋敷、下屋敷のあったところで、これは江戸の北方を堰止めたようなかたちになり、その向こうというと、市街地の繁華さとがらりと変わった田園地帯になったわけだ。

もう一つ、谷つづきで、谷中になる。ここに天王寺などの寺が数十軒かたまっているのも、日暮里・駒込を、郊外の感じにしてしまっていた。

市中の騒音を嫌った者が、根岸から日暮里あたりに別荘を造って、憩いの場とした。

武士も町人も、こうした贅沢が出来るのは、生活に余裕がある者に限るのだがひとつには、三日にあげず発生する火事への対策でもあった。

火事と喧嘩は江戸の華といわれるように、燃え易い建築材と櫛比した家が、火事を日常のことにしてしまっている。

猿若町の芝居茶屋、〝小菊〟の女将が、日暮里に別荘を持っているなどというのは、当時としては、いささか奇異だが遠山金四郎にはピンと来た。

「なるほど、うめえ考えだ」

遊び狎れた金四郎だから、理解が早かった。

「芝居茶屋のいいお客というのは、役者買いで湯水のように金をつかう連中だ。だが、下手をすると、逢い引きが表沙汰になって、困ることになる。身分のある者ほど、しっぺ返しが大きいからな」

「正徳のころの絵島の事件を思い出します」

と、三沢信吾も言った。

「あれは芝居町が、まだ木挽町などにあったころだが、浅草に移ってからも、役者買いが減ったわけじゃねえ。いやかえって、増えたろう。猿若町の繁昌も、そのことと無関係じゃねえ」

「浅草といえば、吉原に近いし、少々羽目をはずしても、かまわないという気持ちがありますから」

「だが、身分によっては、噂が立つだけでも命とりになるからな」

そうした客のために、日暮里の別荘を一夜貸しすれば、喜ばれるわけだ。

「金儲けのうまいやつは目のつけどころが違うぜ。芝居茶屋の女将などというのは……」

「あの若い女将もそうなるでしょうか」

「なるさ、いずれな」

金四郎は、お安の肌のねっとりとまつわりつくような感触を思いだしている。

根岸の里のわび住まい、という表現は、いかにも慎ましげであるが、華やかな芝居茶屋の女将などには、そんな風流人のワビサビなどの気持ちはない。

あるものは金儲け。

それも男女の恋情をエサにして莫大な儲けをあげる。

金持ちの浮薄な娘や色後家などの役者買いには、道具立ても華やかでなければならないか

ら、日暮里のその逢い引きに貸す別荘も、贅を尽したものだった。
小ぢんまりとしているが、木口は凝っている。
檜をふんだんに使って、手入れがよくゆき届いて、畳も新しく、青々としている。
「ふうむ、いい普請だ」
と、金四郎は感心して、見まわした。
「あら、それほどじゃありません」
女将は若いころの色気を、どことなく漂わして、金四郎を見た。
こういう流し目は、身についたものだろう。若いお安に代替わりしたあとでも、まだ色気を捨てるのは惜しいというふうである。
女将は、金四郎を知っている。
昔の金四郎を知っているから、現在、北町奉行に出世していることも知っていた。
その金四郎が微行(しのび)でやって来たのだ。
とまどいと不安が隠せない。
それを隠そうとして焦る心が、よけいに色気を出させるのだろう。
「あの……こんな遠いところまで、お出ましになったのは、何か……」
「なあに、何でもねえ」
「……」
「女将に会いたくなったのさ」

「御冗談を」
「そいつァ冗談さ」
「……」
「実はな、女将。おいらも妙なことから町奉行ということになってしまったが」
「御出世、おめでとうございます」
「出世？　なんでェ、たかが不浄役人の頭だ。ははは、そいつァいいさ、おいらのような刺青の奉行がいた方が、江戸の悪党どもはおとなしくなる」
「はい」
「そりゃァいいがな。おいらも男だ。浮気もしてえ、そこでだ、つまり、好きなその逢い引きに、人目につかねえところを、と思ってな」
「あっ、そのことでしたら、御便宜をおはからいいたしますよ」
「明日でもいいか？」
というと、女将は、あ、と困ったような顔になった。
「あの、それは……」
「どうした」
「あの、実は……」
「先約があるのか」
「はい」

「せっかくのお奉行さまの御希望ですから、お受けしたいのですければ、あいにくと、ここ十日ばかりは、他にお約束が……」

と、女将は言い難そうに、断わった。

むろん、金四郎は、ここで、誰と逢い引きするつもりはない。

サグリを入れてみたのだ。

したがって、すぐに撤回した。

「そうかい、十日か、そいつァしかたがねえな。十日と待ってからじゃァ、あの女は、ほかに男を作っちまうなあ」

「まあ、そんな。お奉行さまほどの男の方に想われて、そんな心変わりするようなひとはいますまいよ」

「喜ばせてくれるぜ。ところがな、近ごろの女ァ、そんなものさ。まァいいやな。ほかに新しいのを見つけるさ」

金四郎の演技も相当なものだ。女将は信じたらしい。

「お奉行さま。あの、お断わりしてからナンですが、もし、お望みなら、いい子をお引き合わせいたしますよ」

と、女将は、したたかな一面を剝きだしにした。

男が女をほしがっていると見ると、カモに見えてくるのだろう。

こういう女の醜さは、

「胸くそが悪くなる」

と、外へ出てから、金四郎は言った。

「全くでございます。まるで女郎ですなあ」

「女郎じゃねえ、女郎屋の女将だ」

しかし、その本性を引き出したことでいよいよ、狙いが正しかったことが証明されたようだ。

「あの女の首ねっこを抑えつけて吐かしてやりてえが」

「責め問いすれば、吐きましょうが」

「拷問か。おい、そいつはいけねえ。悪人でも、そんな手を使うのは下の下だ。遠山の金さんは、そこまで野暮じゃねえ」

「恐れ入ります。つい、手っ取り早い方を……」

「なあに、動かぬ証拠を突きつけさえすれば、責め問いをしてお白洲を汚すこともねえのだ」

「はあ」

「そのためには、もっと、手間はかかるがね」

「なんでもやります」

「張り込んでくれ。ひと晩かふた晩……昼間は人眼を警戒しても、夜になるとこのあたりは全く静かになる。悪党どもが動きだすのはそれからだ」

三沢信吾は日が暮れてから、人目に立たぬようにして、舞い戻ってきた。
この家にひそかに出入りする者の正体をさぐるためだ。
まわりが田圃だから、裏道というものはない。
畔道伝いにくれば別だが、夜の畔道は危ないし、人目がないのだから、そこまでしないだろう。
信吾は、凝っと暗やみに身を潜めて、見張った。
大きな木の下だった。徹宵見張るつもりで、握り飯も用意してきている。
信吾は若いだけに、純粋なところがある。
張り込みをする以上、猫の影も見逃せないという気持ちになる。
その張りつめた気持ちが、逆に、隙を作ってしまうのだ。
あまりにも、家の出入りにばかり、眼を向けていたので、背後にひそかに近づいてきた者の足音に気づかなかった。
(おかしいな?)
もうそろそろ、家に近づく者がいてもよさそうなものだ。
あまりにもひっそりしているのが、いぶかしい。
そう思ったとき、草の軋みを、うしろ手に聞いたように思った。
「あっ!?」
と、振りかえったとたん、二、三間離れていたところから、黒い影が、熊のように襲いかかって来たのだ。

信吾は、咄嗟に手にしていた握り飯の弁当を、ぱっと投げた。
幸いにも、そやつの顔に当たったらしい。
あっとのけぞった。
が、襲撃は一人ではなかったのだ。
右側からも、殆ど同時に飛びついて来た。
右側だったのが、信吾に抜刀の機会を与えなかった。
利き腕を抑えられたからである。
「何やつ!」
信吾は、腕をふり払った。
が、左側からも、そのとき、影が飛びこんで来た。
何か固いものが、肩に当たった。棍棒か木刀のようなもので打たれたのだ。
腕がつけ根から離れたような痛みで信吾は呻いた。左腕の知覚がなくなっていた。
「殺せ」
と、いう声が聞こえた。
「ぶち殺せ」
「簀巻きにして荒川へ投げ込めや」
そんな喚きの中で、信吾は尚も、刀を抜こうとした。

「うぬら、おれを誰だと思っている、上役人に狼藉を……」
そんな叫びに耳をかすような手合いではなかった。
「何じゃァ、どぶ鼠が」
「こんなところで、何をしてくさるか」
「盗人だべ」
「泥棒猫は、ぶち殺してもええのじゃわい」
「んだ、んだ、ぶち殺せ」
だが、その言葉は、明らかに、信吾への威嚇だった。
殺そうと思えば殺せた。刀も持っていた。だが、斬る気がなかったのは、町方同心を斬れば南北町奉行所全体を敵に廻すことになる。
その恐ろしさを充分に知っている様子だった。
信吾の働きを制限させるだけの打撃を計算していたようだった。
肩を打たれ、腕を打たれ、腰を蹴られ脚を踏みつけられた。
信吾は、顔を草むらに押しつけられて歯が木の根に当たって、血が吹いたのを知った。
どれくらいの間、この争いがつづいたろう。信吾が抵抗を失うまで、打擲がつづいた。
これはかれの活動力を奪うのが目的だと気づいてから、信吾は、抵抗をやめた。
如何にも半死半生になったように、ぐったりして見せた。
「――やれやれ、こいつ、骨を折らせたぞい」

「死んだか」
「死にゃすめえ」
「まだ息をしてら」
「このくらいで、止めておこうぜ」
「これに懲りて、二度と出過ぎた真似はすめえよ」
「今度来たら、簀巻きだ」
「荒川だ土左衛門だ」
げらげらとかれらは笑った。
五、六人はいたらしかった。
「さあ、行くべえ、酒が待ってら」
「御馳走にありつけるぜ」
「そうだあ、酒と女と、へへっこたえられねえ」
ぞろぞろと歩み去る様子だ。
信吾はほっとした。
「――やい、丑、何を間誤間誤してやがる、早く来ねえか」
「待ってくれ、落とし物だ」
「落とし物だって」
「手拭いが……」

この暗闇では、見つかりっこない。
「なんでえ、手拭いの一本くれえ」
「それもそうだが」
逡巡していたが、あきらめてなかまのあとを追っていった。
(手拭い？)
信吾は、手に握りしめていたものに気がついた。
揉み合ううちに、相手の頬かむりをもぎとっていたのだ。
(丑とか呼ばれていたな……)
それでも、暫くの間、時を稼いで、凝っとしていたが、すっかり静かになってから、信吾は身を起こした。
(くそ！　よくもやりやがったな)
かれは、よろめきながら歩き出そうとしたが、からだ中が痛く、骨がバラバラになりそうだった。
それから小半刻ほど経って、漸く目明しが来た。
これは交替の約束だったのである。
「馬鹿野郎、気の利かないやつだ、おれがこんな目にあわされているのに」
「へえ、済んません、顔中血だらけですぜ」
「口を切っただけだ。まあいい、あとを見張っていろ」

信吾は、刀を杖にして、やっと山谷堀まで戻って来た。
金四郎は、そのひどい姿に驚いて、
「やられたな」
と言った。
「はい、面目ありません。不意をつかれました」
「まあ、命があっただけ、目っけものだ。その手拭いは何だ、派手なやつだな」
「はい、中の一人が被っていたものですが……」
無意識にむしり取った手拭いである。信吾にはおもいがけない怪我の功名である。
「おい、それを見せてみろ」
金四郎はくだんの手拭いを手に取って見た。一瞥するなり、
「何だこれは、役者手拭いではないか」
手拭いには大きく役者の隈どりが染めぬかれている。
こうした手拭いは、芝居役者が盆暮の挨拶にひいき客や茶屋などに配るものだった。
したがって一般には売り出したものではないので限りがある。
せいぜい二、三百本のものだ。名代の人気役者などだと、五百本ほど作ることがあるが少ないのは、百本そこそこという場合すらある。
「こいつァ手掛りになる……」
といいながら、金四郎は仔細に見た。

「おや、名前が書いてあらあー」
「えっ、何と」
「――離鶴とあるぜ」
「嵐離鶴なら知ってます。立ち役者だが、いま売り出しで」
「そいつを洗って見るか。ひいきの名がわかるだろう」
「はい、いまそれを思い出したのですがこの手拭いのやつを……うしと呼んでいたようです」
「うし？　丑の字か、丑之助か、丑太郎か、丑次郎か」
「それ以上は……」
「まあいい、それだけわかっただけでも探しやすい」
「はい、まずひいき客の名を調べてみて丑の字が頭についたものを」
「うし……と呼んでいたのだとすると、それは苗字ではあるまい、名前だ」
「そう思います。名前の頭文字、そう睨んだのですが」
「すぐに調べて見よ、急げ」
「必ずや下手人を突きとめまする」
からだのふしぶしが痛かったが、彼は耐えた。
あんな目にあったのだ。どうしても自分の手で捕らえたかった。
「くそっ、逃がしゃしねえ、五人まとめて一網打尽だ」

と彼は痛みを耐えて、芝居町に急いだ。
だが、思ったほど簡単ではなかったのである。
「手拭いでございますか」
と嵐離鶴は迷惑そうに眉根に縦じわを寄せていった。
「あれは、三百本も配りましたのでねえ、それも去年のことでございますよ」
というのだ。
「去年でもいい、どこへ配ったのか、相手ははっきりしているだろう」
「へえ、そうはおっしゃっても……」
ひいき客に迷惑がかかっては、というおもんばかりなのか、離鶴は言葉をにごした。
嵐離鶴は三十歳を少し出たくらいで、苦味走った目鼻立ちだった。こういう顔は、見かたによっては、ふてぶてしく感じるものだ。
役者にとって、ひいき客は大事に違いない。
だが、そんな斟酌をしていたのでは、下手人の追及は出来なくなる。
「吐くのが嫌だってェのなら、こっちにも考えがあるぜ」
信吾は、声を荒げた。
そんなつもりはなかったのだが、相手の出方次第では、鬼にも蛇にもなる、という気持ちだ。
こういう人の嫌がる、不浄役人などになっていると、若いうちは、それなりの理想を持っ

ていても、小悪党たちばかり相手にして、小狡いかけひきなどされて、次第に、人間が悪くなっていくのだろう。

素直な町民ばかりだと、悪くなりようはない。

「いいか、やつらは、おれをこんな目に合わせた」

と、信吾は、腕や頭の傷を見せた。

「こんな目にあったのだ、黙っていられるか。不浄役人は、半殺しにされてもいいってェのか」

「そんなつもりはございませんが」

「その言葉の下から言っているではないか。お上の役人を何だと思ってやがる。芝居者は、そこらの尻軽女どもから、チヤホヤされて、いい気になっていやがる」

「……」

「上役人も、野良犬くれェにしか見えねえだろうが」

「とんでもねい……って」

「おれをやったやつらを、庇い立てすりゃ同罪だ。御牢に入って半年も経てば、少しは、わかるだろうが」

「御牢ですって、そればっかりは、御勘弁を」

「やつらは何人も女を殺している。その上、女形だった鯉三郎も殺した。女形と立ち役の違いはあっても、同じ役者だ、え、なかまが殺されて、うぬは平気なのか」

信吾は理詰めに、追いこんでいった。

「へえ、そうは仰有っても、ひいき客だけに配ったわけじゃないんで、なんといいますか、茶屋に預けて、ほかにも……」

離鶴は意識的に隠すつもりはないらしかった。

「もう一度、拝見させて下さいまし」

といってから、かれは手にとってみた。

「これは、ハンパの方ですねえ」

「なんだと」

「へえ、染めムラがありましてね、ちゃんとしたお客には差し上げられませんで、くれてやったものでございます。こんなのが、五、六本ありましたので」

「じゃァ、五、六人ということか」

「はい」

「それじゃ、わかるはずだ、思いだせ、二人でも、三人でも、それに丑の字だ」

「それがどうも……」

なまじ丑の字にこだわったのが、離鶴の記憶を混乱させたようである。

かれは五人の名をあげたが、その中に丑の字のつくやつはいない。

戻ってそのことを報告すると、金四郎は、首をかしげた。

「染めムラの、つまりハンパ物というわけだ。それでも助かったぜ、百も二百もじゃ調べよ

うがねえが、五人なら、絞ってゆきゃァ出てくるだろう」
「はい、そうも思いますが、丑の字のつく者が見えませぬ」
信吾には、それが、どうしても合点がゆかなかったのだ。
「そこだぜ、お前が、聞き違ったのか」
「はァ、そうも反省してみました。あんな際ですから、耳が……どうも、そう思ってふりかえると、うし……ではなくて、うま……」
「馬かえ、馬太郎や馬助なんてェのは、尚更、いねえぜ」
信吾が書きとめた帳面を広げて、金四郎は首をかしげた。
今戸の喜助
花川戸の伝五郎
竹屋の長七
神がらみの六
屋根舟の藤作
いずれも武士ではない。肩書きは、住んでいる所の町名だったり、生まれたところだったり、職業だったりする。
町人には姓がないので、区別をつけるのに必要なのが、いつか通り名になるのだ。
「む、丑はいねえな……」
と、金四郎は名前を前にして、考えこんだ。

「だが、こいつらは、ひょっとすると、鬼面党のなかまかもしれねえ」
「な、なるほど、全部がそうだとすれば……」
「なんともいえねえが、丑の謎さえとければ、な」
金四郎は、その中から、知っている名を探した。
二人いた。
神がらみの六と屋根舟の藤作だ。
「藤作の舟には何度か乗ったことがあるし、六のほうは吉原の……」
と、言いかけて、あっ、と声を放った。
「わかった」
と、言ったときは、金四郎は膝を起こしていた。
「解けたぞ、謎が」
「え、どんな」
「吉原だ」
「すると、この六が」
「そうだ、こい」
金四郎は顎をしゃくって、先にとんとんと、階段をおりていった。
わけがわからずに、信吾もあとへつづく。
岡っ引きもそのあとへ。

山谷堀から新吉原は、日本堤を遡ってゆくと、編笠茶屋があり、見返り柳と大門が見える。
金四郎のあとにしたがいながら、信吾は、まだ謎がとけないでいるのだった。
新吉原の大門を入ってゆくと、とたんに岡っ引きなどは、相好を崩して顎をなでた。
ずらりと並んだれんじ格子の見世には、それだけで、艶冶な風情がある。
大まがきの持つ豪奢な雰囲気は、旗本や大名までが遊びに来るせいもあったが、新吉原のいいところはそれぞれ身分階級に応じての遊びが出来るように、太夫から格子、さん茶と、遊女たちの格が、段階があって、揚屋の一夜百金の遊びから、小遣い程度でチョンの間遊びもできるように、出来ていることだった。
金のないやつは、お歯黒どぶに沿って安いところへゆけば、それなりの満足が得られるし、女たちの方でも、自分の地位を知っていて、結構、情を尽くしてくれるのである。
金四郎も遊び人だったから、この花里の雰囲気が好きだ。
家督して、御役に就いてからでも、時に、微行で、遊びに来ている。
昔からの馴染の連中があちこちにいる。
女郎だった女が、齢をとって、やり手婆になっていたり、禿の少女が、新造で突き出されたり、歳月の変化を目のあたりにしている。
金四郎の記憶にあった名前が〝神がらみの六〟だった。
この男は、角海老の技夫太郎だった。
牛太郎である。

なぜ、牛というのかわからない。
一説では、もうし、もうし、と客を呼び、牛のよだれのように、だらだらと執こいからといい、あるいは、モウ放さない、と袖をつかんで食い下がるからともいう。
この〝神がらみ〟の異名も、そんなところから来ている。
というのは、見世にしてみれば、役に立つ客引きだというわけだ。
「お前の聞いた、うし、ってのは牛太郎をもじったやつだ。牛の六だ」
と、歩きながら金四郎は、信吾に説明した。
「素早しこいやつだ。あいつは、たしか観音像にお詣りの、お上りさんの田舎娘をタラシこんで叩き売ったり、かっぱらいなどやっていたやつだ。抜かるな」
角海老に入ってゆくと、その六がいた。
女郎の手鏡を借りて、小鬢のほつれを直しているところだった。
「――六、久しぶりだな」
「あ……お奉行」
「今日の神がらみは、主客転倒で、こっちからだ」
金四郎のあとから信吾、そして岡っ引き、と見るや、六はすべてを察したらしい。
ぱっと身を翻して、逃げようとした。
「斬るぞ！」
一声で、竦んだところを、金四郎はぐいと襟がみをつかんで、

「神妙にしな。どうせ行く先は三途の川だ」
「ふてェ野郎だ、やっぱり、うぬはあのときの」
信吾は思いきり、六の横腹を蹴飛ばした。
「よくも上役人を袋叩きにしてくれた。この礼はじっくりとやるぜ。さあ、あのときのなかまの名前を申し立てろ」
信吾にしてみれば、半殺しにしてやりたい気持ちだ。
だが、いまは、鬼面党の正体を突き止める方が先決だ。
「へえ、へえ、申し上げまさ」
六が並べた名前は、ムササビの三蔵、日ぐらしの勘八、キスグレの彦作、小笹の四郎五郎。
あの手拭いを貰った者たちとは関係ないらしい。
「そいつらと組んで、わしに讐(あだ)をしようというのは、どういうわけだ。何の怨みだ」
「へえ、怨みなんてありゃしません。まあ、怨みといえば、どうせわっちらのようなやくざはお上と聞くだけで」
「うらめしいか」
「へえ、まあ、そういうわけで」
「それでやつらと組んで、殺しをはじめたのか」
「金(かね)でさ、金。金を貰ったんでね」
六は首を竦めた。

「誰だ、そいつは」
「……」
「やい、隠すか」
信吾が十手で、脇腹を突いた。
「痛てて……言います、言います」
「誰だ」
「へえ、女なんで」
「女だと？」
信吾は、金四郎と顔を見合わせて、
「たばかるな、こいつ」
「ほ、ほんとうでさァ、わっちの女なので」
「ますます、面妖だぞ、うぬの女などがなぜ、あのような」
「へえ、そいつァ、知りませんがねえ。いくら、わっちでも、見ず知らずの野郎から、いくら金を積まれたって、人殺しを請け負やしませんや」
それもそうだ。
その女というのが、もと吉原にいた、散茶女郎で、六の情女だったが、いまは千住の宿場で飯盛りをしている。吉原で働くには、年齢のリミットがある。年増になれば、場末へ落ちるしかない。

「宿場女郎か」
「へえ、気質のいいやつでね、へっへっへ」
「のろけはいい。何てェ名だ」
「お伝てェので、旅籠は……下総屋で」
「嘘じゃあるめえな」
「へえ嘘なんて、お役人様に、嘘なんて、へえ、口が歪っちゃいます」
「口が歪るくらいじゃァ済むめえぜ」
信吾は岡っ引きを連れてすぐに、千住に向かった。
だが、その下総屋について亭主に聞くと、けげんな顔をされた。
「お伝という女はいましたがねえ、もう半年も前にやめましたよ」
「――嵌めやがった」
信吾はいきまいた。
「半年前に消えた女房を、知らぬ存ぜぬたァ通らねえ話だ」
「全くで、あの六の野郎、締め上げて吐かせましょう」
岡っ引きは腕をさすりながら、同調した。神がらみの六をいたぶる快感に、ごくりと生唾をのんだ。
お伝の行き先はわからないと、下総屋の亭主はいった。
利害のない旅籠の亭主が、嘘をいうはずがないと思ったのは、しかし、考えが浅かったようである。

六を見ると、信吾は、ものもいわずに殴りつけた。
「やい、上役人を甘く見るな。お伝は半年前から、旅籠をやめているそうじゃねえか」
「まさか、あの女！　そんなこととは知らなかったんで、へえ、ほんとうでさあ、一体、どこへ行きやがったんだろう」
「まだ嘘を。うぬは、女房に頼まれたといったじゃねえか」
「いいえね、お伝の名前で、金を送って来ましたんで、へえ、それと手紙を」
殺人の依頼――というより命令書だという。お伝の添書があったので、信用したのだという。
「そいつを出せ」
「へえ、手紙は読んだら、火中の事、と書いてありましてねえ、すぐに焼いちまったので」
どこまで周到な敵か。
自らは姿を見せず、的確に、手先の者を動かしている。
「ふむ……」
金四郎は考えて言った。
「手紙は焼いても、何か残っているだろう。え？」
「金ァ使ってしまったんで」
だが、六の家を家探しした信吾は、金包みを発見している。二分金が五つ、反古紙に包ま

れたままだった。
「あ、忘れていましたよ。こいつァ隠したんじゃありません、つい忘れちまって」
「二両二分……忘れていたとは豪儀だぜ——まてよ。この匂いは」
反古紙を嗅いでみて、金四郎は首をかしげた。
「香の匂いだ」
「え!?」
「いや、上物じゃねえ、線香の匂いがする」
「線香ですか」
信吾は眉をしかめて、
「まさか香奠を、死人の枕元から、かっぱらって」
「さあな、六、こいつを持ってくるのはどんなやつだ」
「どんなって、竜泉寺のお不動さまの爺さんで」
下谷竜泉寺にお不動様がある。その堂守の老人だという。
「お不動さまか。まさか、火焔不動が、わしを殺せと命じはしめえが」
金四郎は、その老人に会うことにした。
お不動さまの境内に入ると、二抱えもある巨人な銀杏の樹が目についた。
お不動さまの堂守りの老人がすべてを知っているに違いない、と金四郎は睨んだ。
だが、下谷の竜泉寺町にいってみると、意外なことが起こっていたのである。

お不動さまの境内には、十数人の男女が群れて騒いでいた。
金四郎は、はっとした。不吉な予感がした。
「どうした、何があったのだ」
その群衆の中に、町役人らしい姿を見て、信吾は声をかけた。
「ああ、これはこれは、お町奉行所から……お早いことで」
町役人たちは驚いたようである。
「どうしたのだ」
「へえ、惣太爺さんが殺されましてね」
「惣太というのは」
「ここの堂守りでさ、もう十年以上も、住んでいましてね、ちっと、変わったところがありましたが、よく掃除はするし、近所でも重宝がられていましたよ」
「——斬られた……」
信吾は、がっかりしたように、呟いた。
まだ発見されていくらも経っていなかった。
金四郎は唇を噛みしめた。
(また先を越されてしまった……)
よほどに、組織の網が広がっているのだろう。金四郎らが、情報を得たことが、すぐに筒抜けになって、口封じが行われてしまう。

斬られていたのは、境内の裏手にある惣太の小屋の前だった。
その斬殺死体に蓆がかぶせてあり、血がまだ流れていた。
町役人が蓆を剝ぐと、ぱっくり口をあけた背中の刀傷が、一太刀で致命傷であることを示していた。
金四郎は仔細にその傷口を眺めた。
「あざやかだ」
「え？」
「かなりの腕前だ」
「そうでございますか。ですが、お言葉を返すようですが、これは、うしろ袈裟でございます。腕のある者なら、何も、うしろから斬らなくても」
信吾には、その点が疑問だったらしい。
「いや、この老人が逃げようとしたのではないか。それで、追い打ちに斬った、そう見えるな」
「はあ、それだと、納得いきます」
「このままか、誰も死体に手を触れていないのだな」
「はい、お届けを済ませてからと思いまして」
「ふむ、このままだとすると……」
金四郎は首をひねった。

老人は斬られて、這いずったあとがある。
「おや、何を持っているのだ」
両手を見た。
老人の左手は、握られていたが、右手には、松葉を握っていた。
よく見ると、指の間に、松葉をはさんでいるのだ。
指の股は片手で四つ。
偶然だろうか。
そして左手の中にも松葉があった。
人の死に臨む、その言や善し、という。
これは人の死ぬ際には嘘は吐かないという意味だが、殺されたりした者は、死の間際に、下手人の手がかりを残そうとつとめる。
不動堂の堂守り惣太老人の死体に、金四郎はそれを見た。
右手の指の股に、それぞれ松葉をはさんでいた。
それは、苦悩のあまり、そこらの松葉を無意識に握りしめたかにも見える。
だが、金四郎には、不審が残った。
「苦しまぎれに摑んだにしちゃ、おかしいぜ。ものを摑むときに、指を揃えているものだ。指をおっ広げて摑むなんてェのは、どうにも、納得できねえ」
五本の指の間は四つ。

「それでは、こちらのほうに」
と信吾は、老人の左の手をこじあけた。そこにも松葉が握りしめられていた。
「こっちは指に挟んではいませぬ」
「それさ、両方とも同じなら、そういう指つきともいえるがな、こいつァ……考えものだ」
老人は死に臨んで、何かを言おうとした。誰かに、何かを——それは、下手人を訴える意志を示すほかに何があろう。
(松葉だ、松葉、松……)
四つと一つ。
五つ——五つの松葉。
金四郎は、松の木をふり仰いだ。歩きだして、また振り返って見た。
(五つの松……)
あっ、とかれは声をあげた。
「そうだ」
かれは呻くように言った。
「五松庵！」
信吾はけげんな顔をした。
「お化け地蔵だ」
「え？」

ますますわからない。
金四郎はもう急ぎ足に歩きだしている。あわてて、信吾と岡っ引きは、そのあとに従った。
「根岸にある尼寺だ。五松庵というお化け地蔵がある。お地蔵さまが、あっちをむいたり、こっちをむいたりするそうだ」
金四郎は苦笑しながら、
「お化け地蔵に化け物が住んでいるのだろう。五松庵の謎だ、あの松葉は」
言われて見れば、なるほど、そんな気もしてくる。
「すると、その尼寺に、鬼面党の頭領が隠れているので」
「わからぬ。が、あの老人が、五松庵に行けと、わしに訴えているのだ」
金四郎は確信を持ったようである。
根岸が近づくと、信吾は一寸、気になって来た。
「あの、不遜なようですが」
「なんだ、申せ」
「尼寺というと、寺社の……」
「そうだ、町奉行の支配筋じゃねえ」
金四郎はにやりとした。が、足は止めないのである。
現代でも、役所の縄張り根性は根強い。況んや、当時は絶対だ。町奉行は三千石で旗本にすぎないが、寺社奉行は十万石程度の大名が就任する。以て非なる身分である。

尼寺は寺社の管轄だから、町奉行所の立ち入りは許されない。
金四郎が平気だったのは、どうせ正面から詮議の足を踏み入れるつもりはなかったからだった。
「近所で聞き込んでみろ」
「よくわかりませぬが、尼僧が男を咥えこんでいるというのでしょうか」
「尼寺に男の出入りがあるはずだ。その辺のところをな」
五松庵のいわれは、境内に見ごとな枝ぶりの老松が五本あるからだった。
「図星でした。尼寺とは名のみで、中には妙な男たちが住んでいるらしいとのことです」
「やはりな」
金四郎はにやりとした。
「尼が尼でなく、寺が寺でなくとも、かたちがととのっていちゃァ、表立って踏みこめねえ。こうなりゃ、こっちも町奉行の袴脱いで、素浪人の金さんでゆくぜ」
信吾はそれを聞くと、十手を袋にいれて懐中に深く納めた。
「お供します」
「おう、抜かるな」
二人は境内に踏みこんだ。
築地塀が外からの眼をふさいでいる上に見事な老松が大きく枝を広げているので、奥は見えない。何が起こっても、世間に知れないということは、秘密の匂いがする。これほど、鬼面党と名乗る殺し屋の集団の隠れ家として格好なところはないであろう。
金四郎は、充分、あたりの動きに警戒を払いながら足を運んだ。
こちらは二人である。肩書きをとってしまえば実力だけだから、大勢に囲まれてどんな手を用いられてもしかたがない。しかし、この緊張感は、武士にとってこころよいものだった。死を賭けた行動には、動物的な昂奮がある。
(いた!)
はっとして、金四郎は足をとめた。
方丈のところに影が動いた。人影だと思ったときに、ひゅっと、風が哭いた。
ひゅっと一筋の矢が飛んで来たのだ。
上半身を反らして、金四郎は抜き打った。矢が二つに切れて落ちた。
声もなく、数人の影が飛び出して来たのである。
すでに暗い境内ではあったが、少なくとも五、六人、と読めた。
信吾も抜刀している。かれらは、声を立てなかったのは、こんな際でも、外部に騒ぎが洩れるのを慮ったからであろう。
猛然と斬りこんで来た刃を、金四郎は受けた。鏘然と、かん高い音が宵闇の中にひびいた。
火花が散り、目が眩んだ。横合いからも殴りつけるような一刀が風を巻いて走って来た。
血の雨の中を、金四郎は走った。はげしい憎しみがかれに久々に、刀をふるわせていた。
何人も斬ったが、どこを斬ったかも記憶にない。

若いころの道場剣術が、どの程度、この実戦で生かされたかわからない。

かれはこの尼寺に巣食う〝鬼面党〟の連中を、一人残らず、切り殺したら、町奉行を辞めてもいいとすら思っていた。

寺社の手入れには寺社奉行に相談しなければならない。が、そのひまはない。ために、町奉行の袴を脱ぎ捨て、一介の金さんとしての斬り込みだった。

問題が紛糾したら、腹を切ればいいのだという思いきりのよさが、この決断を早めたといえる。遊び人の金さんとして若いころ陋巷に彷徨していなかったら、こんな決断はとても出来なかったろう。

「信の字、大丈夫か」

ときどき、声をかけた。

それに元気な返事がかえってきた。三沢信吾も、金四郎と生死をともにすることに、武士らしい喜びを抱いていた。

それが、かれを強くさせていた。士気が上がるか下がるかで、この危急の場では生と死が岐れる。

金四郎がほっと息をついたのは、いつの間にか、かれの前に敵がいなくなってからだった。あたりは、倒れた男たちが呻き声を立てていた。

「首領はどこだ」

と、一人の胸ぐらをとって引き起こして聞いた。

「首領がいるだろう、どこにいる」

「……」

「言え、言わねば、殺す」

鍔子を、咽喉もとに突きつけると、男は、呻きながら、眼を左の方に走らせた。

「あの部屋か」

奥の部屋である。

金四郎は、血刀を一振りして、血を飛ばすと、その襖に向かって走った。

そこに首領がいるとすれば、すでに槍か鉄砲でも向けているはずだった。が、用心をしているひまはない。金四郎は、襖を蹴倒すように足で開け放つや、さっと飛びこんだ。

すると、その部屋の中央に、脇息に身を寄せた男が坐っていた。般若の面をかぶっている。あまりにも、静かだった。悠然とした感じである。

金四郎は、さすがに、その姿に向かって斬りかかることは出来なかった。

「うぬか！」

と、叫んだ。

「面をとれ、武士なら顔を見せろ」

それにも無言だった。

その男は、ゆっくりと立ち上がった。

「とってみよ」

はじめてこう言った。そして、静かに歩を運んで来たのである。

「とってみよ、金四郎」

あっと思った。その声に聞きおぼえがある。が、それが誰だったのか、判然としないうちに、抜き打ちの一刀が走った。

油断をしていたわけではなかった。般若の面から洩れる声に、そっと、疑惑を感じたのが隙になったのだ。金四郎は刃風のもとに、一瞬、身を躱したが、しゅッと白刃は胸から袖を裂いて走っている。紙一枚の差であった。金四郎が掬い上げるように斬った刃は、その男の左胸の下から右の顎下へ。かつんと、般若の面が割れ、顔から血が噴き上がった。

「……」

金四郎は、呆然として、その男の苦悶を見おろしていた。とどめを刺すことも忘れていた。その血を噴いている顔は——

久しく遠山家から消え去っていた、義兄の景善だったのである。

嘗て金四郎を邪魔者にして暗殺しようとして失敗し、失踪した。以来、生死もわからぬまま、廃嫡になっていたのである。その景善がここに潜んでいたとは。金四郎の町奉行就任を憎み、失脚を狙っての連続殺人だったのか。

「なんということだ」

断末魔の苦しみのなかで、景善は、何か言いたげに、唇を動かし、手を宙に伸ばした。その指が、金四郎の裾をつかみかけたが、最後の気力はそこまでだった。

ばたりと、力を失って手を落とすと同時に、四肢は動きを止めた。

そこへ信吾が、これも返り血を浴びた凄まじい姿で駆けつけて来た。

「やっと片付きました。あ、そやつが首魁ですか」

「そうらしいな、こやつ……」

「素性は知れませぬか」

「わからぬ……」

金四郎は、眼をそらして言った。

「もはや、済んだ。詮議することもあるまい」

信吾には、金四郎が、なぜそう言い切ったのか理由はわからないままに、かれも、ほっと息をついたのだった。

金四郎は、信吾を促して、尼寺から出た。袴を脱いでの斬り込みとはいえ、永居は無用だったのである。

返り血を浴びた姿ではあったが、もはや戸外はとっぷりと暮れていた。

「——信の字、いやな晩だぜ」

「はァ、でも、これで鬼面党は片付いたのですから」

「次には何があらわれるかしれねえ。町奉行という荷は重いぜ」

「お察しいたします」

「——飲みてェな」

と、金四郎はあたりを見廻した。
「こんな姿では居酒屋にも入れませぬ」
「それもそうだ。まず銭湯を見つけようぜ、さっぱりしてから」
「居酒屋ですか」
「ははは、着替えてから吉原に繰り込む方がいいなあ、それならお久のところがいい」
吉原も久しぶりだ、と金四郎の表情は漸く、なごんで来たようである。

ケイブンシャ文庫 252

真説（しんせつ） 遠山金四郎（とおやまきんしろう）

昭和63年10月15日　第1刷

著者　早乙女貢
発行者　加納将光
発行所　株式会社 勁（けい）文社

〒164　東京都中野区本町3-32-15
電話　東京　(372)5021（編集）
(372)3291（営業）
振替　東京9-13311
印刷　凸版印刷株式会社
製本　明興製本工業株式会社
——定価はカバーに表示してあります——
（落丁本・乱丁本はおとりかえします）

著者と了解のうえ検印を廃します。

© M.Saotome 1988

Printed in Japan
ISBN4-7669-0809-0　C0193

この作品は、一九八四年八月青樹社より刊行された。

ケイブンシャ文庫　好評発売中

五味 康祐
乱世群盗伝
500円

名将ひしめく戦乱の世、やがては天下統一をと、たがいに固く盟約を結び、漂泊の旅へ出た中西太兵衛と豊田小隼人。かたや満身刀創の豪放の士、かたや眉目秀麗の美丈夫。処女の血で染めた朱総の槍を守り神に、乱世を渡る男たち。その数奇なる運命を多彩な人物をまじえて描く長篇時代小説の本格派。

五味 康祐
秘玉の剣
420円

三日月藩主・森長俊に森蘭丸から伝わる秘玉があった。白蛇を呼び、常にその身に纏わせる不思議な玉――この玉に係わる森家の臣下が次々と斃される事件が起きた。下手人と目される隻腕の武士。謎の武士が携える蛇彫の小太刀。秘玉と剣の呪われた関係に、事件の波紋は意外な方向へ……。時代小説の傑作篇。

五味 康祐
国戸団左衛門の切腹
400円

老中松平伊豆守の家来、国戸団左衛門は文武に秀でた武士ではあったが、それを表に出すことはなかった。ところがある年のこと、伊豆守が満座の中で大久保彦左衛門に辱しめを受ける。後日、主君に加えられた恥辱を見事に雪いで、潔く散った武士の一途な心情を描いた表題作ほか、六篇を収録した時代小説集。

五味 康祐
一刀斎忠臣蔵異聞
400円

女だてらに禁制の手裏剣を使い、人々を驚嘆させたお雪。そのしたたるばかりの色気にぞっこんの安部主税。だが、お雪の父の敵は、主税の亡き叔父であった――。それ故に悩む二人の恋の行末を描く「隠剣」。五味一刀斎が「忠臣蔵」と史実との差異を検分した表題作などを収録した、オリジナル傑作時代小説集。

ケイブンシャ文庫　好評発売中

柴田錬三郎
明治一代男
540円

時は動乱の幕末から明治。間引かれそこなった貧農の子、捨吉の唯一の武器は、持って生まれた図太い度胸。大金持への大志を抱き、江戸に出た捨吉は、まず異人相手の商売に着手する……。踏まれても踏まれても、一途に金と女への執念に燃え、押しまくった型破りな男の純情一代記。

柴田錬三郎
柳生但馬守
460円

大阪冬の陣も詫った慶長二十年春、徳川家康の命により、柳生但馬守は、故太閤の寵姫淀君奪取を敢行した。それを察知した真田幸村は敢て計画を看過し、豊臣家安泰のために家康と閨房を共にせよと淀君を説得するが……。――剣と戦乱の世に命を賭けた名将智将の奇想天外、荒唐妄誕な活躍を描く波瀾万丈篇。

柴田錬三郎
清河八郎
480円

幕末を、一瞬の光芒を放って消えた男がいた。荘内の山猿と陰口をきかれながらも、剣は北辰一刀流の使い手。学識風貌ともにすぐれた、いずれは大事断行の中心人物と目された男――。憂国の血に燃えた志士たちの中にあって、ひときわ異彩を放ちながら、若くして暗殺者の手にかかった清河八郎の熱血の生涯。

柴田錬三郎
抜打ち侍
440円

旗本直参の身でありながら、勤王の志に邁行する旗本随一の剣客・正木弥九郎。一方、評定所御目付役・小俣堂十郎は、幕府覆滅を謀る危険人物として、弥九郎暗殺を画策、剣魔・秋沢壮典を操り、刺客をたて続けに送った。だが、その裏には謎めいた出生の秘密が……。痛快時代小説の傑作篇!!

ケイブンシャ文庫最新刊

汝、死ぬまで叫べ

志茂田景樹

結婚の約束を交わしながらも別れた女に再会した短大助教授丸木。歳月は、清純だった彼女を魔性の女に変貌させていた。丸木は彼女の経営するスナックを訪れる。だが丸木がそこで見たものは、嗜虐のためだけに檻の中に繋がれた少年たちの姿だった。女の変貌の裏には七年前の忌わしい事件が…。 **定価440円**

真説 遠山金四郎

早乙女 貢

勘定奉行の家に妾腹の子として生まれた遠山金四郎。武家暮しを嫌い、女の生首の刺青をして、放蕩無頼の〝金さん〟として長屋住いをしていたが、兄の出奔により家督を継ぐはめとなった。と、それを待っていたかのように、連続殺人を予告する不逞な挑戦状が届く！ 遠山金四郎の実像に迫る傑作長篇時代小説。 **定価540円**

浮気は大胆に

豊田行二

政治家の資金集めのパーティに出席した平井は人妻風の美女にみとれていた。友人にその女を紹介された平井はさりげなく「浮気をしてみたくはないか」と尋ねてみたが、なんとその返事は「主人に絶対バレない方法があれば」。大ハリキリの平井が考えだした浮気の妙案とは!? 傑作官能小説集。 **定価460円**

女子高生誘拐ゲーム

難波利三

「私たちを誘拐して」と、かわいい女子高生二人に声かけられた、元警官の中年男とグウタラ大学生の二人組。遊びのつもりで引き受けたが、本人たちの知らぬ間に事件はホンモノになったからやこしい。殺人事件に巻き込まれ、ふんだりけったりの二人組が真犯人を追いつめる長篇ユーモアサスペンス。 **定価460円**